

新時代の風俗雑誌

# 奇譚クラス

昭和二十六年十月五日創刊（毎月一回）  
昭和二十六年一月五日創刊（毎月一回）  
昭和二十六年一月五日創刊（毎月一回）  
昭和二十六年一月五日創刊（毎月一回）

奇譚クラス  
9



倒錯の告白

櫻姫全傳 曙草紙  
山東京傳作  
初代豊国画

1952.0月号

N289

10-5



貸本部  
有隣堂  
六間道

定價九拾円  
地方売価九拾参円

N289





「戦の獲物」 ヴィレツト画  
古代の惨虐性を遺憾なく  
現した鞭打の画

あぶな絵表情集









○倒錯の告白○（これは偽らざる赤裸々な告白集である）

狂い咲くカンナ	羽村京子	(一六)
白い腋窩の幻想	三富浩生	(二五)
僕という男	中野安太郎	(三二)
妖しい花びら	寺尾修治	(三七)
弱者の醍醐味	村井健司	(四四)
憂鬱症の轉機	蘭 守	(四九)
「サデイスト」の悲哀	天野一郎	(五八)

足部憧憬の悲願	山本貞輔	(六三)
---------	------	------

銷夏怪異漫語	嵯峨あきら	(六八)
變態心理を衝く	波多野 新	(七六)
彫刻と性について	池 長 味	(七九)

「記録」係	岡田咲子	(八四)
-------	------	------

中国艶話 夜譚隨錄	皆 田 仁	(九二)
-----------	-------	------

邪恋の焰	松井籟子	(九六)
------	------	------

サド候爵と殺生關白秀次	高取 辰治	(一〇六)
處 女 性 の 神 秘	的 場 通	(一一〇)
洋パンを圍む座談會	辻 村 隆	(一二五)
加虐淫虐症の種々相	仁比山 等	(一二三)

吉原の淫虐魔	綠 猛 比 古	(一三六)
--------	---------	-------

陸軍御用達千夜一夜	松本公惠	(一三六)
ケンプエル江戸參府紀行	伊吹慶太郎	(一四四)

（神罰男女見世物）

平城夜話 俠盜犬麿	庄司浩平	(一四七)
-----------	------	-------

倒錯の告白画集	画 竹中英二郎	
★口繪★ 玲子習作二十態	画 喜多 玲子	
あぶな繪表情集	縛られた女の写真集	(美の緊縛)

「戦の獲物」古代の鞭打画 ヴィレット画

櫻姬全傳 曙草紙	山東京傳作 初代豊國画	(一五四)
----------	-------------	-------



玲子習作  
縛られた  
をんな  
二十能心

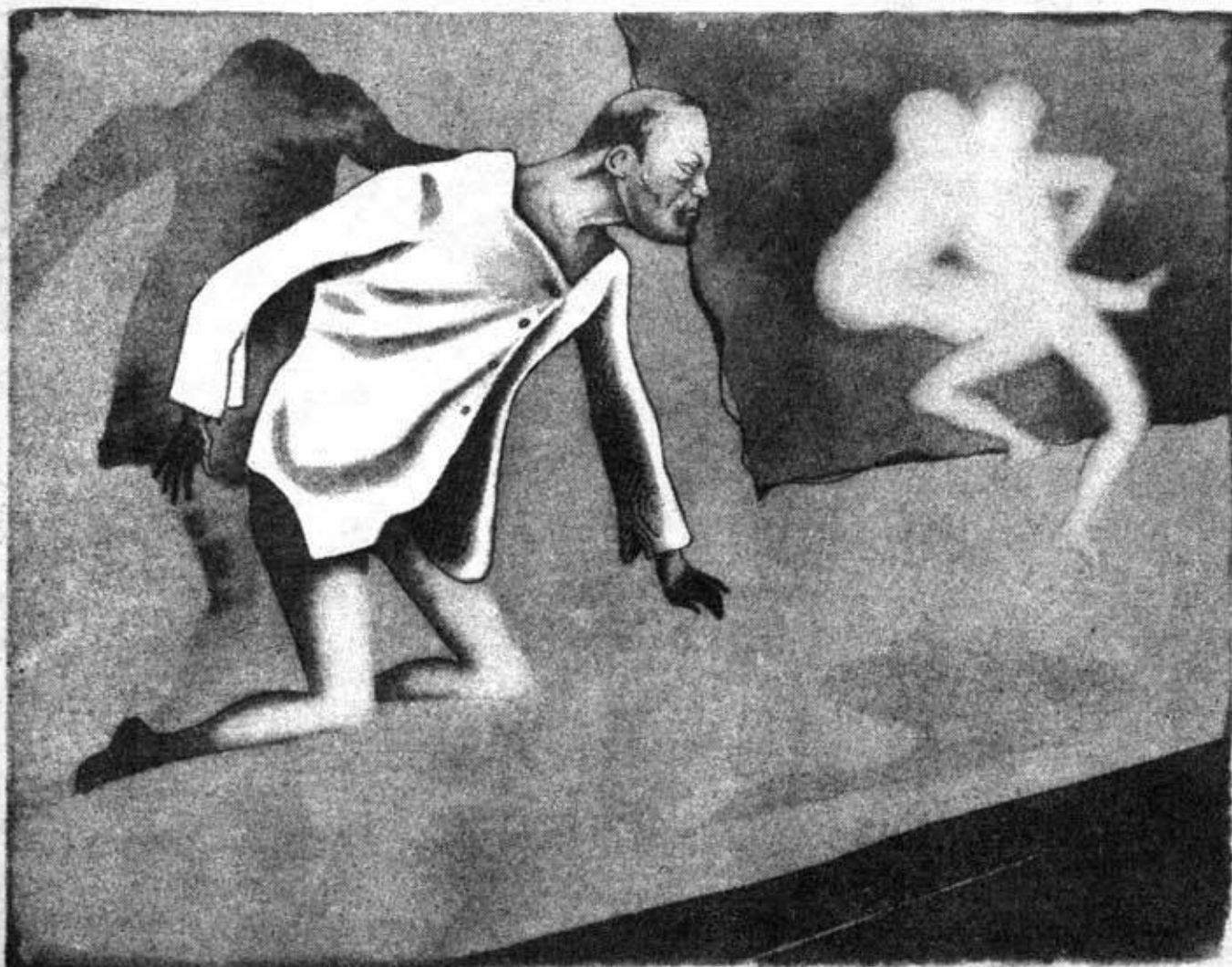
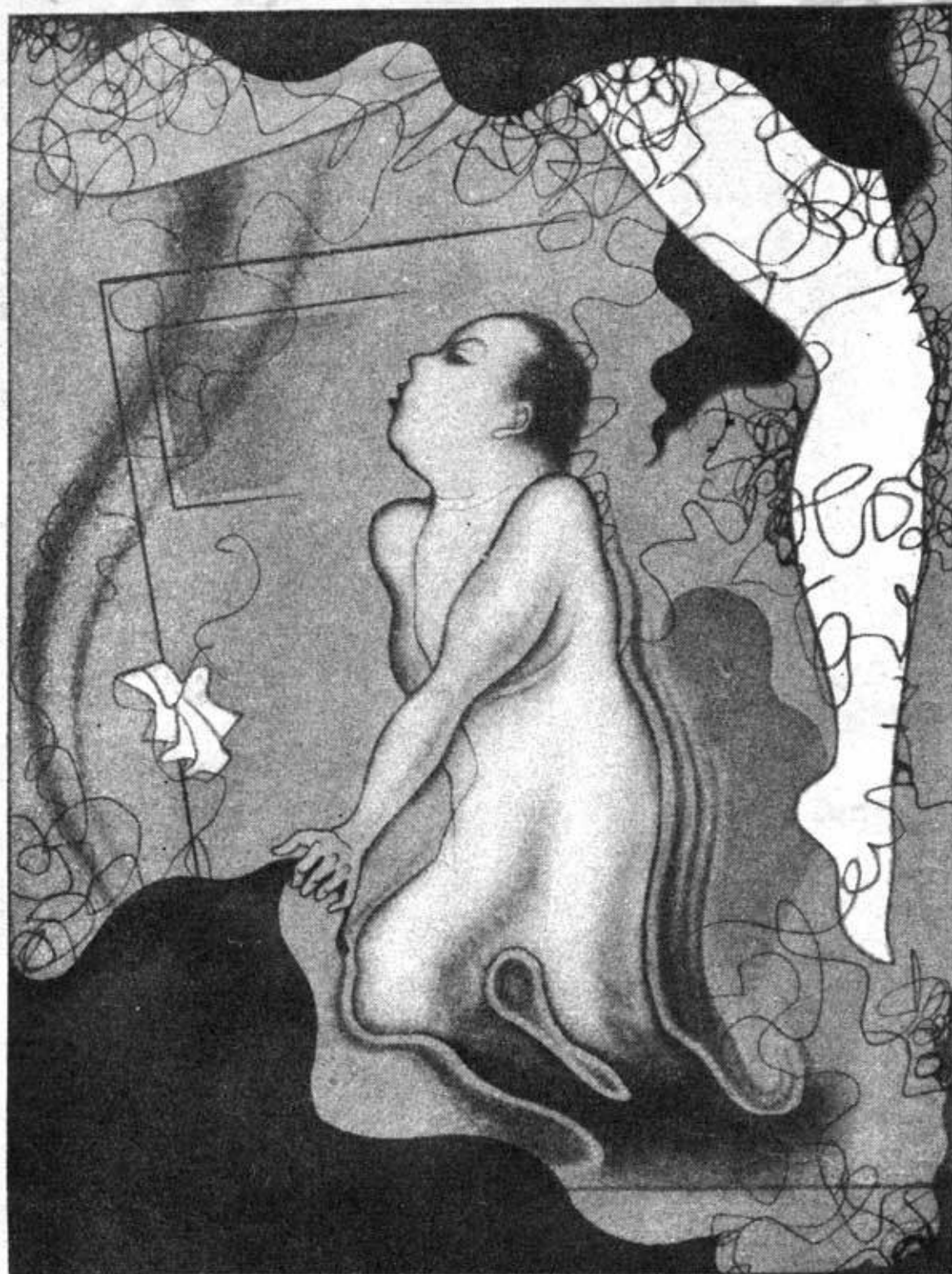




# 倒錯の告白

## 憂鬱症の轉機

出来なくなつた私は、素裸になると手当り次第に、美しい衣類をからだに巻き付けて、母の脉に抱かれた気分になり楽しむようになってしまつたのですが、ある夕方のことでした——（本文四九頁）



## 弱者の醍醐味

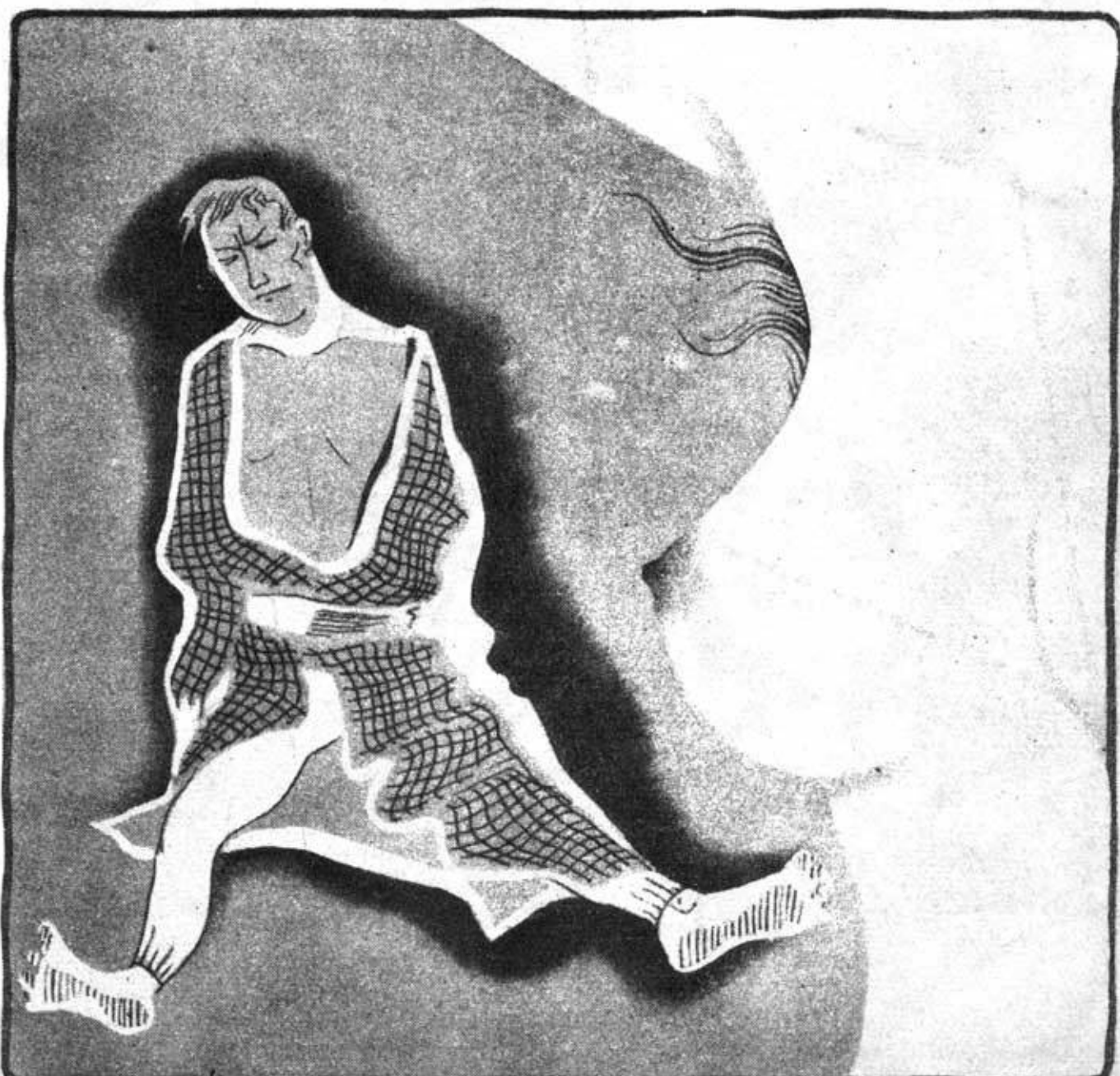
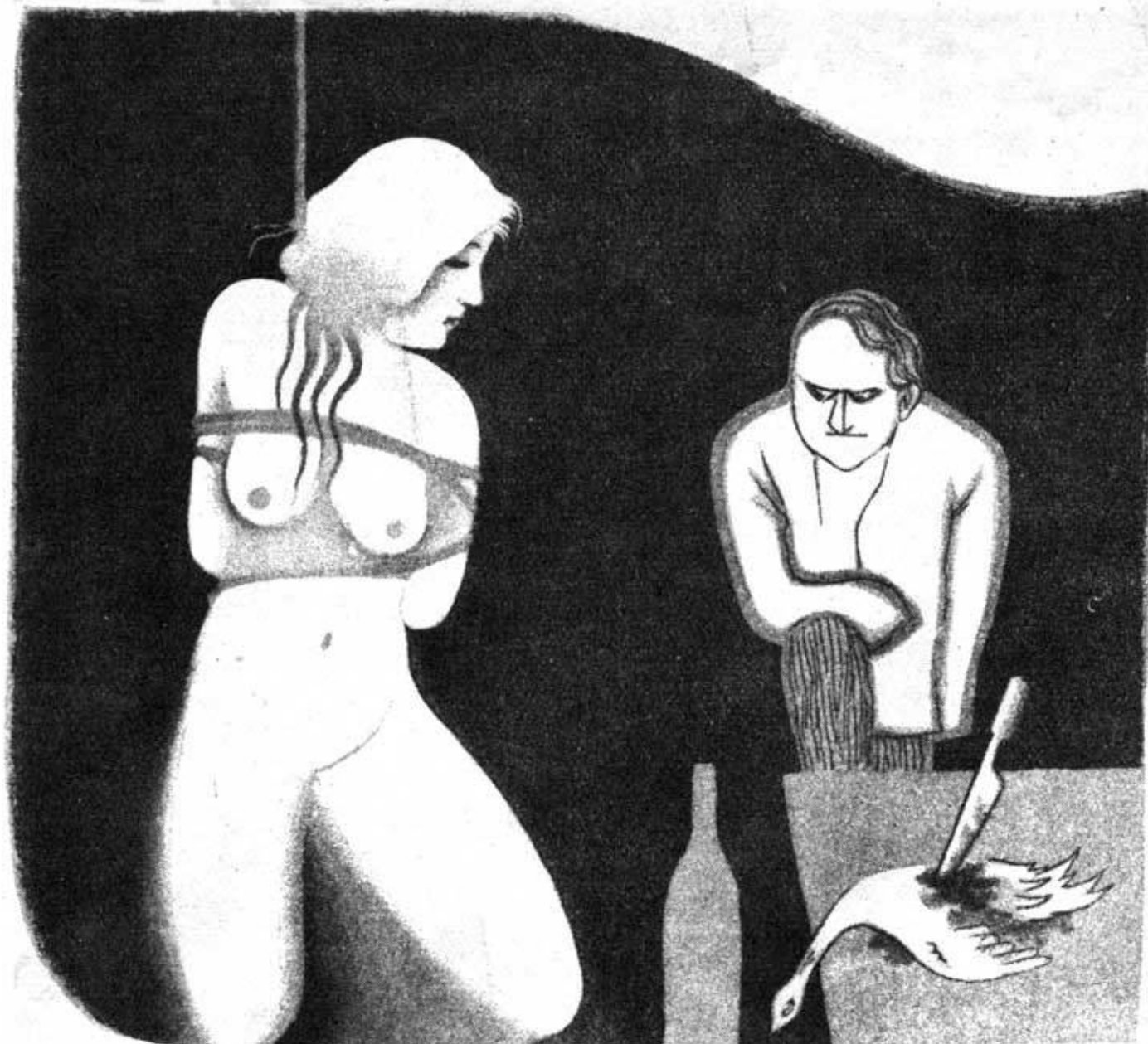
——老人は眼を輝かせながら、私たちの姿を覗いているのであつた。酒に酔いしれた私の感覚は、怒とは別な妙にねばつこい快感が、腑抜けた様な体の隅々まで行き渡るのをどうしようもなかつた——

（本文四四頁）



## 狂い咲くカンナ

——私はいつの間にか、夫の肉慾のために捧げられた犠牲獣として私自身を感じるようになりました。私は彼の前で裸の体をぐつたりと横たえ、「この身体は、すっかりあなたのものよ。あなたのいゝようにうんとおもちやにして頂戴。狼み



## 白い腋窩の幻想

たいに食べちやつてもいゝのよ」などと云うのです。彼はそんなとき——  
滑らかな腋のくぼみが私の視線を吸いつけ、瑞々しさの溢れるクリーム色の腋窩に、二筋の陰翳が柔かいひだをたゞみ込んで、私の慾情を掻き立てるのだった——

(本文一六頁)

(本文二五頁)



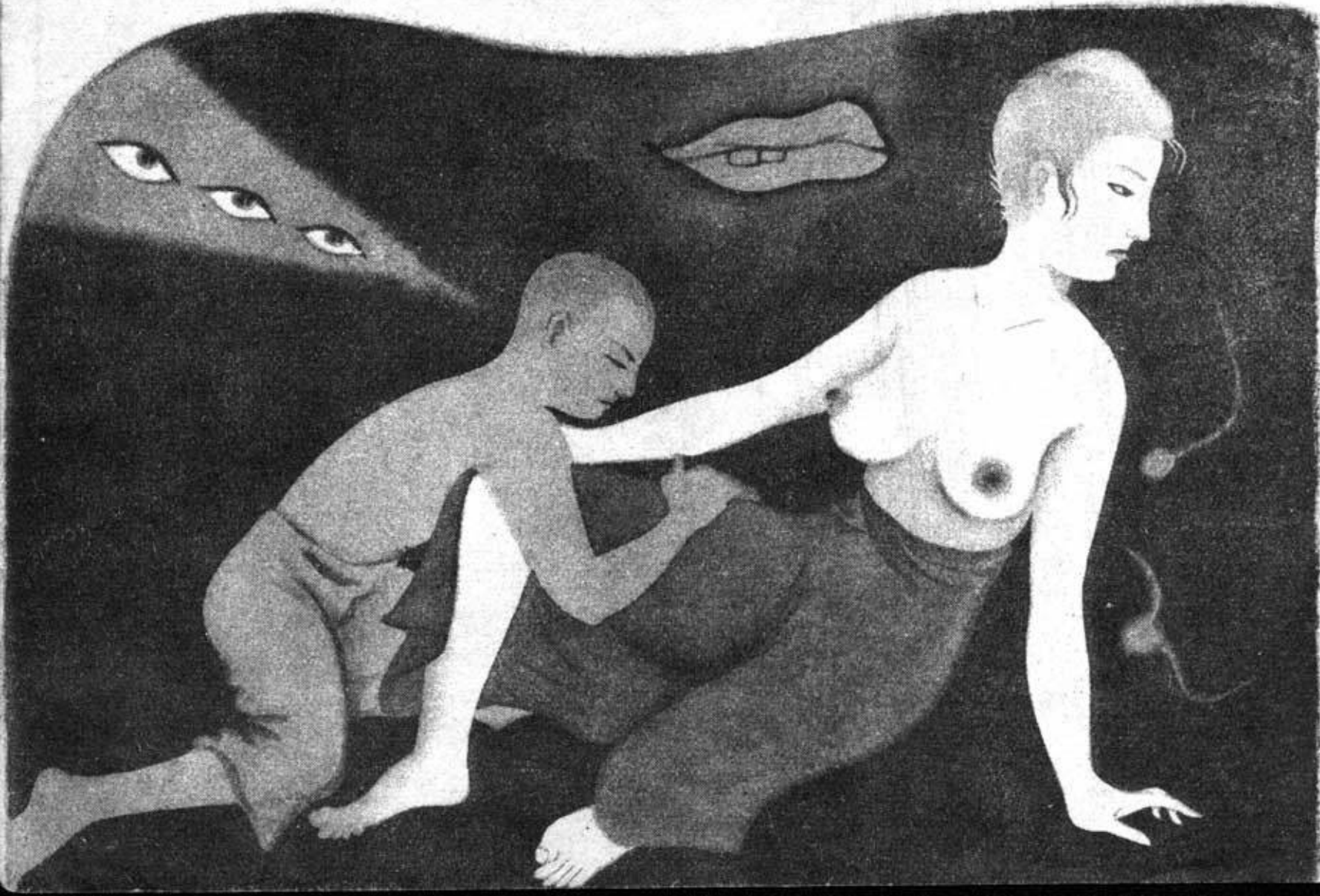
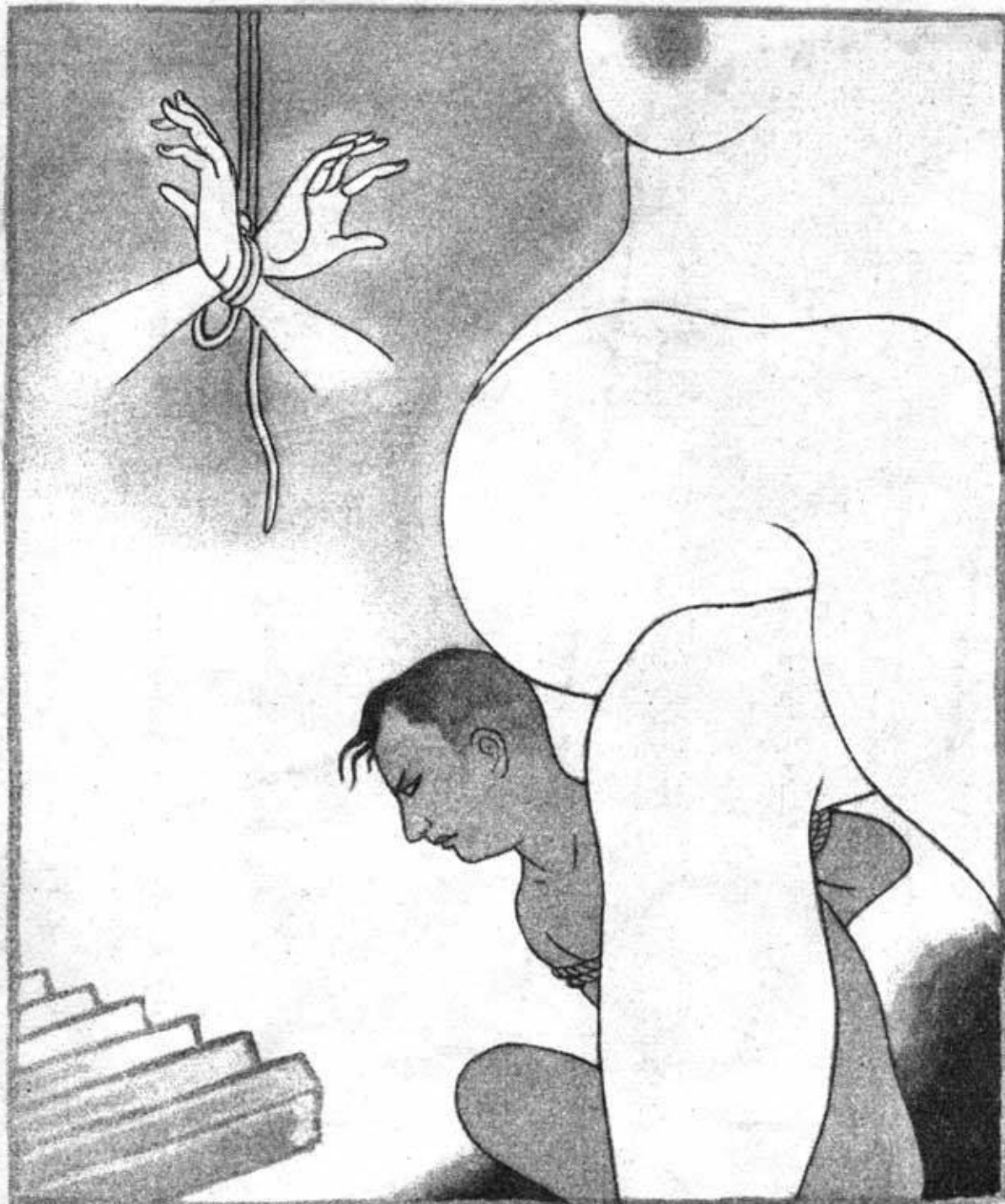
## 妖しい花びら

——僕はいつまでも眠られず、寢床のなかで反転していました。電気を消した瞬間、母の胸がひらき、その軀から淫蕩な、倦きることのない連想が湧き、ぼくは知らず知らずその想念にしがみついたのでした。

## 僕と云う男

(本文三七頁)

——私は本屋へ行き、少しでも責め場があると、その雑誌や本を買つて来て、愛用の拷問台の上で夢中になつて——(本文三二頁)





# 足部憧憬の悲願

——普通の人が何ら関心を示さない足に対して私は何故、こらも強い執著をするのでしようか。足、足、足、これは四六時中私の頭の中を



去らない美しいイメージなのです。誰か此の哀れな私に美しい足を与えて下さる女はありませんか。私はその人の足を抱いて死んでも悔いません。——

## サディストの悲哀

(本文六三頁)

——いけない、いけない、と抑えれば抑えるほど興奮の度は高まり、今度逢うときこそはと、彼女と逢う日ごとに思うようになりました。或る日、私は例の「責」のスクラップ帳を机の上に置いたまゝ外へ出ました。彼女が当然そのスクラップ帳を見るであろうことを計算に入れての外出でした。何喰わぬ顔で帰つて来た私は——(本文五八頁)

画・竹中英三郎



好 奇 心



新 時 代 の 風 俗 雜 誌

奇 譚 ク ラ ブ

九 月 号

(第六卷 第九号 通卷第四十七号)





# 倒錯の告白

まえがき

恐らく誰でも、このような告白を公けにすることには非常な勇気を必要とします。しかしそれにも拘らず私は敢えて書いてみようと思います。それは二つの理由からです。一つに

は、私自身のために、告白することによつて自分を客観化して自己の反省と安心とを得るためと、もう一つは、他の人達に、この私の経験が何かの参考になりはしないかと思うからです。とはいへ、私が私のあられもない、はずかしい秘密をこうして正直に、つつまず何もかも申し上げる決意をしたのは、くどくど申す必要はありませんが、それこそ余程のことなのです。どうか私の心中をお察しの上お読み下さいませ。



## 狂い咲くカンナ

羽村京子

(一)

私は二十一歳の人妻です。他人から見れば、どこにでもあるような、ごく睦まじい二人つ切りの生活の中にこんな秘密が隠されていていようとは、夢にも考えられないことでしよう。私は随分悩みました。自分を抑えもしました。しかし私は今とな

つては、宿命とも云える私の情念に抗がおうなどという気持はもうなくなつてしまいました。そんなことは私のかよわい力で出来ることではありませんでした。私に出来ることといえはただ、私の秘密の楽しみと、それによる心身の消耗とを天びんにかけて身の破滅を少しでも遅くすることだけしかないので。しかし、私はまた正常な性行為によつても満足することが出





来ますので、私を変質者と呼ぶべきか否かには疑問がありました。けれども同時に、私はもはやはつきりと意識的に、正常でない満足を求めているのです。してみればやはり私は変質者なのかも知れません。とにかく私は思い切つて、ありのままを書いてみます。

私がこんな風になつたのは、子供の時腸が弱かつた上に、神経質な母が浣腸をらん用しすぎたのが原因のようにも思われます。あるいは、お尻の穴から赤ちやんが生まれるというような妄想をもつていたのかも知れません。その辺は記憶にたしかではありませんが、とにかく、多分十一歳の時だつたと思います。入浴中に石鹸でまみれた指を肛門に突つこんで、急に便意を催して便所に駆けこんだ時の感じを、今でもはつきり覚えています。それから時々、わざと指を入れてみることに興味をもつようになりました。間もなく私は女学校に入つて、二年の時からメンスが始まり、体もだんぐ女らしく発達して来ました。しかし肛門のいたずらは依然として続き、益々大胆になつて行きました。もはや指だけではなく、万年筆や鉛筆など手当たり次第に用いました。滑剤もそのころからメンスロータムを使いました。やがていつの間にか、私は家人のいないのを見はからつて肛門から自転車のポンプで腹の中に宛氣を押しこむこと、水道につないだホースで水を入れることを覚えしました。これは子供がよくやる、あの、麦わらを蛙の肛門に突きさして息を吹きこむ遊びから思いついたものです。

この新しい方法は大変私の氣に入りました。私はよく鏡の前ですつばだかの自分の姿をうつして、フットボールのようにか

ん／＼に膨らんだ自分の腹を見ては興奮しました。いつも我慢出来るぎり／＼のところまで水や空氣を入れたので、そのあとには大抵苦しかつたのです。しかし苦しくなることは分つていても私にはやめられませんでした。体温でなまぬるくなつて排泄された水の分量をはかつてみると三リットルもあることがありました。また二、三度だけ、そのころ書物で見た拷問のことを真似て、口から水を飲んでみたことがあります。しかし苦しい割に面白くなく、あとで無暗に小便が出るものですから、やめてしまいました。

そのころ私にはM子さんという美しい親友がありました。私は私が自分の体に対してするようなことを、Mさんにもしてみたくて仕方がありませんでした。そこでとう／＼ある日、一緒に風呂に入つてMさんの背中を流しながら、そつと彼女の肛門に指を入れてみました。ところが「いやあよ。」とMさんが大声で叫んだので、私も思わず吹き出したようなふりをして「あら、ごめんなさい。」と云つてしまいました。それなり私はすっかり氣おくれしてしまつて、最後までMさんには何一つしなかつたのです。

また私は別の方法で自分の肉体を弄ぶことも覚えしました。私は家人が寝しずまつたころ、ふとんの上ですつばだかになつて、綱で体をいろいろに縛つてみるのでした。殊

#### 私の略歴（羽村京子）

昭和六年三重県Y市に生る。  
昭和二十二年県立Y高女卒、昭和二十五年K市女専卒、同二十六年現在の夫と結婚、引続きY市に在住す。この告白が始めてのものなり。





に私の好んだのは、腹のくびれをきつく締めつけることでした。力一杯、それこそひょうたんみたいになるまで綱を胴に喰ひこませて柱と一緒にくると、ぶつくりとまりのように固く丸く飛び出した自分の下腹に激しい興奮を覚えるのでした。一度、押入れの上の段に上つて両足首を縛り合せ、綱の端を上への釘にひっかけて逆さにぶら下つてみようとしましたことがあります。釘が体の重みで抜けて、私は大きな音を立てて真逆様に壁の上に落ちました。皆が驚いてかけつけたのであわててふとんをかぶつてその場をつくりましたが、もし釘が抜けなかつたら、どうなつていたか分かりません。

私はこうして自分の体を弄ぶことだけでは満足出来ず、いろいろのもつともつとひどいことを空想するのです。たとえば真裸でまないたの上に仰向けに横たわっている私が、大きな出刃庖丁でざつくりと腹を割かれてずるずるとはらわたをつかみ出され、まるで魚かなんぞのように体を料理されてしまうのを想像するのです。そのような私にとつて、学校の生物室にある標本は耐えがたい誘惑でした。私は、例のM子さんの腹部をのどから肛門まで真一文字にたてに切り開いて、あの蛙や、いもりや、また猫のように、赤や青の色とりどりの内臓をさらしてはりつけにされた、人間のアルコール漬け解剖標本をつくる計画を空想してみても興奮しました。

(二)

戦争が終つたのは私が女学校の三年生の時でした。すべてこれらのことは、その前後を通じてずつと行われていたのです。

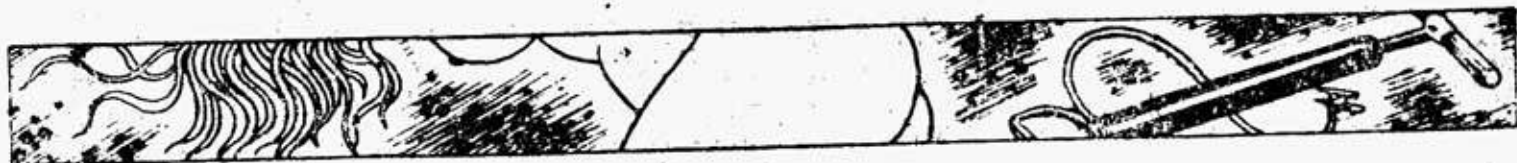
私のY市もかなり爆撃を受けましたが、幸か不幸か私は一度も無残に殺された人の死骸を見る機会がありませんでした。私はいつもそれを見たいと思つていましたし、また、もし見ていたら、私の恐怖心は私の悪夢を一ぺんに吹きとばしてしまつていたかも知れないのですが。

昭和二十二年に私は郷里の女学校を卒業しK市の専門学校に入りました。十六歳の時です。私の抜きがたい病癖にも拘らず私は勉強が好きでしたし、普段はかなりよく勉強したのです。戦後の自由な専門学校の生活は本当にたのしく、私は思い切り本を読み、思い切り遊んで、新しい環境の中に旧い罪惡をすっかり忘れてしまふように感じました。その他、K大学の学生との淡い思い出もありますが、この辺は本筋に関係がありませんから省いて、簡単に先へ進んで行きます。

三年後に私は専門学校を卒業してY市に帰つて来ました。何のくつたくもないお嬢さんの生活が私を待つていました。私の父はまだ若く、以前から當んでいた商売で、あのインフレの激しい困難な時代にも一家はとにかく食べて行くことが出来たのです。それから半年間、ある会合で苦いサラリーマンの現在の私の夫と知り合つたことが、私の運命を決定しました。

私達はお互いに愛し合うようになり、幸に彼の両親も私の両親も二人の結婚に賛成しました。私達は皆に祝福された恋に酔い、未来を話し合いました。私は身も心もすっかり彼に捧げて彼の中に、彼の愛の中に生きることを学んだのです。

この私の新しい幸福と未来への希望の中に、私の小さな胸をくもらせたのはあの過去の惡癖のことでした。女学生のころ級





友の一人が盲腸を患つて、大分あとになつてから手術したのですが、痛みが激しかった時にこんにくで腹をあたため続けたため、腸の表側の色がすっかり変つていたということです。私の場合も、もしかしたら自分でも分らないところに、嘗ての痕跡が残っているかも知れない、という想念が絶えず私を悩ました。しかし開腹手術をうけるとか、死後解剖されるとかいうことさえなければ、私は私の秘密を私一人の胸におさめておくことが出来ましよう。私は、あわよくば、私以外の誰も知らない、ただ私の記憶の中にだけ生きている、あの思ひしい一連の出来事を、私一人の力でこの世から完全に抹殺する決心をしました。それに私はもう悔い改めているのだ、彼に捧げた体がたとえ見えないうところできずものであつたとしても、それをわざと彼に知らせるのは却つて残酷というものだ、などと私はもつともらしい理くつをつけるのでした。

しばらくの婚約期間の後、昭和二十六年の五月に私は結婚しました。私は一人娘でしたけれど、父も母も家を継がせるなどという旧式な考えは持つていませんでしたし、彼はまた気楽な二男坊の身でしたから、私は夫の姓を名乗りました。そして父母の家から少し離れた、同じY市の一角にささやかな新居を構えました。私は二十歳、夫は私と七つちがいの二十七歳でした。夫はO大学の卒業生で、毎日Y市から電車で一時間近くもかかるT市に通勤しているのです。

## 倒錯の告白

ああ、思えばあれから僅か一年余りしか経っており

ません。その一年間の出来事を詳しく書くことこそ、この告白の主な目的だつたのです。

### (三)

私は結婚後間もなく女の肉体のよろこびを知りました。

私は丸顔で色白のぽつちやりした、子供っぽい顔をしていました。目が大きくて口が小さく、鼻が心持ち丸いのです。背はどちらかというと低い方で、全体として小肥りに肥つていますが、でも胸はちゃんとくびれて、自分で云うのも変ですが、均勢のとれた体です。そして私の体の持ちようは、よく発達した胸と腰とにあるのです。そのような私を夫はよく「肉感的な可愛い女だ。」と申しました。私は彼にうんと甘えてやりました。

愛情と、そして年令の差が私達の性生活をいやが上にも奔放なものにしました。私は夫のすすめで英語とフランス語を習い始め、時々夫に教わりながら、屋は大抵机に向つて辞書を引いたり、単語や変化を覚えたりしてすごしていたのですが、夫のいない一人ぼつちの長い昼の時間も、夜の情熱をかきたてるためにのみ存在するかのようでした。夫は外見はそれ程強そうではなくてもしんから丈夫な方ですけど、それにしても、一日の仕事に疲れ切つて家に帰つて来るのですから、今にして思えば、当時のような生活に、どうして耐え得たのか不思議な位です。実際私は驚く程大胆になりました。はずかしいなどという気持は夫の前にはすっかりなくなりました。私は煌々と照らす電燈の光の下で一糸まとわぬ全裸になつて、どんな淫らな姿勢でも厭いませんでした。これは同じ位の年令の夫婦の間





ではむづかしいことでしよう。

私にとつて、彼と私とは一つのものでした。彼を離れた私というようなものは考えることさえ出来ないのです。そして私の生き甲斐の証として、二人の肉体の合一以上にたしかなものはありませんでした。私は驚くべき無謀さで私の官能の愉悦にひたりました。私は本当に純真な無邪気な気持でそれをしたのです。しかしこのことはある程度無理はなかつたとしても、少しばかり間ちがつていたと思います。

私は、夫の前ではそれこそ何でもしてみせる、恥し知らずな女になつてしまつたのです。私はバナナの皮をむいたものも使いましたし、鶏のように卵を産む実演もやりました。私はまた徳利を、股の間から取り出して、体温で程よく燗の出来た酒を夫の盃に注いでやりました。私達はこれらを「わが家のストリップ」と称していました。夢中になつて得意気に演ずる私の狂態を、夫は充血した眼で喰い入るように見つめていました。

私はいつか、夫の肉慾のために捧げられた犠牲獣として私自身を感じるようになりました。私は彼の前で丸裸の体をぐつたりと力を抜いて横になりながら、「この体はすっかりあなたのものよ。あなたのいゝようにうんと玩具にして頂戴。狼みたいにお尻や、太ももや、腹や、胸や、背中を、ところきらわす歯でくわえて、ぴちや／＼と舌をならしながら食べるまぬをするのです。」

この辺りまでは、夫婦間の他愛もない遊びごととして、多少度はすごしているにしても許されることでしよう。しかし夫婦生活において、正常性と異常性との限界はほんのきわどいところにあるものです。私の肉体の本性的に深く刻みづけられていた根づよい傾向が、この情慾の奔流の中に及しても姿をあらわし始めたのです。私がこのことをうす／＼ながらも感づき始めたのは、昨年の夏から秋にかけてだつたと思います。それから後の私は、これまでのように、肉体の歡樂の追及において天真らん漫であることは出来ませんでした。

ある日私はむちやくちやに夫にせんがんで、とうとう、両手で一つずつ足首を握つて逆さに吊してもらいました。私はぞつとするような快感を覚えしました。「あなた、こうやつて私の股を左右に引き裂いてしまうことが出来る？」と私は叫びました。しかし夫はすぐ私を下におろしてしまつたのです。ただ、私が夫の大きな机の上に裸で仰向けに寝て、出刃庖丁を持つた夫が私を料理する真似をして遊ぶことはよくやりました。これには夫も興味をもっているように見えました。思えば私は、こうして、正常な夫の中に少しずつ異常なものの芽をめばえさせつゝあつたのでした。

この程度のことでは我慢出来るなら問題はありませんでした。年があけて今年の始め頃には、私はもうすっかり女学生時代の古い悪夢のとりこになつてしまつていました。私は再び、時々指を肛門に入れてみるようになりました。しかしそれ以上のことをする前に、私は何もかも夫に話すべきだと思いはじめたのです。重苦しい日々がつづきました。





私が何の秘密もあつてはならない夫、その夫にもこのことだけは簡単にうちあけることが出来ませんでした。まして夫の協力が得られるかどうか、私は一月余りもの間、私の小さな体を圧しつぶすような罪悪感と斗いつづけました。夫は私のすぐれない顔色を見て、よく「どこか体でも悪いのじゃないか？」と心配しました。

偶然の機会が救いの手をさしのべてくれました。三月三日の私の誕生日に夫は休暇をとつて、その前日の二日の日曜日から私を近くのS温泉につれて行つてくれたのです。温泉宿の静かな一室で、私はとうとう彼に何もかもうちあけました。「あなたは是非聞いてほしいことがあるのよ。」と云つた時私の胸は激しくふるえました。しばらく心をしずめてから私は思い切つて話し出しました。その一語一語を夫は静かに、「うむ。うむ。」とうなずきながら聞いてくれました。私はやはり話してみてもよかつたと思ひ、その時はうれしさに涙がこぼれる位だつたのです。

変態的な快感というものは、一度味わうようになると病みつきになつてしまふものです。今や私だけでなく、夫もまたこの禁断の果の味の味を知つてしまつていたのでした。私達は、新しい奇怪な遊びの数々を頭に描きながら、よろこび勇んで家に帰つてまいりました。

(四)

その時から私達の寝室は土曜日ごとに極度に淫らな責め場に変りました。私達は夫の提案で、主として私の体をこわさない

ために、特別な享樂を一週一回に限定したのでした。それは文字通りの肉体の饗宴でした。始めは恐る恐る、次いで次第に大胆なやり方で、夫は私の体を弄んでくれました。

一週間毎に、私のための責め道具がふえて行きました。

奥の六疊の間の天井は空襲の激しかつた頃の名残で真中がとりはずせるようになっていました。私達はその二尺四方位の穴を通して、梁から綱を滑車で上下して私の体を吊り上げることの出来るようにしました。両手首を頭の上で縛つて宙吊りにすると、足首で逆吊りにする外に、四肢を縛り合せて狩の獲物みたいにぶら下げる方法、最後に、手足をくくらないで、胴中に綱をかけて俯伏せに宙ぶらりんになると、少くとも四通りに遊べます。柱は、後の壁がぐりぬいてある床柱がそのまま役に立ちました。これもいろいろな形で体を縛りつけられるので何なら頭を下に逆さになることが出来るのです。

次には机と椅子です。机はかなり大型のもので、少し体を曲げれば私の体が楽にその上に横たわることが出来ますし、椅子は股を開いて縛りつけられるのに、なくてはならぬものです。それだけでは足りなくて、私達は木製のベッドをつくらせました。これですと手足を自由に開いて結びつけることが出来ます。肛門に空気を押しこむために私達は、バレーやラグビーのボールに空気を入れるポンプを買いました。それからカーテンの棒があります。この棒は中空になつた真鍮の細長い管で、私が蛙のようにその管でお尻から夫に息を吹きこんでもらうと、おなかぶうつと膨れるというわけです。水を入れるのには、ゴム管で高い所から水をひいてくるイリガートルという器具を用





います。もつとも、俯伏せになつて尻を上突き出し、漏斗で簡単に流しこむことも出来ます。私達はまた、腹の中に入つた水や空気をすぐ出してしまわないために、強いゴムの風船を直腸の中でふくらまして中から栓をしてしまふ方法を考え出した。

もう一つ、子宮保温器という便利なものがあります。これはに温い湯を充たして使用するのです。

私達は、私達の寢室の雰囲気をやが上にも怪妖なものにするために、様々な工夫をしました。赤や青の電燈、どぎつい色の壁掛け、全身をうつして見ることの出来る姿見などがそれです。私達の部屋は以前の何倍かの明るさに照明出来るようになったのです。

その他に、云うまでもなく、私達は変態性慾や、残酷な拷問や刑罰、怪奇な犯罪事件のことなどを書いた書物や絵や写真をどんぐり買いこみました。それを見て、私は生きた蛇を自分の肛門から入れてみたいと思つたことがあります、流石にそれはなしませんでした。

夫の一万五千円ばかりの給料は毎月、こうして、僅かづつの貯金をのぞけば、これらのものを買うのに費いはたされて行くのです。

(五)

S温泉の一夜から二ヶ月経つて、五月三日の憲法記念日は私達の結婚の一週年記念日でした。今年は四日の日曜を中にはさんで五日の子供の日と三日間もの休日がつづき、講和発効のす

ぐ後でもあつたので、誰も彼もうきうきとその数日をすごしたことでしようが、わけても私達にとつては、官能のしびれるような歓喜にひたり切つた三日間であつたのです。

二日の夕方、六時ごろに夫は勤めから帰つて来ました。見ると大きな紙包みを二つも提げています。

「これはFさんがくれた鶏だ。お祝いだつてさ。こちらの方は……」といったずらつぽく笑つて見せて、

「僕のおみやげ、何か分る？」

「分らないわ。何なのよ？」と私が云うと、

「君がほしい」と云つてた写真機さ。月賦だよ。」

「まあすてき。」と私は彼にとびつきました。私達はかねがね私達の淫らなポーズを、そして殊に縛られ、責められているのあられもない姿を秘密の写真に残しておきたいと云い合つていたのでした。

Fさんというのは私達の仲人で夫の上役なのです。包の中から出て来たのは、よく肥つた牝雞、というより、もうきれいに羽毛がむしつてあつて、薄赤い色の肉の塊、でした。私達はすぐ、用意してあつた風呂の中で夫は肛門から漏斗で湯を入れて私の腸を洗つてくれました。何回も湯をとりかえて大腸の中のものをすつかり出してしまふと、私の体はぐんにやりと力が抜けて、それがまた妙に快く、腹の中ですつかりきれいになつた私は、夫と一緒に、二人ともすつぱだかのまま六疊に帰つて来ました。

部屋一杯にふとんを敷きつめて、その真中に小さい食卓が、アルマイトの盆に盛られた例の丸裸の鶏を中心に、二本のビー





ルと二三のつまみものを載せて置いてありました。鹽がすつかりふとんで隠れて異様な感じのする部屋の中央に、ぽつかり口をあいた天井から綱が下つています。私はぐつたりと全裸の体を横たえました。

「さあ、覚悟はいいかい？」と夫が云います。

「いいわ。」と私はすつかり彼の人身御供になつた気持ちに、うつとりとして答えました。

夫は私を犬のように四つんばいにしてポンプでお尻からどん／＼空気を入れました。シューツ、シューツと押しこまれる圧さく空気で、ぐ／＼と腹が張つて来ました。いろ／＼な動物の形をしたゴムの玩具のように、私の体は膨らまされると不思議にしゃんと立ち直つて来るのでした。

「ビールを飲ませてやろう。」と夫は云つて、栓を抜いたビールびんの口を私の口にあてがいました。ぐ／＼と無理矢理に流し込まれる液体の苦しさ。私は歯をくいしばつて休めます。鼻の頭の汗。しかしそれはほんの一瞬間です。やがて冷いビールの味がきゆうつと腹一杯にしみわたるのです。げ／＼と胃の中の空気がのどに押し出されて来ました。ビールびんはすつかり空になつています。夫は更にもう一本のビールを同様にして私の腹に詰め込んでしまいました。

それから私の体は、手首を縛つて天井から吊り下げられました。縛り合された両の手首にきり／＼と綱がくいこんで腕が肩

## 倒錯の告白

から抜けるかと思ふと、私の足は床を離れて宙に浮き

ました。

「どれ、こうしておいて、こちらの方を先に片づけるかな。」照明がぱつと赤一色に切りかえられて、赤裸の、文字通り鳥肌立つた鶏の柔らかな腹に出刃庖丁があてられました。

大きな鏡の中で、私のグロテスクな全裸像が天井からぶら下つています。もう少しで下にとゞきそうな爪先がかすかに揺れて、妊娠末期の女の腹のように呼吸をするのも苦しい位大きく膨脹した私の腹部は、赤い光に照らされて残酷なまでにむき出しな感じを与えるのでした。料理されかゝつている牝鶏。私は奇妙な錯覚に捉われて、うつとりとるんだ眼で嗜虐的に自分の生々しい赤裸の姿に見入るのでした。

鶏は胸の大きな骨をすつかり取り払われて、べろ／＼したはらわたを醜く露出していました。私はそれを見た瞬間ぐ／＼と目まいがする程激しく興奮しました。私の腹部はきん／＼に張り切つて、時々ぐる／＼と腸管の中を移動する空気が突つぱるたびに、腹がぼん／＼といびつに形を変えるように感じられました。

その私のまん丸く突き出した腹に、べつとりと血の付いた出刃庖丁の鋭い切先が、ぶつ／＼と音でも立てそくに触れた時、突然恍惚の不思議な転換が起つて、全身が激しくけいれんすると同時に私は強い快感にひきこまれました。

この新しい経験は全く予期しないことでした。私の体は完全な変質者の機能を示しはじめたのです。

激情の発作が去ると私は急に苦しくなつて来ました。手首のちぎれるような痛み、膨れ上つた腹に圧迫される苦しさ、腸の





しぼるような苦しき、それに充滿した膀胱の圧迫など一度に感じられて、私の顔は苦痛のため真蒼になり、額には汗が流れて来ました。

私の体はふとんの上に降されました、それから夫は、ゴム球の栓を抜きとると、腸の中の充滿した空気は音をたてゝ出てゆきました。腹の膨らみも大方もと通りになつて体もだんだん楽になつてからは、私はやつと人心地がついて、夫の顔を見てにつこりと笑うのでした。

「あゝ、苦しかつたわ。」

赤い電燈がもとの白色にかわつたのは、まだやつと九時でした。私達はそれから夜のふけるのも忘れて、尙も夢中で私達の秘密の歡樂にふけりつゞけるのでした。

しかし私はもうこれ以上、くわしい話を書きつゞける必要はないようです。私はこゝでたゞ、夫の買つて来てくれた写真機がその夜の私達の遊びを大變ゆかいなものにしたと云うこと、及び、私達は三日三晩の間、心ゆくまで怪奇な遊びにひたり切つたということだけを申し上げておけば充分だと思ひます。

私はあまりに淫らなことを書きすぎたかも知れません。しかし私はとうとうすつかりみんな書いてしまいました。書き終つてみると、私には微細な点に至るまで、全部事実そのまゝであるところのものが、他人から見ると恐らく荒唐無稽いな作りごと、しか思えないのではないかという心配が新たにいたします。皆様は私が、本当にあつたこと以外には神かけて何一つ書かなかつたのだと申し上げても、果して信じて下さいましょうかしら。

# 「読者通信」

はからずも偶然貴誌を入手して実に驚きました。此んな面白い雑誌を何故今迄発見しなかつたのかと残念でなりません。旧号早速申込みます故至急お送り下さい。

（函館 畑 一男）

○ 小型になつてからの奇譚クラブは断然よくなりましたね。六月号のバルカンクリーデはもう少し長く載せてほしかったですと思います。僕は毎月貴誌の発行されるのを心待ちにしている一人ですが、奇々愛読者のグループが出来たら面白いと思うのですが如何なものでしょう。誰かその音頭をとつて貰えませんか。

（群馬 大森浩平）

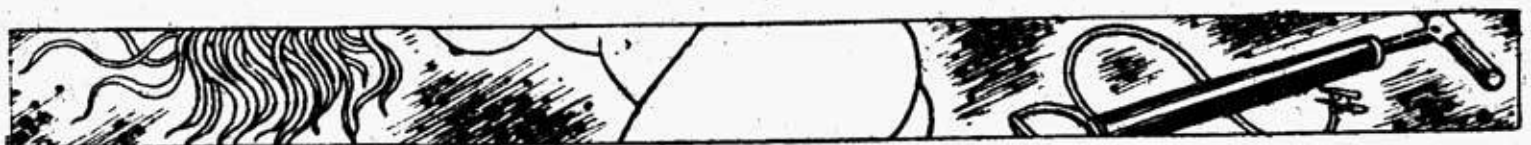
○ 私は貴誌の愛読者の一人です。型も小型となり読みよく

なり非常にうれしく思います。七月号の変態艶書は興味深く読ませて貰いました。私も此の記事と同感です。これからこういう記事（一寸変態かな）を載せて下さるよう呉々も御願ひ致します。編集者御一同の御健闘を祈る。

（八尾市の一愛読者より）

○ 小生は奇譚クラブの熱狂的な愛読者ですが、最近の貴誌の充實躍進ぶりには驚異の眼を瞠つております。貴誌こそは我々の希望であり唯一の慰安のオアシスなのです。小生の外にも小生と同じ考えの方は沢山居られると存じますが今後共、他誌に類例の見ない記事を満載下さるよう大いに期待致します。編集者の方々に些少ですがこゝに為替を同封しておきますから茶菓でも召し上つて下さい。六、七、八月号は断然優秀でした。今後の御活躍を祈ります。

（東京 柴田源三郎）







# 白い腋窩の幻想

三 富 浩 生

芳美は死んで終つた。私も、もう直ぐ死ぬ心算だ。芳美を失つた人生なんて、今は考えられない。あの凶悪な男が、つい其処に死んでいるのが目触りだが、死んで終えればそれも苦にはなるまい。私は愛する芳美の体をしつかり抱いたまゝで死ぬのだから……

あの日芳美は、今晚は、と、まるで人見知りしない子供のような、あどけなさであつた。白とえんじのビツケで、共布のワンピースとボレロが、しつくり似合う可憐さなのだ。私は一目で彼女に愛情を感じたのだ、と今になつて思う。彼女は一通の封書を持つて、夕食を済ました許りの私を訪ねて来た。手紙は弓子からだつた。

貴方なら此の娘を預けられる人だと思います。働けない間、世話してやつて下さい。充分貴方のお役にならつた娘です。

弓子

そんな奇妙な手紙を読んで、私は如何にも間の抜けた顔をしたに違いない。芳美は、くつくつと笑い出し、暫らく止まらなかつた。

「私の体、好きなようになつて、でも病氣だから普通の事は

駄目よ。」

私は、びつくりして彼女の顔をまじく見つめた。清純なまるで未だ女学生のような娘が、病氣だなんて、と思う一方、弓子の仲間なんだから、とも思つた。私は何も事情を聞かずに泊めてやる事にして、苦笑しながら尋ねた。

「弓子が言つたんだな、俺のあの事を」

彼女は熱い茶を吸りながら悪戯ツぽい眼付きで、こつくりと肯いた。暑くても、私は熱い茶以外は何も飲まないのである。私も茶を飲みながら自分の奇妙な嗜好が如何にも大人らしくなくて、彼女に恥ずかしかつた。

「君だつて馬鹿にするだらう。俺を、」

彼女は相変らず無言で首を横に振り、而も黒い瞳は、じつと私に注がれている。私はその瞳が眩しいようだつた。

「今夜は、もう寝給え。」

私は餓えた狼のように彼女に飛びかゝりたくはなかつた。街の女にも仄々とした憩いを求める心は有ろうというもの。可愛い少女をゆつくり寝かせてやりたい、私の甘い趣味なのだ。ところで寝床は一つしか無い。私は毛布にくるまる心算だつた。彼女は落着かなげに見廻していたが、やがてボレロも脱がず





に万年床に潜り込んでしまった。私は内職の原紙切りを疲れる迄やつた。疲れると彼女の眼を覚まさないように近寄り、しみ／＼その寝顔を見た。

広すぎず狭すぎぬ額、長い睫毛、余り高くないが、形のよい鼻、いつも笑っているような悪戯ッぽい笑窪を秘めた頬、可愛い唇許、私は、黒く輝く瞳を其の上に思い浮かべながら、彼女のボレロを脱がせて腋窩を見たくなくて来た。悪い癖だ、と私は反省し、毛布にくるまつた。

人の気配に眼覚めると、真暗な中に香料の香が漂っていた。眠気の奥で微かに覚めている意識が、芳美のいる事を思出させた。身近に女の呼吸を感じて覚めたのだつた。

「どうしたの？」

私は眠そうな声を出した。彼女は、

「済みません。トイレットなの」

此のアパートに始めての彼女なのだと気付き、私は燈を灯した。便所の在り処を教えるとうふんと笑つて、頬を染めた彼女は、出て行つた。帰るなり、「私此方でいゝわ」と言つたが、私は「いゝよ」と髪を撫でているのだつた。

彼女は、私が勤めに出た後、毎日医者へ通うらしかった。数日経つて、朝から不機嫌に黙り勝ちだつた彼女は、夜寝る前に「何故つまらぬ遠慮なんかするの。」

鋭い声だつた。何時も着更える所を見せない彼女が、私の眼の前でワンピースを脱ぎ棄て、シユミーズもかなぐり棄て、挑むような眼付きであつた。白く艶やかな肩、円いふくらみの上に、ぼつ／＼と赤いものを乗せた乳房、その間の浅い谷間、す

つと細まつたウエスト、未だ荒れていない少女の肉体が一時に私を射すくめた。彼女は、私の顔色を見ながら、腕を挙げ頭の後ろで組んで見せた。

滑らかな腋の窪みが私の視線を吸いつけ、瑞々しさの溢れるクリム色の腋窩に、二筋の陰翳が柔かい髪をたゞみ込んで、私の慾情を掻き立てるのだ。私が今迄彼女に其の姿勢を要求しなかつたのは、街の女と知つていながら其の可愛さに惚れ切つていたからかも知れない。奇妙な羞恥が、彼女の前に痴態を見せる事を許さなかつたのだ。然し私は今は彼女を恥ずかしめていたのかも知れない。と反省し、静かに抱き寄せた。と彼女の職業的な媚笑が私の胸を刺す。私は口重く言つた。

「判るよ。気を使うのは、じゃ今夜は任してくるね。」

肯く彼女に、私は、倒錯的な彼女なりのプライドが漂うのを感じた。

私の慾情は誤つた方向に発展していた。私は子供の時、誰でもが一応は感じるように自分の性器に興味を持っていた。遊び事に飽きると、それを眺めて楽しんでいた。人を見たい等とは思わず自分のだけで満足していた。今思えば典型的な自己愛の萌芽である。其の内に自慰を覚えると、真赤に充血して肥大したそれが、とても美しく見えた。やがて女性を意識し始めた時、幼い頃に女湯で、乱れ群がり生えた女の恥毛に激しい嫌悪を覚えた記憶が障害となつた。自分の恥部に魅かれ、女のそれに興味を持てないのだつた。その事は、始めて街の女に赴いた時、はつきりと判つた。





女は、あつさりズロース迄脱ぎ棄てた。私は、じつと彼女の裸身を凝視していたが、黒々とした贅を眼にしては、彼女のそこへ傾倒して行く気が、何うしても起らなかった。

「情ない人ね、未だ若いのに、」

私を不能者だと思つてか、女は嗤つた。私は紙幣を投げ出して逃げたかつたが、女は私を放さなかつた。サデイスチックな態度で私の体に左腕を廻し、右手で私の前を探るのだ。電灯の下で私は思わず「よせよ」と言ひながら然し手で拒む事は、しなかつた。……

女の恥毛の感触が私を酔わせず、快さも感じない内に総てが過ぎて、彼女の中で私は萎えて行つた。

女は、ふん、と鼻で嗤つて腕を放し、後頭部で組んで天井を向いた。香水の匂に交つて微かに体臭が漂い、女の脱毛した腋窩が私の鼻先に半ば開いていた。私は其処を瞞めた。

微かな陰翳が小波のような微妙で美しい皺を作っている。私は、そつと指で撫でた。

「何すんのさ」女が物憂い声で言う。私は、それでも其処に魅き付けられた。彼女に腕を伸ばしてみてくれと頼んだ。先刻は半分しか見えなかつた楕円形が、今度はすっかり見える。まず鼻を寄せ、遂に舌で舐めた。塩ッぽい汗の味の他に、甘酸よく切ない味がする。

其の時私のそれは俄かにふくらみ、私は彼女の暗い白桃色の腋窩と、私の頼らんだそれとを見較べながら、自ら融るのだつた。先刻は感じられなかつた快さが私を酔わせ、絶頂が私の体を震わせた。女は呆れた顔で私の仕草を見ていた。私は間もな

く女と別れて帰り、アパートの部屋で寝転んでからも、女の腋窩の線が、脇腹への繋りも含めて幻想に浮かぶのだつた。

其の次に女に会いに行つた時、私は、始めから彼女の腋窩を目鼻舌で味つた挙句、そこに唇を押し付けたまゝで、自慰するのだつた。金が無くて行けない時は、流行のヌードフォトが、僅かに私を慰めてくれた。始めての女との接触を経て、女の恥部への幼い嫌惡の他に、自分の、或いは女の手で自由な緊迫感とテンポを私は楽しんでいた。

其の街の女が弓子であり、従つて弓子は、私が女体との接触を欲しないのを知つて、病氣の芳美を預けて寄越したのである。

芳美は、それを承知で来ているのに、私が何もしないのに却つて腹を立てたのだ。私は其の夜、彼女に弓子と同じ事をさせた。それから、一日か二日おきに彼女と戯れた。

私は内職に筆耕をし、屋は近くの消費組合に事務を執る。自炊の独り者には、食料が簡単に手に入れられるので、何よりの当座凌ぎだつた。本当は小説が書きたかつた。然し仕事片手間では何も書けず、まとまらなかつた。

原稿が売れる迄の生活費を貯えて、それから専心しようと決心した。従つて、私などに振向く女も勿論無かつたが、奇妙な嗜好と、経済上の必要とから妻を迎える意志は無いのである。芳美は小遣位は貯えているようだが、食べさせねばならなかつた。

彼女の案外な温しい素直さが未だ壊されていないのを気付い





私は、或る日弓子を喫茶店へ呼び寄せて会った。継母の有る中流家庭、高校の中途で家出、誘惑、そして街の女、有り来りの経歴を私は、弓子のルージュの度ぎつい口から聞いた。

悪い事に地廻りの若者が芳美を此の深みへ陥し、而も喰付いていた。今は暴力団狩りで遠退いたが、若し出て来たら、貴方が預つてゐるのだから、いゝだろうとは思ふが、と、弓子は言う。私の異常さが妙な所で役立つものだ、と私は苦笑した。姐御気取りの弓子は彼女なりに芳美を保護してやりたいのだらう中途半端な甘さだが、せめて病気の間の養生にと、私を撰んで預けた弓子の心使いが、私にも判つた。芳美という名も親の付けた名ではない。然し、そんな事はどうでもよかつた。脂肪が乗り始めた許りの、柔軟で新鮮な肉体、殊に其の、いつも湿りを帯びていて、而も、いつも優しい感触と、芳しい香りを持つ彼女の腋窩が、私を魅惑し尽していた。私は真剣に彼女を愛し、彼女との生活に希望を持ち始めた。彼女も亦、次第に親しみを濃くして行つた。初めの頃の、子供の虚勢じみた親しさではなく、たゞ向き合つて坐つていただけでも心が温まつて来るような懐しさだつた。私は彼女が恢復し、私を愛してくれるならば、と空想した。然し、彼女の意志は判らない。私は自分から無理をしたくはなかつた。臆病なのであつた。一つには、異常な嗜好が自信を無くしていたのだ。

三、四日前の事であつた。

「もう通わなくつてもいゝつて」

彼女の明るさが勤めから帰つた私に打つかつて来た。其の夜彼女は、原紙を切り始めた私の向う側に坐つて、真面目な顔で話しかけて来た。

「ねえ、もつと本当の暮しをしましよ、私ではお嫌？　もう街になんか二度と出たくないわ。」

私は彼女の心を計り兼ねて、じつと彼女を見つめた。

「私もまともな仕事探さわ、」

私は無言で煙草に火を付けた。と、ついと彼女の腕が伸び、私の唇から煙草を取り上げ、怨めしそくに睨む。

「真面目なのよ、私、貴方の為なら、……お湯で笑われてもいい、不具になるわ。」

私は、はッと思ひ当り、笑いかけて止めた。女の恥毛のおぞましさに、弓子が一度紹介してくれた、俗にパイパンという、そんな女の所へ行つた事もあつた。然し、異様な迄に拡大されて眼に映る女のそれは、一層私を萎縮させるに役立ただけだつたのである。

私は彼女を愛している。彼女さえ其の気なら、いつ迄も一緒に暮してもいゝのだ。私は小説を書く為に金を貯める心算だつたが、そんな心掛では何時経つても書ける筈が無かつた。苦勞する程湧いて来る意慾の外には、何も要らないのだ。その上、私はもう自分の才能に見限りを付けていた。

私はもう二十五にもなつて、彼女とは丁度七つ違いだつた。

然し彼女が、本当に愛した始めての女であつた。私は、にじり寄つて来た彼女を抱き寄せ、静かに背へ廻した手を彼女の腋に滑らせた。と、彼女は私の腕の中で身を挽いた。





「そんな事止めて、ね、本当の生活しましょうって言ったじゃないの」

さう言つてから、ふと頬を染めて、

「私が……淋しいのだなんて思つては嫌よ、でも結局は私の為よ。」

その言葉の意味は、今ははつきり判る。

ところで私は彼女と、やはり式と迄行かない迄も、ずる／＼とは一緒になりたくなかつた。一応のけじめがほしいのだ。そうしないと、彼女が拒む、あの腋窩への執著から逃れられそうになかつた。土曜日の夜迄、私はそれを延期した。今はそれを延ばした事を後悔している。然し及ばぬ悔なのだ。

今日は朝から薄ら寒かつた。未だ十月半ばだと言ふのに……。彼女は明日に迫つた私達の生活を心待ちにしているようであつた。

然し私が夕方帰つて来て顔を洗ひに出ていた隙に、悲劇は始つていた。

廊下を帰つて来ると、半開きになつた私の部屋のドアから、「帰つて下さい」

と彼女が強く言ふのが聞えた。次の瞬間、あわてゝ入ろうとした私の耳に「うつ」という苦痛のうめきが届いた。私は部屋に入つた。茶のジャケツにギヤバのズボンの男が向う向きに立つてゐる。芳美は

スカートの左脇を

抑えて壁に倚つて

## 倒錯の告白

いた。手が血で濡れている。私の顔を見て彼女が「逃げて」と叫ぶ前に、私は咄嗟に手近の手焙り——彼女が押入から出して雑布を掛けた許りだつた——を取り上げていた。氣付いて振り向いた男は頭から灰を浴び、立ちすくみながら匕首を突き出してゐた。然し私は眼が見えるだけ有利であり、やがて彼は胸に自分の凶器を突刺されて動かなくなつた。私の部屋は三階の物置同様の部屋を借りていたので、此の騒ぎを誰も氣付かない様子だつた。

見ていた芳美は、彼が襲れたと知つた瞬間、氣力を失つて、ずる／＼と壁際に腰を落した。彼女の傷口を調べる為に押えている手を取つた時、彼女は、

「キスして、早く」

「息が苦しいよ、そんな事より」

私が言いかけるのを彼女は、

「黙つて早く」

冷く牙えた彼女の額が、私の視野一杯に拡がり、私は泣きたいのを抑えて唇を齧けた。

是が私達の最初の接唇だつたのである私は直ぐ離れた。三十秒位だつたと思う。

「みづ……吐き……そう」

彼女が眼を開けて微かに言つた。私は口を彼女の耳に近付け「いけないよ、医者を呼ぼう」

「いて、もう、し、ばらく、よ、深いもの」

意外に判つてゐる言。然し頬の色は薄れて来た。私は彼女をそつと脱がせ、胸に手を当てた。鼓動は既に弱く乱れて





いた。吐気が来ているし、もう助かりそうにはなかつた。

「まともな暮し、……明日から……のに、貴方があの夜……」

喘ぎながらの言葉に、私は、どうせ助からぬならと、薬罐の水を口に含んで彼女に近付けた軟い口の粘膜が、私の唇に絡んだ。

「貴方と、……一度も……ね、」

語尾が弱く消えた。私は彼女を抱いた。彼女の右腕を私の頭に廻し、私の膝の上に彼女を抱き上げた。その重みが次第に加わり薄れて行く彼女の知覚を感じさせた。私はもう一度彼女に接吻した彼女の心臓は殆んど動いていないようであつた。

私は死んだ彼女を抱えて隣りの室の寢床に寝かせた。自分が死んで横たわろうとは知らずに、彼女が敷いておいたものだった。右腕を私の頭から解くと、ばたりと横に落ちた、腋窩の灰白い滑らかさが私の眼を捉えた。私は夢中でズボンの釦を外していた。

彼女は永い間、正常な生活を望み、私によつて叶えようとした瞬間、かつての情夫——それは弓子の話では、芳美を脅迫していたと云う——の為に殺されて終つたのだ。

私に今出来る事は、私の異常さを矯める事によつて自分も救われようとした彼女の悲願を叶える為に、彼女の肉体に私の生命を流し込む事だけだった。私は未だ微かに温い彼女の体を、確り抱きしめた。スカートを脱がしてみると、脇腹に深く大きい傷口がある。一突で腹を破つた致命傷だったのだ。彼女はもう応えてくれないけれど、私は力の限り抱きしめ、間もなく熱

い液体が彼女の体内に流れて行つた。

私は人を殺した。それは正当防衛であつた。罪にはなるまい然しそれよりも、彼女を失つた今、生きて行く意欲を私は失つた。彼女が出現しなかつたら、もつと生きていたに違いない。然し彼女は余りにも私の愛情を奪いすぎた。私の奇妙な嗜好に基づき自己満足に拘りなく、私は彼女に慰められていたのだ。それが死なれて始めて判つた。此の瞬間に彼女を追つて死ぬ以外には、私の幸せは考えられないのだ。幸いあの男の匕首がある。それにしても、私の初めて書き上げたのが此の遺書だとは……。

私は彼女の衣服を改めてやり、長い接吻を、最後の接吻を、其の唇に残しながら、彼女に重つて死ぬ心算だ。

私は今死に臨んで何ら悔を残すことのない清澄な気持にあるのだ。若し此の三人の変死体を見た人があつたならば、きつと三角関係の挙句の醜い無理心中の結末と見るだろう。私のこの今迄に嘗てない満足と愉悅の心境を、この死に臨んでの心境を知る者はないであろう。ましてや、私の此の拭い去り難い白い腋窩に対する幻想を発見する者はないであろう。

私は最後に當つて、此の偽りのない遺書を残して、私の死を世間のありふれた心中死体でないことを世間の人に訴えたいと思ふ。

(終)







# 僕という男

中野安太郎

私は此れからどんな親しい友人にも打明けた事のない私の秘められた半生を書き綴ることに致します。馬鹿な奴だと思いにらず読んでいつて下さい。

アブノーマルな現在を持つている人はどなたもそうだろうと思います。皆幼少の時にその萌芽があるのではないでしょう。当時私は七ツで幼稚園へ行つておりました。その頃、私の家は紙屋で雇人も三人ばかり使つておりました。店の突き当りの倉庫には荷造りに使う縄が沢山積んでありました。私はいつも其処を遊び場所にしておりました。かくれんぼをする時はその中が屈強の隠れ場になるからです。

或る晩春の頃でした。私は七ツ八ツも年上の鶴吉という小僧と遊んでいました。彼は私をその倉庫の中へ連れ込んで「泥棒ごっこ」だと云つて縄の切れ端で私を縛つてしまいました。私はいやだ〜と云いましたが彼は私をぐる〜巻きにすると縄の束の中へ押し転ろがしました。束と束との間に埋れながら私は新しい縄の芳しい匂いをうつとりと嗅ぎました。鶴吉が「どうだ、降参か、降参と云つたら解いてやる」と云いましたが、私はこの時子供心ながら何んとも云えない快い気持になつていました。鶴吉が閉めた扉のすき間から洩れてくる光さえ、何か

御光のようにさえ感じたのです。これが後年私がマゾヒストになる萌芽だと思ふのです。

私の近所には私と一ツ二ツ違う幼い友達が数人いました。どうしたわけか、私達は他所の家の便所汲取口の蓋を取つて中を覗く遊びを盛んにやりました。これを私達は「便所のぞき」と云つて毎日の様に近くの家の便所を覗き廻りました。勿論まだ幼稚園に通つてゐる幼い者ばかりですから、性的な意味は少しもなかつたのですが、大人がしてはいけないと云う事をしてみせる興味と、便所の汲取口の蓋を開けた時ぶんと臭つてくる臭氣に何んとも云えない興味があるのです。

私の家の前に寿司屋があつて、その家には年頃の二人の姉妹が居て、私を「安ちゃん」「安ちゃん」といつて可愛がつてくれますので私は毎日の様に遊びに行きました。その二人の姉妹は子供心にも美しい女の

## (私の略歴)

大正十四年五月、東京U区に生れ、昭和十三年K商業入学、昭和十五年同校中退、映写学校入学、戦時中は海軍省恤兵部勤務、昭和二十三年K村療養所に病氣のため入所昭和二十五年退所、現在はES劇場勤務、家族は父と高校生の弟との三人暮し。





人だと思いました。寿司屋の店の横の露地を入ると格子のはまつた部屋があつて、そこがその姉妹の部屋でした。私はひまさえあればその部屋へ遊びに行きました。遊びに行くと、直ぐレコードをかけて呉れて、姉の方が私を抱いてダンスの真似等をするのでした。小さい私はそんな時、頭がすつぽりと袂の中へ入つて、抱かれているその人の甘い香りが、だまらなくなるのでした。

それが何の匂いであるか、幼い私にはわかりませんでした。今度訪ねて行つた時、二人共留守だったので黙つて鏡台の抽出を開けると、口紅がありました。その口紅の匂いが彼女の匂いのように思えて、そつとそれを盗んで家へ帰つて秘かにその匂いをかいだりしました。丁度〃ベリの屋根の下〃が流行してゐた時で、それから後もその曲を聞く度に、その当時がありくと眼に浮かんで私の胸をせつなく締めつけるのでした。この姉妹は四五年後、相ついで胸を患つて亡くなりました。

八ツの時、小学校へ入りましたが、勉強嫌いの私は学校から帰つても本を読んだりした事もなく、近所の子供を集めてチャンバラごつこばかりやつていました。男の子供ばかりの中へ、二三軒先の長州屋という酒屋の子供で八重ちゃん、友ちゃんという姉妹が加つて、女だてらにチャンバラが好きで、必ず仲間に入つていました。或る時、私は彼女二人を誘つて近所の空地へ行つて〃お医者ごつこ〃をやりました。その空地は寮を建てるのかいふのでそこだけ子供の背丈位の雑草が生い茂つていたので、叢の中へ蕙を敷いて寝ころぶと、外からは少しも見えないのです。私は裏の倉庫から紙を荷造りする蕙を持ち出して三

人で原ッパへ行きました。

私は八重ちゃん、友ちゃんの二人のお腹を裸にして交る交る触りました。お医者ごつこが終つて三人で蕙をかぶつて抱きあつて擦くりあいを初めました。姉の八重ちゃんは私より二ツ年上でしたので、私は二人に押えつけられてしまいました。私は二人に縛つてくれるように頼みました。二人は私の持つてきた縄で後手に縛りハンカチで目かくし迄しました。そして八重ちゃん、友ちゃんはズロースを脱いで私の顔の上に跨がりました。私はこんな事迄頼みませんでしたので、最初はいやでしたが、押えつけられて内股の匂いをかいでいる中に、何んとも云えない快い気持ちになつてきました。

それからというものは、学校から帰ると毎日空地へ行つて遊びました。いつでも私は縛られて、虐められる方でした。身動ゝ出来ない位縛られて、腋の下や足の裏を擦られるのも好きで、姉妹は私がころげ廻つて逃げるのを面白がつて二人で私を弄びました。或る時は顔にツバをはきかけたり、オシッコをかけられたりしました。然し、私達のこの遊びも人に見つかつてしまい、その遊びを続けることが出来なくなりました。成人してからはその姉妹とは不思議に口もきかなくなりました。

小学校も終り近くなり中学校へ入るため勉強しなければならぬのに家には父が好きで講談全集が揃えてあつたので盛んに読み耽りました。講談にはよく女が縛られたり、責められてゐる絵があり、又女が責められている文章があり、それ等を見たり読んだりしますと、何んだか胸がドキ／＼して来るのでした。その絵の中に坐つた膝の上に石を乗せられて責められてい





る絵がありました。説明を読むと算盤責めというのだそうです。が、私もそんな風にして欲しいものだと思つて、正坐して膝の上に本を沢山積んでみました。しかし、それだけでは物足りないの、色々と考えた末、小さな一人用のチャップ台をひつくり返えして丁度高くなつてゐるサンの上に坐り、膝の上に本を重ねて積みました。何んにも乗せないで只正坐してゐるだけでもサンが脛に当つて痛いのですが、重い物を膝の上に乗せますと痛みは相当なものです。しかし、我慢をして手当り次第に近くの重味のあるものを膝の上に乗せますと、疼痛は愈々増してきて、その疼痛が通り越すと何んとも云えない快い氣持になつてくるのでした。

この遊びを発見してからは、学校から帰ると一人で二階の書斎へ籠つて、それを繰り返えしました。当時譚海という少年雑誌がありました。それに横溝正史の神変稲妻車という小説が出ていて、その中に縛られて樹に吊された美少年が奥方に責められる場面がありました。口絵にもその場面の画が色刷で大きく出ていました。私はその雑誌を秘藏して暇さえあればその口絵を見、その文を読み乍ら自分をその美少年に空想して、自分で自分を拷問にかけて責めるのでした。

私は本屋へ行き、バラ／＼と頁をめくつて見て少しでも責め場があると、その雑誌や本を買つてきて、それを読み乍ら自分をそのようにして責めてみました。角田喜久雄、野村胡堂等の

## 倒錯の告白

物には必ず責め場がありました。だん／＼坐つてゐる

だけでは物足りなくなり、上に乗せる物も重くして、それでも足りない時は揺すぶつて痛みを強くしました。力一杯揺すつてゐると、急に快感が強くなり、思わずパンツを汚しましたので変だなあと思いましたが、それが何のであるかは、三四年後になる迄判りませんでした。

只この拷問台の上に坐る時には、とても氣持よくなるので毎日繰り返えし、時には日に二度もする様な事がありました。然し、べつとりした物が出ると、後はもう坐つてゐる事も出来ぬ位痛くなり、嫌になるので急いで膝の上の物を下すのでした。

私は以前に酒屋の姉妹から、かゝされたあの匂いを何んとかしてもう一度かいでみたいものだと思ひました。そう思ひ出すとその執念がいつ迄も頭の中から消え去つてゆかないのです。

「そうだ、女の子のはいてゐるズロースならきつとあの匂いがあるだろう」と思い二階の物干場から屋根伝いに隣家へ忍び込みました。その家には小学校へ通つてゐる一人娘がいましたが都合よく、一枚のズロースを手に入れることが出来ました。書斎へ持つて帰るなりその匂をかぐと、思つた通り前に経験したと同じ臭いでした。その時の私の喜び、私はそのズロースの一番汚れてゐる所を口に当て、上から手拭で縛り、私の愛用の拷問台の上に坐つて夢中でゆすぶりました。この時の快感は今迄に経験したことのないものでした。

それから隣家の留守を見ては二階から忍び込み、娘のばかりではなく、母親のまでも無断で借りて私の秘密の拷問遊びに使いました。このズロースの拝借は其の後とう／＼最後迄見つからずに落しました。然し隣家の留守を狙つて忍び込むことで





すから、そうは忍び込めず、ズロースのない時は自分のパンツを代用に使った事もありました。

其の頃、私は毎晩寝る時に色々の事を空想するのが楽しみでした。それは同級生のIやYやTにいじめられて、最後は縛られて便所の中へ放り込まれ、小便をかけられるのです。その頃は女性ではなく男性にいじめられる空想ばかりでした。

愈々上級学校の試験を受けるようになりましたが、拷問に魅力があつて相変らずそんな事ばかりやつて一向に勉強に手がつきませんでしたので、仕方なく私立のK商業に入学しました。

流石に小学校時代と違って、上級学校では皆、性に興味を持つていて、同級生や上級生からいろいろの事を教わりました。

オナニーの事も初めて知りました。早速家へ帰るとやつてみました。すると拷問台に上った時と同じ快感がして、同じ様なものが出ました。始めてそれが精液であることを知りました。私は私なりに三年も前からオナニーをやつていたわけです。その頃友人から借りて読んだ本には、オナニーをやりと過ぎると不具になると書いてあつたので、びつくりして、暫くの間にその拷問も止めてしまいました。然し、あの身ぶるいする様な強い快感を思うと、どうしても止められずついやつてしまふのです。それでも一週に一回ときめて自分で強く自制しておりました。

二年生頃から文学に興味を持ち初め、手あたり次第に耽溺した本の中でも谷崎潤一郎の少年という小説には大いに感激致しました。この小説の筋は、少年がその友人と二人で友人の姉に腰掛けになれ馬になれと虐められ最後には手足を縛られて、顔の上にローソクを立てられ、ロウが顔の上に落ちる熱さを我慢

する所があります。私は早速自分で顔の上にローソクを立て、試みてみましたが、火傷をしそうになつたので直ぐ止めてしまいました。

それから潤一郎の物を片ツ端から読み、彼の作品に傾倒してしまいました。『痴人の愛』等は何回読み返えたかも知れませんが、私も譲治のようにナオミにいじめられたら、どんなにいいだろうかと思いました。

幼い時便所のぞきをした事を申し上げましたが、此の頃になつて私の頭が便所に対して狂崇的に執着を感じるようになって自分ながら嫌になるのですが、その身肉から盛り上つてくる強烈な衝動は、どうしても防ぎきれぬものではありませんでした。町はずれの半ば壊れかゝつた共同便所の中へ入つて色々と空想するのが好きでした。時々便壺の中に赤い花びらのような生々しい血痕を発見した時等は、どういふ原因か私の身体の中の悪魔がむく／＼と動き出すのを覚えるのです。

よく映画館へ行きました。それは映画を見る目的ではないのです。いつも映画は上の空で、女便所へ行つては、中へ入つて匂いをかぐのです。便所の上に紙を置いておき、女の人が入つた後、直ぐに行つて小便で濡れている紙を口の中へ入れましたそれが又堪らなく快いのです。

三年の時、勉強がいやになり、とう／＼学校を止めてしまいました。暫く家業の手伝いをしておりましたが、元々商人は嫌いだつたので、映写技士になりたいと思い、当時九段下にあつた映写学校に入りました。映写技士になれば、いつでも女便所の匂いを直ぐかけられると思つたからでした。学校を終えて、小石





川のH東宝へ見習として入社致しました。しかし、その劇場は水洗便所でしたので私の慾望を満足させてくれませんでした。

それでもH花柳界が近くにあるので、劇場にはよく芸者が見に来ました。芸者の坐つた後には、京花紙でかんだ鼻紙がよく落ちていましたので、帰つた後からそれを拾つてきて便所の中で、鼻汁をなめたりしました。鼻汁を舐めるのは、潤一郎の「悪魔」という小説の中に、下宿の娘が忘れていつたハンカチの鼻汁を舐める所があり、私も一度やつて見たいと思つていたからです。鼻汁も小便と殆んど同じ様な興奮を覚えました。此の時は自分乍ら浅ましいことだと思ひました。

そんな事があつてから、ひどい自己嫌惡に陥り、こんな事をしていたら、今に悪い病氣がうつり、いやもううつてゐるのだと考えると、自分で自分の頭が変になり、夜もろくに眠れない日が続きました。その中に戦争が激しくなり私は徴用迷れに海軍省の映画係に入りました。この頃から私の異常も少しは元に戻り、時折、欲望がある時だけ拷問をしておりました。

二十才の時、初めて恋愛をしました。戦時中の事故、映画を見たり音楽会へ行つたりするのが関の山でした。それに又、女性の肉体そのものには欲望を全然感じなかつたのです。三年間交際している間、接吻一つした事ありませんでした。戦争が末期になつて私の家も戦災で焼け、過去十年間に亘つて集めた責め絵も小説も一朝にして灰になつてしまいました。激しい世の移り変りは私の一生の中で私としては一番ノーマルな状態に置いたのです。愛用の拷問台も勿論焼けてしまつてありませんでした。

終戦後一二年して、カストリ雑誌が街に氾濫しました。その中に変態的な読み物が見えたので、私はマゾの事やサドの記事を拾つて読んでゐる中に、再び昔のような欲望が湧き上りあの私独特の拷問をやり出しました。膝の上に乘せる物も戦時中集めていて幸い焼け残つたレコードのアルバムを何冊も乗せました。然し以前と違つて、後で非常に疲れ翌日は頭痛がする様になりましたので、この方法も私に対して漸次興味がなくなつてきました。

其の頃、空氣座という劇団が新宿の帝都座で「肉体の門」をやり出して東京中の評判でしたので、私もそれを見に行きました。最初から強烈にグイ／＼と私は舞台にひきつけられました。クライマックスで一人の女が三人の女にリンチされる所、即ち樹に吊された女を三人の女が替る替るバンドで打つ場面です。私の興奮は極度に達しました。今迄本や雑誌だけでしか読んだ事のない場面を、眼前でやつてゐるではありませんか、私は何回も繰り返えして見返えし、吊されてリンチされている女が自分であると空想して楽しんでおりました。私もあの様に女に縛られて打たれてみたいと思ふ氣をどうする事も出来ませんでした。しかし、一体そんな事を誰に頼めましょう。

私は家が焼けてから厄介になつてゐる伯母の家に帰り、伯母の留守に風呂場の梁に繩をぶら下げ先を輪にして、台の上に乗つて腕を通し、台から足をはずしてぶら下つてみました。手首に喰い込む繩の痛さに、思わず「痛い」と呻めいてしまいました。だが、その痛さが又何んとも云えないよい氣持でした。伯母が留守になると私は一人で風呂場へ入つてそれをやりました。





少年時代からの此の様な不摂生は生来丈夫でなかつた私の身体をすっかり弱らせておりました。昭和二十三年の春、私はとう／＼咯血し都下K村の療養所に入所してしまつたのです。

それから一年は病氣を恐れて、ひたすら何も忘れて療養に つとめましたので次第に元氣が回復して参りました。身体に元氣がついてくると、又ぞろ私のあのおぞましい欲望が頭をもたげてくるのです。

私の病室は個室で同じ病棟には若い女性の患者も多く、便所は男も女も一緒でした。私は此れ幸いと、便器の所へ紙を置き女の患者が便所へ行つた後へ行つて女の小便の含んだ紙を口へ入れました。終りには綿の方が水分をよく吸うので綿花を置いて、しんだ／＼彼女たちの小便を十分に飲みました。又彼女達が散歩に出たりした後で、ベッドの下の物入れから、ズロースを出して匂いをかいだりました。

身体が回復して自由に散歩出来るようになると、一人で責めの絵や本を持つて林の中へ行き松の木に自分で身体を縛りつけたりしました。夏は蚊が非常に多いので、裸になつて縛りつけ動けないようにして、蚊に喰われるのを我慢して、自分で自分を責めにしたりして居りました。此の頃は強く縛つて暫くすると、それだけで快感を覚えて射精してしまふのでした。

私は此処で私を強く愛して呉れる看護婦と知り合いになりました。彼女は私と違つてノーマルな人で、私がアブノーマルな話をするとき非常にいやがりました。勿論私がバンドで打つてくれと頼んでも、縄で縛つてくれと頼んでもして呉れませんでした。私は彼女に大きな好意以上のものを持つていただけに、そ

れが物足りなく、到底私の愛人として愛してゆけることが出来ないと思ひました。私の愛人としての条件は、私を縛り思い切り叩き打ち、私の苦しむのを見て喜ぶ人でなくてはならなかつたのです。

二年間の療養生活も終り私は元よりも元氣になりました。看護婦の愛人とは別れにくい思いもありましたが、私を虐待してくれる女でなければ所詮長続きする間ではありませんでした。家へ歸つても、前の様な拷問はやらなくなりました。それは病氣に対する恐怖心があつたのかも知れません。

昨年より再び映画館へ勤めるようになりましたが、私が女性から打たれたい、縛られたい、虐められたいという望みは以前よりも強烈となり、昔の様に毎晩寝る時、色々な女性に自分自身が虐められる空想ばかりをする様になりました。

これで私の馬鹿馬鹿しい半生記を終わりますが、今迄御読みのように、私は自分で自分を責める自虐症かも知れません。何んとなればまだ本当には、私は私の望む通り実際に女性より虐待された事がないのです。しかし、いつかはきつと私の望みをかなえて呉れる女性の方が現れる事と思います。若しもそういう人が私の前に現れたなら、私はきつと残りの半生をその人の前に捧げて、その人の奴隷となり下ることでしょう。

x x x x







# 妖しい花びら

寺尾修治

(一)

ぼくは早く父をうしない、ものごころづいた頃より、母と二人きりの生活でした。

ぼくの家は、代々富裕で、父祖の財産を受け継いだ銀行員であつた父は、ぼくが生れると、間もなく若死し、未亡人となつた当時二十一才の若くて、美しい母は、一人息子のぼくのために、再婚せず、貞節を守りとおしたのでした。

それには、すでに世を去つた父が、幾何かの財産を残しておいてくれたからでもあります。母は若く、夫婦生活の期間が短かく、女としての、いわゆる性的な意味の迷いもなかつたようでした。

母はぼくをいつくしみ、ぼくの成長のみが生甲斐でした。

ぼくの極度の内気さ、女性的で、はにかみ屋の性癖は、親一人、子二人の生活から来ていると思います。ぼくはいつも母と一緒にいて、母と話し、母と遊び、母と入浴し、母と一緒に寝るのでした。

## 倒錯の告白

ぼくはどちらかと云えば、父に似

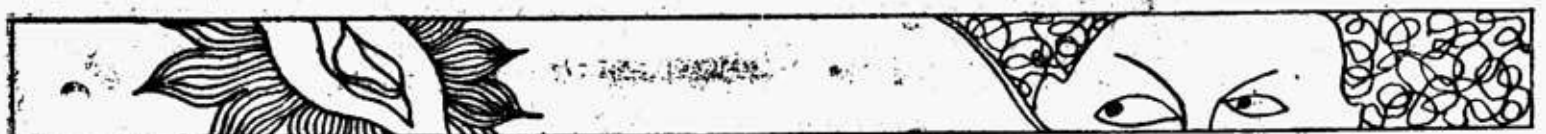
て、色が浅黒く、鼻が低く、鈍感な容貌ですが、母は非常に美しく、上背があつて伸びやかな肢体をもち、頭には豊かな黒髪を品よく捲き、捷毛の長くのびた濃い黒眼、まつすぐな柔い線の鼻、かたちのよい唇を備えた瓜実顔は、色が白くて、声はやさしく、澄んでいました。

ことに、美しかつたのは肉体です。母の真白いからだは、なまめかしく、ぼくは子供のときから、母と二人で風呂へはいるのが、まあどんなに嬉しくつて、どんなに恥しくて、思わず、胸がどきどきするぐらいでした。

ぼくは母の一条もまとわぬ裸体を見るのが好きでした。父が死んでから、ぼくたちは小さな借家に移りましたが、粗末ながらも風呂場は附いていました。近所の銭湯へもよく行きました。ぼくは母と二人きりで、家の風呂へ入るのも好きでしたが、

銭湯で女たちの裸体群像を見るのも好きでした。

近所の銭湯の白いタイル張り、ところどころ、はげ落ちて黒ずんでいましたが、内部は青いタイル張りで、屋号にちなんで、鴨川を描いたペンキ画の柳が青く頭の上から深くおほいかぶさる並木の柳のみどり、足もとに茂る雑草の湿っぽいみどり堤防の濃いみどり、川底になびく藻草の浅いみどり、青いペン





キ面の影は、浴槽に青く、濃く、おゝいかぶさり、浴槽の湯はあざやかな緑でした。

ぼくは一足先に湯の中にとびこみながら、裸になつた母が入ってくるのを待つのでした。

母は手拭いを前にあてゝ、入つて来ます。そして、ぼくのすぐ傍らにかがみこんで、かゝり湯をするのでした、母のからだからは、汗の匂いととも、あの女のみのもつ、肉体の深部からくるかなしい匂いが、むつとしました。

何もかも緑づくめのなかに、母の肉体はかなしいほど白いのでした、母は湯の中にしやがみこみ、手拭を湯の中に浸し、ぼくの顔に滲む汗を拭いてくれるのでした。

湯に浸つた母の膝は、いつそう白く、黒い毛が、海藻のようにゆらゆら揺めいていました、すると、ぼくはきまつて、胸のつまるようなかなしみに襲われるのでした。

銭湯で、ぼくは随分、いろんな女たちを、若い女や、成熟きつた女たちの裸体を見ましたが、ぼくの母ほど美しいからだを、ぼくはまだ見たことがありません。

ぼくは洗い場で、たわむれによく母の背を流しました、美しい母の背に、シャボンの泡を塗りつけているぼくに、

「まあ、坊つちやん、親孝行ね」

洗い場で洗っている近所の小母さんから、よく褒められました。すると、母もうれしそくに、ホホホと、笑いながら、褒めてくれるのでした、そして褒められることが、身内が熱くなるほど、恥しくて、いやでいやでならなかつたのでした。

ぼくは決して親孝行ではなく、母の美しいからだを洗つてみ

るのは、変態的なぼくの趣味だつたのです、ぼくは母から、女を感じていたのかも知れません。

ぼくがはじめて性欲をかんじたのも、母からでした、たしか四つか、五つのときだつたと思います、小さい頃のこととはよくおぼえていませんが、それは、母の一寸した動作からだつたと思います。

やはり、そのじぶん、ぼくは母と一緒に寝ながら、母の豊かな乳房を吸つていたとき、とつぜん、股間に異様な液体が溢れ出るのをおぼえました。

お寝小便かしら？ その当日、ぼくには寝小便の悪癖があり母は、ぼくがどんなわがまゝを云つても、また、いけないことをしても、決してお叱りにならなかつたのですが、ただぼくの寝小便に対してだけは、厳格でした。

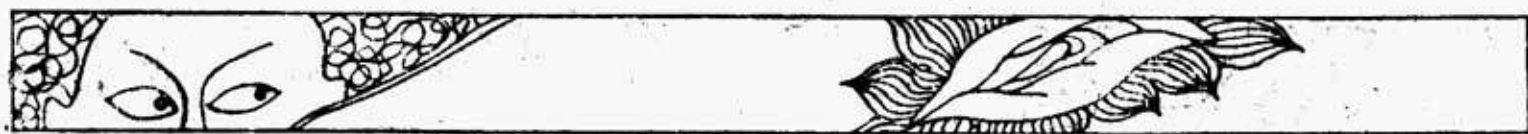
ねまきの部分も濡れていましたけれど、それは、寝小便ではないようでした、それが何であつたことを知つたのは、ずつと後のことです。

## (二)

母は奇麗で、やさしくて、何一つ欠点がなく、あまりによすぎました。

ぼくがどんなにわがまゝを云つても、また、いけないことをして、母はいちどもお叱りにならず、いつも笑つて、ぼくをお可愛いがるのでした。こんな、やさしいお母さまはないとおもいます。

いつか、ぼくがころんで、足をけがしたとき、母は真蒼にな





つて、ぼくの足に繻帯を巻いて下さりながら、めそめそと泣きました。

また、いつだつたか、ぼくがお夕飯どきに飯らなかつたとき母は心配のあまり、真蒼になつて、いきなり、ぼくを抱きしめわつとお泣きになるのです。

ぼくもまた、ときどき、ふつと淋しく思うようなときなど、用事もないのに、母を呼んでみたり、「母さん、大好き」と云つて、母にしがみつぎ、声をたこて泣くこともありました、それはいかなるかなしみが、幼いぼくをそうさせるのか、ぼくは母に武者振りつくのでした。

「まあ、どうしたの、お馬鹿ね」

母はやさしく笑つて、ぼくを腕のなかに抱きすくめ、頬をすりよせ、接吻してくれるのでした。

ぼくは母にさからわず、素直で、何でも母の云いつけを守りました、ぼくは親孝行の息子でしたが、ほんとうは、母とぼくとは恋人みたいでした、少しいやらしいぐらいでした。

そのうち、ぼくは小学校へ入学しましたが、さいわい、ぼくは学校の方もよく出来ました。ぼくが優等生であることが、母により大きな希望と、理想を与え、母の期待がぼくには少し重苦しいほどでした。

ぼくには、幼な友だちの女の子を遊んだ、なつかしい思い出はありません。

小学校時代、上級生や下級生に、好きな女の子があつて、つけぶみをしたり、いじめたり、泣かしたりする級友がいましたが、ぼくにはそんな思い出は一つもないのです。

ぼくは思春期になつても好きな女の子もなく、親しい友だちもありませんでした、ぼくには母がすべてでした。

母はよく、「お父さまさえ、生きていらして下さればねえ」と、愚知をこぼしましたが、ぼくは父が生きていてくれたら—と思つたことは一度もないのです。

父が残した幾何かの財産は、こんな時代になつてもぼくたち親子が生きていくに事欠きませんでしたし、ぼくが大学教育を受けるにも充分でした。

父が生きていたら！ ぼくは父に嫉妬することが多く、こんなに母を独占することは出来ないでしょう、だいいち、ぼくが母と一緒に寝ることは許されないのでしよう。

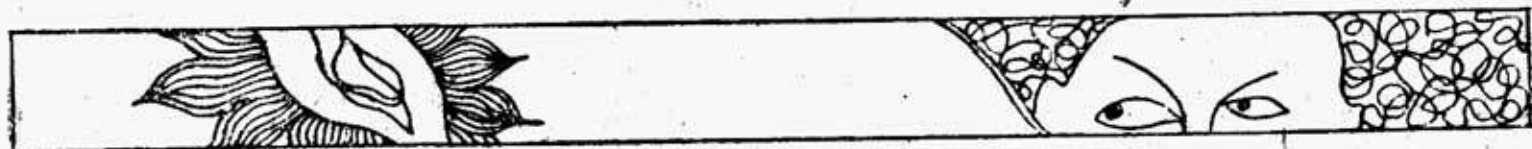
ぼくは小学校時代はもとより、新制高校へ入つてからも、ずっと母と一緒に寝、一緒に入浴していましたが、ぼくは母に甘え一人息子の特権で子供の頃からの習慣から、つい母の乳房に触れ、愛撫し、吸うのでした、母はそんな子供っぽいぼくをいつも笑つていました。

「大きな坊や」

と云つて、ぼくのなすがまゝにまかせ、手を突つこんだり、撫でたり、さすつたり、小さかつた頃とおなじようにして下さるのでした。

母にはぼくがいつまでも子供だつたかも知れませんが、入浴の際、もうぼくは母のからだを、正視するに堪えられなかつたぐらいでした。そして、ぼくの裸体を、平気で母の前に曝すことにも、苦痛をかんじていました。

いま、で子供っぽかつたぼくのからだは、ちょうど、少女の





乳房が日に日に膨らむように、いままで包まれていたものが、もうすっかり開き出て来ていました。

## (三)

女学校を出た年に、平凡に見合結婚をし、翌年、ぼくを生ん母は、この時三十七才の女ざかりでした。

ぼくはいつも母と一緒に外出するのですが、母は世帯の苦勞が少いせいか、暢気で、いつまでも若々しく、新制高校生のぼくとは、親子というよりも、ひとは姉弟のように見るのでした。ぼくは若くて、美しい母を誇っていました。

ぼくの学校には、何某の御令嬢も居り、ぼくはいろんな女優やら、ミス、ニッポンやらを見ましたけれど、ぼくの母ほど美しいひとを、ぼくはまだ見たことがないのです。

母は美しく、ぼくと母とは恋人みたいですから、いやらしくて、憎らしくて、そうして、何だかさびしくて、思いきり我儘をして、母と大喧嘩をしたくて、仕様がなほほどでした。

もつとも、ぼくにも危険な年令がやつて来ていましたし、素直で、親孝行だったぼくは、母に反抗するようになっていました。

同級生のなかには、もう女を知っている友人もあり、大半は貰を吸い、酒の味をおぼえ、恋愛やパチンコに打ち興じていましたけれど、ぼくはまだまだおとなしい学生でした。

ただ「チャタレー夫人の恋人」や、春本、春画の類は、回覧されていしたので、ぼくは幼い性欲をそれによつて燃やしてあげていました。

ぼくの性愛の対象は、いつも母でした。春本や春画をとおしていつも淫らな幻想を思い浮べるのは、ぼくを生んだ神聖な母でした。

ぼくはもう大きくなつているのでし、母と入浴したり、一緒に寝ることは避けるべきだったので、ぼくたちにはそれが長年の習慣でしたし、親一人、子一人のぼくたちには、ちよつと淋しいことでした。

母が、長年さびしい寡婦の生活に堪えられて来られたのも、ぼくと一緒に寝ていたからこそと思います。

ぼくは母と一緒に寝ながら、毎夜あの禁断の木の実に触れた欲望に駆られていました。それは手をのばせば、とどくところにあるのでした。ぼくは母に気付かれぬよう、ひそかに淫らな空想をはせ乍ら欲情的な夢を見ては、夢精しました。

このまゝでいると、ぼくは極く自然に、肉身相姦といふ、人間冒瀆の恐しい罪を犯しそうな不安をかんじていました。ぼくのこの不安を倍加させたものに、同級生の松村の事件がありました。

松村の停学は、犯罪事件が併発しなかつたため、幸い新聞記事にはなりませんでしたが、彼は奥の妹を妊娠させたのでした。彼は小さな鉄工所の息子で、階下は工場に使っており、六疊と二疊の二階に、家族は雑魚寝するのですが、彼の家は子沢山で、長男の彼の下には、七人の妹があり、両親と都合十人、二間よりない部屋に寝込む関係上、家がせまいのと、ふとんがないので、彼は妹と一緒に寝かされていたのでした。

思春期の彼の手が、いつ知らず、妹の膨らみはじめた乳房に





触れ、少女期のほのぼのと匂う無毛の丘に触れるようになったのも自然の行きてでした、きようだいでも、一緒に寝ていると自然とこういう関係に陥るものと見えます。

ぼくだって、母を妊娠させてしまいかも知れないのです。女ざかりの母は、勿論、月経はありません。それはつい此の間、何気なく立ち上った母は、ぼくの異様な凝視に、ハツとして、ふりむき、

「あら、まあ」

と、顔を赫く染めて、ひどく狼狽したことがあるのです。「母さん、血」という言葉を、ごくりと呑み込むと、ぼくははつきり横を向いてしまいました。ぼくはこのとき、非常なショックを受けたものでした。ぼくははじめて、女の血を見たのでした。

しかし、あのことが、ぼくを撃つたはげしさは、何か思い出すにつけても、あのときから、何日目だった、あのときから、何日前だったと、「あのとき」が境界線になるのでした。

(四)

母は決して教養のない女ではないのですが、そして、人並み以上に行儀作法が正しくて、貞操堅固でしたが、それゆえにこそ尙更エロチックであつたのだと思います。

それは、ぼくを可愛いがつてくれた母方の祖母の葬式に行く

# 倒錯の告白

ときのことでした  
祖母はもう長いこと  
老衰で寝ていま

したが、死んだという電報がくると、母はすぐ泣きぐづれてしまいました。

「いゝおばあさんだつたでしょう。いくつになつても、お母さんていゝものよ」

と母は涙を拭いながら云いましたが、何年か後、自分と年取つて、この母を失うときのことを思うと、それが実感となつてぼくの胸に迫つて来るのでした。

その日、母は喪服を着て、(母は色が白いせいか、黒い着物がよく似合いました。ことに喪服を着た母は、清浄な感じで、ぼくは思わず、「母さん、きれい」と云つて、憂色に打ち沈んだ母から叱られました。)ぼくと田舎の家へ行きました。

山蔭の辺鄙な小駅で降りると、そこからバスに乗るのですが生憎なことに、この日途中の路が工事中で、バスの運転は中止されていました。不便な田舎のこととて、他に乗物の便もなくぼくたちは歩かねばなりませんでした。

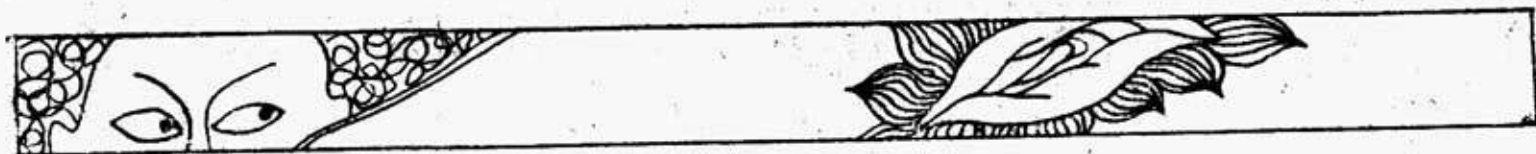
「仕方がないわ。歩きましょう、母さんだつて、むかしこの道を歩いて、女学校へ通つたのだから」

「でも、母さん歩ける？」

「大丈夫よ」

二里ほどの田舎道でしたが、ぼくたちは仕方なく、歩きました。初冬のうすら冷たい日は、いつしか暮れかゝつていました。そのちに、誰にも出逢わないような、畑道や、せらゝぎに沿つた谷間の道を、ぼくたちはいつしか黙りこくつて、ただ脚を速めました。

母は意外に健脚で、二人で並んで街を歩くとき、





「修ちゃん、もう少しゆつくり歩いて」

とぼくはよく催促されるのですが、このとき、ぼくより速いぐらいでした、葬式は明日なのですが、母としては一刻も早く祖母の死顔に面したかったのでしょう。

そのうちに、寒かつたせい、冷えた見え、ぼくは小便がしたくなつて来ました、母は立小便を非常に嫌いましたので、ぼくは随分ガマンしたのですが、そのうちに二進も三進もいなくなつて来ました。人気のない山道のことです、あたりはもう暮れかゝつていますし、ぼくは思いきつて、

「母さん、ぼく、ちよつと——」

とことわると、片側切り立つた崖にむいて脚をひらき、泌々と長い小便をしました。

ぼくが立小便をするとき、母は少し先を歩きながら、待つていてくれて、

「いやなひとね」

とお小言を云うのですが、このとき小便を終えてあたりを見まわしても、母のすがたが見えません。

「母さん」

ぼくは歩きながら呼んでみましたが、返事はなく、そのかわり、何処からか、シヤアシヤアと云う威勢のよい水の音が耳につきました、ふと、見下ろすと、ぼくのすぐ傍らの、一段ひくなつた崖道に、うしろむきになつた母のすがたが見え、きもの裾をまくり、白い尻を見せて、桃色の複雑な組織から、一条の清冽な液体が流れているのが、黄昏のなかに鮮明に浮んでいるのでした。

ぼくは母と一緒に入浴していますし、母の身体の隅々まで知っているのですが、母が小便や、大便をするところだけはさすがにまだ見たことがなく、このときのぼくを撃つたはげしさは、後にぼくが、肉身相姦という、人間冒瀆の恐しい罪を犯すに至つた、動機ともなつた、と云つても差支えないほどです。

母は随分あたりに気を配りながら、恥しそうな仕草で小便していました、都会的な、上品な母から、こういう場面を見るには、ちよつと意外でしたが、母があんなに急いで歩いたのも、実は小便がしたかつたからでした。

途中、人気もなく、W・Cはもとよりなく、やむ得ないことでしたが、かつて、この道を歩いて、登校したという女校時代の母も、きつと、立小便したにちがいありません、ぼくは少女の日の母が、赤い腰巻きをまくり脚をひらいて白い股や尻を見せ、そして、あの桃色の複雑な組織から、一条の清冽な液体を草叢のなかにそゝがせている図を、頭のなかで幾度も思い描いてみました。

その日、ぼくたちは遅く、祖母の家に着きましたが、葬式も何もかも、ぼくには上の空で、ただあのことで一杯でした。その後も、ぼくはあのこととに身震いし、興奮し、母の顔を正視することが出来ず、母としやべりながら、ふと黙つてしまつたり笑いながらこわばつた表情になつて、まじまじと母の顔を眺めたりしました。

「修ちゃん、どうしたの？」

という母の言葉に、ぼくは何も云わないで何かを忍んでいました。





## (五)

松村の事件以来、ぼくは随分、母を避けようとして来たのですが、母の不用意さは、思春期のぼくに、いろんな強い刺激を与え、ぼくは遂にあんな恐しい罪を犯すに至つたのです。

あれ以来、ぼくは夜、眠ることが出来ませんでした、自分の不眠のため、ぼくは母と寢床を別にしたのですが、傍らで、母が眠っているのを見守りながら、ぼくはいつまでも眠られず、寢床のなかで反転していました。

――電気を消した瞬間、母の胸がひらき、母の軀から、淫蕩な倦きることのない連想が湧き、ぼくはその想念にしがみつくのでした。

仰向けになつて、石のように身うごきもせず、暗胆とした闇を湛えたぼくの眼に、あの桃色の複雑な組織が、あやしい花びらのように浮ぶのでした、花びらからは、一条の清冽な液体が流れていました。

ぼくは毎夜のように Onanie しました、それでぼくは思い出のですが、この快感は、いつたい誰に教えられたものやら、教えたものは、はじめ誰から教えられたものやら、ぼくはあの慰みを、誰に教えられたか、それとも、ひとりであれは自分で発見したのか。

ただ云えることはぼくの記憶の及ぶかぎり、遠い過去をさかのぼつてみても、その慰みは、ちやんとそこにあつたという事実です。

もうこの頃では、ぼくは眠られぬまゝ、一晚に三度も四度も

それを試みていました。

そうした或る夜、ぼくの傍らで、母はすでに眠っている筈なのに、或る不思議な気配が、部屋じゅうを上から下までつらぬく、或る不思議なわななきが、なだらかな波動に乗つて、ぼくに伝つてくるのでした。

母はいつものように、もう眠つてしまつたものと思ひ、ぼくは氣にもかけずにいたのですが、ところがこの物音にぼくは耳を澄ましました。ぼくは何とかして、もつとはつきりしたひびきを捉え、何事があるのか知ろうと努めました。

波動がはげしくなるにつれて、母の呼吸も荒くなつてゆきます。ぼくは全身でそれを感じながら、母がいま何をしているか自分の体験をとおして、よくわかりました。

「可愛相な、ママ」

ぼくはこのときほど、母から女を感じたことも、かつてないのです。ぼくはきき耳を立てながら、最後に、もう我慢が出来なくなつて、起き上り、すぐ傍らの母のふとんのなかへしのびこんでしまつたのです。

ぼくは此の上更に蛇足を加える必要はないようです。此の世の中で一番美しい女である母、一番淑やかで優しい母、ぼくはこの讚美を地下の父も宥してくるでしよう。ぼくは母に対する此の讚美を更に確定的なものにしてしまつた昨今この上もない幸福に酔いしれているのです。







# 弱者の醍醐味

村井健司

## 【一】

月島の家並の彼方には、既に明け初める光が、空に漂っていた。不思議な老人の物語りは、私の心を次第に沈めてくれ、人生を愉快にさえしてくれるのだった。そしてルミという少女に、もう一度会って見たいと、無上に心が疼いた。

「あつしは盗視性慾病とでも言うんでしうかね、この病氣になつたそもその発端は、随分と古い話でさ。かれこれ四十年になりますかね。あつしのまだ二十才の時でした。あつしの生国は信州軽井沢の在でしてね。家は百姓で、乳牛を二頭飼つてましてね、まあ中農という所でしょう。毎日朝と夕方に別荘に乳を配達するのが私の役目でした。これから話そうという三人の令嬢は、東京女学館の五年生になる、朋子、華子、良子という、いづれも伯爵家のお嬢さん方で、あつしはこの三人の家にも乳を持つて行くのでよく知つていた訳なんです。それは大の仲好で、軽井沢でも三人組といひましてね、評判娘でしたが、良く言えば明朗、悪く言えばフラツパなお嬢さん方で、下々の

あつし等にも気軽に言葉をかけてくれるので、こらいうのを初恋というんでしうかね、彼女達は毎年夏にはやつて来るんですが、あつしは夏が来るのが待ち遠しくてたまらなかつたものです。

今だつたらこんな馬鹿馬鹿しい事を、内親王様方だつてなさらないでしうが、何分四十年前も前のことで、性科学などというものがなかつた頃のことです。お嬢さん方が妙なことに興味を持つたのをいいことにして、とんでもない悪戯をした悪党がいたものでさ。

丁度風過ぎでしたらう。あつしは用事があつて踏掛に出かける途中、余り暑いので白樺の林に入つて寝転んでいました。あのお嬢さん方の誰とでもいい、こんな所で……、などと甘い夢にふけていました。カッコーが遠くで鳴いていました。あつしが朦朧とした意識の中で、三人の天女達の声を聞いたのは間もなくだつたのでしう。あつしは深々と薄の繁みにさえぎられていましたので、彼女達から見えませんでした。睡気は一ぺんに吹き飛んで、あつしは彼女達の話声に、一心に耳を傾けました。二十米とは離れていませんで、彼女達の秘密らしい声も





クツクツと笑う忍笑いと共に、手に取る様に聞えて来ます。ざつとまあこんな具合でしてね。ヘッヘッ。

「あなた古事記読んだことある？」

「ウン、ちつとも面白くなかつたわ」

一番可愛らしい声の良子さんが答えました。

「あたし面白いこと発見しちゃつたの。イザナギ、イザナミはね、成り成りて成り余れるところと、成り成りて成り足らざるところを一緒に合せるんですつて。フフフ……」

これは一番肉附のいい、素晴らしい胸を持つた朋子さんの、アルトに近い声です。

「それ、あのことでしょう。フフフ……」

高いソプラの華子さんです。

「なんのことなのよ。ね。教えて」

良子さんです。フフフ、フフフと朋子さんと華子さんは顔を見合わして笑っていました。

「あのね、マンが成り余っているの。ウーマンが成り足らないの。解つた？」

こう説明する朋子さんも華子さんも、実は少し解つた位で、まだ実物を見たことがないのでした。我々下々の者ですと銭湯などで、いやという程見えていますし、親父とお袋の夜のいとなみなどを見つけた者も多いでしょう。

## 倒錯の告白

が彼女等は父親と風呂に入つたこともないので、全

然知らないのです。

これから三人は評議の結果、百聞は一見にしかずというので誰がいいかということになりました。あつしの名前が出ました。あつしは心臓の高鳴りで、薄が揺れるかと思えるほどでした。全く自分の臆病には愛想が尽きまさら。あつしはどうしても出て行けないのです。純情だつたんですね。

その時馬の蹄の音がして、高木という彼女達の乗馬の先生が踏掛街道をこちらへやつて来るではありませんか。嫌な野郎でしてね。年は二十五六でしょう。高木子爵の三男坊なんです。がね。こいつがまんまと彼女達の実験の実験台になりやがったんでさあ……」

## 【二】

私はこの老人と奇しくも語り明す破目になつたいきさつを述べて置こう。それからルミを知つた……。其の後の三人の奇妙な友情について……。

私は恋人の真知子が高山専務と別々のドアからであつたが熱海行の急行に乗つたのを、確かに此の目で見た。母が急病だと彼女が断つた今宵の逢引の理由が、専務と熱海くんだりで一夜を濡れようつてな訳だつたのか……。

「畜生!!」

と叫んだ私は、いきなりボラットホームからレール上に飛び下りると、熱海行が発車しようとしている向う側のホームに駆け上つた。五六歩駆け寄つた途端、果物の皮が何かに滑つて横倒しになつた私の前を、華やかな客達に彩られた汽車は、幸福そう





な光影を長々と引いて過ぎ去つて行つた。

それからの私はどこをどう歩いたのか、ラク町界隈を飲み歩いたほろ辛い酒の味は、おぼろげながら記憶にあつたが、現在目の前を黒々と動いているものが河の水であることを意識していた。

その時薄暗い電燈の陰に、人の動く気配がして

「旦那、あんたもお泊りですか。エッヘッヘッ」

と皺枯れた声がかかった。ギョツとして構えた私の向う側に

浮浪人風の男を認めた。突嗟の防禦意識で

「ヤ、おつさん仲よく頼むぜ」

と言うとピースを取り出し

「どうだ一本」

と差出した。

「こりやどうも相済みません」

おずおずと手を出した彼は、六十過ぎの老人であつた。汗と埃ですえた様な体臭が鼻をついた。

「おつさん商売は何だね」

「あつしかね。モク拾いでさあ。其の他何でも拾いますがね。

儲けの半分は此処の宿で使つてしまひましてね。ヘッヘッヘッ

……」

「此処の宿つて……此処は何処だい。一体」

「此処ですか。此処は佃の渡の待合ですよ」

私はやつと自分の居る場所が、勝鬨橋から四百米ほど上流にある佃の渡であることが解つた。それにしても此処で宿賃がいるとはどうしたわけであらう。

「旦那、さき程はお楽しみで……。ヘッヘッ」

老人は皺面に力のない笑を凝らして言つた。私は老人の言葉で、先程私が此処で何をしたかを思い出した。

「あの女はルミと言ひましてね。いい体をしてますね。まだほんの十八ですがね。お陰であつしも心行くまで楽しませ……」

「何だと。君は見ていたというのか。この老ぼれの助平野郎」

私は相手が危害を加えそうにもない老人だと解つたので、威猛高に思わず怒鳴つた。が怒声とは別に妙なねばつこい快感が腑抜けた様な体の隅々まで行き渡るのをどうしようもなかつた。私が怒鳴つただけで、腰を据えているのを見た老人は

「旦那はこん畜生、こん畜生と呟きながら、どえらい勢でしたよ。ルミもね、今夜はどうした訳か、三十女の様なあば様だね。講談師に言わせると、龍虎相撃ち雷鳴轟き渡ると言つたところかな。いや實際此の待合の柱という柱がギシギシと悲鳴をあげたつけ。見ているあつしまでが汗みどろでした。全くよかつたですな」

老人は又私のピースを一本抜きとると、感に耐えぬといった思ひいれよろしく、フーと煙を吐いた。

私は酔氣に霞んだ意識の中で真智子を抱いたのだつた。高山専務のだけではまだ食い足らねえとでもいうのか？この売女奴!! こうした怒氣がルミとの氣狂じみた闘争になつたらしかつた。

「売女がどうだつてさ!! 男になんか負けるもんか!!」

ルミも猛烈に應じて来た。後で解つたことだが、ルミは僅に残つた純情を後生大事に温めていた男に裏切られたのだつた。





築地界隈を飲み荒している間に、同病の私と連れになったものらしかった。

「旦那、ルミ公を可愛がつてやつて下さい。余程旦那に参つたんでしょね。ルミは旦那にサーヴスをしたんですよ。然も猛烈なね。酔つてたから忘れたんじゃないんですよ。あつしからはちやんと定額の百円を持つて行きましたからね。ヘッヘッヘッ……でも今夜の百円は安かつたな……」

老人の話で私は少し前後の事情が解りかけて来た。

「君の宿賃というのは、盗視料百円のことなんだね」

「そうなんです。相済みません。」

「別に詫まんなくつたつていいがね。あきれたね」

「これがあつしの病氣なんですか。どうにもなんねえ業病なんですか。時に旦那、ズボンをおはきになつたら。大分冷えてめえりやした」

### 【三】

これから私は隅田川の流れに浮んだ渡船場の待合で、この不思議な老人と語り明すこととなつたのである。彼の業病、盗視、性慾症の原因を續けて行こう。

四十年前以前の軽井沢高原での出来事に戻るが、朋子、華子、良子の三伯爵令嬢は、高木を実験台として、成り成りて成り余れる物の実態を科学することとなつた。老人の物語は尽きない「私はどうなることかと、唯もう無我夢中で彼等の様子を覗つていました。高木は乗馬ズボンをぬぎ、パンツの紐をゆるめました。流石に令嬢達は手を出すことを躊躇しました。良子嬢な

どは、白樺の幹に映えるほど、真赤になつていました。結局お互に目をつむつていふことにして、中でも一番元氣者の朋子さんが、恐る恐る高木のパンツの中に手を入れました。あつしはその瞬間、全身の血潮が逆流して、毛穴から吹き出るのではないかと思う程興奮しましたね。次が華子さん、最後に良子さんの順でね、良子さんは手を入れた途端、恐い!! と悲鳴をあげました。憎らしい高木つたら、金口かなんかを啞えちやつてねニヤリニヤリ鼻の下を長くしてやがるんですよ。

高木の毒手にかかつた、三人の令嬢、あつしの天使達は、鈴蘭の花咲く白樺の高原でその清らかな肉体を破られたんです」

老人は夜の女達にこの物語りを何回もしたらしく、聴き手はマゝ可愛そりに、と涙を流すくんだりで、いささか科白めいた調子であつた。私も

「チエツ、ひでえ野郎だね」

と言つたが、内心高木つて男は果報な奴だと羨やましくもあつた。老人も私の言葉に、我が意を得たりとばかり

「そうですとも、そうですとも」

と頷ずいてから

「ところが旦那、恥かしいことに、あつしは自分の目の前で初恋の女達が犯されるのを見ながら、救いに飛び出すところか興奮のあまり何度も漏らしちやつたんですよ。情ないこつてさ。笑つて下さい旦那。それからというものは、親父とお袋とのだけでは満足出来ず、夜になると野良犬のようにあつちこつとほつき歩きました。異状神経の高ぶりでしょうかね。あつしは性的神経衰弱とでも言うんでしょうか、自分で女を抱いて見て



もちつとも興奮しなくなつてしまつたんです。インポテンツになつてしまつたんです。女房を貰つてみたら療るかも知れないと、二度ばかり結婚してみましたかね。駄目でした。二度とも女房の方から愛想をつかして出て行きましたよ。何ですか美人局とは違ふつまり、女房に間男をさせて、その刺戟で奮起するといった話も聞きましたかね、女房が嫌だと言えば仕方がねえです。戸の隙間から覗いている現場を見つかつたりして、問題を起したことが二三回ありましてね、田舎には居たたまれず、東京に飛び出してもう三十年になります。矢張り大都市ですね……。チャンスは幾らでもあります。一時望遠鏡なんか買つちやつてね、玉の井、亀戸、吉原と色里近くに下宿しましてね、下宿屋の二階から夜の歓楽街をあかず眺めたもんです。でもね望遠鏡じゃ物足りませんや。サイレントですから。たまに錦絵そのけの大映しに出くわすこともありますかね。終戦後はいやはや全く、あつしの体が持ちませんや。驚きやしたね。我が生涯の最良の年代とでも洒落やしようか。ヘッヘッ。人民広場、神宮外苑、隅田川堤と草の生えてそりな場所という場所はくまなく歩きやした。井之頭公園、村山貯水池なんてになるとお天道さんがカンカン照つてる最中なんですからね……。それに白、黒、黄と国際色豊かにね。あつしも疲れやした。この頃ではこの渡船場を根城にしています。オットト……。つまらね長口舌をはいている間に、旦那、東が白んで来やしたよ」

老人はここで言葉を切つて立上ると、大河の水に悠々と顔を上げた。芝浦の方で曳船の音が聞えはじめた。私はうら淋しい荒野中に見つけたオアシスの様に、ルミのことを思つてい

た。老人の語るところによれば、ルミはここを去る時、臍抜けた様にのびている私の額にそつと接吻したそうだ。その時の彼女の額には一筋の涙が流れていたという。それは何の涙であつたのか。たとえ私のために流された涙でなかつたにせよ、私に詮索する必要はなかつた。私は耐らなくルミがいとほしかつた老人は今しがた小便をしたその大河の水で、口を濯ぎ、顔を洗つた。

「旦那、つまらねえ身の上話を聞かして恐れ入りやす。こういう変な男も広い世の中にいると、どうか聞き捨てなすつて。御縁があつたら又お会いするでしょう……。どれ商売大事と出かけるか。我々の商売は人が起き出さぬ中が稼ぎ時でしてね。御免なせえ」

彼は肩籠を背負い、空罐を下げて、私の喫い捨てた煙草を拾うと

「オット、これはルミ公の喫つたのだな」

と呟きながら、口紅のついた喫さしの外国煙草を、空罐に入れずにポケットに納めた。

「ルミ公はいい娘ですぜ」

振返つて念をおす様に言うと、聖露加病院の角を消えて行つた。

#### 【四】

ルミ、ルミ、私は明確な記憶はなかつたが、彼女は口でこそズベ公らしく粧つているが、きつと可愛い少女に違いない気がした。ルミの中に純粋な女が潜んでいる様に思えた。真智子





の様な多くのオフィスガール、気位高げに澄しこんだ娘達の中に、冷やかな打算に濁り切った女が巣くつてゐるのだ。果してそんな女達との夫婦生活が、たとえ無風に、世間的に信用のある生活を営めたとしても、果して男にとつて幸福と言えるのか？ 私は真智子の裏切りによつて表徴される、現代女氣質に限りない悲しみと怒りを感じるのだつた。萬葉時代のあのおゝらかな恋、純粹な男女関係、私はアトム時代が生んだルミの様な女の中に、返つて萬葉の女をみる様な気がした。

ルミ、ルミ!! 私は狂はしげな思慕の念に耐え兼ねて、次の夜も渡船場に行つてみた。ルミはいなかつたが、暫くすると昨

夜の老人がやつて来た。

「旦那、やつぱりおいでなすつたね。あつしの感に狂いはないでさあ。早速ルミ公を捜して来やしよう。今夜も猛烈なやつを頼みますよ」

老人は目を輝かせ、生々とした表情で、飛ぶ様に姿を消した。ルミは私が想像した様な女だつた。その日から私を加えた三人の奇しき交りが続いている。妙なことに、私は被盜視性性慾症とでもいうのか、次第に老人の盜視がなくては、オーガズムに達しなくなつたことである。



## 憂鬱症の轉機

蘭

守

### 心の病

激しい苦惱、そして煩悶。どうすればよいのか誰にも話も相談も出来ない事であるだけに、しかも胸中の辛さを顔にも態度にも出す事が出来ない境遇が私の体を煉獄の中に置いていた。

私はこの人知れない心の病の故に、安らげき眠りさえもとる事が出来なかつた。私を懊悩の淵へ立たしている苦痛の原因と

は、十六才からの船員生活。そして十八才から外国船に乗り始めて二十五才の年まで合せて十年間を、私は目上の船員の玩弄物として生活して来た。

云い換えれば、男色の被愛者として十年間を過して来た私だつたのだ。

その男らしからぬ生活に我と愛想をつかした私は、支那事變の始つた事に依つて、外国人船員の日本船員に対する見方が変



つて来て、外国人との間の生活がやり難くなつた為もあつたが、私の半生を彩る変態的生活を清算する為めに、七年振りで日本に帰つて来たが、機関士としての七年間の給金を一銭も使つて居なかつた私には、日本円にすると莫大な金が残つていた私の七年間の種々の雑用の金は、皆私を愛してくれた同性達の手で次から次と賄われて、私は自分の月給を使おうにも使ひ道がなかつたのだ。

その金に依つてブラ／＼遊び暮していると結婚をすすめて呉れる者があつた。結婚でもしたならば少しでも私のこの習癖が直るのではなからうか、こう考えて相手の女性も見ずにその結婚を承認したのだつたが、二十五才にして始めて知つた女性の肉体。それはただ私を幻滅の淵に陥し入れるだけのものではしなかつた。

ああ、女体とはこうしたものでしなかつたのか――。

士族の長女と生れて箱入り娘として育てられた新妻は、そうした私の心の奥深い懊悩を知る由もなく、私をひたすらに信じて身も心も任して寄りかかつて来る。何とかしてこの妻を愛したい。愛する心になり度いと私は努力したが、そうすればするほど、妻にではなく、全世界の女性に対して激しい嫌悪の情が私の心に湧いてくるのをどうすることも出来なかつた。そして妻も又女体であつた。私の悪癖の為に何も知らない女性を悲しませてはならない。そう考えることが更に私の苦しみを増加するのだつた。そうだと就職するんだ。船に乗れば妻から離れる事が出来る。一、二ヶ月の間妻から離れて見て、じつくりと考へなくてはならない。

そう考へ付くとその日の中に妻に一言だけ就職依頼に行くと話して、私は横浜へ出て来たが、七年間の日本への空白は、船乗り稼業はしていたとは云え、日本の船会社に対する知識をほとんど零に近いものにしてしまつていて、船員底の昭和十二年の事だから船会社に行きさえすれば雇つてくれると云う事は分つていてもどの会社に行くべきか、どの会社を選ぶべきかに私はすっかり迷つてしまつた。海岸通りをブラリと一廻り歩いた挙句に、グランドホテルのグリルに入つてコーヒを飲み、それから山下公園に出てベンチに腰を下して港の巨船の群に見るでもなくボンヤリとした眸をやつていた。

「三等機関士、園さん。いつ入港なさいましたか。日本で、横浜でお目に掛れるとは思つていませんでした」

突然に外国船時代の職名を呼ばれて、深い物思ひから覚めた私は声の方にまだはつきりしない視線を送ると、ちよい／＼米国やヨーロッパの港で一緒になつた事のある、日本船に乗つていた高等商船出の航海士、私より七つほど年上の、名も判然と覚えていない男と眸が会つた。

「どうなさいました。久しぶりの日本に面喰つていなさるのですか、ボンヤリしていなさる様ですが」

彼は精悍な顔をニツコリと微笑まして、逞しい体を私の隣へベンチに並んで腰を下すと、私の顔を覗きながら云うのだつた。語る相手が欲しい私だつた。私はどうした心理になつていたか、きつと彼の私の心を見通して慰めてくれるような態度がそうさせたのだつたらう。一気に心の中を、名さえ思ひ出せない彼に吐き出してしまつた。





「蘭さん。苦しいでしょう。貴方と同じ苦痛を五年前に僕も味わいました。だから貴方の煩悶が僕には自分の事のようにお察し出来ます。だが、貴方はあまりにも事を急ぎ過ぎました。」

僕は今では二人の子の父親となつていますが、僕も高等商船時代から生れ付きの自分の口から云つては何ですが、人並みの顔立が年上の男達に愛されて、二十七才までも同性の手に抱かれて、同性の胸から同性の肉体から快楽を得る事を覚えさせられそれに満足して過していましたが、これではいけないと今の貴方のように考えて、何とかしてその境地から脱出しようと努力して、とうとう成功する事が出来ました。その道は愛される立場から愛する立場へ自分自身を最初に転じて行つたのです。僕は貴方のように事を急ぎませんでした。年上の同性達が僕にしたように、それを年下の少年にして見たのです。不慣れな内は変でしたが、すぐに同性の若い肉体から激しい快楽を汲み取る事が出来るようになりました。それにすっかり慣れて、愛する立場に立つ事が自然になつてから、それをだん／＼に異性に移して行つたのです。そして今では、異性をもどろにか愛撫出来るようになったのです。それは完全とは云えませんが、貴方のように嫌悪するほどの事はないのです。船員生活をしている事が幸いして、どうにか円満な家を持つ事が出来。船では若い同性を相手にしています。貴方もそうして見られてはどうですか……」

## 倒錯の告白

彼の飾気のない告白と忠言をしみじくと聞いて私もそうし

たならばこの泥沼から何とか浮かび上れるような気持になつて来た。

### 真実の愛情

七月半ばの港から吹く汐風を胸一杯に吸うと

「御忠告有難う。僕は貴方の云つたようにして見ましょう」

私は何ヶ月目かで晴々とした笑顔になると、彼の手をグツと握りしめた。

「蘭さん、御成功をお祈りします。だが、日本では水から上つた河童も同様な貴方を、このまま放つて置いたのでは折角の僕の親切も何もならないでしょう。僕は二人の少年を持つています。その一人を貴方に差上げましょう。彼は喜んで貴方の胸に抱かれるでしょう。彼には僕より貴方がきつと好きになれるはずです。そして貴方が彼を愛する事が出来ると、ほんの少々でも自信を持たれたら、僕がお世話して貴方と彼を同じ船に乗船させて差上げましょう」

何と云う申出だつたらう。彼の親切に私の両眼はうるんで来ていた。

「何とお礼を申上げてよいか僕には礼の言葉も見出せません」

「蘭さん。本当を云うと僕は貴方を抱きしめたくて、貴方の肉体が欲しくて仕方がないのです。外国の港々で偶然に会つた時貴方は、外国人船員の間で、高嶺の花のような存在でした。野暮臭い日本船の乗組みなぞにはたま／＼酒場かレストランで、やつと声をお掛けする位がせいぜいだつたのです。僕はそうした夜毎は貴方の夢を見てどんなに悶えたでしょう。愛される立



場から愛する者にやつと交転してから、僕が心から愛した同性それは貴方が一人だったのです。僕は心の奥そこから貴方を愛していればこそ、自分の愛情を押し殺してでも、貴方を幸福にして上げたい。そう祈ればこそ、貴方に出来るかぎりの事をして差上げたいのです。僕の肉体は貴方の肉体を求めて苦しむでしょう。だが、精神はどんなにか貴方の幸福になる為に力をお借しする事が出来た事に満足しているか知れません」

何と云う愛情深い彼の言葉だったろう。私は彼の愛撫を受ける為に彼の巾広い胸の中に身を投げ入れようとしたが、ほんのわずかに残っていた理性が、やつとの思いで私の身を引止めてくれた。

彼も云つて居るではないか、人間としての人間らしい生活が出来るように身も心も立直さなくてはならない。しかも、一人の女性を不幸の彼方へ追いやつてはならないのだ。彼女には何の罪もないのだ。

男と男との愛情。しかも肉慾を超越した清い温い純愛の中に送られた美少年。上田達夫少年と私とは本牧にほど近いホテルに宿を取った。

柔らかな少年の肉体を抱いて、私は妻を始めて抱えた時のようにまごつかなくてもよかつた。私がかつて体験した事をそのまま彼のまだ半ばしか成熟していない肉体にくり返せばよいからだった。

日も暮れ切らないホテルの一室のベットの途中で、始めの一回の行為の中から私は肉体を炎と燃え上る快感を得ることが出来た。

その快感は同性に愛される事に匹敵する事の出来るものだった。

「これならば僕も更生する事が出来るぞ」激しい肉体の乱舞に疲れ切つてはいたが、私の心は拭つたように久しぶりで晴々として来た。

「上田君。ホテルの食事は不味いね。伊勢崎町に出て食事をしに来ようか」

愛する少年に少しでも美味しい物を食べさせ度いと考えて、外出した為に、私達はその夜まことに変つた事に出逢つた。

今迄の私の事を聞いて頂いたのはその話のプロローグとしてであつて、その夜の変つた体験と、その時に私が聞いた話とが眼目である事を御承知願つて、この一編を何卒十分に味つて見て頂き度い。この物語りは私が体験した色々の出来事の中でも一風変つた物であつて私も十何年になる今日でも忘れかねているが、編集部で許して頂いたならば、私の今迄の普通の生方とまるで異つた半生を、一編ずつにして皆様に聞いて頂き度いと思うのですが………。

### 美しい腰巻

伊勢崎町の本通りのウラ手に俗に親不幸通りと呼ばれる細い通り、戦災後の今日はどうなつてゐるか知らないが、当時はずうとカフェーバー、レストラン等が立ち並んでいた。何軒ものレストランで喰気盛りの上田の腹を満して、ブラ／＼と散歩調子で歩いて来て、横浜公園を横切る途中に小暗い木の下で、私は手を握つていた上田を引寄せて彼の柔らかな肉体を抱くと、





人目のないのを幸いに唇を合した。長い／＼い接吻の後で体を離れた二人が歩み出そうとしたが

「ちよつとお待ち下さい」

背後から呼び止められてギクリと釘付けになつてしまつて、警官が巡視に廻つてあやしんでの不審尋問だろうか、厄介な事になつたぞと私は眉を寄せたが

「お呼び止めしたりして失礼ですが、お願い申し上げたい事があるのですが」

こう云いながら私達の前方へ廻つて来た和服を着流しの男。

「ああ、びつくりした。警官ではなかつたらしい」その様子で私はホツと胸を撫で下ろした。

「貴方方にぜひお見せ申上げ度い物がありますんですが、御迷惑はお掛け致しませんから、私の処までお越しをお願い出来ませんでしょうか」

妙な気魄を持つたその言葉に魅入られたように

「ええ、お供致しますよう」

答えてしまつた私を、上田が驚いて強く手を引いたが、私は好奇心も八分通りは手伝つて、黙つて歩き出した男の背後から上田の手を引いて従つた。

街燈の明るい電車道へ出て見ると、男は思つたより老人でもう六十に近いらしい。地味な、だが涼しそうな黒っぽい品の一通で上品な顔立風体だつた。それを見ると上田も安心したらしく通り合せた空タクシーを老人が呼び止めると、彼も躊躇せず私に続いて乗り込んで来た。

沈黙の三人を乗せて山手へ歩り出したタクシーは弘明寺町の

静かな住宅街に止つた。

「一人住いで掃除婦も通いですし、食事は外でしますので何のおもてなし処か、お茶一つ差上げられませんがお許し下さい」

タクシーを帰して玄関の鍵を開きながら老人は云うのだつた。本当に一人住いらしいが相当の広さの門構えに、庭園まであるらしい様子で、明るい電燈に照らされた案内された寝室らしい部屋は、疊建具も凝つた物だつた。

ボンヤリと突立っている二人には何も云わずに、押入れの唐紙を開くと老人はさつさと二組の寝具を並べたが、ベットと毛布よりは外の物はすつかり忘れていた私は、友禅の夜具の華やかなる色彩に、白いシーツの映える美しさに思わず目を見はつてしまつた。

タオルの寝間着まで二組出して、片方の寝具には枕を二つ並べてから

「どうかお着替えになつて、布団の上に足を伸ばされてからこれを御覧になつて頂きましょうか」

老人は傍の簞司を指差してみせるのだつたが、この中に何が入つていと云うのだろうか、顔を見合せて二人は「ここまで来たんだから……」とお互いに同じ意志を持つている事を察すると、服を脱いで全裸の上に寝間着を着てから布団の上に腹這いになつた。

老人も部屋の隅で着更えていたが、私達が足を伸ばすと、簞司の抽出しを一つずつ引抜いて私達の枕の前に並べるのだつた。

頭を上げてその抽出の中を覗き込んだ私達は「アッ」と思わ



ず驚きの声を上げてしまった。

何と云う事だろう。赤、白、桃色、花模様、格子、そして、ネル、サラシ、絹、ありとあらゆる種類の腰巻が、そうです女の肌を巻くあの腰巻きが、洗いざらしの物から、真新しい物。汚れているような物。どの抽出しにもぎつしりと詰られているのだった。何十枚？いや、百枚以上もあると思われるほどのおびただしい腰巻。

呆然として私達が老人の顔と、その腰巻の入った抽出しとを見並べていると

「驚かれましたか、おみせ申上げ度いと云いましたのはこれだったのです。それで、私がどうしてこうした品物を集めたか、それをお話し申上げてから、その後でお願いがあるのですが、それはそれとして、私がこうした物を集めるようになるまでの生立をお聞き下さい」

静かに語り出した老人の言葉。語り進むに従つて老人は自分の話に夢中になり、私達も自分自身の身に引きくらべて身につきまされる思いで、いつか二人は抱き合いながら、老人の話に引入れられてしまつていた。

以下は老人が語った話で、私と云うのはその老人を差すのです。

## 母の香りに

私は大阪のある紙問屋の一人息子として生まれましたが、私の家の屋号を申上げれば、ああそうかと、年寄りの方なら合点が行くほどの人には知られた店でした。私が中学に入つた年の春

に母が急な病気でなくなりますと、住宅と店は全然別になつていまして、父はその店の方へ早朝から夜中まで行つて居り、住宅では母の田舎の土佐から来て医大に通つて居る従兄と、雇婆だけで、従兄の生活も一定して、私は家での朝夕の食事もほとんど一人で食べるのでした。生来の淋しがり屋で学校でも友達といつても一人もなく、物も一日云わずに過す日さえがあるよになつたのです。

そうした毎日を過すうちに、私は亡くなつた母の部屋へ一人で座つて、母の遺品に埋もれて居る事が私を一番慰めて呉れると知るよになりました。

母の遺品の中でもやはり母が直接身に付けていた衣類が、母の香りがこもつていて一番なつかしく、母の簪司や長持から、色々の衣類を引出して、それを部屋一杯に広げて、ありし日の母の香りに包まれて、私は満足し慰められていました。

そうしている内に、香りだけでは我慢がなくなり、私は素裸になると手当り次第の物を体に巻き付けて、母の体に抱かれた気分になつて喜ぶよになりましたが、ある夕方やはりそうして遊んでいますと、縁の障子がガラリと引開けられたのでびつくりして隠れようとしたのですが、全裸ではどうする事も出来ずに思わず目を閉じてしまつたのですが、部屋へ入つて来た足音が母の品物を裸の牀に巻いて、転がつている傍に立つたまま物も云わないのです。その様子があまり変なので私はそつと瞳を開いて見ますと、それは従兄でしたが、従兄は私のすぐ傍に立つて、偶然私が自分の牀に巻いていた品物が、母の若い頃の腰巻だったので、赤い花模様の布の間から出ている私の





下半身を、ジツと見詰めて、そして息を喘がせているのです。その私を見話めている眸の色がまるで炎の様に燃え上つていようだった事を、あれから五十年にもなる今にでも私は忘れる事が出来ません。その従兄を私はすっかり目を開いて見ていると、浴衣に三尺帯を巻いていた彼はいきなり帯をほどくと、パツと浴衣を脱ぎすてました。

「ごめんよく。こんな事をするつもりじゃなかったんだ。お母さんが亡くなつてから君があまり淋しそうにしているので、慰めて上げようとやつて来たんだが、どうして僕はこんな悪い事をしてしまったんだろう」

炎の情慾が燃え尽きた後で、従兄は座つた膝に私を抱き上げると、ポロ／＼と涙をおとして泣きながら詫びるのでした。

淋しくて／＼たまらなかつた私はそうして誰からでも抱いて貰い、慰めて貰える事だけで、どんな辛さにも堪えられるほど嬉しかつたのです。

「兄さん。謝まらなくてもいいんだ。兄さんが今の様に仕度いんだつたら、何時でも僕は兄さんの好きなようにさせるよ。その代りにしつかりこうして抱いてね」

私がそう云うと。

「そうかい。嫌じゃないのかい。うん、いくらでも抱いてあげよ」

ニツコリと笑顔になつた従兄は、いきなり私の唇の間に舌を

## 倒錯の告白

挿入れて来て、私  
その舌を力一杯吸  
と、両膝に更に／＼

力を入れて私を抱きしめてくれるのでした。

従兄と私の肉躰関係は、従兄が医大を卒業して郷里の土佐へ帰るまで、三年の間も続きましたが

「この美しい模様の布に君を寝せて抱くと、とても気分が良いので」

従兄はこう云つて、私と関係する時には私の躰の下に、花模様の母の腰巻を、最初の二人が肉躰のつながりを持った時に、偶然にそうなにしたように敷くのでした。

従兄に可愛がられていた三年間は私はとても幸福で、朗らかな元氣な子になつていて、学校の方もとても良い成績でしたが従兄が去つてしまつて、母の亡くなつた頃の様な淋しがり屋になり、勉強さえも手に付かぬようになつてしまつたのでした。

私の淋しさを慰めて呉れるのはその頃流行し始めた映画、その時分の活動写真がたつた一つでした。珍らしいフィルムが来ると、私はどんな処へでも行きましたが、新世界でその活動を見ての帰る途に天王常公園のベンチで、三十前後の職人風の男に手を握られて、木立の左の芝生に連れ込まれて抱かれたのが従兄以外の同性に肉躰を許した最初でしたが、それからの私は中之島公園、扇町公園、天王寺公園と、毎夜のように出歩いて手当り次第の同性に肉躰を与える少年になつてしまつていました。

## 腰巻を盗む

どうして私が一人の同性では満足する事が出来なかつたかと申しますと、どの男にも従兄のように私の肉躰を心を充分に満



足させてくれる事が出来なかつたからです。従兄の腕に抱かれた時のように、身も心も天国にあそぶような、夢見心地になつて見度い。もう一度心からのあの快感が味わい度い。その一念が夜の恐ろしさも、見知らぬ年上の同性達への危険さも忘れさせて、私を乱脈な行為にかりたてさせたのです。

三ヶ月以上もそうした煩悶の夜毎をくり返していましたが、もう秋になつたある夕方、その夕方天王寺公園に行こうと家を出て来たのですが、空地の物干に取入れ忘れられた腰巻が、夜風にヒラ／＼としているのを見た時に、私は始めて快感の不足する原因に気付く事が出来たのです。相手の同性が悪いのではない。母の香りが、母の色彩が不足していた為に、私が満足

の絶頂に行きつく事が出来なかつたのだ。フラ／＼と腰巻の干された場所に行つた私は、夢中で竹から腰巻を外すと懷にねじ込んでしまいました。その夜の私は従兄に別れて何ヶ月目かに心からの満足を、肉躰にも精神にも得る事が出来ましたが、それはその腰巻を私の躰の下にして、同性に抱かれた故でした。

盗んだ腰巻は家にも持つて帰れず帰途にすててしまいました。翌日は母の腰巻を探し出そうとしました。けれどその腰巻は従兄が持ち去つたと見えてどうしても見つけ出せず、その夜から私は公園への往路に腰巻を盗む事が一つの仕事になり、いっししか腰巻を盗むその行為が楽しみになつて来ました。

中学を卒業する一ヶ月前にたつた一人の父をも急病で失うと身内の反対も押切つて、店を番頭に一任して、不動産を売却つて、誰一人として私を知る者の居ないこの横浜へ私がやつて来

て、この家を買入れて住み付いたのは、私の悪い習癖が露見する事を恐れたのです。親戚、縁者の多い大阪で、こんな事が公になつたなら、私一人のみではなく御先祖や亡くなつた両親にまで恥をかかせる事になりますから。

この横浜へ来て自由になつた私は、盗み出した腰巻をすてもせずこの簞司に集めたのです。この腰巻の数と同数の同性と私は関係を持つたのですよ。新らしく腰巻を手に入れると新しい同性の相手がほしくなる私でした。だから腰巻の枚数と、私と肉躰関係を持つた同性の数は同じなのです。

長い物語りを終つて一息した老人の顔を、枕から頭を上げて私は黙然として見詰めていた。何と云う烈しい情慾。この人は同性愛故に何もかも忘れてしまつて、変態性慾一すぢに一生を過してしまつて、そしてこんな老人になつてしまつたのだ。だが、自分の思うままに、意の向くままに生きて来たこの老人はどうせたつた一度の一生、やはり幸福だつたと云い得るのではないだろうか。私の眸をジつと見詰めていた老人は、私の眸の中から老人への好意を讀むと

「それをお願いとは、この腰巻の上で貴方方が愛し合つていられる状況を私に見せて頂き度いのです」

意外な事を云い出した。

「えつ？ この腰巻の上で私達に」

驚いて私が問い返すと

「お聞き下さい。三十才までの私は私の肉躰を愛してくれる男を見出す事に不自由しませんでした。三十台になると何か品物で釣らなくては同性の相手が少くなり、四十台には相当な金







写真集

## 緊縛の美女

を必要とする様になり、五十台ともなると一人の同性を得るためにも非常な苦心する仕末。六十台となつてはもうとても駄目です。どんな物好きでも、この皺だらけの肉躰を抱いてくれる者は居ません。異性が相手だつたなら、金さえ積みめば相手に不自由はないでせうが、目的が同性であるだけにお話にならない

のです。それで私はこの腰巻の上で同性二人が愛しあう状態を見度くなり、一度試みて見て貰うと、私の弱つている肉体を駆使するよりも見せて頂く方がより一層の満足が得られることを知つたのです。今夜、横浜公園で貴方方のキッスをなさつてゐるのをお見かけして、つい失礼とは思ひながら声をおかけしてしまつたのです。」

老人の言葉を聞いている中に、私の身体には妙な衝動が浮上つて来た。

「いいですとも、さあゆつくり見てやつて下さい」

私は寝衣をゆつくりと脱ぎ捨てると、純白のシーツの上で果然として私を見上げている上田の身体の上へ簞笥の抽出から手当り次第に摺した腰巻を投げつけた。

何という恍惚境、ホテル等では嘗て得られなかつたエクスタシー。老人の物語りに刺戟されてか、それとも、腰巻の織りなす妖しい美しさに眩惑されてか、私は自分の肉躰を愛される時以上のものを上田の肉躰から味わう事が出来た。

その夜が転機で私は少年を愛せるようになり、いつか何とか異性との肉躰関係も持てるようになり。そして現在は四人の子の父となつて、世間体だけは正常な人間としての体面を持つてゐるが、やはり異性の肉体より、私には同性の肉躰が恋しい。又それより、同性の逞しい腕にしっかりと抱かれて愛されて見度い。私とて元々は通常の性慾を持つて生れて来たのに、こうした私になつた半生記は前記したように編集部が許して下さつたならば、引續いて発表したいと思ひます。





## サディストの悲哀

天野 一郎

あなたはマルキ、サドという人を知つて居られますか。それではサディズムあるいはサディストという言葉聞いたことがありますか。そしてその意味を御存知ですか。

あなたは人が打たれているのを見て、どう御考えになれますか。可愛想になつて打つ人に哀願して止めて貰いますか、それとも目を覆つてしまふか、あるいは其場から逃げ去られるでしょうか。

その反対に何となく気持よく感じられますか、そして自分でもその鞭を持つて打ちたいと御思いになれますか。打たれて居る人が痛さにもだえれば、もだえるほど痛快な気持になれたことはありませんか。

次にあなたはマゾッホという人を知つて居られますか。それではマゾヒズムあるいは、マゾヒストという言葉聞いたことがありますか。そしてその意味を御存知ですか。前の例の場合あなたは打たれている人を見て、自分も打たれてみたいと御思いになりませんか。打たれている人がもだえる姿に羨望めいた感じを御持ちにならなかつたでしょうか。

もつといふ例があります。田村泰次郎の「肉体の門」を読ま

れましたか。あるいは空気座の「肉体の門」の芝居を御覧になりませんでしたか。どうでしたか、残酷で見て居られなかつたと仰有るのですか。しかし何か感じられた筈と思うのですが。答を申し上げます。

打たれて居る人の苦しむ有様を見て、自分でも打つてみたいと思われたか、打たないまでも苦しむ姿に快感(適当な表現ではありません)を感じられたのなら、あなたにはサディズムの性格がひそんで居り、若しそれを実際にやつてみたいという衝動があるならば、あなたは明らかにサディストであることに違いありません。若しその反対に打たれてみたい、縛られてみたいと御思いになられたならば、あなたにはマゾヒズム的性格がひそんで居り、マゾヒストと言えるでしょう。

太古の母権尊重の時代は別として、人類は大体父権尊重で現代まで進歩して来ました。言葉をかえて言えば男が主で、女はこれに侍つて従つて居たのです。現代語では男尊女卑といつて居ますが、性生活に於ても常に男が上位にあつたのです。戦争に負けたおかげで最近「女上位」という文字も見れるようにはなりましたが。勿論それは男女の肉体構造のせいでもあつた





# 倒錯の告白

う／＼死んだ女があら  
ります。若い頃、一  
度は誰かが味うセン

でしよう。僕は医者でもないし、又生理衛生のことを書くつもりではないので止めますが、要するに従来までの生活様式からしても、男は征服者であり、強者であり、女は被征服者であり弱者であつたことはよく御存知のことです。即ち男は多分にサディズムの性格を持つて居り、女は多分にマゾヒズムの性格を持つて居るのです。簡単に言うならば一般的に全ての男はサディストであり、全ての女はマゾヒストなのです。世俗に言う「亭主関白」が巧まない、うまい表現をして居ます。勿論原則あれば例外ありで世の中には「嬖天下」といつた夫婦もないではありませんが、そんな夫婦は私にとつては必要のない人々です。サディスト。マゾヒズムとマゾヒストの意味は、凡そ判つて頂けたと思いますが、問題はサドにしろ、マゾにしろその程度です。ノーマルなのか、アブノーマルなのかを計るバロメーターがこの程度なのです。番町皿屋敷で青山播馬が、皿一枚割つた位でお菊を井戸へ吊して斬つたのも、仙台侯が高尾の吊し斬も明らかに行き過ぎです。最近では夫の死体をバラ／＼にして遺棄した富美子も、とんでもない行き過ぎで精神錯乱の甚だしい例です。アブノーマルも此処まで行けば、アプレガールの比ではありません。多分に変態性を帯びて来ます。マゾヒズムの行き過ぎには、よく恋人の名前を自分の肌に入墨した人を見ますが、これなども多少度を越したマゾヒズムでしようし、ひどいになると、夫に焼火箸で自分の身体中に名前を書かせ、と

チメンタルが昂じて、同性心中をした娘などもこれです。個々の人間には誰にも知られていない大なり、小なりの秘密があるものです。

ところで私がそのサディストなのです。それも相当重症の患者なのです。しかしこれは別れた妻が他人に話して居ない限り誰も知つては居ません。その妻とてサディズムとか、精神倒錯とか、あるいは変態性慾といったむづかしい言葉は知つて居なかつたと思います。そんな恐ろしい性格を持つた私が三十三才二ヶ月の独身者で、月収一万二千元、会社では主任のデスクに坐つて居て云々の宣伝文句で嫁を擧げて居るというのですから全く世の中は危いものです。行きはぐれて焦つて居るオールドミスにとつては、恐ろしい陥穽と言えるのではないでしようか。一度この落とし穴にはまりこんだが最後です。好むと好まざるを問はず私にいい、さいなまれるのです。子供の時、感じた夜の恐ろしさを、もう一度感じさせられることでしょう。私がどんな方法で、いじめさいなんだかということは他の機会にゆづつて私の人となり(サディストとしての)を少しく書いてみましょう。

子供の時、玩具の刀でチャンバラ遊びをした経験をもつた人は大概持つて居られると思います。近藤勇や、桂小五郎、月形半平太は子供にとつては憧れの英雄なのではないでしようか。ところが私の場合は「寄らば斬るぞ」と大見得をきるだけでは物足りなかつたようです。必ずそこに美女が介在し、新撰組に捕われて桂の、あるいは月形の隠れ家を白状しろと拷問される場



面が組まれるのでした。そしてあわやという危機一髪の時、桂が、月形が彼女を救いに現われるという筋書としては陳腐ですが、こうした構成が必要だったのです。そんな場合、誰もが桂や月形になりたがるものですが、私は卒先して新撰組の平隊士になつたことも、私が縛られた女に異常な興味を持つて居たからです。又「山賊ごっこ」と称した遊びは殊に好きでした。勿論私が山賊の役を買つたことは、その筋書に拐わかれて来た旅の娘を痛みつけて従わせようとする場面が織り込まれて居ることになれば、容易に察して頂けると思います。二十年近くも前のことですが、その時勤王の娘になつたF子や、旅の娘に扮したS子を縛つた時の言いしれぬ愉悅感は今だに生々しく残つて居ります。

そうして子供の時はまだしも満足出来た私も、思春期以後は女を縛る興奮がセックスと結びついたためと、そうした行いが必ずしも正常なものでないことを知つたため、羞恥とから、兎角妄想によつて満足せねばならなくなりました。又私のこうした奇行に何の疑惧もなく勤王の娘や、旅の娘に扮してくれたF子やS子も、成長するにつれ段々私の願いをきいてくれなくなつたことも、一つの理由となるでしょう。

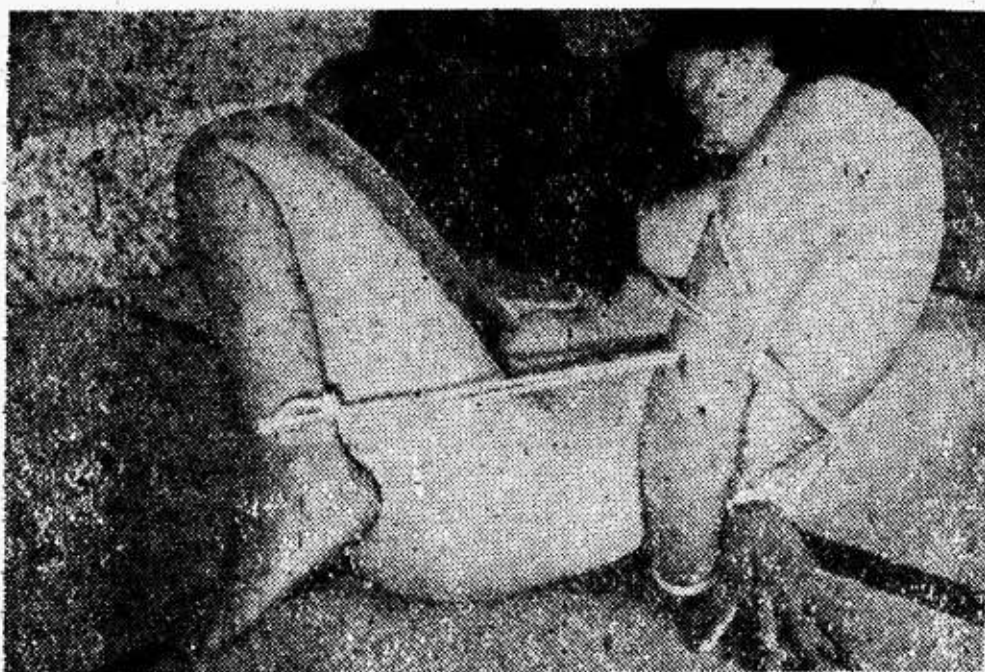
私がまだサディズムとか、変態性慾とかいつたむづかしい言葉を知らない頃——たしか小学校の五年か、六年の頃だつたと思いますが——ある雑誌で覆面の侍四、五人が娘を後手に縛りあげて、猿轡を噛まそうとしている挿絵を見たことがあります。この時私の記憶に残つて居る最初のサディズムをその絵に感じ

ました。たしか「稲葉小僧新助」という連載小説の挿絵と思つて居ます。その絵をきりとつて抽出に納いこんだ私は時々眺めては秘かに愉しみました。その後江戸川乱歩の探偵小説の挿絵に多くの縛られた女を見出し、夢中でスクラップしたり、「小松嵐」のお時が寒中に素裸で後手に縛られ冷水を浴せられている絵や、「身代り紋三」だつたと思います。の挿絵に井戸に吊された娘が悪侍に誘拐されて毒牙にかけられようとしている絵に魅入られたりして、自分でもひそかに絵を画いてみましたがこの方は生来不器用なことで、一枚も物にならず落胆したこともあります。「実話雑誌」で或る家に電気のメーター検針員を装つて入つた男が、留守居をして居た十九になる娘を縛りあげて凌辱した記事と、挿絵を見た時は、馬鹿々々しいことですがその男が羨ましくてなりませんでした。

谷崎潤一郎の「少年」を読んだ時の感激は今だに忘れません何度繰返して読んだことでしよう。悪魔主義派と言われた当時の谷崎の小説は「刺青」にしろ「秘密」にしろ又「暗黒時代」「悪魔」等全て私の気持にマッチして居たのです。芥川龍之介の小説にも感銘するものがありました。「地獄変」がこれです。その頃、大連のとある古書店にて「変態蒐集考」を発見し、初めて例の伊藤晴雨画伯の存在を知りました。そしてぐんぐん惹きつけられて行きました。私には寡聞にしてこれ以外にもいろいろ「責」に関する書籍はあつたかも知れませんが、残念ながら知りませんでした。しかし、時代は軍閥跋扈の暗黒時代に入つたため、この種の資料を求めることは困難というよりも不可能となりました。







それでも眼につく限り挿絵のスクラップだけは頁を重ねてきましたので、それを見ることによつてせめてもの慰めとしておりました。専門学校を卒業した私は直ぐ好きな映画界に飛び込みました。薙洲映画協会です。名シナリオライターになるべく野心満々でした。絵を描く事の出来ない私は、「責」を文字に表現しようと思つたのです。運よくゆけばフィルムに再現しようと一心にシナリオを書きました。しかし此れは徒勞に終りました。治安部の検閲（脚本の事前検閲です）で私の企図していた場面は悉くカットされました。理由は惨酷、煽情……いろ／＼つけられましたが、全てがNGでした。

勿論シナリオに書く以外に誰にも見せられない短篇小説をいくつも書いて自慰の具に供しておりましたが、時が経つにつれ、原稿用紙の枚数が増すにつれ、書くだけではどうしても満足が得られなくなりまして。それを

実行してみたくなつたのです。しかし自分の書いた小説の主人公のように、強盗や雲助になることは到底出来る筋合のものではなく、やつと見つけた唯一の方法は金で一夜を購つた娼婦にこれを求めることでした。これは新京（今は長春となりました）での話です。大概は一度で愛想をつかされました。当時彼女たちの肉体を一夜買ふには二十円いりました。安サラーマンの私には相当な負担でありましたが、それでも「責」の姿態への強い執着は、私を捉えて離しませんでした。一度で愛想づかされても数多い娼婦のことですから次から次へと相手を換えていつたものです。日本人、半島人、中国人とそれは人種の変つたいろ／＼の相手でしたが、やはり日本人の女が私の気持を一番満足させてくれました。然し、人間の慾望には限りないもので、次第に娼婦では満足しなくなつたのです。高い金を払つた上にブツ／＼言われながらのことですから当然のことでしょう。幸か不幸か、この時、結婚話が持ち上り、或る娘と交際するようになったのです。甘つたるい蜜のような逢曳が続けられるようになる一時は、この病も納まりました。いや納つたと思つたのは次の奔騰への下準備だつたと思います。お定まりの接吻の段階を卒業する頃には、又もや不敵な計画がムラ／＼と燃え上ってくるのをどうすることも出来なかつたのです。

いけない、いけない、と抑えれば抑える程興奮の度は高まり今度逢うときこそはと、彼女と逢う日に思うようになりました。或る日、私は呆けた顔で例の「責」のスクラップ帖を机の上に置いたまゝ菓子を買いに外へ出ました。彼女が当然そのスクラップ帖を見るであろうことを計算に入れての外出でした。何喰



わぬ顔で帰つて来た私は早く、彼女の表情を見るなり、予定通りの筋書になつてゐることを知つて心中密かに快哉を叫びました。何という恐ろしい企みだつた事でしよう。そして、その夜私は彼女の抵抗と無限の悲しみの籠つた眼を受けながら実行してしまいました。そして予期した如く彼女は此の夜を最後に私の前に二度とは現れませんでした。何という軽率なことをした事かと自嘲にも似た気持でした。

こんな時、舞いこんで来たのが赤紙の召集令状です。昭和二十八月一日のことでした。十五日後には敗けるとは神ならぬ身の知る由もなく北鮮の工兵部隊に入隊した私は、銃一つ支給されることもなしに三日目には陣地構築とか何とか体裁のいい名目の下に、在留邦人を放つておいて南下し遂に定平という寒村の山中で十五日を迎えたのです。それから先はお定まりの俘虜生活の二年二ヶ月。ノルマの完遂と、栄養失調に悩まされました。ウラヂオストックから一万五千軒彼方のチフリで労働していました「花より団子」というにイロハ歌留多を身に沁みて感じました。食欲本能の前には、性慾本能は物の数ではありません。食い気一点張りの餓鬼道に陥ちた俘虜にとつては、どんな美女の誘いも駄目です。この二年間さすがに私も異常性慾に悩むことはありませんでした。ダモイの夢と、寿司やポタ餅の夢で精一杯でした。

二十二年十月に復員、両親も幸い恙なく引揚げていました。翌年五月に私は或る豪農の娘と結婚しました。然かもその初夜に私は実行してしまつたのですから、全く病盲膏に入つたともいふのでしうか、それは二度と高島田に結わせる機会がな

いと思つたのと、新妻の羞恥心の最も大である此の夜に是非やつてみたいと思つたからです。そして半歳——アブノーマルな夫婦の営みは続けられましたが、その結果、私に報いられたのは離婚の申立という苦盃でした私は妻のこの抗議に反駁するに余りにも自らの行為を自覚し過ぎていました。こうして妻は私から逃げ去つたのです。それから三年まだ独身で佗しさをかこつ淋しい男となりました、今妻と別れて、こうして独りペンを走らせていると、余りにも無軌道に過ぎた過去の自分の行為が悔まれます。

——これが僕の過去の経歴です。サディストの悲哀——判つて頂けたでしうか。

行きはぐれて結婚を焦る処女の方も、再婚を求めて居られる未亡人の方も、世の中には僕のような変質な性格を持つた男が案外多いことに注意して頂きたいと思ひます。肉体の疾病でないため、この精神病者の診断は極めてむづかしいのです「ジキル博士とハイド」——もう一度この小説を読んで下さい。

ジキル博士に一度むけば鬼畜の如き行為をするハイドの隣れな性格のあることを、あなたの方の聰明な眼で看破して下さい。ハイド的性格の男の犠牲に供せられるような愚かな道を辿らぬよう、心してあなたの幸福を掴んで下さい。

此れが妻に捨てられた私の世の女性の方々に對するせめてもの老婆心なのです。

私は今日も淋しく三十三歳の働き盛りの肉体を持てあましています。







# 足部憧憬の悲願

山本 眞 輔

私が少年時代を過した実家は、街の周囲をめぐるお濠端の柳並木の美しい旧城下町にありました。父は私が五つの時死んだそうですが、私が物心ついた時は母はその町の賑やかな通りで美容院を開いていました。隣りは福寿湯というその頃、町でも珍らしいコンクリート建の風呂屋で、近くに色街の新地があるため朝早くからよくはやつていました。理髪店、化粧品店、小間物屋、飲食店、洋服店等がずつと新地の入口迄並んでいました。

母は助手の女の子二人を使つてさゝやかなパーマの機械を置いて朝から晩迄それはコマ鼠のような忙しさでした。従つて小学校へ通うようになってからは、そんなに忙しくしている母の手をとらさない為、私は一人でお濠に掛つた橋の上から家の軒並をぼんやり眺めたり水面に石を投げて遊んだりしていました。内気で気弱な私には友だちも出来ませんでした、幼い時

## 倒錯の告白

から本を読むのは人一倍好きでした。唱歌とか体操を除けば学科はいつも優等を

貰っていました。

家へ来た色街の姐さん達は、私の事を「可愛い、坊ちゃんだ」といつて白粉くさい膝の上へよく抱き上げてくれました。そんな時私は身体をねじらせて直ぐ逃げ出してしまふのです。美しい女の人に抱いて貰っているという嬉しさがありながら、いざ、そういった機会に恵まれると、只もう恥しくて逃げ出してしまふのです。小学校が終りになる頃には、店へ出ることもなく、母に用のある時も、店へ顔を出すのさえ顔が赤くなる程恥しくて、次第に孤独癖が強くなつてきました。

その頃、便所へ入つた時とか、風呂へ入つた時などに、つくづく自分の足の指を眺めるのが好きでした。これは誰にも云えない秘密でした。丸々と肥つた自分の足の指を誰に気がねする事なしに眺める時に、云うに云われない楽しさが腹の底から湧いてくるのでした。風呂の中では、自分の身体の中で足を一番丁寧に洗いました。自分の足に対して何故この様に強い執着を感じるのか理由はわかりませんでしたし、或は他の人もそうであるのかも知れないと思つていました。風呂を上ると一人で部屋に籠つて自分の足をいろいろな角度から鏡に写して見たりし



ました。

中学校へ入つてから、或る雑誌で、江戸時代の遊女たちは、寒中でも素足でいるのが粹であるとして、下駄の台に小さな抽出をつけて、そこへ濡雑巾を入れておいて、いつも足を拭いてはその素足の美しさを誇つた。という記事を読んで強く打たれた事を今でも覚えております。

歐洲大戰で儲けた或る俄成金はロウソクのかわりに十円札を使つたり、部屋中に紙幣をばら撒いてそれをあわてふためいて拾いあふ芸妓たちを眺めて喜ぶという無茶な遊びをするので有名でしたが、この人が或る時芸妓たちを繰上げて散財していた時、「今日はお前たちの中で誰が一番美しい足をしているか鑑定してやろう。若し俺がこれは美しいと折紙をつけた者には一等から三等迄に分けてこの賞金をやろうと云つて札束を眼の前に積みました。金の事に目の色を変える女たちもお大尽のこの言葉には尻ごみして誰も足を出そうとする者ありません。彼が無理に芸妓達の裾をめくつて足を出させると、誰も彼も顔は磨き立て、白壁のように白粉を塗りまくっているのに、皆一様に足の裏は真黒で爪を伸したり指の間に垢をためたりして、御義理にも美しい足だと賞める者はなかつたのですが、最後に、いつも控え目にして大人しい一人の芸妓だけは、足の裏から指の間に至るまで顔にお化粧する以上に手入れをして爪先にはうつつすらと薄紅さえ刷いていたので、彼はすっかり感心してしまつて、その一等から三等迄の賞金全部を彼女に与えてしまつた。

という雑誌の記事を読んだ私は、沢山の女たちの足の美醜を

一々検査した俄成金に羨望を感じると共にその美しい足をして、いる芸妓を夢に描いて、そんな人の足を眺めたり触つたりしたらどんなに愉快であろうかと思つたりしました。

自分の足を眺めて楽しむ事は相変らず続きましたが、次第に自分の足を眺めるだけでは満足出来ず、若い女の足を見たくて仕方なくなりました。店へ髪を結いに来る若い女の人達の足がちらりと見える時、その白さが目に入るともう頭がくらくらとして身体中が痺れるようなショックを受けました。それでいて正面向いてつくづく見るといふ様な勇氣はともありませんでしたが只、ちらつと見た感じがその女の白い素足がどんなに美しいだろうという憧憬が私の心を捉えて離れませんでした。そしてその女の人の身体つきや年恰好から考えてその足のイメージを描くのが楽しみでした。

夏休みを目前にひかえた第一学期末試験の時、私は二階の奥の一間で試験勉強をしていました。暑いので東側の窓を開け放つて窓際へ机を置いてその前に坐ると、遠く色町の方から風につて流行歌のレコードが聞えてきます。私は不得手な数学に全力を注いで今度こそは待望の十番以内へ入りたいと思つていたので。紙芝居屋の子供寄せの拍子木の音が響く頃になると色町の姐さん達が福寿湯へ二三人宛連れ立つてやつて来ます。私は二階の窓から風呂屋を出入りする彼女たちを見るのが日課になつていました。そこには誰にも秘密にしている覗きの楽しみがありました。然し私の見るのはいつも彼女達の素足でした。窓の真向いに福寿湯の女湯の脱衣場がありました。或る日の夕方、私の店へいつも髪に結いにくる十八位の姐さんが湯桶を





提げて内股で向うからやつてくるのです。私は彼女の名前も所も知りませんでした。何度も見ている中に、すっかり好きになつてしまつたのです。彼女の容貌から想像して、きつと可愛い、美しい足に違いないと思ひ込みました。そして彼女の姿を見かけると何物をおいてもその姿が見えなくなるまで視線で追いかけるのでした。

その日も風呂屋の入口の暖簾をあけて入り込んでしまふ迄。つと私は視線を注いでいたのです。まだそれでも物足りなくて机の上に乗つて背のびをして女湯の方を見たのです。そこで私はあつと驚きの叫び声を放ちました。今迄、気付かなかつたのですが、夏になつて風呂屋の天窓が開けられてあつたのです。その天窓を通して女湯の脱衣場の大鏡が真正面に眼に飛び込みました。番台や浴槽の方は見えないのですが、その大きな鏡に映つた脱衣場の光景だけが手にとるように見えるのです。鏡の前に立つた湯上りの女の裸体がはつきりと私の眼に映りました。学期末試験を目の前にして私は大きな勇猛心を奮起してその天窓を覗く強い誘惑から逃れようとしたが、夕方が迫つてくると私は自分の身体の中から盛り上つてくる衝動をどうしても制御することは出来ませんでした。然し中年女のだぶぶに肥つた裸体や瘦せ細つた娘のごつ／＼とした身体なんかには魅力がありませんでした。若い女のふつ／＼とした足が見たくて仕方がなかつたのです。鏡には足の方迄うつらないのは残念でなりませんでした。

私は脱衣場のぞきに飽き足りなくなると、橋の袂の柳の木にもたれて人待ち顔に佇んでいて、そこを通る風呂帰りの若い女

の中で奇麗な足をしている人があると、その女の人の後をどこ迄もつけてゆきました。大概そんな女の人たちは、新地内の粹な格子戸の家の中へ入つてゆくのが常でした。

或る時は余り美しい足をした女なので、その人が家の中へ入つてからも若しや又出て来ないかと、その家の前を何度も行つたり来たりした事もありました。或の日曜日の朝、私ははからずも、あの私の家へ髪結いに来る好きな女の裸体を見てしまつたのです。その日は朝のことで電気がついていないのでその真白い裸体は暗闇の中にはんわりと浮かんでいました。彼女は前に手拭を挟んで長い間、裸のまま鏡に向つて顔の化粧をしていましたので、私は何度も机の上の上つたり下りたりしながら彼女の身体をすっかり見てしまいました。今迄見たどんな女の人よりも均整がとれ、それに乳房、お臍等の恰好がとてもよく一番私を感激させたのは、右膝を爪先立てた膝小僧の美しさでした。彼女の足が私のイメージ通りに美しいものであるかどうか鏡に写らないので見極めることは出来ませんでした。

三年生になつてからの私の成績はがた落ちでした。私は何んとかなく勉強するのが嫌になり、二階の奥の四畳半の部屋で小説を読み耽るか、或は町の中を宛もなく美しい足の持主を探し廻る男となつていました。母は相変らず仕事が忙しくて、そういうつた私の行動に対して別段注意する風にも見えませんでした。私の嫌人癖は益々昂じてきて、空想の中では縦横無尽に活躍する私も一度実際には、無口で一人の友人もありませんでした。四、五月頃から夏にかけて、私は身体の内にかかむ／＼とする衝動を感じてじつと家の中に居れないのです。それというの



は、若い女が一樣に足袋を脱いで素足となるからです。私にとつて冬程つまらないものはないのです。足袋を脱ぎすて、素足になり出す頃、私の頭は燃えるような喜びにふるえるのです。道で行き逢う女や電車に乗り降りする女の裾に鋭い視線をはせるのですが、未だ嘗て、ゆつくり手にとつて若い女の足を眺めたことはありませんでした。自分の足を眺めて楽しむ癖は此の頃になつてからは、強い昂奮を伴い、自分でもはつきりとは分らない乍ら一種の性的な満足さえ感ずる様になりました。

文芸雑誌の投稿欄から知り合つた地方の一少女と文通するようになり彼女の文章からその足の恰好やら美醜を想像するのです。町で行きずりに逢つた女でも直ぐその人の足を空想に描く癖があり四六時中、頭の中は女の足で一杯でした。当然学校の成績は低下する一方で上級学校へ入学したいという気持もなく出来れば小説家として身を立たい気持でした。

普通の人が何ら問題にしない足に対して自分だけが何故このように執着するのであるか不思議でなりませんでした。挿絵でも可愛い、足を描いたものが好きでしたが殆んど顔は顔は町寧に描いても人間の下部の方は手を抜いてあるのが普通でした。浮世絵師が女の足の表情に強い関心を持つてゐるのは驚異の的でしたが、次第に集めてゐる中に個性のないのが失望させられました。如何に美しく描かれていても個性のないものには嫌気がさしてくるのです。

中学校を卒業して産業組合に勤めました。そこで初めて私はいろ／＼の女の足を見近かに見る機会が出来たのです。最初は私の此の足に執着する性癖を誰も知らぬとは思ひ乍らそこへ視

線をやるのは何か恥しくなりませんでした。殆んど女は無関心でした。私の視線を素足に感じて羞恥の感情を顔に現す女は極めて稀でした。然しそんな機会に遭遇すると私はその相手の娘以上に顔を赤くしてしまふのです。それでいて、その瞬間に強い性的衝動を感じ、そしてその相手の娘に強い魅力を感じるのです。

無関心を示す殆んど女に対して、私は今迄抱いていた美しいイメージががらがらと音を立て、潰れてゆく思いがしました。あれ程美しいものに描いていた若い女の足の如何に不恰好な事よ。私の机の向い側に坐を占める女学校出たての事務員は事務所にいる間草履にはきかえるのですが、顔は綺麗にしているのに引きかえ足はいつも垢だらけで爪を長く伸しているのは幻滅でした。机に向つて事務をとつていながらも、私の頭は事務所を出入りする女の人の足に捉れていました。それには一番末輩の私の席が最も適当してゐました。然し此処でも私は現実の女の足にはすべて失望落胆させられました。私にはやはりイメージの中の女の足が懐しく、それでいて血の通つていない空想の中の足に満たされない気持で一杯でした。

私は足の中でも特に拇指に魅かれました。然し、女の足に踏まれたり蹴られたり舐めたりしたいという様な慾望は少しも湧きませんでした。只、美しい足を手にとつて眺めたいという気持ばかりが強いのです。通勤の行き帰り、やはり私は道行く女の足の美しさを求めて、或る時は何度も電車を乗り換える女の後を追つて家へ帰つてきた時は終電車近かつた事もあります。現実には私の意を満たして呉れる女はありませんでした。寧ろ





あれ程女の足に憧憬を持つていた私の気持は次第に冷されてさ  
えゆく傾向にありました。矢張り少年時代に二階の窓から眺め  
ていた色町の女が一入懐しく思われて仕方ありません。

二年ばかりして、母の知合の人から私の嫁の話を持ち込んで  
きました。私は相手の女の人が如何に美しい人でも、その足に  
魅力がなければなりません、しかし、そんな事をあからさま  
に云えるものでもなく、只まだ早いからと云つて断つてしま  
いました。日曜日は朝から新地の廊の中をうろついて、水商売の  
女達の足を見に行きました。家のたゞずまいやつくりが何んと  
なく粹で艶しいのも好きでした。然し此処でも私は自分の意を  
満足させることは出来ませんでした。白い素足をちら／＼させ  
乍ら足早やにやつてくる彼女たちののは、ちらつと通りすがらに  
視線を走らせるだけで十分観察することが出来ないのです。後  
から踵ばかり見るのは不満でした。と云うのは私は足の指によ  
り強い魅力を感じているのですから。

夢のような美しい足のイメージが現実打ち破られると、私  
はまん円く肥えた艶々しい白い足であつたならば、私の理想に  
合わなくとも一度そんな足を心ゆく迄、目の前に眺め触り、そ  
して抱いて頬ずりをしたならば、どんなに自分の心が慰められ  
るだろうかと考えました。給料を貰うようになってから、小使  
も或る程度自由になるところから、水商売の女を買つてみよう  
と思ひました。二十二才の夏でした。散歩にゆくといつて浴衣

## 倒錯の告白

がけで家を出た私は  
駅前の飲食店で初め  
て麦酒を飲みました

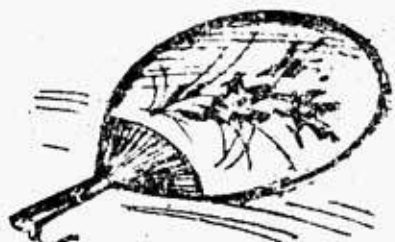
一本のビールを飲み干すと、目の前がく／＼として思わず龍  
舌蘭の樹込である芝生の上に倒れてしまいました。そうして  
三十分ばかり横になつてみると、やつと落着いてきましたので  
明るい火の灯つている新地の方へ歩を運びました。知つた人に  
逢つてはまずいと思つたので、橋の袂の一番かゝりの薄暗い門  
燈の家に夢中で飛び込みました。

小柄の私が浴衣がけでしたので更に若く見えたのでしうか  
年輩の女の人慌てゝ私を二階へ上げて、「恵美子さあーん」、  
と妓の名を呼びました。私は胸がどき／＼しながら応接間のソ  
ファアに腰を下して、生れて初めて手にした煙草をやたらにふ  
かしていました。そしてその恵美子と呼ばれた女はどんな足を  
しているだろうかと、それが楽しみでこの冒険も恐しくありま  
せんでした。やがて音を立てゝ階段を上つてきた女は、十八、  
九の背の低い大人しそうな丸顔で目の大きい娘でした。部屋へ  
案内されてからも私は遂にあれ程関心を持つていた彼女の足を  
見る事は出来ませんでした。女の事について何一つ知らない私  
は只その娘と一緒に蒲団の中でじつとしていてただで息づまる  
ような一時を過しておりました。

あなたの足を見せて下さい等とどうして云えるだろうか、よ  
し相手が誰彼なしに身体をまかす商売女であつたとしても。一  
時間程後、私は只彼女の足を頭に描きながらその待合の裏口  
を出たのです。あゝ、誰か、美しい足を私に与えて呉れる女は  
ないでしうか。私はその人の足を抱いて死んでも悔いません



# 語漫異怪夏銷



## らきあ峨嵯

### はしがき

人間は死に際して驕然大悟、観念して死を迎えた者は、いわゆる怨念をこの世には残さないものであるという。

ところが、惨殺されたとか、不測の死を遂げた場合などは、一瞬の（それは秒速何千分の一にもあたる）怨念が、必ず現世に残るものとされている。

科学者もそれを認めて、説明のしようがないところから、第四面の像が残るのだとアイマイな説を唱える。

第四面——とは巧いことを言つたもので、第三者といえは当事者とはかけ離れた、謂わば無関係の立場を表明した言葉であるが、その無関係にもう一つシンニウをかけた第四の面というのだから、結局、一種の逃避語であつて、煎じ詰めれば、科学では判断がつかないということになるのである。

自然科学がいくら熾んになつてきても、磁石が常に「北」を指すという神秘のペールをはがすことは出来ない。かつては鉄道の列車衝突で大量の惨死者を出した山陽線三石駅の近傍は、いまでも毎年、不思議に事故が生じることとは周知のことで、乗務員たちはこの界

限を「魔の関所」と呼んでいる。

怨霊はウゴメク——筆者が、極く最近に経験した怪異を二三、こゝに書いてみよう。

### (一) 二階の十一番

京都の宮川町——美しい加茂川の水流を、京阪電車が隔てゝいてその中間に満々の水を湛えた疏水が流れているという遊廊——いまでは特飲街だが——そのK楼（遊客が激減すると悪いから、特に名を秘しておく）に、筆者は悪友三名と共に登楼した。

K楼は一流のお茶屋で、三階建であつた。吾々は最初、その三階へ上つて酒宴を開いた。六畳一間の孤立した部屋で、別に変つたことはなかつたのだが、酒宴半ば、私は尿意をおぼえて困惑した。というのは、長い段梯子を降りて、二階の便所へ行くことがメンドウに思われたからであつた。

幸い、仲居もいなかったもので、尾ろくな話だけれど、屋根へ出て、こつそり放尿しようと考えた。で、窓の手すりを乗り越えて、友人たちの笑顔を背に、のつそりと屋上へ出てみた。

夏の夜とはいつても、瓦はしつとりと冷たく夜露に濡れていた。立つて放尿するワケに



もゆかないところから、尻をまくり、足場をかためて蹲みこんだ。そして徐々、放尿にかゝつた。と、不意に、ゾーツと全身が鳥肌たつ思いがして、思わずブルツブルツと震え上つた。例の小児のとき、放尿した後で、何といることもなしに身震いする、ちやうどあれと同じ、いや、それとはすこし違う身震いだつた。

どうも奇怪だと思つた。小児ならいざ知らず、四十歳にもなつて、放尿後に身震いするなどということは稀有のことである。屋上にあるという身の危険視からかとも思つてみたが、視野が闇一色に閉ざされていたのだから、高所にいるという観念はなく、始めから危険などとは考えてもみなかつたことである。

奇怪しい……とは思つたものゝ、部屋へ戻つてまた痛飯するうちに、そのことはいつの間にか忘れてしまつた。

さて、おヒラキになつて、私が入られた部屋が問題の第十一号室であつた。

## 黎明の怪異

座にいた芸妓に泊つていけという、何や彼といわれて巧く逃げられてしまつた。どうもヒトリ寝も面白くないので、仲居を呼び、

Pさんでいゝから、若いベツピンを呼んでくれなどと冗談を言つた。すると間もなく一人の妓がやつてきたが、部屋に入るなり、「わて、ちよつと今夜は工合が悪うおますンやけど……」

と、いきなり恐縮しながらそう言つた。「ぢや、無理とはいわんが、帰りがけに、代



りの妓の来るように言つてくれ」

妓を帰らすと、次々に三人ばかり代りの女がやつて来たが、みな、いろいろな理由をつけては帰つて行く。てつきり、私は妓たちにポイコットをされているンぢやあるまいか……とそう思つた。だから、酒の酔いも手伝つて少々、腹が立つてきた。手を叩いて仲居を

呼び、そのことを口汚く難詰した。

「では、わてがヂキヂキ行つて、好え妓を探して来まほ」

笑いながら仲居は出て行つたが、最後に、今夜初店という、田舎臭のまだ残つている、若い妓を呼んできてくれた。

その妓を抱いて、くどくどと、女の語る身の上話をきいているうちに、私はいつか知らず前後不賞に眠つてしまつた。ふと、焼きつくような喉の乾きを覚えて眼を醒ました。手探りで、枕元を撫で廻したが水瓶がない。こゝろもち、枕をしたまゝで頭を拾げてみると右側の壁に、障子のはまつた丸窓があつた。うつすらとその障子が明るくなつていたから「はハア……夜が明けたな」

と意識した。そして、その横を見るとまなく見ると、丸窓の下に紫檀の机が置かれてあつて、その机に頬杖をつき、齢のころは五十前後の仲居風の女が一人、うつすらと笑ながら此方を見ていた。

乱酔のあとのモウロウとした意識で、「助平仲居奴！あんなところで見物してやがる……」

と私はそう思つた。仲居がいたことは幸いである。いきなり水瓶を持つてきてもらおう

と考へ、むつくり起上つた刹那だつた、見ると右側は一面のなまこ壁で、丸窓も、紫壇の机も仲居風の女も、何も、そこには無いのである。

「呀ッ！」

全身に、昨夜、三階の屋上で感じたと同じ悪感が走り過ぎた。奇怪といへば奇怪ではないか。いま、歴然と、この眼で、丸窓と机と老女とを見たのである。もう、恐ろしくて横になつてはいられない。傍に眠っている女をそのまゝにしておいて、第十号室に眠つて友人の部屋へとびこんで行つた。と、いきなり、友人と一緒に寝ていた妓がむつくりと起上り、

「出たでしよう！」

と、凶星を指した。私の顔色が白紙のようだといつて友人も起き上つた。

## 消えない怨念

「わてかて、ゆうべ、十一番に寝るンやつたら逃げ帰ります……あの部屋には仲居さんの幽霊が出まんネ」

道理で、昨夜、来る妓も来る妓も、変なことを言つては帰つて行つた。彼女等はみんなその消息を知つていて、それで、逃げ帰つて

行つたことが判つた。

その妓の語るところによつてみると、昔、幕末の頃だつたという。遊客の閨房を盗視する癖のある仲居がいて、そつと覗いている背後から、不意に一撃、酔客の刃にかゝつて惨殺されたとのことである。その怨念がまだに現世に残つていて、昔のまゝの姿で現れるのだという。

楼主がいくらその冥福を祈つても、加持祈禱の効果はアラワレないということである。

話を聴いて私は撫然とした。たしかに私の酔余の錯覚ではないのである。この眼でアリアリと見た怪異なのだ。それも、何か、予備知識をもつていての現象だつたら、また、潜在意識による幻覚作用とも判断がつくのだけれど、事実なのだから疑う余地はない訳だ。

それ以来、私はこの世に、超科学的な神秘の存在を信じる一人となり終えてしまつた。

ある日、近傍にあるD撮影所へ出掛けて行つて、その話をした。すると有名な監督のA氏も、企画課にいるNという男も、私と同じ十一号室の被害者だつた。

「なんででしょう、その、凄いと、人を呪うとかいう顔ではなく、男女の秘戯を、癡と瞋めて、うつすらと笑つていふといった顔容だ

つたでしよ！」

「うむ、その通りだ！」

監督A氏の言葉と、私の見た情景とが一致していて、その実感をまた一層深くした。

後日、曹洞宗本山妙心寺のある高僧に会つた時に、私はその話をした。高僧は抹香臭い説明をするかと思つたら、しばらく、熟考した上で、

「そういうこともあり得る訳です。拙僧は、氣流の故ぢやないかと考えるンです……あすこは、東山の上を、滋賀の方から不思議な氣流が流れていきますからね……」

これはまた、驚くべき解釈だつた。法力迷信を説くべき僧侶が、こうした高僧になるとそのことを科学の力で説明しようとする。あるいは科学者のいう、「第四面」の現象か——いづれにしても、私はすっかり徳川夢声と同じように、現在、神秘信奉の徒となつてしまつてゐる。

## (二) 海底の怪

安芸の宮嶋——そこに「岩惣」という料理旅館のあることは有名であるが予め、馴染の泊客は打電をしておく。と、旅館のモーター



ボートが宮嶋駅にまで出迎いに来ていること  
 になつてゐる。

私はいつもそのテを用いた。夥しい観光客  
 を載せた定期船の横を、後から行つて追ひ抜  
 く快感は何ともいえない。今年もその方法を  
 用いて宮嶋駅に下車してみると、例年、モー  
 ターボートを運転していた青年の顔が見えず  
 別の男が客待ちをしていた。

ボートが動き出してから、そのことを訊ね  
 てみると、その運転手は三日ばかり前に水泳  
 中、溺死を遂げたという話だつた。なんでも  
 旅館主の遠縁にあたる青年で、実直に勤めて  
 いたが、人一倍水泳が好きで、とうとう、そ  
 の犠牲になつてしまつたのだと、その男は語  
 つた。

「でも、水泳が好きな位なら、相当練達だつ  
 たろうにな」

という、

「へえ、それが不思議ぢやありませんか、そ  
 の日、地郷前という海水浴場へ出掛ける時に  
 山際に共同墓地があるんですが、つかつか  
 とその墓地へ入つて行つて、誰の墓だか判ら  
 ない石碑の前にしゃがんで、いつしんに掌を  
 合わせていたというんです」

「と、いうと、誰か、それを目撃していたン

だね」

「そうなんですよ。そのとき板場の由さんと  
 いう若い者が一緒に行つて、それを見て、オ  
 カシイなアと思つたんだそうです。そして、  
 棧橋から眺びこんだ途端に、突然、行方不明  
 になつてしまつたというんですけど、虫が知  
 らしたというンでしようかしら……」



「……で死体は上つたの？」

「いゝえ、それがあなた、あの辺は、鳴門の  
 瀬戸といわれているような流れの速いところ  
 ですから、毎年、一人や二人は死ぬんですけ  
 ど、かつて死体が上つたタメシがないンで  
 す」

「変だなア……何かあるンだな？」

ボートの中の、ワレワレの話はそれだけで

終つてしまつた。

翌日、油蟬のやかましく鳴く日で、とても  
 暑くてたまらないところから、私も水泳をコ  
 ロミヨウと考え、よせばいいのに单身、海  
 水浴場へ出掛けて行つた。

## 死体の座談会

厳島の棧橋駅を左に見て、山沿いの道を三  
 丁ばかり歩いて行くと、見晴らしいのいゝ突  
 堤へ出てしまふ。厳島は元来、西の方に白砂  
 の海岸が僅かにあるだけで、他は、すべて切  
 りたてたような断崖になつてゐる。だいたい  
 が海水浴場に適してなく、棧橋からダイビン  
 グして、急流を泳ぐといった塩梅で、とても  
 水泳の初心者などが愉しめるところではない  
 のである。

そこは、前にも述べたように地郷前と呼ば  
 れている突堤で、広島から来る遊覧ランチが  
 繫留される高い棧橋が設けられてあつた。私  
 は学生時代から水泳だけにはつよい自信をも  
 つていた。

幼時、天龍川の近くに育つて、日本一の急  
 流で練上げた自慢の腕をもつていた。だか  
 ら、天龍川の急流と比較してみると海の潮流  
 の速さなど、とても問題にはならないと、心

中ひそかに蔑視していた。で、さつそく裸身になると、指の節々を折り、深呼吸などをして準備をした。

出掛けに係の女中から、くれぐれも注意されたことがあつた。この海辺にはイルカが棲んでいるので、パンツではなしに、六尺のマワシを必ず締めて泳げということだつた。それは水流に白布を長々と流しながら泳ぐと、それに怖れてイルカが近ずかないという、古老のイマシメだというのだつた。

だが、メンドウなので私は、その忠告を無視してパンツ一つで棧橋の上に立つた。バラソルをさした若い女と、女が手をひいている男の子とが、遠く、道路に立停つて見物していた。

棧橋と水面とは三米位の距離がある。見ると濃紺の海水がゆつたりと流れていた。私はいきなりトーンと足場の板を蹴つてダイビングした。頭を垂直にし、両手をさット伸べると、劇しい水圧がひどく胸を叩く。たまらない冷たさである。

ぐっぐつと水流に潜つて瞳をひらいた。すると、ドス黒い岩礁が見えて、その横の白い海底に十数人の溺死人が円座を描き、まるで座談会でもしているような一コマが、瞬時で

はあるが一瞥された。

「うおッ！」

驚くべきことにはその中に三人ばかりの女人が混つている。そその女人らの長い髪の毛が、恰も海藻のように逆立ちして、流れにゆらゆら揺れているではないか。

「駄目だ！」

私はとつさにそう思つた。何という凄惨な地獄図絵だ。きつとやられるに違いないと想像した。で、矢庭に激しく手と足を動かし、一気に浮かび上ろうと身構えた。だが、奇怪な力に引きつけられて、手足が自由が動かないのだ。まつたく私は死者狂いになつて全身を圧倒する奇怪な力の圏外に、やつと泳ぎ切つて浮かび上がることが出来た。

確かに亡者たちの手が、私の足を引入れようとしたことは事実だつたし、海底の地獄図絵は明らかに私の錯覚ではなかつた。海底の亡者たちにうち勝つことが出来たというのはやつぱり水練の賜物だつたにちがひなかつた。

## 邪神の怨念

亡者はすべて篤い供養をうけて、始て、成仏し得るといふ。供養を享受しないものは永遠に邪神と化して、肉親であらうが他人であ

らうが、差別なく、その仲間に入れようとするものだそうである。

私はそのことを誰にも語らず、一命を拾つて帰洛した。そして、K大学のSという心理学専攻の老博士にその話をした。

「いや、それはあり得ることでしょう」

と前提して、博士はその海底の怪異を科学的に解明してくれた。

鰐島近傍は、瀬戸内海中でも、海底の隆起により水流の速いところだそうである。偶々海中に巨大な岩礁があつて、流れてきた海水がそれに衝突し、渦を巻くと共に、岩礁の下部に空洞が現出する。その空洞に、各所から流れて来た溺死体が集つてカラ廻りを始める。溺死体はそれ故に他所へ流れることなく、冷凍体となつてそこに停滞し、ちやうど座談会でもしているように見えるのだという話だつた。

思うに、水中だから、物体がブリズムのレンズを透して見るようになるので、一層、それがグロテスクに見えたのだらうししかも、足を引ッぱられた訳ではないだらうが、恐ろしいシーンを一瞥した瞬間の恐怖感から、拳手投足の機能が一時的にシビレたにちがひない……と言つて、老博士は呵々大笑した。



私はその話で一応は納得をしたものゝ、まだ、何となく釈然としないものが残っているような気がしてならない。

### (三) 眞夏の夜の怪異

源さんは電動機据附請負を業としている男だが、緒ら顔で、お相撲さんのように肥っている。

斗酒を辞せずという質だから、でつぷり肥っているのはアルコールの故にちがいないと本人も、神さんも信じていた。海港都市の郊外の、丘の上に家があつて、若い者を二人使つて、毎日、街の方に工事に出勤ける。

今年の春、東京へ嫁がしてあつた一人娘のお光が妊娠して帰つて来た。どうも容子が変なので産科医に診てもらうと、子宮外妊娠とあるので吃驚した。

早速、入院をさせて手術をうけたが、手遅れで、とうとう残念ながら、駄目だつた。泣く泣く葬式をすましたものゝ、一人娘のことだつたし、骨箱を婚家の方へは渡さず、自分の家の仏壇の中に納めて、手離すことをせず、酔うと、骨箱のフタを除つては、ひとりで泣いていることなどがしばしばあつた。

神さんがどこから聞いてきたのか、ある晩

変なことを言い出した。

「ねえ阿父つあん、いくら可愛いゝからつてお骨箱を家へ置いておくと、ロクなことがないつて、そういう人があるンですよ。ですから、早く、田舎のお墓へ納骨するなり、善光寺さまへ納めるなりしましょうよ」

「バカ！そ、そんなことア迷信ぢやい。骨になつても俺の娘だ。肉親にアタンをするようなことがあるものかい！他人が何といおうと打棄ツとけ！」

源さんはにべもなくそう言つて、とても不機嫌な顔をした。

事実、毎日々々の命日には、常念寺の和尚にも拜んでもらつてゐるのだし、そんなベラボウな話はないと、固く信じていたのであつた。

ところが、六月の声をきくと、急に仕事が忙しくなつてきた。金ヘン景気の上昇が、自然、そうした現象を惹起したのであるが、断り切れないほどの注文をうける。そればかりか、一日、休日にこつそり競輪に出掛けたところが、八千三百円という大穴を四枚もあてゝ雀躍した。その上、ある朝、新聞を見ると買った三枚の宝くじの一枚が、三等の五万円に当せんしていた。

まことに、気味の悪いほどすばらしい幸運の続出である。有頂天になつてゐる源さんと反対に、神さんは、どういふワケだか澁面をつくつた。

人間は、あんまり幸運が続くと、その反動で、何か、ドエライ悪運が湧いてくるものである。即ち、神占でも、大吉は凶に通じてゐるものだと言説して、ことごとく阿父つあんに警告した。

「阿呆ツ！また始めやがつた！バカは死なゝきやなおらねえ……」

と軽く、浪花節の文句で揶揄し、てんで、相手にもしなかつた。

「だがよ、宝くじの五万円が入つたら、ナイものにして、お光の骨納めに善光寺さまへでも伴れて行つてやろうかい」

と、酒がまわつてくると、冗談とも本当ともつかず、言つたりした。

### 病 癖

源さんには、元来、一つの悪い癖があつたそれは、酔うと、鉄道線路を歩きたがる——という病癖であつた。

その日も朝早く、若い者を先発させて、街のベニヤ板工場へモーターの据附に行くこと

になつていた。

「ちようど街へ出たついでに、宝くじの金をもらつてくるかな」

滴るような紫紺色のなすび漬けで、朝の茶づけをかつきながら源さんは、台所で弁当の用意をしている神さんに言つた。

「お金を貰つてくるのもいいけれど、帰りにハシゴをしちや駄目ですよ」

へタをする五万円ぐらい、マタタクマに費つてしまふオソレがあるので、神さんはくんと一本釘をさした。

「大丈夫よ。だいたい今日は工事完成で、社長さんからお祝いに一杯いたゞけることになつてゐるんだ」

「それならなおのことですわ。勸銀の方は今日でなくなつていゝのだから、宝くじは持たずに行つて下さいよ」

「うむ、どつちだつていいけど……」

金を持たすと危いと思つたので、神さんは警戒をして、そのことを阻止した。

いつに交らず出掛けて行つたが、見ると上りがまちに弁当が置き忘れられてあつた。そんなことは一度もなかつたことで、神さんはそれに気付くと、慌てゝそれを持ち、源さんの後を追馳けた。

街へ行くには築港の駅から汽車に乗つて、三キロばかり東の本駅まで行くことになつてゐる。神さんは坂路を汗を拭き／＼降りて行つた。ちようど踏切のところまで行くと、汽車が出てしまつた後だつた。多分、工事完成のお祝いで御馳走になるのかもしれないと思つて、そのまゝに引返してきた。

## 幻 覺

その晩、晩御飯をすませて神さんは、台所に立つて汚れた食器を洗つてゐた。八月半ばのむし暑い夜で、表口は開け放しになつてゐた。門口には東西に通じる細い道路があつて、その道の向うは畑になつてゐた。畑には唐もろこしの葉が繁つていて、二本ばかり除虫菊が大輪の花を傾けてゐる。家の中から射している電灯の光線が、その首を垂れている花にマトモに當つてゐた。

何の気なしに神さんが、濡れた手を拭きながら、その門口の方を見たのだつた。すると家の前を源さんが一人、東から西へ、家の前を素通りして行くのがチラと見えた。つぎはぎだらけの白い開襟シャツを着て、黒い半ズボンを履き、ゲートルを巻いた姿で、今朝出掛けた時と寸分違わない服装であつた。たゞ

変つてゐるところは、古びた経木真田の帽子を冠つてゐないということだけだつた。「なアんだ、阿父つあん……黙つて家の前を素通りなどして……？」

別に気にもとめず、洗物を了えると、上りがまちに腰を下して煙管を手にした。何か、御近所に用件でもあつて出掛けたのだらう。すぐに帰つて来るにちがいない。酔つてゐる容子も見えなかつたし御亭主の好きな胡瓜もみも作つてあるし、手落ちはない……とそう思つて、またゆつくりと煙草を喫んでゐた。と、不意にまた、門口を東から西に、源さんが通り過ぎて行くのが見えた。

「あら？阿父つあん！」

と、不審に思つて、思わず神さんが声をたてた。が、振り向きもしないでスタスタと行つてしまつた。一度ならず二度までも、家の前を、しかも同じ方向から、十分とも経たない間に素通りしたということは奇怪である……一瞬、神さんは水でも浴びたように背筋がゾッとした。いきなり門口にとび出してみたが、どこにも源さんの姿は見えなかつた。

急に、妙な胸騒ぎを感じたけれど、ひよつとしたら、隣組長をしていた福井さんのお宅



へ行つたのかもしれないと考え、その方向へ歩き出した。

戦時中から福井さんにはいろいろと世話になつていて、商売違いだけれど、へボ将棋の好敵手として、しよつちゆう出掛けていくことのある家であつた。

列んでゐる長屋の棟つゞきである。その一番端の、福井さんの家へ入つて行つた。

「今晚は」

「おや、どうしたんです？青い顔をして……」

福井さんの奥さんが玄關へ出て来た。神さんの容子がすこし變つていたので、いたく驚いた風であつた。

「あの……家の阿父つあんがお邪魔をしてやしませんか？」

「いゝえ」

「へ——え、そうですか……これはおかしい？」

「どうか、なすつたの？」

神さんはいましたが、家の門口を源吉が二度までも素通りをしたことを話し、てつきりお宅さまへお邪魔をしているだろうと思つたと話した。

「いゝえ、お見えにはなりませんよ……きつと、人違いでもなすつたんでしよう」

「それでしよかしら……」  
神さんは狐にでもつまゝれているような氣持で、再び家へ戻つてきた。

## 歩く靈魂

それから、約一時間ほどして、警官に附添われながら、戸板に乗せられた源さんの轢死体が、若い者に担がれて運ばれてきた。



若い者の話によつてみると、国道は遠廻りになるというので、例によつて三人は鉄道線路を歩き出したという。そのとき、工事落成の祝いで源さんはかなり酔つていたということである。

本駅から一キロ半、ちやうど築港駅との中間位のところにトンネルがある。ものゝ五十

米もない小トンネルで、源さんはいつもそのトンネルを鼻唄まぢりで通り抜けることを常としていた。

その夜も、工賃の勘定と、祝儀が貰えるというので二人の若い者が後に蹤いて歩いていた。トンネルの中へ入つたと思つた瞬間、上り列車が驀進してきた。三人は驚いたが、もう引返すことは出来なかつた。で、三人が三人とも一列になつて、トンネルの壁に両手を拵げ、コウモリのようにへばりついていたのである。

長い長い貨物列車が通り過ぎて、若い者二人はホットした。見るとそのとき傍にいるべき筈の親方の姿が見えなかつたというのだ。驚いて、名を呼びながら探してみると、十五米ほど先の線路のフチに、親方が血みどろになつて死んでゐるのを発見した。

したゝか泥酔していたために、壁にへばりついてゐた姿勢が崩れ、車輪に引ツかけられて轢殺されたものに違いない——という若い者の推定だつた。始め、脳天をグワンとやられたらしく、靴をはいた片脚がトンネルの出口に投出されてあつたという。

時刻を計つてみると、ちやうど源さんがト

ネルの中で奇禍に遭つた時と、門口をすつと素通りをして、神さんが怪しんだ時刻とが合致していた。

「阿父つあんのタマシイが来てくれたんだ」と言つて、神さんが源さんの死骸にとりすがつて号泣した。

最近、北海道の小樽で実際にあつた話である。神さんが嘘を話す訳はないのだから、これは真実にちがいない。

だが、氣遣つたあまり、明るい部屋から暗い屋外を見た時の、それは神さんの幻覚だつたらう……という者もある。しかし、親近の

者は、ラジオのセットのように、波長が同じだという解釈もつくから、死刹那の想念が一種の波長となつて、神さんのセットに反応したのだという説明もつく。いずれにしても、怪異がこの世に実在することだけはタシカである。南無阿彌陀仏を唱えてこの稿を了る。

## 變態心理を衝く

波多野 新

### たゞ量の相違のみ

どんなのが正態で、どんなのが変態か、それは容易に判るものじゃない。程度の強い変態ならすぐ判るが、ではどんなのが典型的な正態だといったら、それは全くむづかしい筈に違いない。事実人間というものは、実に多くの、いろいろな心理を持つているのでその質は大抵同じなのであるが、量に於て相違があり、此の量の相違で、同じような人間でありながらいろいろと特色をつけられるよう

になるのである。人間が人間を、それがどういう人であらうと、またどんな場合に於てであらうと、決して輕蔑してはならない理由がそこにある。

例えば、盗み、殺人、或は姦淫等、つまり人間が悪と名づけているものを行うものがある。そしてそののひどいのを、即ち世間で悪人というのであるが、しかしそうした性質は誰にだつてないとは云えないのである。たゞ潜在意識として隠されているか、意識の上に出ているも理性でうまく調節し制御して行け

るから行為の結果として表われないだけのことである。誰にでもあるこうした人間の性情が、偶々ある特定の人間にそれが極めて濃密に表現の形をとつたからとて、どうしてその人を非難出来よう。聖書にかいてあるように女を見て色情を起すものが姦淫の罪に値するものとすれば、今の世に姦淫をしないと云える人があるであらうか。

それと同じように変態心理も、或る心理が或る特定の人に特に極端なというだけで、そうした心理の軽度のものは誰にだつてあろう



また考えようの如何によつては、変態心理必ずしも悪いものではない。寧ろ典型的な正態心理の綜合などは詰らない存在で、却つて変態心理の発現のうちに人間の創造、的進化が掬み取られるのではなからうか。

だから私は困つた意味での変態心理を笑うことが出来ないと共に、いゝ意味(天才的とさえ云つていゝ)の変態心理をも特に尊敬はしないのである。

### 天才とは変態の純化

私の独断を許させて貰えるなら、天才というものは変態の純化した程度のものに過ぎないと思つてゐる。変態が尊敬に値いしないとするれば、同様の理由で天才的な存在なんか相手にしたくない。

私個人の経験に徴しても、神経衰弱みたいになると肉体的表徴としては、何だか眼球が凝固したような感じになつて、眼球が、快く又軽く左右上下に運転しない。そんなときはたゞ一つ所を見詰めていたいような氣持になる。肉体的にも心理的にも快い流動性、柔軟性乃至自由性が失われて来るのではなからうか。男によらず、女性にかぎらず、神経衰弱乃至ヒステリーに罹つた人間はその瞳を見れば

ばすぐ判る。即ちその瞳は一つの対象乃至思考に凝注するものらしい。

健康状態のときの眼球に何等の重圧的なものがなく、氣持よくその欲する左へでも右へでも、また上方へでも下方へでも輕快に動くように、人間の心理が正態で健康なら、特に一つの対象にのみ打ち込むというようなことのないのが普通かも知れない。その人はきつと、何でもが面白く何でもに興味がもて何時でも爽やかで愉快で、浴後ののんびりした氣持そのまゝの暢氣さを持ち何一つしないでも何物にも拘泥することなくして、生存そのものだけで足りるほどに、その生存が氣持のいゝものに思われるのかも知れない。が、そんな人間は物が纏らぬにきまつてゐる。花から花へと勝手に飛び歩きたいような生存そのものだけで事の足りる人間に何の精神作業が出来る。それを思うと、學者にして一つの専門に、全生命、全時間を打ち込む者は、恰も神経衰弱者の眼球が一つの対象を見つめたり変態心理者の頭が一つの考えにこびりつくようなものではないかと思ふ。

### 従来の歴史は変態心理者の列傳

専門學者特に天才が一事に熱中して、何事

をも忘れることは尊いとされている。

併し、これまでの人文史は尊ぶべき正態心理を平凡として輕蔑し、変態心理を一も二もなく尊敬して來た謂わば変態心理の歴史で、歴史とは変態心理者の列伝みたいなものであるとも云える。

平凡かも知れないが、生々潑潑とした自然の、正態心理の持主は、行動と思考とが、ちやんぽんになつてゐるのに違ひない。その向きの人間は云う、「考えることは病氣だ」とだが、人間は病氣な人間ほど思索を行動から引き離し思索の尊ぶべきことを説くのである「日に三度省みる」——そんな文句があるがこれは倫理的神経衰弱患者にあらざる限り吐かないであらう愚言ではないか、と私には思われるのである。

変態心理——それは或る心理が、特定人間の心理を藉りて聚積的に表現されたものである。その輕症のものなら誰にでもある。変態心理は心理学の特殊の部門に属するが、社会の上から見ると変態心理が多くの場合、人心を支配し、影響し、作用してゐるのである。

個人心理に対する群集心理及び社会心理の対照がある。私が上述した変態心理は個人に就いて云つたのだが、社会的変態心理といふ

こともまた考察される。仮りに、或る人達が今の社会組織に反対である、と云えば、とりも直さず、現在社会組織を根柢として成り立つ、社会感覚乃至心理に反対であると云うことになる。

それ等の人達が現在の社会組織に反対して立つ所に、それ相応の合理的根柢がある。しかるに今の社会組織を意識的に乃至無意識的に肯定している連中は、それらの態度を目して、即ちその心理なり生活態度なりを目して変だと考えたがる。それは少数なるが故にであらうが、少数の合理的突進者は、いつの世にもその時代から変態的な社会心理と看做されるのである。だがその場合、どちらが変であり、どちらが変でないかは静かに考えて見るがいゝそれらの立場から見れば、今日の社会多数人は変態社会心理の上に、成立つてその生活を押進めているのではないかと思われる節がないでもない。

かゝる意味に於て私は、個人に属する変態心理から更に一步をすすめて、社会心理の変態的局面をも考察すべきであると考えたいのである。

## 私は変態心理者か

最後に変態心理に就いて更に一言を加えさせて貰うならば、変態心理者は概して自己が変態心理者であることを意識しない。能才は自覚し、天才は自覚せずという言葉を心理の局面に準用していうならば、変態心理であるを意識するものは、まだ傾向、癖、乃至好みといった程度ではなからうか。ほんとうの変態心理者に、「君は変態心理の持主だよ」と云うならば「冗談云うな、莫迦にするな」と云つて憤慨するかも知れない。天才の努力が努力でない如く、変態心理者のそれも、恰も水が低きに就くが如く、事程左様に無意識的なのかも知れないのである。

いくら考えても私に一風変つた何ものかゝあろうなどゝは思われない。それなのに、世人は常に私を一種の変種扱いをする。私は不思議に感じてならぬのであるが、で更に再考してみらに、私には神経衰弱の傾向があるのと片意地な所がいくらかある位のものだ。しかしそんな微少の癖なら誰にだつてあるに違いない。それ以上には物事の考え方がチト空想的であること、独りぎめなところのあること考え方の上に或は若干の我儘勝手はあるといったようなところは、ないでもないようであるが、それとても、変態心理とまでには尙距

離があまりに遠過ぎるのを感じる。どんなに誇張して考えても、私には変態心理的色彩をもつ何ものかゝあろうとは思われないにも拘わらず、何かしら変つた何物かであるかの如く見られるのは心外である。

が、第三者がそう見るのには、そう見るに値するものかゝあるのかも知れない。それとも第三者その人達の眼付が却つて悪いのか、まあそのどちらかであらう。ともあれ私自身にとつては、あるようにしかありえないのだから、それはどちらでもいゝのである。だが私は正直に考え方をぶちまけると、今の社会は変態心理者の社会である。貪婪飽くなき、蓄財もそうなら、今の社会に対しても野心もそうであり、地位、その他外飾的な一切を欲しがらるものも、すべてその悉くが変態心理者としか思われないのである。

で、私は彼等がみんな変態心理者であると思つてゐる。詰り、今の社会組織を肯定しているものは、極端に云えば変態心理者に外ならないのである。

以上が私自身のもつ変態心理者観である。



# 彫刻と性について

—文と画—

池 長 味



私共は、現代の美術展覧会の彫刻室を見て、余りにも男女の裸体彫刻の多い事に驚ろかされてしまっています。

一体、この裸体彫刻は何教こんなに多く作られるのでしょうか？この理由は、決して現代でストリップが喜ばれるのと同じ傾向であると云うのではありません。

之には、深く彫刻の本質的要素が介在しているようであり、大變専門的になつて恐縮ですが、この裸体彫刻は、紀元前数千年の昔から既にあつて、以来絶える事なくあらゆる時代、あらゆる地方に作られて来ているのであります。勿論その制作の動作や、意味は違つてゐるし、従つて作品に表現された気持も様々であります、ともかく裸体彫刻というものの真の目的と云えば、一個の人体をかり、ただその中に人間と云う一個の自然物の生命が見ずいていて、裸体を通して人々に自然の広大な

美の世界を知らせ、彫刻の真の生命が、その服装や姿体や表情ではなく形そのもののの中に包含されている事を教えているものであります。

彫刻の真の目的が、このあらゆるモデルの個性を取り去つて、塊そのもののもつてゐる生き生きとした感じ、又張り切つた生命を単純な形の中にちぢめて美を表現しようと云ふ処にあるとすれば、それ以外の目的の為に、又それ以外のものを感じさせる彫刻は真の彫刻とは云えなくなり、この意味で、私共が彫刻を鑑賞する場合、その作品の中に文学的内容を求める事は無意味であり、本当の彫刻の塊の美しさ以外に文学的内容だけが眼に着くようなものは、又決していゝ彫刻とは云えません。

之は何をしている処か、何を意味するのかと云ふより、何をどんなに表現したかと云ふのがどこ迄も問題になつて居ります。

例えば犬の彫刻があつた場合、それが實在の犬とは違つていても彫刻的に美しい犬でなければ彫刻としての価値はありません。

真の彫刻は物象の標本であつてはならないのです。

よく、こんな話をする人があります。

女性の特に妙齡の女の裸体彫像は、性慾的快感のみで之を鑑賞する以外にないと云うのです。こうした考えを持つた人達は、女の裸体像の本質を、性慾的な或物に挑発されてその快感を美と思う人であり、従つて、裸体彫刻の中には真の美は介在するものではなく、裸体彫刻を見て楽しだとは実にいやしい趣味であり、裸体彫刻なんて世の風俗を乱すものであると信じています。

この事に就ては、その対象が真実の意味のすぐれた彫刻であれば正しい観方とは云えないようです。例えば、私共が野の花を見る場

合、それがどんな花でもその美しさに差はあつても、花は美しくないと云う人はありません。

花はつまらないから見ないと云う人でも、花は美しくないと云う人があつたとしたらその人は至つて間違つた事を云つてゐる人ではないでしようか。

然しこの花そのものは、事實は繁殖の機関であつて、生殖の目的物だと知り乍らも花を見ると誰でも美しいと思うのです。

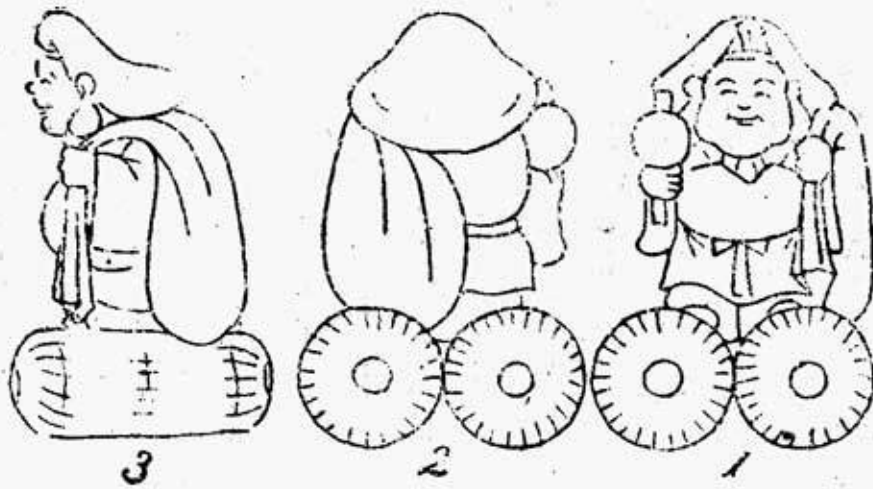
私共が百合の雌蕊の形を見るとその形がそり反つて男根に似ている事に気がつき、萩の花、スイトピー等総じて蝶形花冠を持つ花の、特に萩の花は女の性器そっくりの形を持ちその感を抱かせます。

然し百合の花や萩の花を見て、性慾を起す人があるでしようか、それが万一あつたとしたら、その人の心の実にけがれて賤しい事を物語つてゐるものであります。

之と同様、若い男女の裸体彫刻を見てけがらわしいと思う人は、その彫刻の乳房、臀部、股間を見て性慾を起すのであつて、正常な理性の持主でないような気がします。

云わば、本当に彫刻を見る資格のない人のように思われます。

私共は生殖の目的である所の花



を見て之を美しいと思うように、男女の裸体彫刻を見ても之をただ美しいと、清く素直に、鑑賞する知性と感情を持ちたいものです。

そして又、男女の裸体彫刻が決して性慾を挑発し、そしてその挑発する所に美の存在するのではなく花を見て花が美しいよう、裸体彫刻それ自身に真の美があるものこそ真の彫刻と云えます。

然し世の中には、こうした真実の美を持たない、かげんな彫刻が多いものです。

あえて、彫刻や絵の本質的美しさと言ふものより脱して、慾情を挑発するような目的の為の絵画彫刻、写真、文章のある事は私共の己に経験している事です。

之でさえ、只其目的とする処のみを見ても、駄作秀作の差がありますから、之等は一方的に純粹美からはなれて、思ひきつてその目的にそのものになるか、或は純粹美、純粹芸術を理想とするか、ど

ちらかにはつきりしないと中間的存在はかえつて純粹芸術の価値判断の破壊と混乱を招き風俗を乱す基となるかも知れません。

云わば、どちらかに、はつきりした態度で席に着く可きです。

江戸時代、風俗画の大家として著名な歌麿、春章等になると云う所謂春画は、之を見る者をして春情を起す以前に、すぐれた芸術品としてほれぐとしますし、現代フランスの彫刻の大家、オウギュスト、ロダンの彫刻に、セツプンと題する若い男女の裸体が抱き合つて接吻をしている構図の作品があります、之とて慾情をちつとも感じさせないほど真の彫刻美を感ずる名作であります。

この例からも、私が前に云つたように、すぐれた彫刻は彫刻美だけが残つて文学的内容である接吻と云う事が氣づかない程、影をひそめている事実を知られる筈ですここに面白いのは、我が日本に



男女の性器をあつかつて立派に彫刻化・絵画化して、神として祈り崇拝しているものがあります。之等は前に云つた芸術美、彫刻美の見地から見ると多少其趣きを異としますが、余りにもすぐれて彫刻化・象徴化されたために、性器としての実感を感じなくなつています。

それは、たいていどここの地方でも福の神として有名な大黒様・エビス様ですが、俵に乗り打出の槌と袋を持つた大黒様、岩の上に釣竿と鯛を手にして坐るエビス様を見て誰が性慾を起すでしょうか。

之は余りにも性器の象徴化に成功した、驚くべきケツサクである事は疑の余地がありません。

長崎県の離島、平戸島方面にはマリア観音と云われた仏像があります、これは時の為政者に依つてキリスト教が禁じられた時、その眼をのがれるためと仏教の方の観音像の形をかり、その中にマリアの象徴化をねらつたものですが、

之等は一目見てすぐマリア像だと云う事が解りますので、結果としては形の構成に成功しているとは云えません。

之に比較すると、性器の福神化は、古今、洋の東西を問はず之程すぐれたものが他に存在するでしょうか。

試みにこの福神をごらんになるとよく御諒解される事ですが、大黒様の方では、頭に乘せた所謂大黒頭布は男子性器の龜頭に当り、この頭布の帽章のある位置の一種の模様は尿道口であり、足下に踏む二俵の俵は勿論睾丸である事は間違ひありません。又肩にした宝袋は或は輸精管と云えましようか。

一方、鯛を抱えたエビス様の方では、頭上のエボウシは女性性器の陰核であり、胸間に見られる柏の紋様に似た模様は、恐らく陰口のシンボルでなくてなんでしょう。大黒様の方は、之を側面から見ると一層此事が解ります。

挿図の1は大黒様の正面、2は後面、3は之を横から見たところ、4はエビス様の正面で5は後面です。試に正面図の顔をかくして図を見て下さい、どんなふうに見えますか？。

之は多少余談になりますが、こうした性器をシムボライズしたすぐれた神像は、いつ、どこで、誰が生んだものでしょうか。

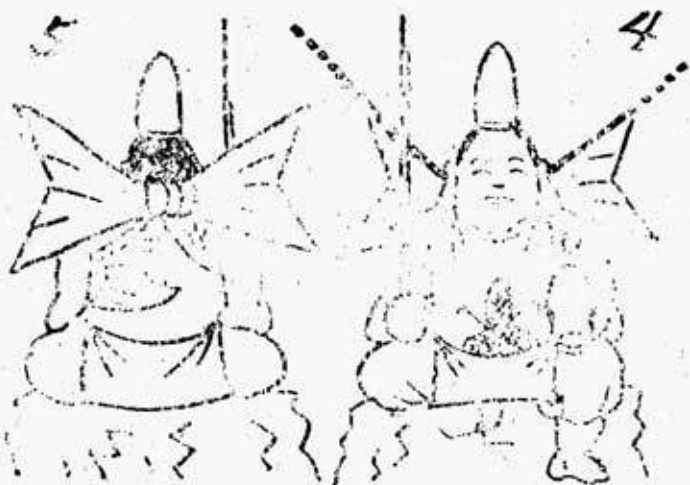
勿論、日本神話にある白兔の故事で有名な大国主命、その子事代主命とは凡そ別人であり、いつの時代かすぐれたデザイナーが男女の性器を意識して象徴化したものでありましよう。

では何故かような神像が生れたのか、又生れる必要性があつたのか考察してみると、現代でもよく巷間に云われているように、理由はともかくとして、春画を懐中にしていると勝負運や、商売の賭引に強いと云う迷信の一事からでも当初は、恐らく性器そのものの形

を持ち歩るき、又は住居の何処かに置いて神として崇め、神秘と奇蹟をたのみ一身の盛運を祈り念じたものでしょう。

之に就ての時代考証は審らからありませんが、一般芸術が日本の支配階級、為政者そう云つた者から一般庶民の手に落ちて隆盛を極めた徳川時代ではないかと想像します。

然し世は頽廢文化の時代とは云え、性器そのものを祭神としての



信仰はやはり世をはばかり、性器そのものの神像は地方の道祖神等の堂宇深くおさまる巷間には現代に見るように素晴らしく象徴化されを福神形態がとられたものと考えられます。その生誕の動機も恐らく、強い迷信の中に必然的であつた事が信じられます。

事の真非はともかく、巨匠左甚五郎が時の豪商の爲作つたと云う大黒様は講談等で有名ですが、之等は名匠の作になる性器の傑作と云うべきではないでしょうか。

以上のように、人間の持つ性器の信仰の対象として神像化されている事実を考へる時、現代に於ては昔の迷信から離れ之をもつと範圍を拡大して、男女性器そのものの芸術化、彫刻化と云う事がなされてこそ、近代人の芸術の一部でもある、又大きな近代の収穫であるかも知れません。

勿論、誰かが信ずるように、性器や福神の信仰が私共人間の運命

を支配するとすれば、福神の存在価値は必然的でしょう、いつの世迄も存在すべきです。

御承知のように、人間の性感帯（色情帯）と云われているものの中に、唇、乳房、陰阜、陰核、龜頭、陰莖等ありますが、之等一つとして芸術化されて美を感じないものはありません。

特に真の意味で、純粹彫刻化された時この色情帯が如何に美しいか想像しても愉快ではありませんか。

彫刻は眼で見る芸術より、手でなで見る触感芸術であります。人の裸体や性感帯も、美しい愛情の中の、やわらかな性的愛撫にこそ真の意義を見出すものであれば、この両者の共通性の中に美しい芸術への展開を認むべきです。この意味に於て、万一各々異つた形と量感を持つ、唇や乳房、陰阜、龜頭その他が真の彫刻として制作されたら、之等を鑑賞する人

は、性感を感じる以前にその美感じうたれ、人間の存在理由や生活の意義を知り、各々の宿命に光りをあたえられ、人の踏むべき道を悟つて生きてゐる事を喜び、地上の花々が美しいと愛されるようにいつ迄もこの彫刻は愛撫されるに違いありません。

すなはち、芸術は作家が感動した処に生れ、それを見た人がより感動するのですから性器（色情帯）の彫刻が人をして感動させない筈はありません。ましてそれ等一つとして立体的彫刻の要素を持たないものはないのですから。

ともかく、いつの日か今の裸体彫像もかわつて、陰莖を大理石の巨石によつて彫刻し「永遠の希望」と題したり、あの陰阜のやわらかいふくらみが作品化され魂の喜びと題されたりして、公の美術展あたりに出品されないと誰が断言出来ましょう。いや私共は、裸体彫刻が制作される以上、その中で

最も美しい之等性感帯の彫刻をなし、之を見る人に、美への憧憬と生きてゐる喜びを知らすべき責任をさえ感じて居ります。彫刻と性は密接不離なものです。

—○—

現代の美術展に見る、超現実派の彫刻、その中には人の唇や、乳房、臀部等、部分的に之等を大きく誇張した作品があります。又ピカソやマチスの仕事には得て云つたものが多いのですが、之等の作品の中に性感帯の彫刻らしいものがあつたとしても不思議ではなく、私共がそんなふうに観たとしても決して一向に差しつかえない事です。

（筆者は彫塑家）

× × ×



## 奇譚クラブ最近号 主要目次

○六月号 戦争と性慾特集○

口絵 戦争と性慾画集、ハレムの美妃

「責められる女の美」写真集

好色秘本 バルカン戦争

貞操特攻隊の悲劇

モスコウの妖花

ナポレオンの兵隊

成吉思汗の性慾戦術

テルマ病院の点描

人間便所の妄想狂

男子同性愛雑考

陸軍特設第七天国

港々の女たち

南方特殊慰安施設こぼれ話

太平洋戦争戦塵漁色余話

今は昔戦線エロ落穂集

中国兵の妻となつた女

戦争と娼婦

魔性私刑

小説・京マチ子

淫蕩歌舞伎図絵

男子同性愛者からの書信

女性陰毛の生理

女性哨戒線突破

## 戦争とエロ

杉山 清詩	三嶋 彰太	下山 雄	直鍋 吟吾	浅倉 文朗	二宮 忠一	花本 史郎	中沢 公平	松谷 茂	藤田 盛治	杉山 清詩
島原 順三	下出 章一	田島由美子	田森 浩志	街 啓介	夏目 千代	緑 比古	南里 文彦	田中 芳生	浪速 三郎	杉山 清詩

## 特選小説

男子同性愛者からの書信	南里 文彦
女性陰毛の生理	田中 芳生
女性哨戒線突破	浪速 三郎

○七月号 女天下時代特集 ○

口絵 縛られた裸女十態……喜多 玲子

緊縛裸婦写真集「美しき苦悶」

女天下時代(マゾの男達)画集

女の奴隷、マゾヒスト群像……高取 辰治

女体の下に露めく男たち……阿久津 猛

淫乱婦女伝……花木 実

疾患の鶏……藤安 節子

或る変態夫婦の死……藤崎 洋美

お座敷ストリップ色勇伝鬼山 絢策

女剣闘王健在なり……富士 芳孝

国際文通好色囃……二俣志津子

上海の売笑婦 野鷲族……野中 愛三

変態 艶書……岡田 咲子

世男奴隷艶情史……野溝 草兵

少年好色奇譚……松谷 茂

維新志士漁色競べ……花山 剣作

性交なき遂情行為……島上 源一

性愛と残酷……仁比山 等

恥毛と腋毛……田中 芳佳

女の足の蠱惑……赤坂 剛

夢性の美少年……三村 幾夫

張形の謎……緑 猛比古

小説 倫落の岐路……壬生すみ子

都々逸に現われた性愛感情……安部 雨紅

性愛 談義 獣類にも恋愛はあるか……絹島 増夫

張型を用いた性愛の技巧……白川朝子

## 女天下時代

高取 辰治	阿久津 猛	花木 実	藤安 節子	藤崎 洋美	絢策	富士 芳孝	二俣志津子	野中 愛三	岡田 咲子	野溝 草兵	松谷 茂	花山 剣作	島上 源一	仁比山 等	田中 芳佳	赤坂 剛	三村 幾夫	緑 猛比古	壬生すみ子	安部 雨紅	絹島 増夫	白川朝子
-------	-------	------	-------	-------	----	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	------

○八月号 責めと男色特大号 ○

口絵 浴場と浴室のエロチシズム

惨虐の芸術(合巻に現れた殺し)

男色天国繁昌記画集

女体相撲艶色史……増田 志郎

変態コレクトマニヤ……庄司 浩平

男の天国・女工哀史……早崎 稻穂

ソドミーとレスボスの愛……染田 玄

夢性の美少年……三村 幾夫

【変態心理】自虐淫楽……三富 浩生

日本性見世物変遷史……潮 マリ

乳房を失った女……竹谷 十三

男色殺人事件……井口 正憲

男性的女子の記……藤安 節子

特選 変化中条流……緑 猛比古

読切 青い濁流……竹内 節夫

MとS……岡田 咲子

温泉ホテルの母娘……矢代 文世

不貞の倫理……貴崎 郷子

姦淫私刑考……丹波 太郎

悦虐の記録……喜多 玲子

拇指反つた素足の美……的場 誠

王朝好色本 音なし草紙……宮内早次郎

◎喜多玲子習作集「縛られたる女の十五態」

◎折込口絵写真 「緊縛美の断片」

神戸暗黒街探訪記……久木田 堅

光源氏の性的生活……畑村 連治

記

録

係

ス ク リ

プ

タ ー



岡 田 咲 子  
画 喜 多 玲 子

A 映画撮影所の記録係になつてから、明日で丁度一年目になるの。いよいよ明日から一人前の記録係になつて、お仕事が出来ると思うとうれしくて、うれしくて大きな声で、ワァーとさけびたくなる位よ。昔、女学校の入学試験にパスした時も矢張りこんな気持だったのを覚えて居るわ。

お仕事面白い？かつて——。そりやあ面白いわ。面白いからこそ、こんなに張切つて居るんじゃないの。そりやあ監督さんの言うことを間違えて助監督さんに叱られた

り、先輩の記録係のお姉さんたちに、いじめられたりして本当に悲しくて泣いてしまった事も有ったけど、それだつて今日の喜びに比べたらものの数じゃあ無いわ。

でもね、言いくいんどけれど貴女が記録係になると言うお話には、本当に心から賛成が出来ないのよ。こんなに記録係と言う仕事が好きで好きでたまらないのに何故なのか、自分でも不思議なの。

弱つちやつたなア。この私の気持をどう言葉にして表現したら良いのか知ら？……。嫌よ。涙なんかためて——。貴女にそんな顔をされると、ますますその説明にこまつてしまふから。ねえ涙をふいてね。

ではこうしましうよ。これから私が記録係になつてから、この一年間に起つた経験談を二ツ三ツして上げましよう。そして私の話を聞いても、それでも貴女が記録係になりたと言ふのなら、私も賛成することにしましうよ。

それで良いでしょ？。それ以外に今の私には貴女に説明する方法が判らないのよ。

そのお話と言うのは、記録係や女優さんのお話なのだけど、全部私がこの目で体で体験した話なの。私の話を聞いて居る間に貴女の



進む道を決めなさいね。

最初は私たち記録係のお話をして上げましよう。私がA撮影所の記録係の見習に採用されて三ヶ月ほどたつた頃のことでした。

## 話の【1】

記録係と言うお仕事はね、撮影が始まると女性と名前がつく者は出演する女優さん以外には記録係が唯一の女性になつてしまふことも有るのよ。だから記録係を五年十年とやつて居る間に、服装も気持も次第に中性化して来るのは事実なの。

夏や冬は、寒暑がはげしいセットやロケーションで男性と同じ条件の下で飛び廻つて働らく商売だから仕方がないのよ。そして仕事の味を覚えて来て面白くなると、結婚なんてことは忘れてしまふのだと思ふわ。

結婚とか恋愛——もちろん男性との話よ。

——を忘れても、人間である以上は必然的に起こる生理的な作用。変な言い方だけど、判るでしょ。そんなものが男性を忘れ、結婚を忘れた女にも有るのよ。きつと——。

私も中性化したですつて？。嫌よ、まだ一年しかたつて居ないのよ私は——。でもこんなことが曲りなりにでも言えるのは、私もや

やその方向へより始めた証拠かも知れないわね。おそかれ早かれ私もそうなるんだから構やしないけれど、女は矢張り恋愛から結婚そして家庭と、出来るなら正しい道を歩まなければいけないと思ふのよ。

これからお話する記録係のK子さんも一度は女としての正常な道を歩いた訳なのよ。恋愛も結婚もした方だったの。だけど不幸に家庭生活の第一歩で、男性つて野獣の様にいやしいきたならしい動物だと言う印象を、男から強く受けてしまつたのね。そして男性に向けるべき性慾を同じ女性から求めて始めたのよ。考え様によつては可愛想な人なのね。

だからKさんは新しい後輩が入社して来る一番可愛がつて呉れたわ。それはもうカイ所に手がとどくつてのは、Kさんのために出来た言葉かも知れないと思ふ程の可愛がり様なのよ。

ええ、そうよ。私も可愛がつてもらつた後輩の一人だったの。だけど一月二月すぎる間にKさんの愛を受ける目標が私一人になつたと言うことを、私も気がついたのよ。

私も最初の間はうれしかつたけれど、日がたつにつれて、四六時中何処へ行つても私の体を見守つて居るKさんの目が恐くも有り、う

るさくもなつて来たの。

それも無理ないのよ。風呂飯も入浴も映画も散歩も私一人だけが自由に出来ない。一寸助監督さんと仲良くしたつて言つては叱られ俳優さんと話したと言つては嫌味を言われるんですもの。たまつたものじゃあなかつたわそう、こんなことも有つた。

助監督さんにR大学を出た二枚目の青年が居るのよ。一度映画へさそわれたんでKさんになまつて一緒に居つちやつたのよ。

私だつて、たまには男の人とも映画ぐらい見に行きたくなるわ。そりや映画の批評をさせても矢張り監督のタマゴだけあつて良いこと言うわ。あの日も終つてからまだ早いし、外に行く当てもないので、その人が居る、アパートへ寄つて行くことにして、彼氏のアパートの部屋を開け様とした時、誰か後ろから肩を叩くの。何んの気なしに振向くと、私は真青になつてしまつたわ。それもその筈、Kさんが何時来たのか、うらめしそうに私の顔をにらみつけて居るんですもの——。誰れに聞いたのか知らないけれども、これじや人権じゅうりんもはなはだしいじやないのねえ、こんな話つて有る？。

それから二三日後、新しい作品の本読みも

終り、スタッフが組まれて見ると、記録係はK子さんで私がその下で見習いにつくことに決定して居るじやあ無いの。

嫌だつたけど、幹事制をとつて居る監督部は自分の好き勝手に、組についたり止めたりは出来ないし。そんなことをしたらそれこそ大変、助監督の幹事にお目玉をくつてしまわ。仕方がなく、その組についたのよ。

いよいよ撮影がクランク・インすると、これが他の会社との俳優さんの貸借りや、曇天のロケーション中止などが原因して強行撮影になつたのよ。封切日を間に合わすために——毎日終了が午後11時や12時にはなるの。だから、遠くから通勤している者は、みんな会社へ泊つてしまふのよ。

あの日も午後11時半にセットが終了したのでK子さんと私は、記録係の部屋の二畳の間にねることにしたの。

アパートの件が有つてからK子さんは前の様に近ずきもせず、仕事の話以外はしやべらなかつたのだけれど、如何したのかその夜は至極陽気で御気嫌が良く、布団へ入る時にK子さんは洋服を脱ぎシユミーズ一枚になつて床へ入ると、私に

「貴女も、服を脱いでねないとしわだらけに

なるわよ。」

私もうなづいてシユミーズになり布団へ入つたの。しばらく二人共だまつて目を閉じていたわ。急にK子さんが

「あの時のことまだ怒つてゐるの？」

言われて見れば、私もだまつて居るのが悪い気がして来てね。微笑して

「いいえ、もうとつくの昔に忘れてゐるわ、あんなこと——。」

と答えたの。K子さんはうれしそりに

「本当？」

私もはつきりうなづいて上げたわ。するとK子さんは思いつめていたものを、一度に全部はき出してしまつた様に大きく息をはき出すと

「あゝ良かった。嫌われたら如何うしようかと思つちやつた。ねえ仲なおりの握手して——」

布団の下からK子さんの腕がのびて来て、私の片方の掌を固くにぎるのよ。私もなんだかすまない様な気持になつて、もう一方の掌をK子さんの掌の上にのせて

「御免なさい。私も悪かつたわ。心配ばかりかけて——」

K子さんも首を振つて

「ううん、悪かつたのは私の方よ。でも仲なおりで出来た記念に、一遍だけ私が抱いても良いでしょ。嫌、また変な顔をする。一度つきりだつて断わつてゐるのに、ねえお願い、この通り拝むわ。」

両手合せて拝まれ、ば誰だつて嫌とは言えないでしょ。私もそれ以上K子さんの申出をこぼめなくなつちまつたのよ。

仕方がなく、うなづいた私の体にK子さんは両腕をまきつけて抱きしめたの。シユミーズ一枚のK子さんの平たい胸で私のこの大きな肥った乳房は、強く圧されて私のブラジャ1の下の胸へ、はつきりK子さんの心臓の音が聞きとれたわ。

私とK子さんはしばらくの間、そのままじ1と見動きもせずに居たのよ。そうするとK子さんの顔は上気し紅色になり、息する度毎に上下する胸が次第に早くなつて、その息は熱つぽくなつて、私の頬へK子さんの頬がピツタリくつついて、K子さんの息がだんだん耳元へ近づくと

「ねえ、キッスしても良いでしょ、ねえ、良いわね。」

ささやかれ、返事に迷つて居る私の口へK子さんのヌメヌメした光沢の真赤な口びるが



おはい被さつてしまつたの。

「ムムム——」

私は驚き、呻きもがいてやつとK子さんの口びるをおしどけて

「嫌、嫌、苦しいから止めて！そんなことするの！」

私は声を一寸あらくして言うと

「何故？嫌なの？。どうして嫌なの？そう。

そんなに私がきらいなの。本当に仲なおりして呉れたんじやなかつたのね。皆んなそうだったのね。良いわ。判つたわ。でも貴女がいくら嫌つても私は貴女が大好きだから仕様がなないわ。貴女に嫌われ、ば嫌われるだけ貴女が大好きになるのよ。さあ私がどれほど貴女を愛しているか見せて上げるわ。」

K子さんは私の顔を見てニヤニヤ笑つて立上るの。私も恐くなつてジリジリ後ずさりして背中をピッタリ壁につけK子さんの様子を見守つたわ。

するとK子さんは洋服かけの自分のズボンから細い革バンドをぬき取つて片手に持つと今度は、私の洋服からレインコートのバンドをぬき取つて持つと、手拭かけへ手をのぼしタオルを取つて来ると、私の前へしやがんで「良いこととして上げるから両腕を出してこら

んなさいよ。」

私だつて、バンドやタオルがどんな役目をはたすのか位すぐ判つたわ。だから首を横に振つて

「馬鹿なまねよしてよ。」

私は立上りドアを開けようとしたの。すると何時閉めたのか鍵がおりて居るのよ。K子さんは

「騒げば真下の守衛さんが目を覚まして、上つて来るわ。そうしたら私がこう言うわ。この人一緒にねて居る間に私の財布持出そうとしたの。だから私が捕まえたの。フン下を見てごらんないな、私の財布から百円がはみ出して居る。」

私はそのトリックに見事、引つかかつたのよ。身動きが出来なくなつてしまつた私は恐怖にふるえて、

「余りひどい目に合わせないでね。」

私は恐る恐る両腕を前へ出すと、K子さんは

「良い子ね。大人しくするんですよ。」

微笑しながら、革のバンドで手首をギューとして

「さあ、良い子はねんねんよ。」

と言つてね、私の体を布団の上へ、お向け

におし倒して、手首のバンドを私の頭の上へ持つて来るとバンドの片端を窓の開閉器の金具へ縛りつけてしまつたの。

だから私の縛られた両手首はバンドで引張られ固く食い込んで、腕がぬけるように痛かつたわ。でも私はがまんして居たの。

K子さんは

「お利口さん、でも、もうしばらく辛抱するのよ。そうすれば必ず私が好きになつてしまふから。さあ、このきれいな両足をのぼして——、そおそお。」

レインコートのバンドをぐるぐる両足首にまきつけると、次はそのほしを反対側の窓まで引張り同じく開閉器の金具へ結んでしまつたの。両腕と両足を両方から引張られ止められてしまつた私の体に近づいて来て

「これから今晚中二人で誰れも知らない秘密の楽園へ行くのよ。でも余り楽しくつて貴女が大声を出すと、階下の守衛さんの安眠妨害になるから、一寸息苦しくつてもこのタオルで貴女の口をふたして置くわ。駄目、駄目嫌でも仕方がないわよ。撮影所の中よ。駄目口を開いて——。よし開かないと、こうするわよ。息が出来ないでしよ鼻をおさえられたら、ほらほらヤセがまんを張つてると死ぬ

わよ。お開け！」

私も苦しくて苦しくてとうとう口を開けちまつたの。そして完全に自由を失つた私は、それから後はどうされたつて動きもさけびも出来ず、シユミーズもブラジャーも、それからズロースもずり下げられてしまつたのよ。それから夜が明けるまで、貴女の前なんかでは、とうてい話することも出来ない様なことを教え込まれちまつたの。どんなことをされたのか聞きたいんでしょ？。嫌な子ね。じゃ次のお話をして上げましょう。そしたらだんだん判つて来るわ色々なことが――。

次のお話はあるスター女優さんと私のお話しの。仮りにその女優さんのお名前をSさんとしときましょう。今でもA会社の撮影所では主演級の女優さんなのよ。

あれは、前のお話の出来ごとが有つてから二ヶ月ほど後日の話なの。だから私もK子さんや外の先輩の御指導よろしく相当に心臓も度胸も次第に立派になりつつ有つた頃のお話なの。貴女に言わせたら中性化されつつ有る頃なのよ。それはこうなの。

## 話の【2】

その組は現代劇でスリラー映画なの。それ

も非常な強行撮影でね、A班B班C班までスタッフが組まれたのよ。そおなの。A班は監督さんが重要な場面を撮影して行く。B班は大概、チーフ助監督がA班よりは軽い場面を監督する訳よ。C班は風景描写やトリック撮影、大衆や劇場の舞台撮影の時には、ABC三班のカメラが、二階客席からA班、階下客席からはB班、舞台照明室からC班と言つたように三方面から舞台を撮影する時もあるわ。要するに封切日に間に合すのが目的で編成されるのよ。

私はその組のC班についたのよ。応援のチーフ助監督が監督さんだから気合的にも楽しだし仕事も割合に簡単で、その上、うるさい記録係のお姉さんも居ないんだから、大いに張切つて居たの。

ある日、C班は特殊撮影のステージで、主演の女主人公であるSさんが扮する令嬢が悪漢のギャングに断崖の上の松の木に縛ばりつけられて居る場面の断崖の彼方の山や森

をガラスに描き、カメラの前へガラスを置ましてそれを通して、令嬢を撮すと本当い断崖にでロケーションする効果を上げる一種のトリック撮影よ。ガラスワークつて言うんだだけど――。

撮影準備O・Kになると、監督さんが私の手にロープをなげて、Sさんを縛つて来て呉れつて言うのよ。仕方がなく椅子から立上つ





てSさんの傍へ行つて照れくさいががまんして

「Sさん、もう縛つても良いでしよろか？」

Sさんも普通なら助監督さんが来るのにと  
言つた風な顔で白いきれいな歯を見せて微笑  
んで私に

「まあ貴女が縛つて下さるの？」

と言いながら、両腕で松の木を背負う様に  
後ろへ組んで

「両手首も縛つといて下さいね。撮るといけ  
ないから。さあ御遠慮なくどうぞ好きな様  
にお縛り下さい。お芝居で、ほどこうとして  
もがきますから、もがいてもほどこけない様に  
縛つといてね。」

私はまずロープを二本にして、Sさんの張  
切つた乳房の上へロープをまわして、もう一  
度乳房の下へまわして松の木にSさんの体を  
縛りつけて、ずらない様にグツとロープをし  
ばつて後ろで結ぶと、次はもう一本のロープ  
できれいにマネキュアーしたSさんの手首に  
ロープを巻きつけ縛ろうとする

「駄目よ。もつと強く結えておいて、もがい  
たら取れちやつてNG出ると悪いから本当に  
貴女が悪漢になつた積りで縛りになつて構  
わないわ。」

よしと言つたな？と思つて私も茶目氣を出  
して

「痛くてもがまんして下さいさる？」

とSさんの顔をのぞくと

「どうぞ、うんと痛い様に——」

私はもう一度ロープをほどいて、縛りなお  
そうとして不図、私を縛つた記録係のK子さ  
んを想い出し、一寸変な胸のときめきを感じ  
たのよ。

両手首に巻きついたロープを強く縛り、残  
つたロープのはしを手首の間へギューと入れ  
て縛つてやつたの。その時Sさんの掌の指が  
ピクピク反能を示す様に動いたわ。

私の目は一瞬、Sさんの掌と指を見守つて  
しまつたのよ。何故かつて私は掌と指を見て  
美しいなア——。と思つたの。縛られた惨た  
らしさがあんなに美しく感じたの始めてよ。

夢中でSさんのポケットからハンカチーフ  
を取り出してSさんの美しい鼻と口を、ふた  
して自分の椅子へ戻つたの。

本番でキヤメラが廻つて、松の木に縛られ  
たSさんがもがく姿は真に迫っている様に感  
じたわ。一寸私もKさんの病氣が伝染し始め  
たのかも知れないわね。

まだ終りじゃないのよ。その次の日Sさん

のお弟子さんが私に、  
先生が来て呉れと言つ  
てるからすぐ俳優部屋  
へ来て呉れつて言うの  
よ。なんだろうと思つ  
て行くと、Sさんは新  
米の私に十年の知己の  
如く微笑んで、

「明日は日曜で公休で

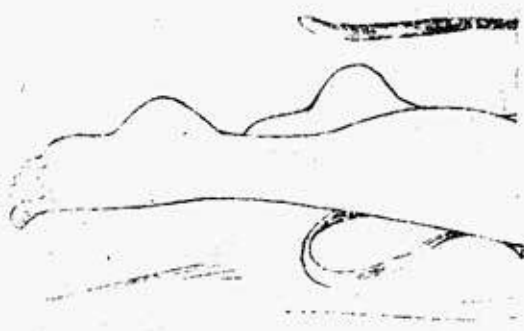
しよ。明日朝からうちへ来ません。？予定は  
有るの？無かつたら遊びにいらつしやいよ。  
ねえ。私、貴女が大好きになつちまつたの。  
これからお友達になつてね。それからこれ似  
合うかどうか判らないけれど私が見たてたの  
よ。プレゼントするわ。」

私は、ぼーとしてプレゼントのハンドバッ  
クの箱を抱えて階段を降りたの。一介の見習  
記録係に大スターがプレゼントして呉れたん  
ですもの。ぼーとなるの当り前でしょ？。

もちろん次の日第一正装で出かけたのよ。  
本論はこれからのよ。

## 話の【3】

Sさんはまだ独身だけど、とつても立派な  
洋風のお家にお弟子さんと女中さんと大きな



シエバードが一匹の家族なの。

まあそう先をいそがずにお聞きなさい。

きれいなお部屋で、Sさんと二人つきりで、

お風御飯を御馳走になったのよ。

お食事中にSさんは

「あなた縛るの上手ね。」

笑いながら言うから

私も

「まあ嫌だ。まるで私があの時のギャング見たいだわ。でも痛かつたでしよ？御免なさいね。」

謝まるとSさんは真顔になつて

「それでね、貴女にお願が有るの。聞いて呉れる？」

もちろん私は、Sさんの言うことならなんでも致しますと答えたわ。Sさんはニッコリ笑つて

「たいしたことでもないんだけど、私の次回作品が決つたの。時代劇なのよ。私、時代劇はじめてでしよ。だからアクションなんかも余程練習しておかないと出来ないのじやア無いか知ら思つて心配してるのよ。そしてね。また有るのよ、悪代官に責められるシーンが——。」

私は何故か急に顔が熱くなつて、この前私

が縛つた時に美しかつたSさんの掌と指のビクツと動いいたことを想い出したの。

「私、時代劇のそんな時のアクションも勉強して置きたいのよ。で貴女にお手伝いしていただきたいの。」

私は良くSさんの言う意味がのみ込めず

「なんでも致しますけど、そんな勉強のお手伝なぞ出来るか知ら？」

Sさんは色つばい目で笑つて

「出来るわ。私の言う通りしていただければ良いんだもの。大丈夫——。」

それからお食事が終つて、雑談しているとSさんは映画雑誌のスクリーンを写しに会社へ行つて、すぐ帰つて来るから待つて居て呉れと言ひ、夕食までには必ず帰るからお風呂にでも入つて待つて下さい。と念をおして出て行つたのよ。

嫌とも言えず、進められるままにお風呂へ入り、女中さんの持つて来て呉れた湯上りのガウンを着て、ソファアに腰かけ待つて居たの。なんだか自分が急に大スターになつた様な氣になつてね。

夕食前にSさんは帰つて来て、また夕食を二人でいただくと、二階のSさんのベットルームへ案内されたの。きれいなベツト、大き

な三面鏡、テーブル、額、どれも立派なものばかり。スターさんは良いなアとうらやましかつたわ。

Sさんは、煙草をのみながら

「良かつたら泊まつてよ。明日の朝私も仕事だから一緒に出ましようよ。良いんでしよ泊つても——。じやあ泊つてよ。これから練習も手伝つていただかなくちやあいけないし、そうなさいね。さあ始めるわ。先刻話した悪代官に責められる場面ね、一人じや仲々うまく出来ないのよ。対手役になる人が居ないと——。丁度、私の役の腰元が、代官の前ではかの意地悪な腰元に責められると言ひ訳ね。貴女にその腰元になつてもらつて私を責めてもらいたいの。芝居なんかするんじやないのよ。この間みたい縛つて、いじめて呉れば良いのよ。」

私はびつくりしてしまつたわ。でも断らず承知したの。心臓でしよ？。でも本当の所は美しい大スターのSさんを縛つていじめられると思ふと胸は高鳴り、夢心地でうなづいてしまつたのよ。

Sさんはガウンのままじゆうたんの上へ横ざわりになつて両腕を後ろへ廻し、私に「その三面鏡の下の引出しに縄が入つてい



わ。それから机の横に細い竹のムチが有るか  
ら使つてね。外に貴女が考える様な小道具が  
有ればなんでも使つてみてよ。この前の様に  
本当に縛るのよ。そして気分が出ないから本  
当に叩いても良いわ。そうしないと良いア  
クションが浮んで来ないから——。」

大変なことになつてしまつたと思つたわ。  
でも今さら嫌とも言えず、三面鏡の引出しか  
ら麻縄を出して来て

「じゃあ、この間みたい、に縛りますよ。」

私は縄をSさんの胸へまわし、形の良い乳  
房の上へ下へ、二重三重とまきつけ後手に縛  
り上げてしまつた私はもう無我夢中だつた。  
思わず強くしめ上げてしまつたの。Sさんは  
痛そうに顔をしかめたけど、だまつていたわ  
私はなんだか自分が本当に意地悪な腰元にな  
つた積りになつてしまつて、机の横の乗馬用  
の竹製のムチを持つて来て

「如何が？。ほどけないでしょ？。」

とSさんを見ると、Sさんはイライラした  
声で

「ね、早くいじめて！、早くころがして叩い  
て！力一杯引つばたいて！ね、早く、早く  
！」

たえられないように体をくねらせるの。ガ

ウンの前が割れて、白い太腿が見えるのも構  
わずに。肩からガウンがすべり落ちて、乳房  
のふくらみも見えて居るのに、私の足もとへ  
にじりよる。その時だつたの突然——。

私の体の中に、私が今まで知らなかつた血  
が急に流れ始めたの。貴女に説明しにくいの  
はその血の事よ。私自身その時始めて血が流  
れたことに気がついたの。もつと早く言えば  
Sさんの言う通り、いいえそれよりもつとひ  
どいことをしてSさんをいじめてやろうと思  
い出したのよ。それが今までに知らなかつた  
無上の喜びとなつて表面に出た。まつたく飾  
りけのない私と言う人間だつたのでしようね  
恥しさ、はじめ、外聞も、私は完全に忘れて  
しまつたの。

私はSさんを見下ろしていたが

「じゃあ、おつしやる通りいじめて差上げる  
わ。」

私はムチでSさんの背を叩いた。Sさんは  
悲鳴を上げてさけんだわよ。

「もつと、もつと、強く——」

私は続けて叩いたわ。私の血は逆流し妖し  
いこうふんに心はかき立てられて行つたの。  
アクションの練習は口実で、Sさんは叩かれ  
呻めき声を上げながら、慾情の喜びに満足し

て居る様子だつた。でもあの時の私にはそん  
なこと如何うでも良かつた。私はSさんの髪  
毛を引張り、じゆうたんの上へころがし、三  
面鏡の引出しから別の縄を持つて来ると、す  
んなりのびたSさんの太腿からまる出しにな  
つて居る美しい両足首を抱えると、その縄を  
固くギリギリ足首へ巻きつけ縛り上げてやつ  
たの。そのまま、ムチをSさんの体へ所かま  
わず振り降ろすと、Sさんは悲鳴を上げ、じ  
ゆうたんの上を、のたうちまわつたわ。私は  
洋服ダンスを開いた。猿ぐつわをかましてや  
ろうと思つたの。

Sさんの靴下、ネツカチーフを持つて来て  
「これをする面白。そのきれいなお口の  
中へこれを固くおし込んで上げるわ。」

私は靴下を丸めてSさんの口へ一杯ギユウ  
ギユウおし込み、ネツカチーフを細長くたた  
んで、鼻と口をしつかりふたしてしまつたの  
よ。息苦しげに身をよぢるSさんの横たわる  
姿に私は慾情を一層かきたてられて、Sさん  
の体を抱き上げ、

「如何がです？お氣にめしまして？まだ充分  
じや有りませんか。」

Sさんは猿ぐつわに息苦そうな顔を向けて  
判らないことを言うのだけど声にならないの

私は猿ぐつわをずり下げると、絹靴下のつま

つた口から

「はだかにして、はだかに——」  
私は最後の言葉を聞き、聞いてならないも

つたの。  
私は私の手が、ガウンの紐をとき始めたま  
では知つて居る。だけどそれより後は、何を  
したのかほとんど覚えて居ない。ただSさん  
の呻き声と縛られたゆれる乳房と、のびたり  
ちじめたり、Sさんの体の一部分ではない別

の生きものの様にうごめく、白い美しい縛ら  
れたSさんのなまめかしい素足だけが、はつ  
きり私の覚えていることなのよ。  
もう嫌、話すのかんにんしてね。とつても  
たまらない。一寸休ませてね。あー苦しい。  
でも、貴女、まだ記録係になりたいの？(終)

## 中国艶話

# 夜譚隨録



皆 田 仁

## ◇ 詭 黄

詭黄(詭はいつわるとか怪しいの意味)は  
名前を黄と云いましたが、その郷里や苗字は  
誰にも判りませんでした。その行為が大変あ

やしくて秘密たつぷりなので人は皆詭黄と呼  
んでいました。彼は幻術に精通していて、時  
々良家の女たちを田舎に連れ出して彼女たち  
を汚していました。生れつき疑深くて、家には  
妻妾がありました。人に見せないように

しておりました。妻はもと郡中の大家の娘で  
大変若くて美しく、妾も又悪い女ではありま  
せんでした。黄の隣に飛官という若者があり  
まして、年は十七八、少女とも見紛う美少年  
でしたので、黄は幼い時より誘惑し、男色を  
持つて関係をつけて、家に度々出入りしてお  
り、その都度妻妾をぬすみ見しますがいつも  
黄に邪魔されていました。豪商某の娘はその  
美しいこと類なく、見る人は皆天女かと噂し  
た程でした。黄はたま／＼仏の祭に彼女に逢  
い一目見てぼうつとなつてしまいました。そ  
こで一策を案じ天使と偽つてその生年月日を  
知り、ある夜、術を行いますと娘は彼の書齋  
に現れました。黄は娘を床中に伴い思いを晴  
らすと再び法を持つて夜の明けぬ間にこれを  
帰しました。飛はこの有様を窓の隙間からの  
ぞきみて、その術を知り春情止み難く、日頃  
の思いを遂げんものと黄の妻妾の生れ月日を



知り早速ある真夜中、城外の荒れ寺の中に隠れて、法の如く行いました。初めは何の験もありませんでした。ところが暫くすると戸外で物音がするので、戸を開けてみますと黄の妻妾が素裸でさも酒に酔った人のようにふらふらして立つておりました。我は驚きと喜びが半々でしたが、二人を寺中に扶け入れ交るゝ汚してしまいました。ところがたまゝその夜附近の悪少年五、六人が夜獺の帰りみち寺の前にて馬を止め一休みしております。寺内からだならぬ気配がしますので、灯をつけて内へ入つて参りました。我は大変驚きましたが、如何ともしがたく、少年たちは最初訝つておりましたが、裸の女二人と美しい少年をみると、良き供物とばかり、各々衣服を脱ぎ捨て、女たちを慰み。また驚く我も少年たちに裸に剝かれたかわり後庭を犯されました。曉を告げる鶏の声にやつと少年たちは立ち去りましたが、一人の女は痛みが甚しく身体を動かすことが出来ず。我も大変苦しみましたが、夜明けに、件の法を行おとしたが咒文を忘れ、利目がありませんので困り切つて逃げてしまいました。二人の女は裸のまま日中まで寺に臥しておりましたが、通りがかりの人がこれをみつけ、太守の許に届

けました。群衆中に女を見識つてゐる人がありまして「これは詭黄の妻妾です。なんと天の報いの正しい事でしよう」と告げました。太守は二人の女から黄の日頃の行いを知り、黄を捕えて鞭うつて問いましたが、白状しませんでしたので、太守は大いに怒り、遂に打ち殺してしまい、二人の女は官にて養つてやりました。後に我を去るところでみかけた人がありました。すでに道士の冠を戴いておりました。

## ◇ 異 犬

某侯が襲爵の前の年、年は十七、その肌の美しいことまるで玉のようで、鬪鶏とか競犬を好む癖がありました。一疋の黄色い犬を飼ひ、とてもこれを可愛がつておりました。ある夏の日、犬を連れて城の東門から出て郊外を散歩していますと大雨が俄かに降つて参りましたので侯は一墓門の下に逃げこみました。墓の前は芦荻が生え茂り非常に淋しいところでした。侯が入つて間もなくまたそこへ逞しい三人の不良少年が雨をさけて鷹をつれ弓を負うてやつて来て侯をみますと各々なか騒ぎました。侯は生れつき色白く美しい少年でしたので一人がじろゝと眺め野卑なこ

とばでからかいました。すると残りの二人も声を立てゝ笑いましたので、侯は代々学者の家の子でとても力ではかなわないと思い、大いにおそれ危険を感じましたので雨を冒して出て行こうとしました。すると少年たちはその袖を引き手をとりますので侯は若しみ、「君たちは僕をどうしようつてんです」ととがめましたが不良少年たちは笑つて答えずに抱きしめました。傍の犬は主人の危険とばかりに大いに吠えて、かみつこうとしましたが少年は大きな石を犬の頭に投げつけましたので、哀れ犬は一声高く吠えたと遂に悶えつゝたおれました。そこで少年たちは邪魔ものがなくなると必死に抗う侯の手取り足取り衣類を剥ぎとり、遂に一糸も留めず素裸にしますと、その手足を縛り上げうつむけにして草の中におしたおし、侯の後庭を犯そうとしました。侯は驚きの余り泣叫んで、土の上の身体をよじつて逃れようとしたが少年たちの力に自由を奪われ、遂に一人の少年によつて汚されようとしたとき、林の間から数人の騎乗の人が現れました。不良少年たちはあわてゝ思いを遂げずに逃げました。騎士は素裸で縛られている少年を見て不思議に思いましたが、その縛めを解いて訳を聞きますと、

その災難を憐み、家迄送つてくれました。た  
おれていた犬もふら／＼と随いて帰りました  
か、数日食事をせず、頭の創か化膿して遂に  
死んでしまいました。侯は大変悲しみ、これ  
を庭に埋めて祭つてやりましたが、仲の良い  
友だちを喪つたような淋しがりやうでした。  
その夜、夢の中に犬が現れて、侯に申しまし  
た。

「御主人さま、厚く扱つて頂きましてありが  
とうございましたが、そのうちに御恩返しを  
いたします。あなたはこれから門を出るのを  
お慎しみ遊ばせ。でも万一危険が迫りました  
ら、私が御恩返しに、その時必らずお救い致  
します」

目がさめて侯は不思議なこと、思いつ迄  
も忘れずにおりました。ある日、侯は通州に  
用事がありその帰りみちを舟にとり大通河を  
下つて参りましたところが、城門近くの岸辺  
に先日の子の一人が居て侯を認めますと、  
呼びかけ、つゞいても二人の少年も姿をみ  
せ、舟にそつて下りながら侯をみて猥らな様  
子をして笑いかけますので侯は先日のことを  
思い大変おそれました。やがて城のほとりに  
至つて舟は止り、同乗の船客はちり／＼にな  
りましたので侯はその人たちにまぎれ込み岸

辺の料理屋に入り、後をつけて来た三少年が  
遠くへ去るのをたしかめてから、はじめて淋  
しい道を走り出しました。約一里程進みまし  
たところが思いがけなくもきび畑の中から突  
然三人の少年が姿を現し侯を捉えて人の来ぬ  
きび畑の奥に引きずりこみますと声を立て、  
抵抗する侯の口を掩いもがく侯の肌着を最後  
の一枚まで剥ぎとり再び侯を地上におしたお  
しました。侯は口を掩われ手足の自由を奪わ  
れて必死の抵抗も空しく遂に一人の少年の為  
にその……正にその……侯

の後庭に触れるのを感じたとき、忽ち一疋の  
巨犬が黍の間からとび出して来て、侯を犯さ  
んとする少年の陰部をかみ切りまましたので  
、少年は痛さの余り地上に倒れました。犬は  
さらに逃げる二少年を追つて、一人の腓を、  
もう一人の尻を噛みました。侯は無事を喜び  
衣服を着け、履をはきますと、田の中を走り  
去る犬のあとをつけて行きますと、やがて一  
軒の家の前に来て、犬は籠の傍に倒れました  
ので、よくみると、一疋の癩を病んでいる黄  
狗でしたので、驚いてしまいました。家の前  
の広場で麦をふるつていました老婆が、侯の  
様子を眺めて笑いながら「  
その犬は私の、家の老犬で、半年も癩を病ん

で昨夜死んだとこなのです。坊ちゃんはどう  
してそのきたない犬を珍しそりにみておられ  
るのですか」

といふました。侯はいゝ加減に返事をして  
非常に考えながら家に帰りました。その夜夢  
に犬が来て侯に告げて申しました。

「御主人様の御恩に少々ですが報いさせて頂  
きました。冥府で私の忠義の心を憐んで末世  
は人間に生れる筈になつておりますので、こ  
れでお別れして再びお会いする事ができませ  
ん」

犬は泣く／＼こう申しますと幾度も頭を下  
げて去つて行きました。侯は深くその義を感  
じ、犬の死んだ日より七日目毎に必ず埋めた  
ところで祭つてやりました。後に三少年のそ  
の後を探りますと二人は廢人となり陰部を傷  
つられたものは、その翌日死んだとの事でし  
た。

## ◇護 軍 女

某護軍（親兵）の姫は太変美人でしたが、  
十九才で未だ嫁入りしませんでした。隣家の  
少年もまた護軍でありまして、日ごろその容  
姿を自慢しておりましたが娘をちらりとみて  
美しいと思ひ、折につけそれとなく言葉でも



つて挑んでみましたが、娘は相手にしませんでした。少年の座敷は、娘の部屋とたゞ一枚の板を隔てゝいるだけでした。丁度娘の父が征南に従軍し、母も実家に帰えり、たゞ老婆と二人家に残つてゐるのを知り、少年は間の板壁を打つて煙草を所望しましたが、娘は応じませんでした。そこで少年は小刀で板に錢大の穴をあけ、のぞき、娘に

「一服の煙草位をどうして惜しむのですか」といふました。娘はこのさまをみて奮然と怒りましたが、やつとおちつきを取戻して笑ひながら「私たちは知合の間柄でもないのに、どうして、物をお貸しすることができません」と申しました。少年は娘が口を聞いたので、大いに驚喜し、「そうすまじなさんな。こうして穴をあけることかできたからには垣を越えることができないとは申せますまい」と挑みました。娘は「この一つの穴かもう問題を起すのに充分ですのに、どうしてこの上危険を冒すのですか？」話しながら横をむいたので、ますくあでやかさをましました。少年は自分の肉体に勃然として来るものを感じ、また娘を誘惑出来ると思ひましたので、声をひそめ「私は良い物を持つてゐるんです、あなたがそれが何にか識つていますか？」

と聞きますと「娘はどんな珍しい物なのか？」と問いました。そこで少年は「一寸お見せしましょう」といつて、先ごろから張切つてゐる件のものを穴にあてがい娘の前に突き出しました。娘は大変驚きましたが、そのつきでた首を手にとり弄つておりましたが、つと頭のかんざしを抜きますとその肉棒を横に貫きました。少年は突如の痛さに声を挙げ、泣き叫びましたが、娘は部屋を出るとその戸に錠を下ろし、聞えぬ風をしておりました。少年には妹がいましたが兄の叫び声を聞きますと少年の様子を驚いてその母に告げました。母は少年の部屋に参りましたが、こちらの部屋からはどうしても救う手段がなく、そこで娘の家に訪れて許しを求めました。しか

し娘は「私の母の帰るのを待つて下さい」と承知しませんでしたので少年の母は苦しみ、娘の母の里に行き嘆願しました。娘の母はすぐさま家に帰つてみると、娘は泣いて少年の所業を告げ死ぬと申しますので皆はやつとなだめて事なきを得ました。やがて舅が戸を開いて娘の部屋に入り、板の穴から頭を出してゐる少年の一物を見、怒りましたがその形のおかしさについて笑ひだし「この創は小さいが大いに懲しめるのに充分である」といつて、少年を罵りながらかんざしを抜いてやりました。少年はやつと解放されましたが氣絶して地上に仆れましたので、一同はこれを担いで別室に入れ、治療すること一月余りにして全快しました。(終)

### 読者通信

貴誌八月号大変面白く読みました。小生は若く美しい女が男の様にアグラをかくのを興味を持ちます。貴誌八月号の男性的女子の記の中、特に胸をはだけてあぐらをかきビールを飲んだりしてゐると男と間違えられそらだ。の所は一番好きでした今後若く美し

い女のアグラをかけた写真を沢山おのせ下さい。

(静岡の一愛読者)

東京のPL様、貴男なしの幸福はありません。一度だけ御目にかゝらせて下さい。思ひ残す事はありません。住所御知らせ下さい。御目にかゝれば死んでも死にきれませんねば死んでも死にきれません

(大和Y・S)

(東京Richard.T)

玲子氏の習作は回を追うて傑作の域に進んでいるのは嬉しい八月号折込口絵の十五態は同じ号中の同氏作挿絵に比べると線描のみなので少しく物足りない。同氏は日本画家と思われるが次に中間色を持つた全部陰影を加えた作を掲

# 邪戀の焰

松 井 籟 子



幕がまだおりきらないのに、久美子は客席の間を小走りに通つて廊下へ出た。

廊下のすみのソファアにへたへたと崩れるように腰をおろしたが、ジーンと体がしびれて熱い。血のさざめきが体中に小さな音をたてて狂い廻っているようだった。

近頃歌舞伎に通し狂言がはやつて弁天小僧の通し、三人吉三の通し、鏡山の通しというように上演される。それにならつたわけでもないだろうが、苦手の役者の勉強会のようなこの座が「与話情浮名横櫓」の通しをやるという。

久美子は夫宛に來た今日の芝居の切符を、旅行中の夫にかわつて見に來たのだ。

美容院で思いの外に手間どつて、久美子が客席へ戻つた時は、与三郎の責め場の幕があこうとしている所だった。

伊豆屋の若旦那与三郎が木更津の浜でお富を見染め、濡れ場があ

つてから、お富のあるじの源左衛門に今でいう私刑にあうこの場はめつたに出ない幕だった。

舞台は二重の離れ座敷。その縁端へ拔身をブスツと突立てて、源左衛門が腰をかけ、その左右には大燭台に百めろろそく、井、大平血など置き並べ酒宴の模様である。

その前の平舞台に痛々しく繩にかかつた与三郎が転がされている。半面血汐によごれ、細引でぐるぐる巻きにされた上、胸もはだけ、袖もちぎれ、そして、そのはだけた胸にも、細引のくい入っている。二の腕にも、無惨な太刀疵が赤黒くつけられている。髪は元どりが切れて乱れ髪、一すじ二すじ口にくわえて、拔身をさげた源左衛門の子分達に鬨りものにされているのだ。

「何といいさまじやござんせんか」

自分のひとりが足の先で蹴上るように与三郎の顔を上にむかせたと、苦痛に眉をよせながら、目をきつと見開いた与三郎の顔が、客席にはつきり向いた。

瞬間、久美子ははつとして、思わず自分の目を疑つた。それ程み



じめな姿になりながら凄いほどの美しさは、十年前と一寸も変つていない高津昇二郎に間違ひなかつた。

土地も違ひ、芸名も違ひ。他の者ならそれと気づかずに落んでしまふかもしれないが、久美子が高津を見違へる筈はなかつた。

「どうだ、苦しいか」

舞台では源左衛門が、身動きも出来ない与三郎の顔へ大燭台のろうそくの火をつき出して

「ふん、いいまだなあ。こうしてくれよう」

と、与三郎の頬をそのローソクの火でじりじりと焦すのだ。

「ううつ！」

とそむける顔を、子分の一人が細尻をとつて引き起し

「ええ、しつかりしやがれ」

と邪慳にこづく。

いつたい高津がこの責め場を見せようと、送つてきた切符なのだろうか。偶然なのだろうか。それにしても、他の狂言ならともかく高津の扮する与三郎が責めさいなまれる姿を見せられて、久美子の古傷が痛まないでいられるはずはない。

「ええ、この目で迷わせたか」

と、目もとを突き

「この面（つら）でか」

と、あごをしやくる。

「いつそのこと、こうして、こうして……」

と、源左衛門が与三郎を切りさいなむ度に久美子は自分の心の傷をずた／＼にかきまわされる思いがした。

後手に縛られた与三郎は、ただ

「ううつ！」

「ああつ！」

と、呻きながら、右に左に源左衛門の太刀先で玩具にされ

「ええ、殺せ、一思いに殺してくれ」

と、ふりしぼるような苦痛の声をあげる。

見ている久美子はだんだんに息苦しくなつてきた。

舞台と現実とがいつの間にか一つになつて、与三郎という役ではなしに、高津自身が細引でぐるぐる巻にされて、颯り殺しになつてゐるのを見てゐるような苦しきものだ。そのくせ幕の途中で廊下へ出てしまふ気もおこらない。それ程それは芝居でなくて現実だつた。芝居なら見たくなければ見ないですむ。高津が責められてゐると思へば、久美子は客席の椅子に自分までがんに堀めになつたように動けないのだ。

とうとう与三郎が簀巻きにされてかつぎ出されるまで見終ると、急いで廊下へ出て来たのだが、くらくらと目まいがしそうで、ソファに腰をおろしたまゝ、片手を額にあてがつて、じつと自分の興奮をしずめていた。

「やあ、ここにいたのか？」

声をかけられ、その声を耳が聞くよりさきに心臓が聞いたようにぎくつとして顔をあげた。夫の哲夫だつた

「どうしたんだ？ 真青じやないか。さすがのお前もあの責め場にはまいつたとみえるな。ハハ……」

何の屈託もない夫の明るい顔に、久美子はやつと我にかえつて「随分陰惨な芝居ね、驚いたわ」

と、しいて何でもなく言つたが、夫が高津に気がついてゐたのか

どうかわからなかつた。それなのに哲夫は言葉をつづけて

「当世向きの芝居だよ。何しろバラバラ事件なんてものが現実におこるんだからね。芝居の上でそういうものを見せられると、案外その真似をしそうでしないものなんだよ」

と、一と理屈言うのが癖の夫は、むしろその癖が出る時の常で上機嫌らしく、与三郎をやつた役者が高津とは知らないらしくつた。

「じゃあ、ああいう芝居をみておいていただくと、もしも私があやまちを犯しても、現実にああいうまねはなさらないですむのね」

「犯す気かい？」

「さあ、わからないわ」

冗談にして笑いながら、久美子は随分大胆な冗談を言つたものだと、言つてしまつてからはつとした。そしてふと思いついて

「いっお帰りになつたの？」

と、急いで話をそらした。

「今朝の汽車でついたんだが、会社へすぐ連絡しなければならなことがあつたんでね、駅から真直ぐ行つたんだ。おひるすぎに電話したら此処へくるといつて出たというのでやつて来たのさ」

十年の古妻を恋人のように扱つてくれるいい夫だつた。

「終りまで見ていくかい？あとおきまりの源氏店だろう。出て、めしでも食いに行こうよ」

僅か二三日の旅行でも、帰つた夜は久美子と一杯のむのを楽しみにしている夫の愛情に、今さつき高津への古傷をかき立てられた心の乱れを済まなく思つた。

「じゃあ、出ましょう」

お酒でものなら、このさわがしい心を静められるかもしれない



と久美子は思つた。

しかし、夫と並んで芝居小屋を出る久美子の耳に、冴えた板の音がひびいた瞬間、もう一度客席へかけ戻つて、高津の舞台姿を見た、高津に会いたいという思いが、熱い火の棒をつきさしたようにジーンと体をほてらせた。十年昔に忘れきつたはずの高津への思慕は、久美子の中で、ただ十年間無理に押さえられていたというだけだつたのだ。

## 二

高津はもともと歌舞伎役者の息子で、小さい時から踊りや長唄の稽古に通い、女形の修行をさせられていた。

しかし、門閥のない父親の下で若い高津はいつ花咲くかわからない歌舞伎の世界にあせりを感じていた。



丁度その頃、久美子が属していた新劇団が創作劇をやるについて和服の似合う二枚目がありそうでなく、それとなく物色していた。ふと高津昇二郎に目をつけたのは、同じ劇団の演出助手をやっていた石河哲夫だった。

哲夫と高津とは同じ小学校の出だったのだ。歌舞伎に見切りをつけていた高津にとつて、それは再出発の良い機会だった。

しかしその芝居の稽古がすゝむにつれて久美子は自分の恋人役の高津に、役の上だけではすまない心の動きを感じてきた。

下襦袢の黒い衿をきつちりと合わせて和服を着ている高津の衿元や、あぐらをかくでもなく、横座りに足をくずして座っているその腰の線のやわらかさの中に、久美子の今まで知らなかった男の魅力があつた。それは変に倒錯した魅力だった。女のようにやわらかい高津の体つきに、かえつて久美子は男の体の、男でなければ持つていない部分を対照的に思い浮かべてしまふのだ。男らしい男が、その体全体から男の匂いを発散させているとすれば、高津の華奢な体からはある一点に集注された男のぬめ／＼とした体臭が感じられた。役の上でとり合ふ手に、思わず本気に近い力が入つた。高津の瞳にもわけのわからない光が増してきた。

しかし、それはあくまで役の上で、稽古場の人目の多い中ではそれ以上進みようもなかった。

哲夫と久美子は同じ方角へ帰るので、稽古が終つても、高津とは道が違つたが、酒ののめない高津がわざわざ酒好きの哲夫につき合つてついでくることもあつた。久美子はそれが、せめても自分に対する高津の愛情の表現なのかと思つていた。

やつと一週間の公演が終つたラクの日に久美子は舞台装置の蔭で

高津と短い会話を交す事が出来た。

「ねえ、今夜この幕が終つたら、屋上へあがつていて」

「屋上？」

「ええ、私、お話したいことがあるの」

それは一軒建の芝居小屋ではなくて、或るビルディングの五階六階を劇場にしたものだつたから、屋上へ出ると、夜はシーンと静まりかえつてゐるのを久美子は知つていた。

その次の幕は久美子と高津の出番はない。

久美子は急いで顔をおとすと、洋服に着かえて、誰にも知れないように気を配りながら客席の廊下をぬけて屋上へ上つて行つた。

星の一つもない、なまあたたかい重い空だった。わずかにぼーっと十日の月がかすんでいる。

屋上には小さなおいなりさんの祠があるきりだった。

久美子の靴の音がコツコツと暗い夜空に消えてゆく外はシーンとして、時々下の電車通りから聞えてくる騒音は遠い世界の物音のようだ。

彼女は屋上の一番はしへ歩いて行つた。普通にはあまり人が上つて来ないせいか、飛降自殺を防ぐような金網もない。のぞきこむと電車や自動車の灯が誘いこむように闇が深い。

後から高津が影のように近づいてきた。

草履をはいているのか足音もしない。ただ空気のみずかな動きで久美子が背中ですれを感じたのが、それよりさきに高津の手がうしろから久美子の肩を抱いた。

「高津さん？」

聞いたが返事はない。ただ肩を抱いた手に力が加つた。

久美子は前のめりに屋上のはしの鉄棒をつかむと、体はしぜん下をのぞきこんだ。

ふと、わけのわからない恐怖が体を走つて通つた。

肩を抱いた高津の手が小さきみにふるえている。

一言も言わない彼の体から生温い血が久美子に通うようだった。

と、思つたとたん、高津が手を離した。

「ああ……」

軽い溜息が久美子の口からもれた。期待したものがはずれたような淡い淋しさが風のように吹いて通つた。

「ああ」

と、高津も同じように、何かしら体の中からすき間風がぬけていくような声を出したが、久美子から顔をそむけると、鉄棒を片手で持つて、荒い息ずかいをしていた。

「どうしたの？」

久美子がきくと

「哲夫さんがあなたと結婚するつて本当？」

顔をそらしたまゝで彼が聞いた。いつの間にか劇団の中にそんなうわさが立つていたらしい。

高津はそれを気にして、今の今、はじめは何の気なしに肩においた手を、下の灯をのぞきこんでいるうちにふと死に誘われて、いつそこのまゝ二人で下へ落ちていつたらと思つたのだらうか。それを静める為に思わず手に力が入り、荒い息づかいとなつたのかもしれない。

久美子は高津の愛情とその気の弱さが、自分の方から抱きしめたい程不満になつた。

「哲夫さんと結婚するなんて誰が言つた？」

「では本当は根も葉もないことなの？」

高津は、それが癖の、女のようなもののやわらかな口調できいた「勿論よ」

「本当？」

「ええ、そんなこと、あなたがきくまでもないじゃないですか、私……」

と、久美子はそこで一言、はつきり自分の愛情を口にしようと思つた。

しかし

「そう、よかつた！」

高津は嬉しそうに思わず口に出していうと、その言い方にてれたのか、二三步久美子からはなれて歩き出した。

「ねえ」

久美子が言葉以外の表現を唇に求めようとした時、急に下から靴音が上つて来た。

「やつぱりそうか」

荒々しく言つて近付いたのは哲夫だった。

「何してるんだこんな所で？」

「いいえ、べつに……」

久美子があわてて答えると

「劇団なんて所はおせつかいな奴が結構いるもんでね、僕に屋上へ行つてみるつて言うんだよ。何故僕にそんなことをいうか、久美ちゃん、わかるだらう？」

「いいえ」



久美子は氣弱くごまかした。

哲夫の好意はわかりすぎる程わかつていたが、高津に惹かれていた彼女はそのをさけていた。

「高津」

哲夫はそう強く呼ぶと、片手で久美子の手をしつかりとつて

「はつきり言つておこう。僕は久美ちゃんを愛している。いいか。愛しているんだ。久美ちゃんを……」

そういうと、久美子を抱きよせて顔をよせて来た。

久美子がふりはなそうともがいたが、哲夫の広い胸に抱きしめられて、自由な方の片手で哲夫の体をつき放そうとしても、その手首までつかまえられ、後手に一つに握られてしまった。

「ああ、何するの！高津さん助けて！ああ！」

久美子の叫びは哲夫の唇に吸われてしまった。息のつまるような接吻は一度ならず二度、三度、無理押しにくりかえされた。

高津は青い焰がめらめらと燃え立つような瞳でじつとそれを見ている外、化石したように動かなかつたが、急に泣くような叫びをあとに残して、駆け出してしまった。パタパタと、草履の足音がコンクリートの階段をかけおりてゆく間、哲夫は久美子の腕が折れるかと思う程しめつけて放さなかつた。

足音が下へ消えてしまふと、久美子ははつとして、出来る限りの力で哲夫の手から逃れようとしたが、芝居の興奮が高津へ対する嫉妬で輪をかけたのか、いつもの哲夫ではなくなっていた。それはもうただ男という体をもつた人間だつた。本能の鬼だつた。

久美子の両方の手首を一つに握つたまふ、片手で久美子の乳房にふれてきた。そして冷たいコンクリートの屋上の入口の壁へ久美子

をじりじりと押しつけて、久美子の貝殻のような耳から首すじへと唇をあてながら、舌の先でくすぐるように愛撫していった。

いつか久美子までが魂を失つて、ただ女という体をもつた一人の生きものとして、哲夫の生命の火の前に不燃焼物ではなくなつていつてしまったのだ。

### 三

それつきり高津昇二郎の姿は東京を去つてしまった。久美子の心がいかに高津を求めても、氣弱く去つて行つてしまった高津の行方を探す術もなく、又、探すことの出来ない体になつていた。

戦争が始つて戦争が終つて、東京から焼け出された久美子達は関西の都市に住むようになり、哲夫は芝居から離れて、ある会社の宣伝部に籍をおく身になつた。

夫婦仲に子はなかつたが、哲夫は強い愛情で久美子をつかまえてその嵐のような愛情にもみくちやにされることに喜びを感じるのか久美子もいつしか哲夫の妻として満足して生活して来た。いや、満足していたと思つていた。

それなのに、思いがけなく見た高津の姿は久美子にとつて決して過去に捨て切つてしまつた心のあるものを感じさせた。自分は一度も夫の哲夫を愛さなかつたことに気がついた。妻として喜んでいたのは、久美子ではなく、久美子の中の別の生きものだったのだ。

そして、今その体の中の女のいのちまでが、高津に会つたことを喜び出しているのだ。処女の久美子が高津に感じた思慕の情を、心も体も一つにして、久美子の成人した「女」が激しく惹かれてざわ

めき出したのだ。

憑かれたもののように、久美子はある日、又高津の与三郎を見に来てしまった。

それにしても偶然にしてはあまりに暗示的な芝居の狂言だった。

お坊つちやんの与三郎は切られ与三と異名をとるやくざになつてお富に再会するのだ。

十年前内気な青年だった高津も、此の関西の土地で、下廻りの役者の勉強会とはいふものの、主役である与三郎をやるようになるには、随分いろいろ苦勞も多かったろう。昔は久美子をうらんだかもしれないが、もしかしたら大人の感情で久美子との再会を喜んでくれるかもしれない。

兎に角久美子は高津に会いたかった。舞台姿だけでは満足出来なかつた。

打出しは賑やかな所作事で、高津は出ていない。

久美子は幕の途中で楽屋口へ廻つて行つた。

昔ながらの和服姿で出て来た高津は幾分やつれてはみえたが年令がかえつてその美しさに深みを増したようだった。

「ああ、やつぱりあなたが来たのね」

高津は久美子のくるのを知っているように言つた。

「哲夫さんは？」

「昨日一緒に来てたんですけど……」

「あら、いらしたの？私だとわかりました？」

「いいえ、わからなかつたようすわ」

「相変らずね」

「え？何が？」

久美子が聞き返えすと、高津は急に話題をかえるように

「とに角、出ましよう」

と、つれ立つて劇場の前から、賑やかな通りをぬけて色街の方へ歩いて行つた。

「私、ゆつくりお話したいの」

思い切つて久美子がいうと、高津は何か心の中で戦っているらしかつたが、ぎらぎらと異様に光る目で

「いいの？」

と、聞いた。久美子の体に電気が走るような目差しだった。

「ええ」

久美子は睡をのみこむようにして、強くうなずいた。昨日旅から帰つた夫は、会社の仕事で民間放送の録音が夜中になるだろうという事で、今夜は帰らない筈だった。

「じゃあ……」

と、高津は通りかゝつたタクシーを拾つて久美子を促した。

市街を少しはづれると、もう田畑が見え出すのが関西の都市の東京とは違つた所だった。

「相変らずの貧乏ぐらしなのよ」

高津が案内した家は、農家の納屋を改造したような家だった。それは役者の住いにはふさわしくなかつたが、住宅難の折では不思議ないかもしれない。

「奥さんは？」

しーんとして誰もいないらしいその家の鍵をあけている高津に久美子は聞いた。

「私は……」





——歌目——

というような言い方で高津は言葉ににがらせた。その虚しいひび

きがふと久美子の心を痛くゆすぶった。

高津が手さぐりで灯をつけると、その行燈のような型の電気スタンドの横に紫ちりめんの掛蒲団が半ばまくられたまゝになつてゐる夜のものがなまめかしく目を射つた。

畳も新しい六畳程の部屋で、新しく床をはつてつくりかえたものらしく、納屋らしいものといへば、スタンドの光がわずかにほの暗くどいてゐる天井の太い棟木と、部屋の隅から棚のような中二階にあがれるように立てかけてある梯子ぐらいなものだつた。

簞笥や長火鉢、鏡台など、男一人の住居というよりは、水商売

の女の私室のようでもあつた。

「ああ、とうとう連れてきてしまつた」

高津は誰にともなく言つて吐息した。

「本当に……。でも、私、後悔してないわ」

久美子が言つと

「本当？」

高津が問い返した。そして、

「今に後悔するわよ、きつと……」

と、言葉をついだ。

それは久美子のためらいがちな心に油をそそいだ。

「いじわる。もう後悔することないじゃないの。何にも……。私、十年前からあなたを愛してゐたのよ、十年という長い間哲夫に奉仕して来たのですもの、今度こそ、私が私の愛情をしのばしてもいいと思うわ。私、哲夫を愛していやしないわ。無理に結婚させられたのよ強姦されたも同じだわ。私は……」

「女つてこわいわね」

高津はふつと顔を上げさせた。

「高津さん、あんまりだわ、そんなことあなたがいうなんて……。私が哲夫と結婚したのが悪ければあなたの気の済むようにされてあげるわ」

やつきとなつて言う久美子に高津は言つた。

「気の済むようにしてあげる。裸になりなさいよ」

「裸に？」

「なれないくせに……。女つて口が上手だからかなわない……」

高津はいじわるく言つた。

久美子は昔、高津を愛しているようなそぶりをしながら、いざとなると哲夫と結婚してしまつた自分を彼が疑うのも無理ないという気がした。

この上は高津のいうなりになつてやろう。それで高津を愛している久美子の本心を知らせられるならいいではないかと思つた。

彼女は紫ちりめんの布団の横でくると裸になつた。当然彼が裸の体をすぐにも抱きしめてくれるものと思つた。

しかし、高津は彼女が裸になつたのをみると、いきなりとびかゝるようにして、彼女の両手に久美子の今といったばかりの腰紐で結わえてしまつた。

「あつ！いくら哲夫に強姦されたのだと私が言つたからつて、あなたまでそんな……ずいぶんだわ」

久美子は彼をなじつたが、まだ半分は冗談のつもりで、そうされたことを何となく高津の愛情のほとばしりのようにも感じて、とがめるよりはむしろ嬉しかつた。

「怒らないの？」

高津が言つた。

「怒らないわ」

久美子はただ、高津の前にむき出しにされた両方の乳房がはずかしく、伏目がちに答えた。

「何をされてもいいの？」

「ええ」

久美子がうなずくと、

「じゃあ、ここへいらつしやい」

そう言つて高津は久美子を後手に縛つたまゝ梯子の所へつれて来

た。そして、あらためて久美子の手を別々に高くあげさせて、梯子の上の方へ縛りつけると、足は足で下の方の横へ縛りつけた。

久美子は自分の愛している高津の手で、自分の手足の自由を失われていくのが、こころよい陶醉に感じられて来た。くもの巣にかかつた虫のように、高津ががんにがらめに自分の体を梯子にしばりつけていくのが、高津の愛情にがんにがらめになるようにで氣持よいのだ。

手を高く無理に引つばるようになげさせられると、胸の二つの隆起は尙一層もり上つて、ぐみの実のような乳房がふんととがついていく。子供を産んだことのない久美子の乳房は処女の様にふつくよかだつた。もう三十を二つ三つ越していたが、女の盛りは熟れた果物の様に、水がたれそうに美しい。久美子は自分のその美しさを自分でみとめていたから、今、愛する高津の前に、足も手もくくられて身動きも出来ずにながめられても、つらいとは思わなかつた。

しかし、高津は久美子の腰紐で手と足を縛ると、どこからか細引を持つて来て、更にしつかり縛り出した。胸がしめつけられて、思わず久美子は悲鳴をあげた。

すると高津はその久美子の口へハンケチをおしこんで、手拭で猿ぐつわをはめてしまつた。

冗談にしては、あまりにひどいやり方だつた久美子は何かしら不安を感じて叫び出そうとした。

しかし、時すでに遅く、叫び声はのどの奥で苦しく押し殺されるより仕方なかつた。

「ほら、後悔したでしょう」

高津は無気味な笑いを浮べて言つた。



「もつと後悔させてあげましようね」

彼は久美子の脇の下をくすぐった。

両手を高く縛られているから、脇の下の皮膚はつれて敏感になっている。その脇から横腹へと、高津のやわらかい指がくすぐつていくのだ。身もだえすることすら出来ない。動けば硬い木の梯子に背中をぐりぐりとこすりつけることになる。

「フフム。あんたには何故私があんたをこんな目に合わせるかわからないでしょう？ 憎らしいからよ。憎くて憎くてたまらないからよ。哲夫さんと結婚したことを責めているのだと思うでしょう？ そのとおりなのよ。でも、あんたの考えてるのと一寸違うのよ。私の愛しているのはあんたじゃないのよ。それはもうわかつたわね。いくらなんでも愛している人をこんなひどい目には合わせるはずはありませんものね。私はね、私は哲夫さんを愛していたのよ。そうなの、哲夫さんがとても好きだったあの屋上であんたが私を待つていてくれた時、いつそ誰にも知られないようにあんたを後からつき落してやろうかと思つたの。あんたと私とあそこで会つてゐるのを知られてなければ私がつき落したつて、何かの拍子であんたがあやまつて落ちたか、それとも発作的自殺だとかわかりはしなかつたわ。そう思つてあんたの肩に手をかけたんだけど、やつぱり恐かつたのよ、人殺しなんて……。でもそうすれば哲夫さんは私のものになつたのよ。男が男を好きになるなんておかしい？ 笑うなら笑つてごらんさい。その恰好じや笑えないわね、いい恰好だわ。哲夫さんに見せてあげたいわね。私から哲夫さんをうばつておきながら、なによ、強姦されたなんて、ぬけぬけと……。憎らしいわ」

高津は久美子の腿をいやという程つねつた。

「痛い？、この位で悲鳴をあげるにはまだ早いわよ。私、今切られ与三をやつてゐるでしよう？ ああ責め場でどう苦しんだらいいのかわからなくてもはつきりつかめないのよ。そりやあ芝居だから真似ごとでやつてはいるけど、いったい人間つて、この生身の肌を焼かれたら、どんな顔をするのかしら？ ろうそくの火がどの位近づいたら熱く感じるのかしら？ じりじりと頬が焦げる……。その時その人は目をつぶるものかしら、見開くものかしら？ 私にはよくわからないの。そりやあ自分で我身をためしてみればいいかもしれないけれど苦しむ自分を見ることは出来ないわ。そして、私、ふと思いついたの、あんたのことを……。私が憎い憎いと思つていたあんたに復讐するいい機会だわ。関西には文化人が少いので、哲夫さんがどこで何をしているのが、私はよく知つていたわ。江戸の仇を長崎ということだつてあるわ。芸の鬼つて言葉だつてあるわ。フフム。でもこんなうまい工合にいくとは思わなかつた……」

意外な高津の言葉に、久美子はどうやつたら逃げられるかと、身をもだえてみた。自分の浅はかさが悔まれる。

「ほら、ほら、後悔したでしょう」

気味よさそうにいう高津は、縄でくびれた久美子の裸体を面白そうに見ているのだ。

手首も足首も、腕も脛も、ジーンとしびれて痛いよりは苦しい。「顔だけはかんにんしてあげるわ」

高津はローソクに火をともしと、久美子のわきの下へ近づけた。瞬間、久美子の息が止つたようになつた。

焰の先が少し皮膚から離れると、肋骨まで押しあげられるように胸が大きく波打つのだ。そして油汗が体中の毛穴という毛穴からし

ぼり出て、べとつと肌を濡らす。久美子は血潮までが流れ出すような気さえた。脇の下の毛も、じりじりと焼け焦げた。

そうして久美子は次第に気が遠くなつていつてしまったのだ。

高津の切られ与三は評判になつたが、あまり残酷だからと、その筋から注意されて、この場はけずられてしまった。

久美子は……。

どうしても裸体になることを厭がる淫売婦がいて、銭湯へも決して行かないという話を風の便りに聞いたが、それが久美子かどうかそこまでは作者も知らない。

## サド侯爵と殺生関白秀次

高 取 辰 治

### サド侯爵

サド侯爵は一七四〇年、フランスはパリの名門に生れ、一八一四年、七十四歳の高齢で世を去つた貴族である。彼の青春時代は騎兵士官として七年戦争の役に従つたことがあり又文学、哲学、歴史、社会学等に多くの趣味を有し、聖書に対しても明晰なる批評眼を具えていた程の能才であつた。

彼の愛読した哲学書はラメットリーの唯物論で又マキアヴェリイの学説等も根本的に研究していた。此の如き多才多学の人物たるにも拘わらず、その行為は全然常規を逸し、青年時代より放蕩淫逸なる生活を送つた。その動機は失恋のためで、彼の父は同じ名門の二十才になる令嬢を彼の妻にあてがつた処が、彼は妻の妹に対して燃ゆるが如き恋情を抱きその結果、尼寺に託せられた妹を盗み出して

性慾倒錯の一つである虐待性好淫症、即ちサジスムス Sadismus の名詞の源となつたフランスのド・ザード侯爵と、我国の殺生関白豊臣秀次とを比較して此二人の悪魔のような行為と、文芸に通じてその氣質の温雅であつた事との矛盾を明かにするのは、多少の興味が無いでもない。

抑々「サジスムス」という性慾倒錯は、異性に暴虐を加え苦痛を与えて、性的快感を惹

起する変態性慾で、クラフト・エビングの云つたように、異性に対する暴行的残酷行為の衝動により、又はこの様な行為を思念して快感をおぼえる異常の性的興奮を称し、或はフエーレーの云つたように「残酷と暴行と性的快樂との連合」の事である。此のような変態性慾を「サジスムス」と名づけたのは、フランスの貴族、サド侯の行為及び其の手に成つた「ローマンス」の内容に基くのである。



之と同様し、一時は幸福なる生活を送つていたが、不幸にして情婦が夭死したので、大いに失望し、悲哀の極、放蕩三昧に日を送ると共に、その性慾にも甚しき異常を来し、途上で偶然彼に慈善を乞うた妙齡の婦人ローザ・ケルレルなるものを鞭撻して鮮血淋漓たらしめ又婦人の集会した席上に於て、催淫剤たる「カンタリデン」を混じた菓子を与えて、多数の中毒者を出したようなことがある。

此の如き残酷の行為を恣にする処から遂に牢獄に禁錮せられた。彼は二十七年間を禁錮生活に送り、その瞑目する迄、いろんな小説を作つた。いずれも異性を虐待凌辱して、性的快感を満足せしめる変態性慾的事例を露骨に描写したものである。その作中の主人公は性慾の猛烈なる淫蕩男子で、その犠牲となるものは、上流の婦人が多く、売笑婦の如きは割合に少い。而して其の描写するものは、男子が婦人を鞭撻殴打し、或は男子及びその友人が相手の女に毒を与えて之を苦しめた上にも、公衆の面前で之を犯したり、或は女を殺傷して血液の流瀉するのを楽しげに眺めたりして、絶大の快楽を感じる残酷非道の光景である。

一八〇〇年の七月、彼は「ゾロエと其の二

人の侍従」と題し、性的大乱行をそゝる小説を公にした。「私は悪徳の道のみを歩いていきます。それだからこそ私は薔薇のような美しいものより他には遇つたことがないのです」とサド侯爵は結んでゐる。而して主人公の行動によつて彼自身の性行を描写してゐるのである。

「ジュリエット」は「ジュスチヌ」に続くものであり、此れに対して「有徳者の不幸」と題するものがある。「化粧房の哲学」は彼の大作である。「ソドムの百二十日」はサド研究の中心をなすばかりでなく人道史の資料として最も尊いものとされている。

上記の小説は、エリスの評した如く「性慾倒錯辞典」ともいうべく、又「十八世紀の変態性慾書」とも云つてよいもので、その中にも、「放蕩教師」と称せられる小説は世に最も名高い。

而して上記の小説は、いづれも彼自身の淫蕩慘酷なる性的生活を根拠として作つたものである。

然るに吾人が茲に是非共銘記すべきことはサド侯が右の如き残酷なる性慾倒錯者たるにも拘わらず、その氣質は至つて優柔で、さながら女の如く、又其の音声も甘えるような媚

を含んだ猫撫声であつたという事実である。尙其の上にも既に記したように文学、哲学にも趣味を有する人であつたことを記憶しなければならぬ。

## 殺生関白

我国に於ても、サド侯に比較すべき有名な人物を史上に求めることが出来る。それは則ち殺生関白と称せられ、畜生塚の主人公として二十八歳の壯齡を一期とし、高野山の露と消えた豊臣秀次である。

彼は少年時代より屢々養父秀吉の軍に従つた殊功を奏し、二十四才の弱冠にして関白職を襲いだ程の人物であつたが、その人と為り淫蕩放縱で、色を漁るに貴賤を論ぜず、且つ殺生を好み、屢々侍臣を手打にし、夜は微行して街上の路人を斬殺し、或は城楼より銃は弓を以て行人を射殺し、或は罪人の死刑に処せらるゝことあれば之を大板上に臥せしめ自ら手を下して之を楽みとなし、戦は罪なき妊婦の腹を割いて胎児の宿つた様を見、その行為の惡逆残忍なる処から殺生関白という渾名を得た。

「日本西教史」にも彼の行為を記して「人を殺すを嗜む蠻行ありて、之を無上の楽みとし

若し罪人の死に処せらるゝあれば、自ら割手  
のことは行ふを常とせり。関白の居館を去る  
こと一里半の高地に刑場を設け、その周囲に  
土塀を築き、中央三間の大案板を置き、その  
上に人を臥せしめ、之を刳切して興となし、  
或時は之を立たしめ、兩段に割下し、その最  
も快とする処は、罪人の四肢を一々切断する  
にあり。その状恰も鳥類を刳割するに異らず  
而して其の最も残酷なるは孕婦の胎を割きて  
其の子を見るの一事なり。」とある。彼に性  
慾の倒錯のあつたか否かは史乘に徴すること  
は出来ないが、その血を好んで人を殺傷する  
を快とした顯著なる事実や、又右大臣晴季の  
女の寡婦となつたものと其の娘とを同時に妾  
とした如き非倫の行為等に徴すれば、その性  
慾にも異常があり、「サジスト」なるべきこ  
とが推想せられる。

然るに秀次が上記のような残酷無道の行為  
を擅にした人物たるにも拘わらず、文学の趣  
味に深く、又父母に孝であつて、且つ才識が  
俊秀であつたことは、吾人の銘記すべき事柄  
である。彼が六国史、類聚三代格等を朝廷に  
献じ、大和にある諸寺の僧侶に命じて、源氏  
物語を謄写せしめ、五山に扶助料を給して連  
句会を再興し、又自らも屢々連句会に親月の

宴を催して、風流韻事を嗜んだことは、亦以  
て彼が如何に文芸を愛したかを立証して余り  
ある。「白石紳書」には秀次が或る謡曲の故事  
に就いて、世雄坊という僧侶の言の誤を正し  
たことを記し「備前老人物語」には彼が和歌  
の趣味に深かつたことを賞してあり又彼が画  
を善くしたことは「画工便覧」に明記せられ  
てある。又彼が皇室に忠誠であつたことは黄  
金五千枚を朝廷に献じたことが「御湯殿日記」  
に記してあるのを見ても明かであり、又実父  
三好吉房に孝心深かつたことは、当時の名医  
秦宗巴を尾張に派して其の病を診せしめ、且  
つ父を養うに十萬石の俸を以てしたことに徴  
しても分る。

又祖母大政所が病に罹つた時には、畿内の  
諸神社に各万貫文を捧げて平癒を祈つた。

されば「日本西教史」中にも秀次を評して  
「壯年の貴人に稀なる良質を見え、其の才識  
邁にして義に篤く、実直謹慎の人なり。」と  
嘆賞し、又彼の嗜好を記して「文事は其の最  
も嗜む処にして之に優るの樂は無し。」とあ  
る。

## ○

以上記述したようにサド侯爵と豊臣秀次と  
の二人は、略ぼ類型の人物である。サド侯が

婦人のように優しい氣質で、且つ文学、哲学  
に通じていた如く、秀次も亦忠孝の心篤い武  
将で、その最も嗜むものは文芸であり、又美  
術の方面にも長じていた。然るに他の一面に  
於ては、兩者共に女色を好み、荒淫放縱なる  
のみならず、血を流し人を虐げ之を快樂と  
するが如き、残酷無道の行為を擅にした。実  
に奇怪極る一大矛盾である。併し「サジス  
ム」の人間が概して温順優婉なる男子に多き  
奇異の事実を想えば、この様な矛盾の謎は容  
易に解き得られる。

抑々人を殺傷して快感をおぼえる「サジス  
ト」は案外にも氣質の優しい温和なる人間で  
ある。此の事實はエリスの記述した实例に徴  
しても明かで、之に依れば、途上に於て短剣  
を以て一婦人を刺した「サジスト」の一給仕  
人は、女子の如き音声を有し、又その外貌も  
可愛らしい小供のようであつた。又殺人淫樂  
者たるライデルという男は至つて恥しがりの  
内気な性質であつて、人前で放尿することも  
出来なかつた。又マリーの実験した一サジスト  
は彼と共働した女子を絞殺せんとしたもので  
あるが、至つて内気な性質で、一寸したこと  
にも顔を赤くする程の気の弱い男であつた。  
又キールナン、マイエルの実験した既婚婦人





は同性愛を好み、その教育した一少女を「フオーク」及び鉄で傷つけ、総身に百余の創を負わせた程の残酷を敢てしたが、併し彼女の平素は貞淑温雅で、誰しも賞讃せざるは無か

つたということである。又モルの説に依るも「サジスト」の多くは神経質性の体質で、繊弱なる女性的性格のものなることが興味ある点だと云つてゐる。

上記の如き事実から観察すると、サド侯及び殺生関白の二人に認めらるゝ矛盾の性格と行為とは、その実矛盾に非ずして畢竟「サジスト」の一特徴なることが明かである。之に關して憶い出されるのは、谷崎潤一郎氏の傑作の一たる「少年」で、果して事実に拠つたものか否かは知らぬが、「サジスト」の色彩甚だ顕著なる塙信一という少年が「附添いの女中を片時も側から離したことの無い評判の意気地なし、誰も彼も弱虫だの、泣虫だのと悪口をまいて遊び相手になるものゝ無い坊つちやん」であつたと云う記事は、上記の所説を裏書きするものである。

併し温和柔順なるもの、繊弱なる女性的性格の所有者が、好んで残酷極まる行為を敢てし、なま／＼しい血潮の泉のように溢れ出づる有様や、苦しみのために悶え狂う状態等を見て、一種名状すべからざる非自然の快感をおぼゆるのは何故であるか、この疑問に就いて、未だ確実なる解決を与えることが出来ないのは私の遺憾とする処である。

(おわり)



# 處女性の神秘



的  
場  
通

## 処女の性慾

ちぎれるようにはちぎれた肉体をし、燃ゆるような頬をし、そして到る処に柔和な円い曲線を帯びて来るのが即ち処女時代の顯著なる特徴である。

私は先づ最初に処女の性慾ということに就て觀察をして見たいと思う。元来この性慾というものは、多くの学者も既に認めているように、「性は生と始まる」と云つて過言でない。それは生の力は人間を幼少の時代より支配しているものである。例えば或る女兒の乳腺は、其の生れた時に或る程度までの活動をしていたとも云われる。また、普通の月経開始年齢前に於て、早くも妊娠するということも世人の知る所である。かのチャンチャックルソーは、その自叙伝の一頁に、「自分は極く幼少の時代に

悪いことをして答で打たれた為に病的な情慾を起した」と語っている。これは体罰と性的思想及び感情の問題であつて、場合によつては、鞭打の結果、普通、淫狂という一種の性慾倒錯症に罹ることがある。之が若し大人であると実際に苦痛を感じる。だからこつした子供に対する体刑の道德的価値の問題に關しては、世の親たり教師たる者は十分熟慮しなければならぬことである。特に女兒は一般に男児よりも性慾的に早く目醒めるということも考へて置かななくてはならない。

こついう風に、その幼少の頃から慣習的に形造られた所の性慾というものは、春情の発動するに及んで往々驚く程猛烈に発現する。

それは高尚な意識的な感情に比べると、殆ど比較にならないものがある。男となり

女となる第一の徴候が現われる以前の少年少女は、昆虫で言えば、幼虫時代である。ほとんど無意識の裡に、年少兒童の或る習慣が機械的に發表して、親を困らせたり、悲しませたりすることがある。

## 処女と手淫

手淫即ち(Onanie)ということとは、決して男性ばかりのことではない。一般に女性の感ずる性的衝動は男性よりも潜在的に激烈なものであるからして、女子の手淫はまた男性よりも甚しいものがあるのである。たゞそれが男性のそれほど、表面に表われないといふにとゞまるだけである。某女学校の寄宿舎生は、夜ひそかに電球を持つて来て、之を挿入し、その緊張する余り驚いて、破烈し、附近の医院に治療を乞うたが遂に一生を棒にふつたという実話もある。





また汚い話を云うよりであるが、ある女学校に隣している農夫は、その便所を汲みとるたびに、夥しい茄子を小便壺の中から発見したということを告白している。

斯く早熟な自己興奮は、偶然的事件として起ることもあれば、又、局部の刺激、乃至、不定の理由に依つて起ることもある。この自動的行為が普く行われている遺精、或は手淫の端緒となることがよくある。しかし、それは稀ではあるが、春情の発動と同時に歇み、時々道德的、或は情緒的原動力が之を禁ずることもある。道德的意識が深刻になり、美的修養が始まると同時に、節制力が起つて来る。少年にあつては、意識的な恋よりも、更らに純な感情たる理想的な愛の芽生れが、屢々之を防ぐ道具となることもある。

ホルモン（生殖器の内分泌物）が、血液に混合するため、こゝに漠然たる欲求が起つて来る。少年や少女は新しき情緒と感情とに駆られて、遺精の満足を求むることが屢々ある。

年若き処女が、自ら性慾を満足させると言うことは、極めて重大な問題である。

由来性慾の衝動は年齢を問わず、性の別

なく、すべての人類に種々の形式を取つて自発的に現われるのが常である。先に暗示した如く、赤子及び幼児の反対的行為は、大人の異常と共に意識的遺精の標式となすべきものは、道心堅固につとめている独身生活者の、総べてでないまでも、殆ど大抵が熟知する所のものである。睡眠中の機能亢進は、頻繁でない限り、健康な大人にあつては尋常の事として、現在では全く医師の承認する所となつてゐる。是は有意行為ではない。むしろ、遺精ではあるが手淫と名付けることは出来ぬ性質のものである。昔は之を一種の罪惡なりとして排斥したこともあるが、今では道德的な見地よりすれば、この自発的顕現を以て、独身生活者の「自然的安全弁」なりと言うべきである。

普通手淫という有意行為は、早く幼時に起り、大人になるに及んで捨てゝ顧みられなくなるか、或は又春機発情期に始まることもある。其の時潜在せる感情は、普通何等かの手段を採つて現われる。家畜の中でも、牝牡両性を分離して置くと、往々にして此の現象を認めることがある。

遺精の精神的形式となすべきものには種々あるが、其の真相は往々本人自身にも氣

づかないことがある。精神的、想像的乃至空想的な一種の遺精に因る者が沢山ある。異常に神経過敏な男女の中には、音楽を聴き、絵画を見、或は海の光景などに接して直ちに自発的の興奮をする人があるが、この状態の因縁を求めて、心で性を考えたからとか、或は道德心が緩いからとする必要は更でない。

「すべて高尚なる感情は不劣なる物と同様に、其の根柢を種の保存、否、繁殖という慾求の手に存している。何となれば、自然は個人を顧みることなく、たゞ種のみを考へるからである」とモント氏が云つたが、まことに至言というべきであらう。生の力が性的衝動という形式をとつて、突発するということとは、是非とも理解し重要視しなくてはならない。

この情緒たるや、たゞえ上品で、合理的で道心堅固な男女にしても、情熱家であれば、突如として現われことかある。如何にして完全無敵な貞潔を保つべきかの問題は全部、之を中心として動いているものである。求めざるに來たるこの考え、招かざるに突如として現れ來るこの憧憬、自ら起る怪しの興奮、是等に対して果して我等は責



任を負うべきか、又、幼児が暗示に因らないで、全く自発的な不思議な悩ましい衝動に駆られたる時、之を以て一概に卑下することが出来ようか。

それから次にこの自瀆行為の有害か無害かということに就てあるか、多くの識者は現在では「無害説」に傾いているようである。しかし、近眼などの遺伝性を持つてゐる人は、この自瀆のために却つて促進されることの大きなは、自然的な性行為と比較にならないと言われている。また、過度の自瀆のために、本当なら前に述べたように、豊満な、謂わば人生の花である処女などが、見るからに活気の無い憔悴した姿をして、寄宿舎の窓などに凭れて、わけも無く涙ぐんだりするような悲劇を我々は見聞することがあるが、之は正にその悪習癖のために、ヒステリーかヒポコンデリー即ち憂鬱症に悩まされている傷々しい実例である。尙おまた、生来、虚弱な身体、例えば腺病質の如き者が、この自瀆に耽溺したために、恐ろしく身心を害して、遂には死期を早めてしまふというような例も挙げられている。

我々はまた、うら若い処女が、一たん人

の妻となり、やがて破鏡の嘆を見なければならぬようになる例も目撃するが、これらの中には所謂不感症のために、良人から嫌われてしまふというようなのもある。元来、この不感症というのも一面に於ては、その処女時代に於て、不自然なる方法のもので性器を濫用したという罪にも帰せられるものである。

尙この風習は一般に、教養のない処女よりも、女学校とか工場とかに出ていて、多数の人々と接触している処女達の方が、より早く感染する傾向がある。

我々がこの世に生れて来た不思議、父と母とを繋ぎ合せやがて子となる愛の美、親

### 【読者通信】

奇譚クラブの愛読者の一人です。八月号の殺人事件、夢性の美少年は面白く拝読致しました。つきましては「責め場」等は特に女に限れているようになっていきますが、男のリンチ的な場面、軍隊生活の同性愛、囚人の男色等を載せて頂きたいものだと思っております。では貴社の益々御繁栄の事を御祈り致します。

(大阪 中原生)

子が打ちとけてこらいう事を話し合うならば、最も理解のある暖い同情が、お互の胸に湧いて来るであらう。

### 処女の開花

処女時代、靈の發展する時代、誘惑のうやく襲い來たる時代であつて、この複雑な悩みに惑わされて、あらぬ方向へさ迷うことが珍らしくない。又男性に取つて其の時代は冒險性、或は放浪性が多くの少年の胸中に去來する。同時に情緒の増加、宗教的、或は道德的向上心、懷疑心と穿鑿心、異常な生の喜悅、それを屢々、消散せしめる所の憂鬱、親の權威に対する憤懣、煩悩

○ 僕は八月号を始めて読んだのですが、非常に自分の琴線に触れるものを感じて嬉しく思い、何故もつと早く貴誌を発見しなかつたのかと悔んでいます。特に三幾男氏の「夢性の美少年」を拝見し、その体験記が丁度自分の心の中をそのまま誌面に映し出された様で何んとも言えぬしみじみとした感じを味いました。そして同じ男性としての友を発見した喜び





快々たる自我の籠城、沈黙、熱烈、英雄崇拜、多性多感、羞耻、秘密癖、盛んなる想像、等このようなものゝ徴候が殆ど常に現われる性慾的の衝動が成熟する時期には、男女いづれにも、多かれ少なかれ共通的に現われるものである。即ち肉体的にも精神的にも極めて重大な危機がある。今まで性慾本能の示顯しなかつた幼児は、突如として、又全く偶然に他の暗示により、或は睡眠中自発的に、之を経験するであらう。幼児は由来夜をおそれるものであるが、青年男女の風を恐るゝは猶一層警戒すべきものがある。

女性の卵巣分泌液は、新陳代謝の目的、即ち言葉を換えて云えば、栄養作用の化学的作用に役立つものである。女子の頸部より甲状腺を移し去ると、月経及び妊娠に故障を来たし其の機能は月経中にも妊娠中にも拡大する。生殖腺より出る分泌液を過度に浪費するのは心身両方面に有害である。そして、何処より過度とし、何処までを適度とするかの問題は今暫らく措くとしても兎も角、適度を超えて之を浪費すると時としては全身に、時としては少くとも局部に其の影響を及ぼすことは承認されている。

で一杯です。

(秦 冬男)

七月号にて「変態艶書」興味深く拝見しました。そして喜多さんにも貴女にも限りない羨望と嫉妬を覚えた事は事実です。それは小生も又サディストであるからに外なりません。喜多さんの御宅で過された一週間の生活が如何に御二人にとつて妖しくも愉しいものであつたかは、小生には容易に想像出来るのです。その

光景を頭に画くだけで、小物は恰かも自分自身が貴女を辱めて居るような快い幻覚に酔うのです。それだけに「変態艶書」に貴女がその時体験された事を具体的に書かれなかつた事が残念でなりません是非その時の生活を本誌に発表して下さいませんか。恐らく喜多さんも許して下さいと思います。

(天野一郎)

岡田咲子様

故に身体諸腺の相互関係を了解することは等閑にすることは出来ぬ。一つの腺を誤用すれば他の腺の活動を鈍らし、或は正調を乱し、以て心理及び肉体に大影響をする。

青春の処女の世話は恐らくは男児よりも一層緊要であらう。女の子は、元来、男の子よりも温容で、内気で、隠立をするものであり、またより甚しくものを忌み嫌ひ易いものである。動物界でも、又人間界でも、女性に概して、男性よりも受動的であつて、性慾方面でも自衛的で、恋愛三昧に流れないこともたしかに男性以上である。何となれば婦人に取つては、恋愛は男子よりも遙かに大事な意義を有するからである

女は子を産む玉手箱、人類の主な創造者子供の主なる養育者である。又、性慾が女子にもたらす所の、冷酷なる悲劇的事件も、其の伴侶たる男子以上である。性の抱合も男には通りすがりの出来事であるが、女には長く心身に苦悩を及ぼし、生命を危くし時には死を招致することさえある。子を宿すといふことは、女の喜悅であると共に、又厄であつて、女の不幸は、殆ど子宮のまに／＼左右される。

恋の成否に因つて、天国にも昇れ／＼ば、地獄にも陥ちられることは、聊か男子と類を異にする。それにまた、女子は一旦男子と関係をした以上、そこには潜在的に混濁



せる血液を残すものである。

## 處女と来潮

生理的進歩は婦人に週期的な厄を課したこれは太古にあつては、今日見る程、頻繁でなく、身体、精神、及び情緒に影響する所も亦少かつた。月経は非常に進歩したことを示すものであるが、しかし不快になり病氣に罹り易く神経病を起し、時々精神及び情緒の性質に変調を來たす点に於ては、莫大な犠牲を払つて得た進歩である。

婦人の機能にこのように大なる役目をなす此の機能は、十四五才までのうちに開始し、又時としては之より早く始まることもある。

前にも述べた様に、処女の自説行為は一般には春機発情期に起るか、或は月経中に始まることが多い。が、これは取りも直さず、斯る特別な時期は、女子に取つて最も性的衝動の萌す時だからでもある。

あらゆる処女、あらゆる婦人は月経時中は少くとも一日は休養を要し、一週間の労働時間を短縮しなくてはならぬ。また、地方へ行くと月経時は湯に入ることを避けるようであるが、これは現今の進歩せる医学

では却つて有害とされている。月経時中には、余り熱い湯はいけなないが、温浴、又は微温浴をしてつとめて、身体の清潔を計らなくてはならぬのである。

心の高潔なる友は、年若い者に善良な感化を与えることが出来る。青春の男女が相親しみ、能う限り異性と交際するのはよいことである。男女別ありなど、言つての行為は、すべて宜しく避くべきである。何んとなれば孤独の寂寥裡に在つて思ひに沈める者こそ、悪習に耽り、或は病的になるから。品性の芳わしい婦人が、少年に善良な感化を及ぼすことは、なお賢明にして同情ある男子が延びて行く少女の心に感化を致すが如きと同じ例である。恋情的衝動を征服するに、女子を他より分離別居せしめる如きは有害である。少年少女は自由に交際させなくてはいけない。人工的な、往々、滑稽な束縛を加えて、分離するよりも、男女両性が同じ真摯な知的程度で成長するならば、性慾上の過失、間違、不幸の大半は之を免れることが出来よう。余りに嚴重に保護すると、一生取り返えしのつかぬことになるものである。深く根差せる穿鑿性、困惑、病的な衝動は、そんな風にして鎮圧し

得るものではなく、却つて日蔭の草木の如く病的となる。箱入娘は最初の誘惑で身を誤り易いものである。性慾のセの字も知らないで育つた人で、手のつけられぬ放蕩者になつた人は幾人でもある。むしろ、かゝる束縛された境遇に置かれたればこそ、放蕩するに至つたのだと云つてもいい位である。

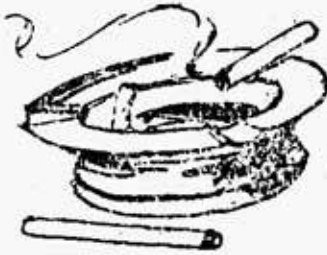
生殖と性慾生理をちよつと教えるだけでも非常に役立つ場合はあるかも知れないがしかし、それだけでは未だ十分ではない。情緒に、美的本能に、道德心に、自尊心にそれ〴〵強く訴えるところが無くてはならぬ。そして当初から學問的に訓練すべきではあるが、詩的又は英雄的な訓練を除外してはならないのである。生物学的又は生理學的の知識に立脚すると同時に、また必ず美的感覺を刺激し、性的生活の他變的行為に關して、高尚優美な理想を鼓吹する必要がある。

たゞ性に対して我々の恐るゝ所は、尊きものを汚し、或は傷つけはしないかという懸念である。人の云ふ如く、神が我々に創造して与えて呉れた器官及びその機能は更に恥づべきものではない。



# 洋パンを囲む

## 座談會



日

昭和二十七年七月〇〇日

所

近鉄奈良駅前 太平 楽

出席者

A ジュリー松浦 (二〇才)

B メリー小村 (二三才)

C 長尾ユミ (二〇才)

D 太田恵子 (二四才)

本誌特派記者 辻村 隆

日本の独立により大阪の駐留軍が五月上旬大挙して奈良へ移動して以来、七代七十余年の帝都として七堂伽藍を誇った眠れる古都も、尼ヶ辻RRセンターはガイドと云われるボン引の車で大混雑を呈し、田圃道に突如日ならずして駐留軍相手のショッヅが簇立した。時ならぬ洋パンブームに狼狽するもの儲けるのは此の時

ばかりと躍起となるもの等、今やその影響ははかり知れぬものがある。洋パン存在の可否は別として、甘き蜜に集り彼女達バタフライの生態をキャッチするのは風俗雑誌としての当然の使命であると、本誌では逸早く辻村隆氏を特派して幸い彼女たちの協力によりその全貌を知る事を得た。

### 黒人は親切である

記「皆さん、折角のお休みのところ、わざわざお集まり下さいまして有難う御座います五月からは奈良の方へ来られましたそうですが、御商売の方はどうですか？」

D「そりや、大阪の方がいゝわよ」

記「ホームグラウンドつて云うわけ？」

D「そりね、それもあるけど、奈良には地のこの商売の女が矢張り居るもんだから、こちらは土地にも馴れていないし、それに白い眼で見られるしネ」

C「奈良の街と云つたつて知れたもんでしょ。だから五日間の休暇を貰つて、朝鮮から戻ってくるサージヤン(軍曹の事なれど彼女達は兵隊一般、アメリカ人にはすべてそう称える)には、余り面白くないらしい



の、大抵は大阪や京都へ出ようつて云うわ

A「休暇を貰ってくる人は、朝鮮を発つ時、何処は面白いとか、あそこはとつてもよかつたとか、チャント申し送られてくる人だから、世話ないのよ」

記「成程ね、彼等にとつては未知の土地だからね。では早速ですが、貴女方が、彼等とどの様にして交渉を持たれるか、それを伺いたいものですネ」

B「私達グループには、それ／＼親方があつて、その親方が数人のボン引を使つて、奈良へくるバス（駐留軍専用大型バス）から降りる人達に、交渉してくれるの——」

記「グループは今のところ何人？」

B「え——と、全部で六人だつたかしら」

A「ユリーがうちへ来たから、今七人よ」

記「すると、現在三人が……」

C「え、三人出てるわ」

A「ボン引と話合がつくと、ゆきつけのホテルにサージヤンをいれておいて、そこからボン引が電話したり、仲間を呼びにこさせたりして、私達に連絡してくれるわ」

記「矢張り順番なんかあるの？」

B「一時借りの家で待機してる私達は大体順番に行く様してるけど、お風呂や食事などで、欠けてる時もあるから一概に云えないわ」

記「大体どれ位の相場なんです！」

B「それも一概に云えないけど、朝鮮帰りなら、一日六千円ぐらい」

A「けれど、大抵は、三日なり五日なり始めからきめてしまふわ、だから五日なら三万円、ボン引等が一万円、残りで私達の収入——」

記「ボン引の一万円はボロいですね」

A「だつて一人のサージヤンを、三人も四人もよつてたかつてものにするんだし、それにその収入は、引いた人も引かない人も平等に毎朝分けるから、いゝ時もあるし、悪い時だつてあるわ」

B「朝鮮から休暇を貰ってくるサージヤンは十五万円ぐらい貰ってくるから、とても五

日間位の休暇じゃ使い切れない。だから気前はいゝわけよ」

記「そこを狙つての外貨獲得つて訳ですね」

C「そうなのよ。人はどう云うか知れないけど、私達みんなにコレツポチちも迷惑はかけやしないだから——。ジープにのつたり手をつないんで歩いているのが、どうして悪いのと云いたい位だわ。ねえ皆な——」  
（一同それには応えず、B嬢ラツキーストライクをとり出して記者にもすゝめる）

記「人種的に黒人なんかの場合どうですか」

D「余り好きじゃないわね。でも親切な点では、反つて白人より上だわ」

A「私、黒人の時は殆んどホテルで過してしまふわ。だつて手を組んで歩く気にはなれないもの」

D「私一度とつてヨリ／＼したわ。だつて黒人だとあれがとつて凄いだから——」

記「そう／＼、そのあれつて話を、これから一つ願いたいですネ」

D「ホホ、あれつてアレよ、体を見たつて分るでしょ。体が大きければすべて大きいのが当たり前じゃないの。」

A「それに長いわねえ——」

記「どれ位——つまり、その日本人に比較し



て、その何だ、仮に日本人のを一〇とすると……」

C「黒人は一五くらいかな……」

A「白人は一二つて割合じやないかしら」

B「人に依つてはつきり云えないわよ。日本人だつて大きいのもあれば、小さいのもあるんでしょ」

A「でも始めて黒人との時なんか、辛抱出来なかつた——。三日位、何かものが挟まつた様な気持——」

B「それに毛なんかも白人はフワ／＼して柔かそうだけど、チョコレートボーイさんは（と指で一纏まり示して）でブラシ見たい——」（笑）

A「でも親切なことは、とつても親切ね。なめる様にして可愛がつてくれるわ」

C「なめつて貰つたんだろ」

A「いやーだ。気持の悪い」

（大袈裟なAの素振りに一同哄笑）

## お、ワンダフル奇談

記「そのう、我々なら、いよく／＼つて時に／＼寝よう／＼とか、そこはいろ／＼言葉もあるわけですが、向うでは！」

D「アイ、ハット、ゴウ（I hot go）！つて

云うわ。私はコーフンしたつて云う意味よ」

（記者はよく／＼聞き訊したがHOTはハットと発音するらしい、HAT（帽子）にあらず）

B「それでよく、ユー、ハット、ゴウ（I hot go）なんてきくわ。あなたコーフンした！つてきくもんだから、こちらもコーフンした様な顔をせねばならず……」（大笑）

記「そのコーフンすると、一晚にどれ程——」

C「朝鮮帰りはズイ分スゴいわねえ——」

A「私へ／＼になつた時は一晚に〇回」

B「すきな様にさせておけば一晚中寝かさな

いわ、私は何回が最高だつたかな」

A「それで翌日が四回になつて、三日目、四日目が二回、最後の別れる夜が又コーフンして六回、随分凄いな男だつたよ、あれは——」

記「へエ、よく続いたもんですね、御互いに——」（クス笑）

A「それがね、別れる時でもケロッとしているのよ。私日本人は知らないけど、お嫁入りするとあんなものかしら……」

記「とても／＼、恐れ入りましたよ。体の出来がダンチですね。それで貴女の体、どうもない！」

A「ないこともないけど——仕方ないわ」

B「そりやね、こたえるわよ。でも相手によつて、大きな人に当たると、術があるのよ」

記「どんな方法！」

（一同顔見合せて応えず）

B「恥かしいわ。Aさん云いなさいよ」

A「いやよ、そんなこと。云えないわ」

D「あのね、それはね。若い娘なんか、〇〇剤を用いるのよ私も始めの間は使つたけど此頃は余ッ程凄いのにもブチ当たらない限り……大抵大丈夫、ぬらなくてもすむわ——」

——

C「拡がりきつたのよ、きつと——」

D「バカッ、あんただつてそのうち、そうなるわよ——」

B「そんなこと若し書かれちゃ恥かしいじゃないの。もういゝ加減にしないよ。」

A「そうよく。」（A、B、三人Dをたし



長尾さん



なめる)

D「いゝわよ。もうこれ以上云わないから」

記「それじゃ、失敗談とか、人に云えない様なハナシがあれば、お願いしたいんですが」

C「あのね、それは、言葉が通じないので失敗したりする事が一番多いわ。これは私じゃないけど、(Aに向つて)あんたも知ってるでショ、サリーがアチラさんと二人で映画に行つた時の話——」

A「ウフフ、知ってるけど、そんな事一寸口で云えないわよ」

記「いや、遠慮なくどうぞ」

C「これはね悪い話だけど、千日前の映画館へサリーが、相手のホーニイ(恋人とでも云う意か)とチャンバラの日本時代劇見に入つたのよ。その時サリーの彼氏はね、筋も分らないのに、ラブシーンの場面なんかあると、しきりにオー、ワンダフルを連発

して、しまいにはサリーに、ワンダフルは日本語でどう云うのか、教えてくれと云つたの。サリーは人が悪いから、冗談で、ワンダフルは日本語で……いやだわ」

記「何て云つたの?」

C「フフ、あのね……恥かしいな、Aさん云つてよ」

A「いやよッ」

C「困つたな、あのう、ホラ、よく云うでしろ。あの事が一番いやらしい言葉——」

(Cが記者の耳に口を当てて、そつと告げたのは女性器の最も通俗的な呼称三字)

記「へーエ」

C「そしたらね、ホーニイが立上つて、感激の面持で手を振ると、オーワンダフルの代りに、オー〇〇〇と、大きな声で叫んだと云うの、教えたサリーは穴があつたら入りたかつたて——。暗闇でドツと聞えた笑い声が、未だに忘れられないつて——」

A「ホーニイはね、何故笑われたか知らなかつたのよ。後で通訳に聞いて、カン／＼に怒つたそうよ。でもこんな冗談云うの随分だと思わ。私達迄悪くとられて迷惑だわ」

## シヤクハチは英語

記「閨房の言葉と云うと、どんなのがあるんですか?」

C「さあねえ——はつきり知らないけど……」

B「悪口なら、ガツデム!なんてよく云うけど——」

D「それにカクサカ……!。これを云うと怒るわネ。おかマの事じゃないかしら」

B「それにシヤクハチ!大抵のサージヤンはシヤクハチしろつて云うわ」

記「日本語じゃないんですか、それは——」

B「ちがうわ、向うの言葉よ。朝鮮から帰ってくる日本語の全然知らないサージヤンがシヤクハチつて云うわ」

記「日本語ですよ、それは——」

B「いゝえ向うの言葉よ。だつて日本語にシヤクハチなんて言葉ないでしよ。ねえスラングだわねえCさん」

C「えゝ、朝鮮からくるサージヤンはみな云うわね。ヘンなことらしいけど——」

記「なら、どんな綴り?」

A「そんなの知らないけど、ガツデムやシヤクハチは皆云うわ」

記「大体どんな意味です?——」



B「いやらしい事よ。つまりなめることですよ。——」

C「私にシヤクハチO、K?つて聞くからノウだと云つてやると、一万円でも二万円でも出すからシヤクハチのガールフレンド世話してくれつて云われたことあるわ」

記「それなら間違いない日本語の閨房の隠語ですよ。有名なんだよ。虚無僧の吹く尺八つてあるでしょう。あれからきてるんだよなんて云うか口淫つて云う意味——」

(B、C、未だ何か云いたそうだが沈黙)

A「本当かしら?……」

D「逆輸入つてわけね。そう云えばよくパンくなんて云うでしょ。これも日本人がつくった英語なんですつて。人から聞いたんだけど、本当はパンくのことをプッシュガール(Push Girl)つて云うらしいの、今更どちらだつていいけど……」

B「よく、あの時にプッシュくつて云うからかしら」

D「押すつて意味だけど。よくね、こんな風に指で輪をつくつて、こんなことするでしょう。プッシュくく云つて」(笑)

記「感じが出てますね。日本人でも、プッシュくなんてよくあの言葉で使うからネ」

D「この道許りは東西相通じる……」(笑)

### 処女の血はメンス

記「メンスの時なんかどうするの?——」

A「その事で私、反つて得をした事があるのよ。メンスが始つて二日目にボン引から口がかゝつて来たの。困つたけど、五日程あぶれていたし、思い切つて出掛けたわ。ジム・ヘルンと云う、未だ若い、それこそゼームス、スチュアートを若くした様なハンサムボーイで、こんな商売でもハンサムだとやつぱり嬉しいしネ。ホテルのベッドでI・HOT・GOを連発して、猛烈なキツスでしょ。——」

C「そんな時に限つて早いでしょ」

A「ええ、飽つ気ない位。その後で始末しようとして、ふとシートを見ると、粗相して血がついちやつてるのさ、若しメンスが分つたら困つたなあと思つたけど、ネエちゃん(先輩諸姉を指すのであろう)からいつか聞いた事を思い出して、私ジムに甘え乍ら、私はチェリーだから、こんなに血が出たのよと云つたら、物凄く感激したわ笑記「そのチェリーつてどう云う意味、桜?」C「処女のことをチェリーつて云うわ」

記「バージンなんて云わないの」

C「余り云わないわ。知つていけるけど——」

記「一夜の愛の暴風で、パツと散るからチェリー……ナルホド考えたね……」

A「未婚の若いサージヤンなら、チェリーの血とメンスの血の見分けなんかつきつこないのよ。純真そのものよ、物凄くカンゲキでネ、そのシートの汚れたのを、ユウとミイの記念にするんだなんて云つてよ、持つて帰るんだなんて騒いでたわ」

D「もうムチャクチャで御座りますがな」(爆笑)

A「しかもそのシートに、自分の名を日本字で書いてくれなんて云つてね、硯と筆を借りてくるものだから、散々頭を絞つてこうかいてやつたわ。(メモに鉛筆で、字無屁論とかく)どう読めるでしょ。」

C「屁論がケツ作じやないの。あんたにして



松浦さん



は上出来だけど、この話は一寸クサイナ」

A「シヤツやハンカチまで字無屁論をかゝせてね、得々とホテルのボーイに見せて、読めと云つて大騒ぎ——。彼等はすべて、ジム、ヘロンと読む。ユウはベリイグウ(Very good)のナイスガール(Nice girl)だつて。もう大喜びなのよ。日本字で自分の名を呼んで貰えるのがとっても嬉しいのね」

B「ジム、ヘルンは仮名(簡単な意)だからいゝわ私も一度そんな事あつたけど、難かしい名でどうにもならなかつたのよ。なんだつけなあれは、……そうくチャールスマックナーニイ、どう困るでしょ」

(Aしばらく考えているうち、メモをとつて何か書く)

A「これならどう?」

(一同に見せたメモには、茶留守・幕句何)

B「どれく、チャールス、マックナーニ——なるホドネ。ちよつと頭いゝじやないの」  
記「Bさん、どうですか——」

B「じや余り面白くもないけどね、ホラ今のチャールスね、物凄くノッポでネ。一緒に歩くとオヘソの辺りまでしかないのよ。私チビの方だからまるで大木に蟬がとまつた見たいで。——それでもよくしたもので、人間の坐高は余り変りないらしく、アノ時はチャンと合つてゐるんだからネ。でもニューツと長い足がベットの柵を越して壁に突き当つて未だ折れ曲つてゐるんですもの、腰の動きがとれないのよ。」

D「足を紐で縛つて、天井から吊したらよかつたのよ」(爆笑)

B「今度逢つたらそう云うわ。(笑)だけど五日の休暇が終つて別れる時、彼はシンミリとね、再びコリヤ(朝鮮)から元気で戻つてくるから、そうしたら結婚しよう。それ迄、もう誰ともこんな事するななんて云つてね。私を軽々抱き上げて何度もキッスをする、残つていたマネーをそっくり、新えもせずに私に呉れたわ。後で勘定して見ると、三万七千円程あつたけど、流石に涙がこぼれて、彼と別れるのが辛かつたわ

——」  
記「純情そのものだネ。それからどうなつたの——」

B「それつきりよ。だからあんなの前で、こうしてピンシヤンしてるじやないの」

D「去る者は日々に疎し」さ。その時はミソナそんな氣になるんだよお互に——。でもそれをいちく真に受けてりや、莫迦を見るだけよ」

A「別れる時はミソナ、又逢いましようつて云うわ。シーユウアゲン(See you again)つてネ」

記「又逢う日まで、映画の題です、Cサン何かハナシない?」

### 男のストリップはダメ

C「二十八貫かのデブちゃんだつたけど、少し変態なんだね。私の体をまるでオモチャにして、散々いじくり廻した挙句すみからすみまで舐め廻したりして、氣味が悪い事オビタダしいのよ。あの時ばかりはいくらショールバイでもいやだと思つたわ。そしてね、私を裸にしてヨイショと肩クマしたりしてキヤく云つて部屋中を歩き廻るのよ。その上自分で四ツ這いになつて馬にな



つて乗れと云つたり、そのホカ、こゝでは恥かしくて云えない様なヘンなことばっかりするんでしょ」

記「そのヘンなことつて云うと例えば——」

C「いやーね、そんなこと云うの。あのネ、例えば、裸の私が股を拡げて、いるところをカメラで撮りたいから、そうしろなんて云うし——」

A「いやらしいわね。」

C「だから云つてやつたのよ。それじゃユウも裸で自分のを握つてるところを撮つてやるからつて云つたら、テレてね。女はベリイグウだけど、男はノウグウーだつて」

(爆笑)

D「撮つてやればよかつたのに。どんな顔か見てやりたいわ」

C「みんなこんなことあつた？そのデブさんとの三日間ネ、私一ぺんも体使わずじまいだつたのよ。手でしなくちやいやだなんて云つて、とう／＼最後まで、オール手ですましてしまったの。どう変つてゐるでしよ。う。」

D「なら、反つてラクだつたじゃないの」

C「あんたは、そんな目に逢わないから、そう云えるのよ。どんなに手が草臥れるか——」

いつそあつさりスマしてくれる方が、どんなにラクなかしれないわよ」

B「どうせ、そんな男ならシヤクハチ／＼と云つたんでしょ。」

C「百万べん頭を下げたけど、遂々やらなかつたわよ。あんなの……御覧なさいよ。口がさけてしまふわ——」(笑)

### 混血児を生む女はバカ

記「世界中、毛色は違つても、余りその道には変りないらしいね。ところで最後に、貴女達、この道に入つた動機などを、どうでしょうか——」

D「それはね、お互いに余り触れない事にしてるんだけど——」

A「だまされた人もあるし、儲かるからつて人もあるし、百万円もためて、大阪のミナミでスタンドを立派にやつて、好きな男と一緒にラク／＼暮してる人もあるし、まあそんなところよ」

B「そんな事きいたつて仕方ないでしよう」(どうも語りたくないらしい様子)

記「みなさんお国はどこ？」

A「島根県の松江よ」

B「わたしは岡山——」

C「大阪の西淀川区の御幣島つて云うところ」

D「佐賀市内——」

記「いつ迄もつづけるつもり？」

D「考える事もあるけど、例え私達仮りにこの四人が止めたとしても、又誰か他人がやるでしよ。彼等のある限り、続くでしよ」

記「刹那主義ですね」

A「私達の存在で、終戦直後の様に、GIがあちこちの家に入りこんでは、シロウトの女の子をからかつたり、イタズラしたりすると云う事がなくなつただけでも、やはり或る程度、私達も必要じゃないかしら」

B「毎月親に二三万円づゝ送つてゐる娘もあるし、さつき云つた様にスタンドを開いて百万円の持参金つきで、ムコさんを募集したら、ワツと押かけて来て、よりどり見どりで売つた様なこともあるし、体は売つても心は売らないつていうのが私達の考えだけ——」

D「そんなのは珍らしいのよ、だけど。……大抵は余り溜まらないわね」

C「月に少なくとも五六万円はラクに入るのに、何処へ消えるのか自分でもワカラないくらいだわ」

記「それ／＼の生き方もあるでしょうが、若し妊娠でもしたらどうするつもり——」

B「あたし、よくその事で考えるのだけど、毛のちぢれた、黒い子を生む女の人の気が知れないと思うわ。お互いに不幸ですものね——」

D「日本だけでも産児制限で喧ましく云つてゐるでしょ。日本人の子でも随う世の中なのに、何を好きこのんで毛色の違つた子を生むのか、その気が知れないわ」

C「あたしは四月で一度始末したけど、ちやんとした夫婦の仲でもおろすのに、私達誰の子とも知れない子を生む必要なんかないわ」

A「サンダースホームとかで、黒人の混血児が、お風呂でいくら洗つても白くならないので泣き出した、なんて記事をよむと、つく／＼悲劇を感じるわ。」

D「こんな子が二十年、三十年先にどうなるかと思うと、ゼツタイに生みたくないわ」

A「それにこんなショーバイでいち／＼生んでりやたまらないわね。」

D「私達仲間では殆んど子供をうまないわ」

B「メイトとかオンリイ（一人の男にきまつた臨時妻、昔風に云う洋妾か——）とかが、帰ると云う言葉や、結婚すると云う相手の言葉に迷わされて生んだのが多いのよ。」

（この時ボン引、Cを呼びにくる）

C「ゴメンネ。ショーバイだから、じゃ何れ又。」

（記者も引揚げ時と、そろ／＼腰の浮けた彼女達に——）

記「長い間、云い難い話をして聞いて有難う唯私の考えとして、貴方達の生き方に賛成も出来ないけど、止めて正業につけとも云い難いと思います。いずれ時の流れが解決する事でしよう。ゴイングマイウェイ（Going my way）で、まあ精々儲けてあわよくば、バーのマダムにでも納まると云う、あなた達の夢を實現して下さい。長い間有難う御座いました——」

## サジスムス（虐待性淫乱性）

(Sadismus) とは、異性を殴打、暴行し、面上に唾し、咽喉を絞扼し、頭髪を引張り、凶器を以て傷ける等、異性の肉体に暴力を加え、残虐行為を働くことによつて、性的快感を覚える変態性慾であつて、その甚だしきものに至つては異性

を殺害し、四肢を切断し、筋肉を剖き、内臓を剔出して、之を食するが如き者もある。（殺人淫楽）

Qusimord しかも此の様な暴虐

行為は、必ずしも異性に対するのみでなく同性にも加えられることがあり、また肉体に暴力を加えることなしに、他の方法を以て相手に苦痛を与えて快感を催起する者もある。是等は「サジスムス」の

変型と認むべきもので、これに就いて少し許り述べて見ようと思う

## II

東西の歴史を讀むと、人を殺傷して鮮血の淋漓として出づるを見て大いに楽しみ、惨酷非道な獸的蠻行を擅にした暴君暴主が少くない。

その中にも普く我国の人々に知

れ渡つてゐるのは、支那古代に於ける殷の紂王の暴虐である。史に記する処を見るに、紂王は銅柱を作り、膏油を以て之を塗り、炭火の上に加え、罪人をして此の上を渡らしめ、足を滑らして火中に落ちるのを見、之を炮烙の刑と称えて大いに楽しみ、また比干の胸を剖き、九侯を殺し、鄂侯を醢にしたとある。



我国では人皇第二十一代武烈天皇は妊娠した女の腹を剖いて胎児を見、三年には人の手指の爪を悉く剥ぎ取つてそれで山の芋を堀らせ、四年には人の頭髪を抜き去つて大木の頂辺に昇らしめ、その木を根際から切り倒して、真つ逆さまに落ちて死するのを愉悦と眺め五年には人を籠の内にに入れてその流れ出づるを窺い、三刃の矛を以て刺し殺すを楽しみとなし、七年には人を木に昇らしめ之を射殺して打興じたことが「日本書紀」に明記されてある。

なお我国に於ける殺人好きの暴君の代表者として挙ぐべきは殺生関白豊臣秀次である。「日本西教史」に記して曰く「関白は天心ある者の為すに忍びざる奇異非常の一大不徳あるを以て、是等の善行（前文に秀次の文書を嗜むことを記しあり）は謂うに足らざるが如し。此の不徳とは何ぞや、人を殺すを嗜む野蠻の醜行ありて之を無上の楽しみとなし、若し罪人の死に

処せらるゝことあれば、自ら刑手のことを行ふを常とせり。関白の居館を距ること一里半の高地に刑場を設けその周囲に土塀を築き、中央三脚の大案板を置き、罪人をもその上に臥せしめ、之を細切して興となし、或時は之を立たしめ兩段に割下し、その最も快とする処は、罪人の四肢を一々切断するにあり、その状恰も鳥類を割割するに異ならず。而して最も残酷なるは孕婦の胎を剖きてその子を見るの一事なり」とある。



## サジスムスの種々相

仁比山 等

歐洲に於ても血を好む暴君の現われたことは決して稀でないが、中でも史上に最も有名なものはネロ及びチベリウスであつて、年若き男女を眼前に殺害し、その苦悩叫喚するの状を見、鮮血の迸出するのを眺めて無上の快を感じた。それから十五世紀に於けるフランスの将官ギル・ド・レイも世に名高い腫血好きの怪物で、彼は八年間に八百人以上の小児を凌辱して之を殺害したがため、一四四〇年死に刑に処せられた。

抑々残酷と快感との両者が一定の関係を有することは、既にクラフト・エビングの証明した処で、正常の精神を有する者に於ても、性慾の方面に一種の欠陥があつて、他人に傷害を加えその苦悶呻吟するの状を見、鮮血の迸出する様を見て、多大の快を感じる変態的行為は、フランスの貴族ド・サードの行為及びその創作の内容に因んで、「サジスムス」という名称を附したが、併し前世紀の中葉に近き頃に於ても、ブルームレーデルは「歡樂と苦痛」という一篇に於て、殺害嗜好と快樂との間に心理的關係の存することを説き、その証として印度の神話に於けるジワとゾルガー（死と快美との神）等を挙げた。またロンプロソーは軍人の戰場に於て刳掠虐殺を行う際に獸的快感が催起すると云つたマンテガツァーの所説を挙げたことがある。戦斗正に酣にして興奮の絶頂に達した時、敵を傷つけてその肉体から生ず

くしい血潮の泉のように溢れ出づるを見、或は若痛のために悶え狂う有様などを見て、一種言うべからざる非自然的の快感をおぼえることは、戦場に於ける軍人の往々体験する処であるが、好んで人を殺傷する暴君の残酷行為も要するに此れによつて一つは自己の威力を示し、支配慾に満足を与えて愉快がると共に、他の一面に於ては同性異性を問わず、凡てその対象を虐遇して、その苦悶叫喚する状を見ることが、一種特別の快感を催起するに基くのである。

真性の「サジスムス」に於ては異性を虐待することによつて性慾を満足し、無上の快を感じるのであるが、その変型症に於ては、異性同性の別なく他人を虐待して苦痛を与えることに快感を感じるもので、必ずしも性慾の満足のみに限らない。殷の紂王、ローマの暴帝ネロ、チベリウセ等の如きは、蓋し此の種の変態的人物である。

## 三

異性のみならず、また同性を虐待して性慾の満足を永める異型の「サジスムス」がある。これは専ら「サジスムス」の素質を有する同性愛者に認める処で、所謂「男童鞭撻漢」と稱せられるものは即ちその一種である。此の種の間人は既に小児時代から、父兄或は教師に叱責せられ鞭撻せられる同性の児童を見て性的快感をおぼえ、此れがために自慰的行為に出ることがあり、また自ら進んで遊び仲間の子供に暴行を加えることがある。

年令が長じて性慾が発育するに至つても、異性に対しては興奮すること無く、たとえ之と抱合するにしても、その脳裡に児童を鞭撻する光景を想像しなければ性慾が発動せず、従つて性交を行うことが出来ない。此のような変態的男子が、平素児童に接触する教師の如き職に就けば実に危険至極で

之に関する戦慄すべき実例は世に少くない。ロットハフトの記する処に依れば、或る小学校教師はその生徒の一人なる某高等官の男の児を縛して、身体の自由を奪つた上、之を丸裸となし、鞭撻を加えて遂に死に至らしめたといひ、またサニチエンコーはロシアに於ける一小学校長が、毎日自己の面前で五十人の生徒を鞭撻せしめ、其の中にもドヂョギアという生徒はこれがために殆んど死に瀕したことを記述したことがあり、また小学校長ウダルは、些細な過失でも此れを口実として生徒を鞭撻し、その変態性慾を満足したと云ふことである。

真性の「サジスムス」に於ては異性の肉体に暴力を加えることによつて無上の快感を催起するものであるが、然るにその変型症の中には、暴力を加えることなしに、ただ異性に恥辱を与え、或は之を屈辱的地位に置くことによつて快感を感じるが如き者もある。

此のような変態的男子は、金錢によつてその凌辱を甘んずる売笑婦を相手とすることが多い。また前記のような深刻な凌辱行為よりも、寧ろ噴飯に値する諧謔的行為を異性に試みて性慾を興奮し、或は満足するが如きものもある。それにはその愛人或は売笑婦の顔に煤や油を塗つて汚穢にするが如きものもあれば、またクラフト・エビングの記述した如く、売笑婦の顔に石鹼を塗つてその顔を剥つたり、或はパスカルが報告したが如くに、愛人に対して毎月その前髪の垂れ毛を切り取るような者もある。此のようなものを凡て象徴的「サジスムス」と称する。路上に逢つた婦人の衣服に石油或は硫酸等を振り掛けて之を汚濁し、異性の驚怖哀愁するの状を見て、快感を感じるが如き者もまた此れに属する。

それから尙「サジスムス」の変型としては、異性に対して悪罵嘲弄の言を放ち、或は之を侮辱慢罵



する手紙を送つて快を感じる所謂言語「サジスミス」書記「サジスミス」が如きものがあり、或は異性の家宅に放火し、或は物品を盗むことによつて対者に苦痛を与え之によつて快感を催起するような者もある。窃盗が性的動機に基因することの少くないのは實際上争うべからざる処で、彼の「フェチシスミス」(節片淫乱症)に於けるが如く、異性の身につける物品例えばシャツ、手巾、短靴等を盗み、これに触れ、或はその臭を嗅いで性慾を満足するが如き者もあるが、併しまた一方には窃盗をなして対者に損害を与え、その苦痛を感じることに興味を抱き、性慾の興奮満足を覚える異型的「サジスミス」もある。偷盗の性的動機に基くことのあるのは、夙にリヒテンベルグも認めていた処で、「性慾は屢々偷盗の罪を犯さしむ」と云つたことがあり、またイギリスに於ては嘗て盗賊を去勢せよという建議案さえ出たことがあつた

上記の如き変型的「サジスミス」の他、異性に虐待凌辱を加える光景を脳裡に想像することによつて快感をおぼえるものがある。所謂観念的「サジスミス」と称せられるものが即ちこれで、モルの記述した貴婦人の如きは、その愛人を棍棒または鞭で毆打し、或は鉄鎖を以て之を縛し、暴行を加えることを想像して、快感を食ほつたと云うことである。

最後に叙述すべきは毒殺と「サジスミス」との関係である。異性に毒物を飲用せしめ、その苦惱する状を見て、性的興奮乃至満足をおぼえるが如き者のあることは疑いなき処で、イワン・ブロッホの説に依れば、好んで婦人によつて行われる毒殺には「サジスミス」的傾向に由来することが稀で無く毒殺犯罪を専業とした女性犯人エガド・ブリンダイリエ・ゴットフリードの如きは、いづれも性慾の興奮し易い淫婦で、しかも殺人を快楽とする処から異性を毒殺したものであつた。

## 詰将棋が解けるまで

大橋 虚士

一	二	三	四	五	六
王	桂	香			
王	桂	香			
王	桂	香			
王	桂	香			
王	桂	香			
王	桂	香			
王	桂	香			

持駒 角金桂

## 第一ヒント

玉を三四へ出してはおしまいです。その工作

第二ヒント 持駒を利して玉を二筋で詰める。

極く易い問題を詰将棋が解けるまでと題して自分の研究を談話的に話していこうと思ひます。初めから難かしいのでは取り付きにくいし親めないが少し判りかけてくるとこの詰将棋位面白いものはないのです。

諸雑誌に掲載されている詰将棋問題も殆ど易しいのではあります。がそれでも、解答をみないでは仲々詰ませない方が多いのではないでしようか。何故かたんな様にみえて

一	二	三	四	五	六
王	桂	香			
王	桂	香			
王	桂	香			
王	桂	香			
王	桂	香			
王	桂	香			
王	桂	香			
王	桂	香			

持駒 銀歩歩

## 第一ヒント

邪魔駒は捌けというのも詰手法の一ツ

## 第二ヒント

歩ノ活用ト玉を二筋へ出さない事。

むつかしいのか、これは詰将棋というものはどうして作られてあるかを知られないからで諸手筋のいろ／＼をかんたんな問題から感得していかなれたならおのずと一見して大体の主眼点がよめる事と信じます。玉手／＼で一手すかせずに詰まさればならないのもむづかしい理由の一つでしよりでは、右の問題をよく／＼次号解答まで研究して下さい。次号にて詳しく解説を致します。

観々堂手柄話(第五話)

# 「吉原の淫虐魔」

緑 猛比古

今 幾久 造画



初見世の味を一手に引受ける男



「お早よう先生、今日も亦暑くなりそうですぜ——」  
お馴染の両国の岡ッ引せつかちの源六、帷子の袖口にバタ／＼と  
扇子で風を送り乍ら、慌だしく破れ障子を開けると、裏口まで見透  
しの六疊の間の、ボロ蚊帳からやつと這い出した許りの観々堂先生  
に声を掛けました。

「何じやな朝ッばなから——。上野の辰刻(八時)が今鳴ったばかり  
じや。朝飯前の仕事は御免蒙むるよ」

独り寝の物臭さから、朝飯も厄介げに、古畳の上へ腹ン這いにな  
った儘、先生は粉だらけの蓑を引き寄せます。

「相変らずケチな蓬生だネ——」

「何だい、蓬生とは——」

「な——に、蓑のことを蓬生と云うんだそうで」

「——」

「先生も御存知の吉原の松葉屋といや、吉原五町のうちでも指折り



の大見世だ。そこのお抱え大夫の瀬川と云う女が、源氏物語とかいう昔の古い本からとつて作つた、廊の隠し言葉なんだそうで——。学のある女は違つたものだ、瓦版でも専らの評判でさあ。」

「味な女子じやな。」

「簀木と云えば間夫の事で、篝火が遣手婆。夕顔が隠し男で、葵が天下の通用錢……」

「訳つたよ。瓦版の受売りは沢山じやよ。それを云いたさに朝つ端なから飛び込んで来たとは、旦那も長生きのする方じやな。」

「いえね、その瀬川が鳥山検校に身請された、云つて見りや、たかゞ遊女一疋の身請話で、瓦版まで出て騒ぐ江戸中の野郎の、気が知れねえつてだけのことだけのことでさあ。」

「その、気が知れぬ旦那が、こうして朝つばなから騒ぎ立てているのだから世話はない。」

いかさま、かち源の言葉通り、安永四年、鳥山検校が、当時の吉原一の名妓瀬川を身請けした時は、相手が盲目だけに、江戸中は一時その噂で持ち切りでした。松葉屋では、途端に登楼客がドカ減りした位ですから、何とも大した人気のある女でした。余談ですが、蜀山人も「俗耳鼓吹」に瀬川の評判を詳細に書き立てた程です。

併し源六が、先生を相手に瀬川の講釈をするのは、些か釈迦に説法のたぐいで、観々堂先生、その実平賀源内が、数年前、風来山人の戯名の下に、瀬川の事は勿論、吉原廊の色道の機微を究め、傾城買いの奥儀を書きのめした酒落本を著した事を知つておれば、まさか源六も瓦版の受売りはしなかつた事でしよう。

「ところがその瀬川で評判になつた松葉屋の楼主、幸右エ門が、昨夜無惨な殺され様をしたつてんだから、吉原はまるで蜂の巣をつ

いた様な大騒ぎなんで——」

「フーム、前置きがすこし長いと思つたが、それを云いたかつたのじやな。」

「その通りで……」

漸くは先生は起き上つて、源六の話に耳を傾けました。何しろ瀬川の評判は兎も角として、松葉屋と云えば、吉原廊内でも聞えた大見世で、豪奢を極めたものでした。楼主幸右エ門は、有り余る身上から、女道楽は申す迄もなく、書画骨董、雑俳、諸芸全般凡ゆる道楽に凝つて、常時数人の妾を侍らした上、初見世の女は必ずと云つてよい位い、彼によつて味見をされると云う、金力でどんな横車でも押し通そうと云う名代の遊蕩児でした。

「その幸右エ門は、殺される直後まで、金づくで己れに願かぬ素人娘を、責めて責めて責め抜いていたんだそうで——。」

事件は昨夜の亥刻(午後八時)前の事だ。楼主の幸右エ門が、世にも怪奇な手段で、殺されていたと云う、大騒ぎが、吉原不夜城の一部に打ち上つたのでした。



### 桃尻の割目にローソクがゆらく

主人の幸右エ門に責柝檻を受けていた娘と云うのは、お小夜と云つて、器量抜群の初々しい、花の蕾なら綻びかけの、まるで京人形の様なおぼこ娘でした。金でどの様にでもなる娼妓に飽がくると、彼は土地の無頼漢を使つて、有り余る財力にものを云わせて、専ら江戸中のこれと云つた素人娘を、身を沈めずにはおかれぬ様な卑劣

な奸策を弄して、松葉屋へ引摺り込んで、無残にもふみにじり、閨房のあくどい悪戯で散々に犯し尽した挙句、飽きがくると相手の感情を水の様に突つ放して、サツと妓樓へ追いやつて酷使すると云つた、非道千万の行爲も、彼の死後判明致しました。

おそらくは草加在のお小夜も、こうして巧言、奸計にのつて、松葉屋へ引摺り込まれた一人だつたに違いありません。

手先の男達の言葉を真に受けて、女中奉公と思つて来たのが、遊蕩児の餌食と分つて、すきを窺つて逃げだしたものの、土地の勝手分らぬ悲しさで、忽ちに追手の者に捕つて、それから云うもの、幸右エ門は已れの意に従わぬお小夜を、廊の掟を楯にとつて、妓樓の奥に新築した、豪奢を極めた離れ家の、さながら伏魔殿の如き二階の一室に閉じ込めると、夜風となく、責めさいなみました。

当時の廊の私刑として、逃亡とした女が捉まると、再び逃亡するのをおそれ、女を腰のもの一つの半裸体、又はすべて剃ぎとつた全裸にして、狭い部屋に押し込めて絶食せしめたり、縛り上げて、縄目が皮肉に喰い込む迄囑居に吊し上げたり、又は大きな酒樽をすつぽり女にかぶせて重石を置き、三寸四方の食餌の投入口を造つて握り飯と古沢庵で、女が餓えて悲鳴をあげる迄閉じ込めたものです。しかし情痴に飽いた、幸右エ門の折檻は、その様な生易しいものではありませんでした。庄柱に体を逆さにガンジガラメに縛りつけられ、腰がそれ自体の重みで前に折れて、腹の皮はよじれ、キリキリと背骨も折れん汗りの苛酷極まる全裸り、露わに曝された素股のその桃尻

と深部に流れ込む激痛に、魂消る苦悶の呻きをあげ、その絶えいる悲鳴は、二階の密室を貫いて、太夫、女郎始め、牛太郎や遣手

婆の耳にも届き、その上、このお小夜の私刑の姿を、見せしめの為に抱えの女共一人／＼に見せつける幸右エ門は、最早完全に常軌を逸した、暴虐、嗜虐を愉悅する男となり果てゝいました。

熱膿の滴が、桃尻を伝つて流れ込む灼熱の苦悶、身悶えすれば倒れたローソクが已れの皮毛をチリ／＼と焼け爛らす地獄さながらの責苦を眼の辺りに見て、女共は恐怖に慄き、中には卒倒する者もある始末で、同性のこの眼を蔽う私刑に、女共は等しく、心底より幸右エ門のこの行爲を呪いました。

既に自由を失なつたこのお小夜の肉体を、彼はズタ／＼にふみにじり、意の儘に凌辱の限りを尽した事でしょう。しかも今尙嗜虐の手をゆるめず、私刑の埒外を脱して、今は唯、責めるその快びに、幸右エ門はヒタ／＼ひたりきつていたのです。

その夜も、高価なギヤマンの鏡を四方にはりつめた部屋の、緞子の吊夜具に寝そべつて、絹行燈の柔らかな光の下で、赤い酒を含んだ幸右エ門は、滑車によつて逆吊りにした、目前の苦悶にうねるお小夜の全裸の柔肌を、眼を細めて打眺めつゝ悦に入つておりました。思い出した様に手許のなめし革の鞭をしごいては、その玉の肌に桃色の曲線をつくり上げ、纏れ絡んで垂れ下る緑の黒髪を、くる／＼手に捲きつけると、無惨にも振子の様にお小夜の肉体をゆさぶりつけてるのでした。

「いやもう全く、聞いただけでも、クラ／＼と眩暈のする様なむごたらしい仕業で、お小夜の寿命も、この調子では今日明日の風前よ——」

「フーム……」



流石の先生も思わず唸りました。源六の仕方話、余りにも濃艶怪奇を極め、残酷無惨過ぎたからです。

「お鉄が酒を運んで、それから半刻汗りして、番頭の伊之助が、火急の要件で、気兼ねし乍ら、離れ家の二階の主人を呼ぶべく、妓樓からの渡り廊下を通つて、その時フト何気なく、数寄を凝らした離れの庭先を眺めると、夜空に大きく聳える松の古木の、突き出た枝に、何か黒いものがブラ下つてゐるのが見えた。ヘンに思つて庭下駄をつゝかけ、近づいてよく／＼見ると、何とそれが主の幸右エ門の宙ぶらりんの姿だつたんで——。已れがお小夜に行つたとそつくりの逆吊りの恰好で、松の枝から地上一尺程の処に、頭を下にしてブラ下けられて死んでゐた。両足首を縛つた縄の端は、松の根元を二廻りしてくゝつてありましたよ——」

「フーム」

観々堂先生はもう一度、大きく。唸りました。源六の話は愈々複雑怪奇を極めます。

「ところが驚くのは未だ早いんで。……もつと凄いくことに、幸右エ門の死体は両眼共、何か尖つたものでぐさりと突き刺され、眼の玉が潰れて、右眼から流れ出た赤黒い血が額半面を染めた上、腰の辺りまで垂れ下つた着物の合間から覗けた男の急所の尖端に、彼が日頃使つてゐた象牙の箸を、小便袋迄も通れと許りぐさりと突き立てられて、不夜城の夜空を染める仄明りに、醜くし、太く直立して、散々に女を泣かせ尽した名残りを留めて、黒々と夜空をにらんでいた——」

「物凄いくことになつたな——」

「吉原廻りの岡ッ引でつむじの道入の下ッ引が、早速知らせしてくれ

ましたよ。道入親分じや手に負えねえから、源六旦那に是非共御越し願ひたいつて云つてね。」

「ホホウ、何時の間に旦那、大それたなくえらくなつたので……」「へへ、そのあとがいけませんや。落さないが、一ツ走り先生を呼んで来て戴きたい——と、こうなんで、くさつたネ。」

その癖、源六は一向にくさつた顔付でもなく、敬愛する我が先生の名が、吉原界隈までも響いてゐたのを、心から嬉しそうにする、愛すべき男でした。

「では今の話も、道入からの受売りかな」

「いえネ、つむじの道入には、先生は火急の用事で、明日でなけりや来られないと、こう云つて、昨夜チョイト下検分をして来たつてわけで——、時によつちや嘘も方便で……」

「道理で、昨夜は矢鱈にくしやみが出たよ。精々噂をしておつた事じやろう。まあ／＼そこ迄洗い出して参れば上出来と云うもので。では茶漬なとかき込んで旦那の嘘の化の皮がはがれぬうち、ボツ／＼出掛ける事にしようかの。」

こう云つて先生は、やつとみこしを上げました。



### 枕絵襖の部屋にうごめく裸女

松葉屋の大層もない大見世の、門口に待ち兼ねてゐたつむじの道入は、先生と源六の姿を見出すと、ホツとしたのか、緊張した顔を綻ろばせて二人を迎え入れます。

「つむじの——、あつしからも話しておいたが先生がもう一度よー

く訊きたいそらだ。すまないがチヨイとかいつまんで模様を話しちやくれまいか——」

「あゝ、いゝとも。満足にや喋れねえが、手掛りになりや幸い。先生実は……」

と小腰をかがめて語る道入の見聞も、大体源六と似たり寄つたりで、源六の言を裏付けするだけのものでした。

聞き終つて先生は、道入の案内で仏を寝かせてある離れ家の居室に通りました。殺された幸右エ門の死体は、ギヤマンの鏡に取囲まれた豪勢を極めた部屋の、中央にのべられた絹布団の中に、深々と埋まつて白布を蔽せられてありました。生前の悪虐非道を知つていてか、彼の死を心から弔う者とてもなく、白々しい面持で数人の近親の者が、義理厄介の様に店に居並んでおります。

松の枝に逆吊りされた幸右エ門の死因は明らかに絞め殺されたものに違いありませんが、おそらく下手人は彼の油断を見すまして、その眼を突き刺して昏倒せしめ、その上で絞め殺したものと思われ

ます。しかし幸右エ門の死には、色々な謎を含んでいます。

先づ第一に、ギヤマン張りの、己れの密室で殺害されたと思われる幸右エ門を、どうして下手人は、わざわざ手数をかけて松の大枝へに逆吊りしたのでしよう。

第二に、殺害される刹那まで、暴虐を悦楽していた彼の部屋から、お小夜の逆吊りの裸身が掻き消す様に見えなくなつております。

第三に、曲者は十五六貫もある脂肪太りの幸右エ門の死体を、二階の密室から庭まで、どの様にして運んで、又如何なる方法で高い松の枝に吊し上げたのでしよう。

第四に、幸右エ門の陰部に箸をグサリと突き立てたのは何を意味するのでしよう。単なる殺害にしては、そのやり方が余りにも残酷に過ぎます。無氣味に変色して直立した急計に静かに布団を蔽せ終ると、先生は深々と腕を組み、懸てそろりと山羊鬚を撫で始めました。

「平右エ門を逆吊りにした繩は……」

「へエ、これなん

で——」

傍らから道入が差し出したのは五



幾久蔵



丈近くもあろうかと思われる、太縄の束ねたものでした。

「人間一人軽くブラ下げられようつてな、井戸繩程の太いやつが、幸右エ門の部屋には、三束も四束も鴨居にかけてあつたそうで——」

嗜虐を好む幸右エ門の責道具として、これらの太縄は、幾多の女の肌に、蛇の如く絡み、喰い込んだに違いありません。

「それにしても大兵の幸右エ門を、逆吊りするのは容易じゃないな。どんなにしても、摩擦の多い松の枝を越して、自分より重いものを引摺り上げられるものではない」

「だから、こいつは幸右エ門を恨む者が、怨み重なつて数人押し込んでいつて……」

「離れの二階まで、誰にも見つからずに、数人の者が押し込めるだろうか？」

「と、わつしも思いやして、ひよつとすると、梯子かなんかで引揚げたものかとも思いましたが、数奇をこらした庭園には生憎と、梯子らしいものも見当らなかつた。」

道入は考えあぐねたキナ臭い顔をします。

「殺した重い体を、二階からかついで降りて、しかも松の枝へブラ下げる。こいつは一寸出来ぬ相談じやな。ところでお小夜の行方は——」

「さあ、そのことで——これはあつしの考えですが……」

こう云つて、しやしやり出たのは源六です。



潜り門から逃れ出た……」

「チヨイト待つた。ところが庭の潜りはうちから錠がかゝつていて近頃開けたことのない証拠に錆びついていた。庭園の塀はあの通り一丈の高さで、逃亡をおそれか足掛りもない。それに、塀の板に点々と血痕が飛び散っているのが合点が行かねえ——」

道入は傍らから源六の考えを覆えします。

「素裸のお小夜を連れて、まさか吉原は歩けまいしろう。それに死体には、庭土が全然附着していないとなると、幸右エ門の死体は全然地上には触れなかつたと云える。」

先生は立上つて、庭先に面した窓を開くと幸右エ門の吊された松をじつと見入りました。二抱え程もある老松は、枝を一杯に拡げて形よくかり込まれてあります。

「人間の体を引き上げるのは骨だが、二階から下へ両足を縛つてぶら下げるのなら一人でも出来そうです。下手人は幸右エ門を殺すと、その足を縛つて二階の窓から一旦庭園へそろくブラ下げて降した。縄の一端を窓に近く突き出た松の枝にひっかけると、お小夜と下手人が縄の一端を体に結えて窓から飛び降りる。その重味で幸右エ門の死体はズル／＼と松の枝に引き上る。下手人とお小夜は、庭の

昨夜幸右エ門の死体を発見した番頭の伊之助が、呼ばれたのか間もなくギヤマンの部屋に現われました。商売柄卑屈な物腰ですが、芯はしっかりしているらしく、三十五六の色白ですが、案外ガツシリした体つきのいゝ男振りです。度々訊問を受けたのか彼はスラスタと激みなく、心持ち迷惑げな面持で語りました。

「女街の丑松が連れて、掛合いに参りましたので、一応話を聞きました上、前借金のことにつきましては私の一存でも参りませんので、主人にお訊ねするべく、離れに参ろうとしまして、フト渡り廊下から何気なく庭先を眺めますと、松の枝に黒いものが……」

「よし／＼。ところでそちは、主の幸右エ門が、兼々女を虐めて悦び、死に勝る辱しめの限りを女に与えていたのを知っていたか」

「ハイ、薄々は存じておりましたが、私とても主に雇れの身でありますれば、御意見なんぞ申せる筈は御座居いせん」

「御内儀は？」

「二度許りお迎えになりましたが、主のなされ方に蒼ざめられて、お二人とも三月とは持たずお戻りになられ、それよりは定まつたお内儀もなしに、それをいゝことに次から次へと女を変えられました。唯今では三人の、妾と云うには、なんとも非道い仕打を受けて、この離れの夫々の部屋に囲われております」

番頭の伊之助は苦々しはに、屈辱的な顔付で答えるのです。それは情痴と暴虐に明け暮れた主人の死に対して、一片の同情のかけらも持たない態度でした。

「その女達は昨夜どうしておった」

「ビーンと入口から錠をかけられた怪しげな部屋の中で、一糸纏わぬ素裸でうごめいていた事でしようよ。でもまあ近頃、お小夜とか

云う女に主人が躍起となつてゐるせい、こゝ暫くは鞭の御馳走も敷かないので喜んでおる事で御座います」

幸右エ門は、奸策を弄して手に入れた女達の逃亡を防ぐ為、赤裸に剝いて、牢獄以上の生活を女達に強いていたのです。それは最早言うに忍じぬ、人間の価値を一顧だにしない、悪徳の限りを尽した所業でした。瓦版にまで騒がれている瀬川ですから、その女の誇を彼の為ズタ／＼に踏みじられた挙句の果、嫖客の相手をさせられたと知れば、おそらく江戸市民は心から幸右エ門の所業を腹一杯に憎くんだ事でしよう。

先生は伊之助の案内で女達の部屋を廻りました。

逸早く気のきいた誰かに与えられたのか、薄ものを纏つた、見た眼には艶になまめかしい姿で、それでも一樣に安堵の色を浮べた顔付で、入口から覗き込む先生を見上げるのでした。

慌てゝ蔽う足首に、生々しくも喰い込んだ縄跡の女お新——。

毒々しい色彩で部屋一杯に描かれた交情の枕絵襖に取囲まれた中で、顔赤らめる女おくみ——。

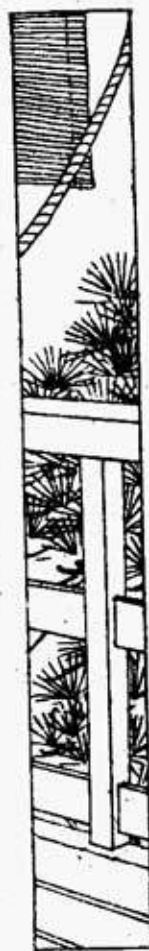
手枷、足枷、金鎖が転がり、壁には笞杖がブラ下つてゐる凄惨な部屋の中に、鞭あとの傷も痛々しげに、痛む女体の置場に悩むお勢の乱れた姿——。

どれ一つ取り上げても眼を反けなくなる様な、嗜虐に狂う男の哀れないけにえに、先生は幸右衛門を殺した下手人より、殺された幸右エ門自身に激しい憤りを感じ、死者に鞭打つ氣持にかられて、グサリと男の急所に象牙箸を突き通した、下手人の氣持が判る様な氣がするのです。

罰されるのはむしろ幸右エ門その者で、先生は、この下手人を探



すのかつくぐ厭な気持ちになり、出来ればその儘引揚げたい様な、むしろな腹立たしい気持ちに駆られました。唯事件そのものを解決すると云う興味だけが、辛うじて先生を松葉屋に引留めていたのです。



### 男を逆吊りにしたのは女?

検屍の結果、幸右エ門の死の刻限は略々亥刻前（午後十時前）と判明しました。

幸右エ門が殺される直前に、酒肴を運んだ下働らきのお鉄が一応怪しく疑われて取調べを受けました。四十過ぎの鈍重な感じのするそれだけに根は正直そうなお鉄は語ります。

「そつと襖を開けますと、眼の前にお小夜さんが体中みみず腫れに腫れ上つて、素ッ裸で逆さに吊されてるじやありませんか。とても真ともには見ておられませず、酒肴をそこへおくとソコ／＼に戻りましたよ」

その言葉を裏付ける様に、下働らきの四名の女は口々にお仲の殺害時刻の不在証明を申立てます。その頃は、丁度吉原大門内は最も出盛りの、活気のある刻限で、遊客でさながら松葉屋は戦場の様にごつたかえしておりました。

施え女十八人のうち、三人の大夫始め、格子女郎、局女郎の一流どころから、散茶女郎梅茶女郎の連中まで夫々に、相客をとつて同衾或いは痴戯にたわむれており、茶女郎三人許りが白首を曝して客待ちの有様で、治介、新五郎、華松の三名の妓夫太郎はこゝをせ

んどと表で客を引つ張っており、遣手婆も標客との駆引に渋茶色の声をはり上げて、忙がしく、十三階段を上り降りしておりました。下働らきの女はひつきりなしの酒肴運びに忙殺され、お鉄も交つて料理を運んでいた事は、料理番や女郎も口を揃えており、一応嫌疑の粹から外されました。

番頭の伊之助も勘定場にずつと座りきりで、女衞が訪ねてきて主人を呼びに立つまで確かに店に居つたと、これも妓夫太郎の華松始め、茶女郎の証言です。

「先生、下手人はどうあつても勝手知つた松葉屋内のものに違いありません。お帳場を通らねば離れに行かれず。しかも離れへの出入口は楼の方からだけで、庭先の方はしめつきりだ。まさかあの高い塀を乗り越えたとも思えね、第一淋しいところならいざ知らず、織る様な人混みで、あの塀を泥棒の様に越えられるものじやねえ」

「勿論、下手人は内部の者じや」

「えつ、判つて居るですか。どいつがやりましたんで——」

「まあ待て、幸右エ門を怨んでいた者となると、おそらく松葉屋全部の者が恨んでいた事だろう。こゝの抱え女すべてが、幸右エ門の為に鬨りものにされた末客をとらされていた事は確かだ。一人として主人の事をよく云うものがないからな」

「……………」

「卑怯な手段で、金と奸策と、悪らつき女衞を手先に使つて、可弱い女を無理強いに苦界に突き落とし、己れの厭意を散々満足させた上飽きれば店へ追いやつて骨の髄迄までしやぶり啖おうとする。その金で己れは眼に余る豪奢を極める暮しをして、蔭に泣く女共を虫けら程にも思つてはいない」

「全くその通りで——」

「人間の面を覆つた鬼富の如き男を殺した、下手人を捕えて、それで旦那、矢張り手柄にしたいかな」

「……………」

「弱い者いじめの嫌いな旦那の事じゃ。まさかいくら役目柄とは云え、人非人の幸右エ門に、それ程迄にして尽してやる事もなからう」

「どうも先生にそう云われりや、源六も江戸ツ子だ。あつさり諦めて手を引きませ。だが謎解きだけはしておくんさい。こうなりや今輪際下手人の名は洩りさねえからよう」

「まあそう力むな。下手人は女だよ。そして共犯も分つておる」

「誰、誰なんで？」

「しーつ、道入が聞くとに限らぬ。まあせくなく。それにお小夜も多分こゝのどこにかかくまわれておる筈じゃよ」

「なんとねえ、あの、女が幸右エ門を逆吊りにしたんで——。女が奴の急所に象牙の箸を突き立てたんで——ヘエツ」

「男なら刃物かなにかでバツサリやるよ。眼玉をえぐつたり、急所に箸を突き刺したりする熱念のやり口は女に案外多いものじゃよ。」

——旦那、帰ろうじゃないか。道入親分にや気の毒だが、こゝは一番諦めて貰う事じゃ、親々堂も薩張り分りませぬと丁寧にそう申して来なされ、割合いに物判りのよさそうな男じゃからな——」

先生は割切れぬ顔付の源六を後に、スタ／＼と松葉屋の、たつた一日で急にさびれた、それだけに構え許りがやけに大きく感じる、妓樓の門を潜つて外へ出ました。夜に引換え、風見世のなんと白茶けた佗しさでしょう。

門口で葬儀の準備に黙々と働らく伊之助に、ヒョイ近附くと、先生は気軽に声をかけました。

「跡片附が落んだら、松葉屋から薩張り足をぬいて、好いた女としてくりと、どこかで世帯でも持つ事じゃな。死人に口なし、菩提を葬らつてやるのがせめてもの功德かも知れぬてハハハ、御邪魔をしましたな——」

ハツと顔色の蒼ざめた伊之助に、再び振り向きもせず、あたふたと追いついた源六と肩を並べて、先生の姿は吉原大門の彼方へ飄々と消えて行きました。そつと手を合した伊之助の姿を恐らく先生は知らなかつた事でしよう。



### 女程思いきつた事をやるものぞ。

「下手人は妾●おくみとか云う女じゃよ。猥らな枕絵襖に取囲まれて顔を赤らめていた女じゃ。相棒は伊之助——」

「でも伊之助は別として、部屋に錠とかけられたおくみがどうして又——」

「伊之助がおくみの情人、旦那に云わせりや「夕顔」とか称する隠し男だとすれば、部屋の合鍵をつくる位は造作もない事。おくみの部屋を覗いた時、女の眼がチラ／＼と落付きなく、どぎつく描かれた袋戸棚の方へしきりに走る、チラリと戸の隙間から洩れた黒髪、ハハンと思つたな、手口から見ても男らしくないと思つておつたが、お小夜をかくまっていたとなると、幸右エ門の部屋に忍び込んだのはおくみに違いあるまいと思つただけの話さ、帰り際チョイト伊之



助にカマをかけると、奴さんてつきり顔色をかえたよ。相手の顔色をよむのがこのわしの本職、造作もない事じゃ」

「幸右エ門はどうして吊したので——」

「二階の窓から松の枝迄と、逆吊りされた縄の、松の枝から幸右エ門の縛られた足首までとの寸法がほぼ一致しておつた。幸右衛門を殺すと、おくみはお小夜と二人掛りで窓口まで運び、主人を呼ぶつもりで来た伊之助に縄の一端を枝を通して松の根元にまく様頼んだ地上と、窓口から枝迄の距離を計ると、枝から垂れた一方の縄をしつかり根元に縛りつけ、女二人は窓口から死体を放り出したのさ。弾みのついた死体は一旦向うの塀に当つて、鮮血を塀にそそぎ、数度宙に揺れてダラリと予定通りブラ下つたのじゃよ——」

「へエーッ、思い切ると女もこわいねえ」

「そうさ。伊之助とおくみは今頃在所の下総へ楽しく旅をつづけている事じゃろう。これがその置手紙じゃよ——」

伊之助の残した置手紙によれば二人は筒井筒の幼馴染でした。離れ／＼に十数年、それが運命の悪戯で、松葉屋で邂逅すると、二人の仲は急速に進みました。それだけに意の儘にならぬ幸右衛門は、お小夜に勝るとも劣らぬ責め折檻を日夜続けました。凌辱の限りを尽された上おくみの恥部は烙印を滅多に押されて見るも無惨に、むごたらしく焼け爛れ、女としての一生の幸福を奪いとられたのです。

膿みたゞれて悪臭を放つ下腹部の激痛におくみは遂に恐ろしい復讐を誓いました。伊之助に事情を打明け、二人はその機会をねらつておりました。その夜、伊之助はそつと赤い酒に眠り薬を入れたのです。お鉄の運んだ酒を含んだ幸右衛門は、お小夜の逆吊りの裸身を前にして酔いと眠気に混沌してウツラ／＼としていました。かね

てそつと錠を外しておいた部屋から糸纏わぬ姿で、おくみは忍び出しました。幸右衛門の密室を窺い、大丈夫と見て忍び込んだおくみは彼の膝元の膳部の上の象牙の箸をとるなり早く、ぐさりと右眼を突き差し、アツと昏倒した幸右衛門をいきなり、お小夜を縛つた縄の端で喉首を力まかせにしめつけたのです。逆上したおくみは、既に息絶た男のクワツと見開いた左眼をも貫き通し、最後に己れに与えられた数限りなき凌辱の根源を目がけて手に握つた象牙箸を突き立てると、半死半生のお小夜の縛めをとき、その縄で幸右衛門の足首を縛り上げて松の枝に逆吊りにして、お小夜の恨みをも晴らしたのです。

伊之助が庭に出て、幸右衛門を逆吊りにする仕事を万端手伝い終り、二人が引揚げのを見届けて、騒ぎ立てたのは云う迄もありません。他の二人の妾達の部屋も逸早く開くと着物を与えておくみの部屋のみ錠が外れているのを隠蔽したのも伊之助の仕業です、妓樓の者が一人として伊之助とおくみの間柄や、伊之助の事を云わなかつたのは、彼の日頃の人柄にもより、又互いに不利な証言をして不幸にならぬ様いましめ合つたのでしよう。それは弱い虐げられたものゝせめてもの抵抗でもあつたのでしよう。

「なる程ねえ。殺した人間より殺された人間の方が何層倍も悪いとなると、お上の掟もむつかしくなりやすよ。今度はつく／＼と考へさせられましたぜ——」

「女は思いつめると怖いものじゃ。旦那も罪をつくると、こいつは決られるどころか、バラ／＼にこま切れにされんとも限らぬて——」  
「へへ、薩張り女に縁のない方で、その点安心でさあ——」



# 陸軍御用達千夜一夜

松 本 公 惠

## (御用達の顔役の話)

戦後あらゆる雑誌が軍人の見た軍人だけの知っている戦記物が書きつくしてしまつた観が有りますが、軍隊の中へもぐり込んで軍人の内幕を民間人が赤裸々に暴いたのはこれが最初でしょう。逆コースで又も軍隊が出来かゝり早いところでは中西順子の警察予備隊汚職事件が起りました。私の実家も昔通り予備隊出入商に返り咲いた様です。祖父の代から三代、明治二十年頃から終戦迄、祖父は払下商を専門に、父と私は納入を専門に、全国に支店出張所を持ち、盛大にやつていたものです。大平洋戦争が激しくなると昔からの私達御用商人の外に臨時の御用商人が随分増えましたが、私達には部隊毎でなく一枚でどこでも入れる門鑑と動員請書という機密書類を何

十通と私金庫に保管し、夜中でも部隊よりホの七号動員と暗号電話がかゝると、早速書類を取り出しホの七号を見て、動員が下つた時間から、早いので五時間、おそくも四日間位の間にその書類の中の品物を取揃えて納める訳です。

五時間以内に入隊してくる兵隊を整理する木札二百個とか荒縄百巻とか、二十四時間以内に晒四千反とか蹄油百八十缶とか、いやその忙しい事、納期日時迄に納めれば価格は取り放題と云う、まるで商人の腕の見せどころこれ程面白い商売は無かつたと思つています。動員以外の平時では、競争入札で新製品でも修理品でも、現物或は設計図を見せられてその場で五六人の私達商人が思い思いの価格で入札する訳です。一方払下商人の方では全国に何百人といいますが、その中の七人が地方

毎に一つのブロックを作り、一人の親分の下に息のかゝつた連中が、毎日の官報を見て、今月は弘前、来月は宇都宮、先月は大連と、ぐるぐるまわつていたもので、祖父の勢力圏内では、祖父をかこんで五十人位、名古屋に入札に行くと、祖父と主だつた者十人位とその土地の伊藤顔役の四十幾人と競争入札をしたもので、祖父の様になると引つれる連中の入札保証金立替その他すぐく資力のいる役で父の組の誰かに落札すると二度目の入札を商人だけでせりなぞやつて処分したものです。

## (刑務所と張りあう話)

平時五六人の顔なじみの連中は先ず経理室次いで兵器委員室、靴縫工場、酒保、門室、蹄、車工場、最後に炊事とどんな日にも二三ヶ所で仕事がありますから、各部隊毎にこれ



だけの係員のいる場所へ順に顔を出したものです。そりや時と場合で本気で入札もしましたが、大半は係員の居る目の前で堂々とカンニング良ろしく談合入札というインチキな見積をやつたもので価格であろりと、その利益の配分方法であろりと目と目、指と指で完全に打合せをやりおわしたのですから、まつたく神業でしょう。実際の所競争くじや共倒れですからね。しかし此処に私達と同じ様に仕事をする刑務所という強敵が現われたのです。私達の修理価格を見てその五分の一位の値で下請して行くのですが、そりや競争しても初めから私達の負けにきまつて居るでしょう。

私達の使う職人は一円五十銭から三円位迄の日当を支払っているのですが、彼等の使う職人は囚人ですから日当十四銭ですみます。だから、それ騎兵隊で馬具修理品がトラック一台出たと情報が入つて飛んで行くと、青い服をきた囚人がサーベル下げた御主人の指図で喜々としてトラックへ積み込んでいる仕末です。指名という無競争だそうで諦めて帰つて行くのですが、或る朝偶然にその価格を見ると私の一円の落札値のすぐ下九十七銭と云う価格なのです。それじや私達とほとんど変

らないし本当の所を申し上げますと修理品には補修材料がつくのですが、この材料が係員と掛合次第で、横流しするとすごく利益が有るので本気で競争すれば七十銭以下でも出来るのです。畜生と思つて尙良く調べると彼の方でも私達以上に新しい皮革を補修材料としましてゴツソリ持帰えつて居るのです。この点をついて強く掛合つても、係員がさつぱり話にならないのです。経理室の主計大尉に直接話しても矢張り駄目です。だまつていると仕事を慾張つてとり過ぎて納期に持込めずぶらぶらいつていながら、それでも後からく注文を取つて行くのです。さあ納らないのは私です。あたつてくだけろと経理室の最高員の首座という職名の或る少佐にぶつかつて見ました。

「そりやあいては国家ですから多少はかまいませんが、納まらない程注文をうけてフーフー云いながら、まだ仕事を持つて行く、しかも価格は私達と同じとは馬鹿にしてますよ。毎日何十年と出入りしている私達より泥棒会社の方が可愛いのですか、軍隊はドロボーの後援会同様じやありませんか」

まつたく若気とはいへ実にこの通りの言葉で掛合つたのですから乱暴ですな「馬鹿者！」

と一喝どなられたら、後はどうなる事やら、まわりの者もハッとして私の顔を見て唾をのみ込んだ事でしよう。ところがこの少佐じつと私の顔を見て

「面白い奴じや、よし話はわかつた」とカラ／＼と笑い出したのです。それ以来この刑務所仕事は従来通りの価格で数量も限定されませんでした。本当のところは喧嘩出来る原因が有るのですよ。主計さん、係員とも刑務所の係員とナアナアで刑務所の作つたズボン、靴その他を無料でもらつて居るのを、刑務所の事務員の清子嬢とランデブーしながら桃色スパイになつてもらつて資料を握つたのです。

### (氣を失つた女学生の話)

私達の日課の中で一番嫌なのは、月一回必ずあつた検便日なのです。出入商人は一人残らず当日きめられた時間に喀痰と糞塊を持参するわけです。二月にどこかでやつて合格したらその証明書で他もOKといけば良いのですが、そこが隊ですね、各隊毎にやるのですから私の様に受持ち部隊数七回もあるのですから、なかの一回位は酒くさい下痢便も有りますよ。下痢便だと次の検査日迄入隊止めとハッキリして居るのです。

検査日が重なると一塊の糞棒を幾つにも切つて荷札をつけて、食物と書類と糞包が同じ鞆の中に仲良く藏われて持つて歩るいたものです。

若い娘さんなど、初めてなので、僅かで良いの、こんもりと持参して、M官に「あんたは可愛い、顔をしているがこの方は立派ですわ」と冷かされて真赤に成つたものです。

或る日時間いっぱいM室へ駆け込むと、なんと途中よつた彼女の家へ置忘れてしまつたのです。引返す時間も有りません。なれたもので、前の列の仲間に「オイ頼むぜ」と云うと、ちよいと輪切りにして一切頂戴という訳です。もらつた一切を包み直していると蚊の泣く様な声で「ね、すみません私も忘れて困つてますの、少し貸して？下さいません」と兼ねて顔知りの酒保のシルコ屋の若奥さんの声、承知してその又半切を包んでやると、その後の御礼の言葉が傑作だね、「忘れたと気がついて急には出ませんものね、本当に助かりました。此の次は倍にして御返しいたしますわ」

次の日オート三輪に納品をつんでM室へいったのですが、この日の珍事は実に愉快で当日は早朝から勤勞奉仕で土地の十七八位の女

学生が何十人と入隊したのですが、セーラ服に包まれた乙女達が宮庭のあちら、こちらを歩きまわると、これが実に良い刺戟に成つて兵隊の能率がグンと上るそうです。さてその群の中の四人の女学生がキャツ／＼さわぎながら、M室へ現われたのです。M室の垣根の中へ入るなりウンと云つて、四人とも立ちどまつてしまつたのです。無理もないので、パット目の前に展開した光景は、第一大隊全員の花柳病検査日で千何百の若い男が、身に一布もまとわず、真裸で背をむけて、ズラリと四列に連んでいるのです。しばらくして一人の兵隊が、此の女学生達を発見したのですね大声で「氣をつけー」とどなたからたまりません。ピンと不動直立。次に右むけ右ーと号令がかゝつたからたまりません、ザーザーと肌のすれあう異様な音響を発して全員右むけ右。キャツ／＼という悲鳴、目の前の何百何千のベニスの砲列を見て、メガネをかけた女学生が仰向けに倒れてしまつたのです。同じ形の物が沢山一度に目に映ると泡を吹くテンカンと云う困つた病が有りますが、そうじやなく余りにすごい刺戟に腰を抜かしたのですから罪は号令ですね。犯人はわからずじまいでしたが、しばらくは笑が止りませんでした

### (女人献納の話)

係の全部が全部と云う訳では有りませんが、私でなくてはという係員も沢山居ましたが、二十点入札する品名があると十五点発表して残り五点は無競争で私へ指名して呉れたものです。倒えば靴の半張りを、その式で納入して価格は二割位の利益をのせて行くと、その価格で勿論OK、ところが次の日は、二割のせて全部で六百円利益があると、その利益計算をいとも正確に計算して来て、ちやんと二百円請水してくるチャツカリ工長がいるのですが余りに靴材料の価格は正確なので、よく聞いて見ると何んと、私の仕入先の東洋製靴の店員が前職だつたのには驚かされました。

もつぱらこの現ナマ受領は世帯持ちで、独り身の係員ともなると、予期しない夜の八時頃、料亭あたりから「和ちゃんいるか俺だよすぐきてくれ」と呼び出しが有るのです。これは一名待合召集といつて公然と親父の費用で遊べるので楽しいものでした。早速いつて見ると先によんだ五六人の舞妓(ゲイシャ)を入れてさわいだとみえて座敷の中は落花浪藉その中で二人の芸者を抱えていとも御満足の



てい。一人は彼氏の、あとの一人はなれたものでチャンと私の好きな女を待たせて居るのです。一人で泊るのは淋しいから、つきあえというわけですね。すでに御床入り、彼氏十分楽しんで十一時に営内へ、私は朝帰り。その夜の費用は全部私持ちという筋書なのです。なんといつても年に一度の軍旗祭、野砲隊では創立記念日ですね、各中隊毎に当日の為にチエをしぼつて子供の様に喜んで迎えたものです。私達もこの日を期待して居るのは、どんなに固い話のわからない係員でも必らず当日の酒席で仲良くなれる自信と計画が実行されるのです。出入商人の全員から寄附金をあつめて、営庭に舞台を作つて本物の芸人を沢山よんで見せる事に成つて居るのですが、寄附した商人には全員四合瓶と折詰を出して招待するのです。主だった私達五人位が特別委員となつていろいろ世話を焼き、午後には将校集会所で、全将校と同待遇で酒を汲みかわして打ちとけるのですが、この席が商人の入り込場所で腕の見せどころなのです。

この話の部隊の隊長は子爵の華族中佐で英国風の紳士でぜんぜん近より難いのです。さて当日は例の如く五人程の芸者を交えて始まつたのですが、芸者が連隊長のそばへ寄つて

もニコリともしないでニーユム湯呑につがれた酒をガブ／＼呑んで居るばかりです。

どこの隊でも酒の酔がまわつてくると猥談が初まるのですが、さつぱりそれも起ります。何んともなく白々しい空気がただよつて居ます。この時料亭の女将が副長の耳もとへ、まもなくお酒が切れますと、耳打ちしたのです。

これが有ると、副官が先ず上衣の釦をとめて「では皆さんこの辺でおひらきにして、表の演芸場のほうへ席がとつてありますから」てな事申上げるとこれで終りという事に成るのです。今日も例年通り、早速副官が立ち上つてやおら挨拶を初めようとすると、ヤレヤレと皆がつかかりして膝の上の芸者をおろしたり、ガヤガヤ立ち上つた所でかねて打合せの通り私達四人が「ちよつと御待ち下さい」と皆をとめて、裏庭から薙包りのフタの抜いたのをエツサエツサとはこんで来たのです。期せずしてすげえと皆が声を上げて嬉ぶ事、先ずはと隊長に柄杓で口迄山盛りで差出すとグツと呑んで、初めてニヤリと微笑を浮べました。それが合図でそれ呑めや唄えで帰えりかけた芸者連も仕方なく、くずれ初まつた隊長の傍へ行くと、ニヤリと笑つた口元が又堅く

しまつてしまふのです。ただ呑むだけですかさて私が副官に耳打ちするとニヤツと笑つて「本当か」とその耳打ちが隊長の方へ、その頃私は酔つたからだをかけ足で表の演芸場の舞台裏へ。実はこの演芸プログラムの事で進行係と少々争つたのですが、呼んだ娘手踊浪曲、万手、手品とレビューなのですが、そのレビューは真打ちだから一番あとでというのに私が一番早くプログラムの組んだのです。勿論私に考えが有るのですが、そのレビューの女の子を五人将集へ連れて来たのです。

カーキ色と日本髪のお酒席へ、舞台姿のままのバーマの若いのが短いパンツかなにかはいてさつと現われて、忽ち踊り出したり歌つたり、それが終ると、驚いて居る連中の中へ交つて酌をするやら彼女も呑むし、今度は隊長もすつかり喜んでしまつて女の子の肩を抱いたり、はては抱きあつて踊り出すという有様です。すると誰れもかれも、和ちやん話がわかるぞと、私にも酒の総攻撃です。終りにはこの英国風の紳士が、窓硝子をガラリとあけて、息子を出してジャ／＼小便をするという仕末です。わしは日本髪よりこの方が好きなのじゃと。

実はこの連中は私が自費でわざ／＼浅草か

ら連れて来た御座敷レビューの芸者なのです  
が、もつともらしく何々レビュー団と名をつ  
けたのです。まだ私の計画はこの位は序  
の口で酔にまかせて、彼女達の宿舎？　これ  
は待合ですが、夕方から自動車で将校さんの  
一部これには隊長も勿論加えてありますが、  
ここで二次会という事に成りました。

実はこの五人の女の中のナナ子は早いとこ  
ろ私が浅草で試食済みで、こちらに来ても契  
約済だったのですが、案の通り係員の希望で  
御座敷レビューの今でいう全スト迄はやりま  
せんが、彼女達も酔ったからやつたと云う事  
にして、ユルペンズダンスと云うきわどいの  
をやったところ、もう彼氏は納まりません  
ところで、係員と彼女達と一組ず々各部屋へ  
引こんだのですが、くさった事に隊長がすつ  
かり、ナナ子が気に入って。これじゃ隊長と  
私は一夜にして穴兄弟と成つてしまいました  
予定の五六倍も費用がかゝつて親父も驚きま  
したが一ヶ月もたたない内に倍にして取返し  
たのは勿論です。

### (四十人の妾を持つた工長)

随分変わったいろ／＼な兵隊さんにぶつかり  
ましたが、後にも先にも、こんな人は初めて

です。階級は万年準尉の縫工長なのです。召  
集で明日は入隊すると云うので、入隊前日こ  
の団地へ現われて、同じ町内の大下派出婦会  
に一夜厄介に成つた訳ですが、その夜事もあ  
ろくに階下の派出婦会長のフトン中にもぐり  
込んだのです。夜這と云う訳ですね、わきに  
寝ている御主人が目をさまして大騒ぎに成つ  
たのは勿論です。いくら何んでもこの人はて  
な事に成つて夜中の道路に放り出されてしま  
いました。行けども行けども宿屋は超満員で  
困り切つて私共へ来たのですが、まつたく大  
変な代物です。

最初に私と逢つた二年前に大変な事件を起  
した問題の男なのです。誰だつて出征前夜は  
僅かの時間をおしがつて奥様に十年分位の愛  
撫をするものですから彼の事でも二十年  
分位はやつたでしょう。太陽が黄色いどこ  
か真白に見える位、それでいてその日の内に  
他人の妻のフトンの中へ。

私が初めて逢つたのは砲兵隊なのですが、  
男ばかりのこの世界にこそ縫工場は別世界で  
どこの隊でも前職洋服屋さんや靴屋さんの兵  
隊工員のほかに女の人が十人位つとめて居た  
のです。ところがこの工長が着任すると実験  
的に今で云うとモデル工場というのでしよ

ね、男工さんは二三人に減して、女の人を三  
十人程に増やしたのです。十六位の御下げ髪  
から三十位迄の人妻迄、中に私も注目して二  
度ばかり映画に一緒にいったよし子という二  
十一の美人も入れて、砲兵隊の縫工場へ行く  
のは私達も楽しみな日課でした。

ところが僅か二ヶ月で工長は転任になつて  
しまつたのです。この職種では、めつたに異  
動が無いのですが、この報を受けて後始末に  
私も早速当工場へ駈つけて見ると、未修理品  
の山の前で残つて居る男三人と女二人が車座  
になつて座談会をやつて居る最中です。話の  
中心は工長さんの事です。私の中に入つ  
て、話をきくと実は今迄居た三十人からの女  
工さんは全部欠勤して居ると云うのです。し  
かも欠勤して居る女工さんは全部彼氏の頼だ  
というのです。頼とは兵隊言葉で、肉体関係  
のあつた女の事をいうのですが、二ヶ月で三  
十人一ヶ月で十五人、二日で一人。ハツと思  
つてよつちやんは、そりや居ませんわ、がつ  
かりして尙話を聞くと、二日に一人どころか  
一日に少い時で二人、多い時は五人位倉庫入  
をしたそうです。倉庫入りとは、もつぱら、  
倉庫の中で桃色遊びをする為に付けられた事  
なのですが、一日に五人も？と、不思議の



余り私が尋ねると、〃そこがすごいのだよ、病名は強直症とゆうベニスが固くなつた切りの珍病なのです、いくら女が嫌々しても、一旦暴力で彼が彼女の鞄に納めると、どんな感のにぶいのも、しがみつくといい魔力なのです。これあればこそ、相手かまわず振りまわすものですから、誰彼なしに、工長さん工長さんとなつてしまふのです。ではこの後日話をいたしましょう、転任とは表むきであまりに噂が高いので厄介拵になつたのです。ところが次の輜重隊へ彼が現われると二三日後にはあの消えうせた彼女達三十人も全部彼について転職したのです。ところがこれも三ヶ月で又厄介拵です。次が騎兵隊、ここは留守隊で一ヶ大隊程しかいませんでしたから、工場も男女共僅か五人。その中の男女が一組恋仲で、しごく平和にやつたのですが、ここへ彼が現われたのですが、さすがこの隊へ例の女工達は連れてこられませんが、着任早々年若いのが初弾を受け次の日には恋仲の彼女が、無理矢理に天国へ引ずり込まれたのです。僅か三人ですもの、欠配勝ちだつた三十人たちがつて満配に次ぐ特配。ここでも不思議な女の心理でこの一人の男を取り合つて争わず仲良く共有物にしたのですが、かねて恋仲の

男工が納まりません。ついに現場へ週番司令を案内したから、たまりません。即座に首でこの幕はあつさりチョンに成つてしまいました。これが二年前の出来事で、その問題の兵隊仲間では誰知らぬ男に成つていたのです。次の日無事入隊して留守隊勤務、知らない人が見れば金銭係と同じ灰色の職別章をつけていますが、なれない手付で算盤の手伝。勿論倉庫工場は近よるべからずと堅いおたつしです。窓から恨めしげに倉庫を見ると、何んと勤務奉任の婦人会員や女学生が何百と働いているのです。

### (ミス豆腐を巡る傷害事件)

私の家は口の中に入れる生物は一切納めませんが、炊事場にも用具を修理する仕事があるのです。炊事場に行くとき戦争中、とても家では口に出来ない、カツ類など、食べ放題という特点が有るのです。この話は戦争初期のことですが、毎日何千人分とたく御飯も副食物も十分に余計に作るのですが、実さい良加減なもので、又中隊から将校用の食膳を取りにくる当番などで、その将校を憎んで居る兵隊は、炊事場で散々悪口をいつて、そのあげく出来上つた食膳を持つて炊事場を出るな

り、その汁の中にベーツと唾をはき入れ、焼魚に鼻くそを塗りまわして、仇を討つていゝのを何度も見ましたが、非道い奴ですね、さしてフライなどは余ると困るので、食べさせて呉れますが、余つた御飯は湯気の出た温い内に残飯として、隊近くの豆腐屋へ払下げるのです。リヤカーを引いて引取つて家に帰えると、附近の奥さん達が何十人と手桶や鍋を持つて買いに来ているのです。此の数量が毎日浮動が有るのですから、炊事員とナアナアとうまくやれば、ごま化す事はこれこそ本当に朝飯前という訳ですね、男主人や使用人が取りに行くとき、キツチリ数量をニューム食器で何十ばい、ハイ何十食と秤られて話に成りませんが、その家の娘が行くとすごく甘い数量に成るのです。出戻り娘のこの女は、細目で男好きのする小柄な女ですが、何と云うのですでしょうか、顔もからだも雪の様に白い皮膚の持主で、誰がつけたかミス豆腐といわれていました。私に云わせればミスガンモドキですがね、いろ／＼な男の血が目茶目茶にまぜてあるところはガンモドキでしょう。上等兵の係官と適当にやつていたのですが、兵長が一人増えた事から話は面倒に成つて来ましたが初めは手のひとつも握らせたらしいのですが

ついには外出日に兵長殿の鞆になつてしまいました。三角関係とは良い結果は有りませんよ、商売可愛さからチョイとやつたのですが前より関係のあつた上等さんの方が好きだったのですね誘われて外出するのも五対一位の割合ですから兵長も面白く有りません。或る朝残飯数量のことで、コツビどく上等さんが兵長さんに締められてしまいました。叱つた次の夕方は沢山いる民間の炊事夫の前で豆腐屋の納めた油アゲの数量のことで今度は兵長がつゝこまれてマゴ／＼させられてしまいました。事ここに至つては戦闘開始です。古風ですがおのおの双物を持つて裏庭で決斗をしたのです。この物音に気がついて炊事夫が駈つけた時には、上等さんは顔と太腿を切られて血だるまです。傷害事件は不正納入迄あかるみに出て、ついに二人とも軍法会議によつて仲良く南方へ島流しになるし、豆腐屋は出入差人止めで、ようやく結末がつかしました。

### (面会日は桃色の林)

外地へ行くと内定すると、部隊では急に面会を許すのですが、若い新兵さんに逢いにくる両親との面会風景は美しい場面ですが、妻帯者や恋人に逢う連中のは、実に悩ましい限りで、いろ／＼珍話があるのです。或る面会日でしたが農家出の許嫁の娘さんが或る兵隊さんに逢いに來たのですが、面会所で衛兵司令から形の様に住所氏名をきかれ、終りにその兵長との関係は？、と問われたのですが、真赤に成つて下をむいた娘は何をいつているのか蚊の泣く様な声でムニヤ／＼と答えるばかりで一向司令の耳には聞えませんが、司令がちよつと大きな声で「関係は」と聞き直すと今度は一度大きく息を吸んで、ハッキリと「四回だけしました」聞いています司令のほろ／＼と思わずベンを落したからまつたく罪です。又特別に時間限外出というのがあるのですが、二時間位の内に二人で楽しもうとあせる彼等は、衛兵所の前も駈足で女の手を引いて走つて行つて叱られます。一名これを早射歩調と云うのですが無理もないでしょう。砲兵隊から兵器部へ近道して雑木林を横ぎると、その林の中はもう宮城広場どころの驚きでは有りません。早射ちが終つてホマレを一服して小休止という所でしよう、そばで奥さんがモンペをわきに乱暴に脱ぎすて、仰向けに寝ていたり。

### 【憲兵隊と警察の力くらべ】

近くの町や村に兵器庁とか飛行学校が出來ると、經理部の命令で私達はその新設部隊へ三ヶ月位泊りこみで仕事にゆきました。店から籍を抜いて軍属の資格で行くのですが、この話の兵器庁は航空弾薬を作る工場ですが、県の或る製糸工場から強制転業で女工さんが三千人位來て居るのです。男工さんは召集に縁の無い老ボレ組が四百人程です。そこへ毎朝近くの町の宿屋から出張するのですが、二十台の五尺七寸十八貫と云う立派な体格の私が行くのですから、もてなかつたら、その方が変ですよ。そんな体でどうして兵隊に思ふでしよう、そりや召集令状も二度來ましたが、軍の重要要員に付免除下されたく、と云う有り難たい証明があるのです。さて町から工場へ毎朝工員バスで行くのですが、乗る時は私と私と、いや服もちぎれんばかりに引ばられてバスの中へ放り込まれますが、このバスたるや中の座席が全然ないつり皮だけと云う珍バスで、その中に、ギツチリつめこまれて三十分もゆられて行くのです。ポケットの中に呼出ラブレターが三本も入つて居たり或る朝などは、散々太腿をすりつけられてその上、私の股間に手が這り込んで來たのです。どいつがな、とまわりの娘達も一人一人



のぞきこむのですが、どの娘を顔を見ると、嬉しそうにニヤリとするので、降りる迄ついに犯人はわからずじまいでした。この位ですから、工場の休みの日は御想像下さい。二回に一回は倦々して実家へ逃げ帰えるのですが、実家の有る駅へつくと、駅前の友達の前で自転車を借りて、知り合いの肉屋さんに寄つて、当時入手困難だった肉類を内緒で仕入れて親達におみやげにして居ました。肉屋の親父と世間話をしてさて帰ろうとすると表に置いた自転車が無いのです。表の子供達に聞いて見ると、その交番のお巡りさんが、かついで居つたよ、と云うのです。店へ戻つて肉屋の親父に聞いて見ると「又ですか弱りましたな実はこうです」といふ話をしてくれましたが、巡査の職務を利用して毎日肉を何百匁と買いにくるのだそうで、勘定はもちろん絶対に払いません。請求すると今度は、お前の家の牛肉は犬肉を混ぜてるといつて逆に叱りつけたとの事、私共ばかりでなく、酒屋も弁当屋も泣かれて居ると云うのです。よし俺にまかせろと、早速交番にいつて、何にか私の自転車で」とここ迄言ふと「何にかとは何んだ——貴様は道路法を知らんのか、道路上に何分以上物品を放置する時には、先に道路占

用願を出すのだ、自転車が欲しかつたら始末書を書け、貴様の住所はどこか」こゝろ乱暴に叱られました。「軍の命令で或る所に住んできますが働き先その外一切防諜上他言はいかんと憲兵隊より堅く注意が有るので申上げられませんか」と言ふと「軍、何にが軍だ。憲兵がどうしたと云うのか、この馬鹿野郎」と大目玉です。

心の中にシメタと思ひました。だまつてサと交番から表へ出ると、待てツと云うのを振りきつて、バスに乗つて一路憲兵分隊へ、当時の分隊長は京大出の若い人で、私も随分可愛がつて戴きました。が、その方の前で一切を御話しました。特に「憲兵が何んだ」と言つた所は何度も力を入れて。

カン／＼に威つた分隊長は早速署長を呼出すと、何事ならんと自動車で飛んで参りました。勿論すぐに交番に連絡して巡査は呼ばれて大目玉です。一時間も叱り飛して、今からすぐ引返して私の自転車を待つてこいと云うのです。青くなつてベチャンコの巡査は、こんどは静かな声で自転車の鍵を貸して下さい。持つて来ますからと私に手を差し出しました。その手をピシリとはいた分隊長は、「馬鹿者奴、先程鍵のかゝたのを背負つてい

つたじゃないか、かついでこい」と叱責で命令です。何んと交番から分隊迄バスでも二十分の道のりを、天罰ですね。しかも持ち帰えるが早いか當倉へ放り込んで、軍隊侮辱罪と云う名で処分されてしまいました。

ところが一ヶ月程たつて父が警察へ留置されたと宿屋に報せが有つたのです。話によると許可書を提出しないで皮革を切つて軍納した罪だそうで、当時は皮は切る前に許可願を出し許可がおりない内に一寸たりとも切れないう規約があつたのですが、許可願を出して半月以上たないと許可が下りないので。動員部隊に納入するのにはそんな、のんびりした事をしていると納まりませんし、軍納品ですから提出すれば必らず許可が下りるので。から、大丈夫だろうと思つてやつたのです。老いた父の留置なぞ考えても悲しい事です。すぐ警察へ事情を話にいつて掛合しましたが、一ヶ月前の事件の当人とわかつてか、話に成らないのです。私もこの助けを分隊長に願出て見ると、早いもので二十分もたない内に父は帰宅して来ました。

(もうかり過ぎてゲツソリした話)

# 行府参戸

— 物世見 —

伊吹慶太郎

納期さえ守れば価格は取り放題といつても余り無茶なのは憲兵隊から叱られます。市価三十五銭の庖丁を七円で百丁、二十四位のストップウオッチを百円で二十個なんて派手に納めて門鑑を取り上げられた商人も有りまして。平時納入する時は見積書を出し落札すれば、納入その時請求書提出、半月たつと銀行の口座に払込みになったのですが、動員の時は品目数量一切秘、しかも支払部隊はすぐ出

発ですから、納入と同時に請求受領と云うスビード支払ですので三割も利益があれば親父は喜びますので、それだけ報告して、別に一割位はハネたものです。芸者の玉代が一日一円二十六銭の頃毎日何十円何百円と現ナマが入るのですから、どこの番頭も妾を一人づつ持つていた位です。私などは好きだった半玉を水揚げしたまま待合に二ヶ月も泊りきりで枕元に電話を引いてそこから注文を取つたと

云う御乱暴です。係もそれが解ると待合に出張して来るので、酒と女を前にして商談成立と云う事に成りました。兵隊達は待合経理室といつて喜んで来たものでした。一方母が主力に成つてやつている、軍装品の販売部でも一度動員が下ると出勤迄店はあけ放しで、軍刀が売切れですと断ると、軍刀型の指揮刀迄それでよいと売れるという忙しさでした。



本書は一六九〇年（元禄三年）九月二十五日、我国に蘭領印度会社使節の医員として到着したケンプエルの江戸参府紀行（異国叢書）に「伊勢参りにつきて頗る奇怪の事を語れり。此者は其国の領主より参宮旅行の許可を得たるが、神聖なる勤行に際

して精進齋の戒を度外にして、途中公の娼と肉の交りに身を委ねたるが、かゝる乱行に対する神罰を受けて、この淫なる一对の男女は、相抱ける身体の位置にて十四日間（中略）千百の観覧者の眼に映りて、身体下方……云々」とある。

——サア御立会の衆、旅の恥はこの通り掻き棄てにはならないよ。因果はめぐる小車、この男女を見てやつてお呉れ。御伊勢参りの前の晩、ひよんな悪戯が神罰観面。モウずん

と離れまい。モウ離れまい、松の若木にひつゝいた絡み蔓。泣いている、泣いている。サアお立会の衆は何にも功德じや。中に這入つて笑つてやれ、笑つてやれ、千人笑えばヒュ



## ケンプエル江

## —神罰男女—

ツクリ、バツタリ、男女はもとの別々物。モウ十人じゃ、後と十人じゃ——

浜松の街道のはづれに、怪しげな小屋掛が出来て、野天を吹く晩秋の風が、ハタハタと薄穢ない庭を煽っていた。僧体の逞しい大男が、衣の袖をかい捲つて、汗だく／＼の長い口上。

往還の旅人、武家、商人。——これまた秋の日短に、気の永い大勢が、首を伸したり、腰を曲げたり、妙な魅惑に足を引止められてモウ黒山の人だかりだ。

「何にしろ珍らしい見世物だ。」

「中の男女は何者だろう？」

「御殿女中とお小姓だによ。」

「エッ。そりや面白れえ——本当か？」

「本当だろうと思う——。」

「置きやがれ。阿呆めが此の忙しい最中にまた人を担ぎよる。」

「忙しい旅ならトットと歩け、貴様こそ阿呆だがな。」

「インニヤ。此処へ野宿しても国の土産に見て歸りてい。」

——サア皆の衆、中の男女はモウ息が無えぞ。無くなるぞ。あけつ放して見るも法楽。見料は見ってからじゃ、見てからじゃ。タビの見世物と訳が違ふぞ。国の女ツ子や、女房娘に滅想も無えい、土産話だ。サア入つたり入つたり——

口上言いは、だん／＼口が荒くなつて、弁慶のような面構えを、鬼のように赤くすると先刻からぼんやりとなつて、足を釘付けにされてゐる十五、六人の人だかりを、勿体らしくキツと睨まえた。

——サア見たく無え者は道中の邪魔だ。退いた。退いた——

と天秤棒を持ち出して、ブーンと一と振り冗談と人気を煽る為めにやつた此奴の芸当が折り悪しく前の方に佇んで居た虚無僧の天蓋に一つボカリり当つた。

「無礼者ツ。」

と一喝——ブルツと震えて右手の尺八が、ヒューツと風に切つて空に弧を描くと、口上言いの脳天目懸けて発矢とばかり降つて来た弁慶もさる者、ヒラリと体を替して天秤棒を双手に取ると、苧殻の様に振り廻して、

「テヘツ。瘦浪人が——旅錢稼ぎの云い懸りなんざあ此の天秤棒で物を云つてやる。」

とブーンと虚無僧六尺ばかりも飛び上つて真向から打ち下す尺八の牙え。弁慶は薙刀ならぬ天秤棒を、大地に脆くも叩き落されて、おめ／＼四つに突く這うと、大きな手で天秤棒をまた拾いにかゝる——隙もあらせず襟首取られて、ギュツと蝦蟇の様に伸ばされてしまった。

虚無僧気持よさそうに——上へ悠々と跨ると、腰から太い煙管を抜いて、ボカリボカリ澄みきつた秋の空気の中に紫色の煙りを吐く「驚いたな。この虚無僧の腕前は——大きな坊主を手玉に取つて、背中の上で一服やつてる。」

「モシお武家さんえ——其のおたばこは国府ですか？水府ですか？」

「黙れツ。」

と大きく一喝喰わされて折角集つた気の永

いのは、

「ヒヤーツ。」と魂消て入方へ散つた。

「だが待たつしやい皆の衆——拙者。いま此の見世物の薙を払つて旅の衆に、タゞで覗かして進ぜよう。」

「エレ。ではこの見世物をタゞで見せて下さるとナ。」

「もとより。」

「有難い事で——オーイ皆んな此處へ集らんか。この御武家さんが此方等の懐中を少しでも痛めては気の毒と——この見世物を買切つてタゞで見せて下さるとよ。」

「そりや本当か——豪気なもんだなあ。」

「コレお前達騒ぐで無いぞ——この虚無僧様を誰だか知つてるか。江戸は小石川小日向合千石取の御旗本の御次男だぞ。故あつて親御の許を離れ、心のまゝに諸国御巡歴。懐中にはいつも千枚の金を持つて居られる。」

「お爺さんよく知つているが縁者の者かい。」  
「インヤ縁者でも何でも無い。大方そんなお人だろと思つてナ。」

「またこゝな龜碌が。散々人を騷りよつた。」  
とドツと吹き出す大笑いを、下から聞いて足をバタ／＼させた弁慶が、

「道中のあふた者めが——ひよんな男の飛び

出したを機に、一人でもタゞで小屋を覗いて見ろ。首根ツ子引き抜いて見世物荒しの仕置をするから」

「未だ云うか悪坊主——こうして呉れる。」

と虚無僧は、煙管の先きに燃え立つ火玉をポンと叩いて弁慶の尻へ一ツ、ジュンツ。

「アツちゅー——」

「こたえたかよ——では皆の衆覗いたり・覗いたり。」

と弁慶を懷の海に投げ込んで、ユラリユラリと小屋掛の薙に手を掛けて、  
「エイヤツ。」と捲り上げた。

薄暗い小屋の中、何んとなく得体の知れない匂いがブンと鼻に迫つて、向うの紫の垂れ幕を引くと、燃え立つ様な三つ重ねの蒲団に、花魁のような装束をした眉目よき女——十九か二十か。蹴り上げた裾は濃い赤、青、黒とり／＼に散つて、雪白の両の足がヌツと露わに二本露く——未だ前髪のお小姓姿が、絶え入る様に伏し倒れて、生白い足の裏がハタ／＼と上にもがいている。

「ウーン。」

と旅人は息が詰まる程驚いて、

「因果だ。」

「神罰ぢや。」

「あんな涙はウソには出無え。」

「可哀想だ。」

「体中が痒くなつて来た。」

と口々に押し合つている——僅かの間に、

「ヤヤツ。其方は永年尋ねる妹の初花ツ。」

と人知れず赤い舌をペロリと出した虚無僧が、前の方へ立ちはだかつた町人体の男に、ドーンと一つ当身を呉れて、外の方へ突き出すと、其のアオリを喰つて重り合つたタゞ見のお客は、ハツと仰天ドーンとばかり道端に跳ね飛ばされて眼を白黒した。

「何んだいこれは——」

「あゝ惜しい所でよ。」

「俺らまだ碌々見やしねえ——ドキツと胸が鳴るとドーンと飛ばされに態々入つた様なもんだ。」

その時弁慶——早や股立ち高く

「——どうぢや皆の衆驚いたか。只今のお武家は中の女の縁者の者ぢや。ホレあの泣き声が聞えるか。愚図々々すると店を仕舞うぞ。サア入つたり。入つたり。」

と急ぎ立てられて、忽ち蛇に見込まれた蛙のように、ジリ／＼／＼見料を払つて、後とから後とからと吸い取られていった。



# 鷹 犬 盗 俠

## 城 話 平 夜

平 浩 司 庄

郎 太 三 根 曾 画



奈良の都まであと数里というところで食糧が尽きた。峠の上であつた。

「おい、何か食うものがないか」

小山田の犬鷹は頑丈な身体をそびやかせながら彼に従っている同輩を端から一人ずつ睨み廻した。食べ物？ 今頃、食糧が尽きてどうなることか、家を立つとき、きつと故意に少量の食物しか持参しなかつたのだらう。以心伝心、五人の同輩は言い合わせたようにそう言つた表情で犬鷹を見つめた。彼等はいずれも犬鷹よりもつきが貧弱でその上、数日の

旅疲れで頬がこけ眼が落ち込んでいた。誰もが生命より大事とばかりに布ぶくろに入れてある食糧をおいそれと出すのが惜しく、暫しためらつていたが、然し隊長格の犬鷹の鋭いまなざしに射すくめられると、出さぬ訳にはいかなかった。

「これだけじゃ」

などと言いながら、しぶく前へつかみ出すのである。干飯（ほしいい）干魚（ほしいい）が僅かばかり路上に並べられた。

「落まぬな、都へ出たら必らず返すぞ」

さすがに彼等の心中を推察して殊勝げに言つた。

「なあ、みんな、全くやりきれんことじゃな官人どもばかり栄耀尽くしてよ」

ほしいおを頭ごと噛みながら犬鷹は都の方角をきつと睨んだ。

「羨んだとて無駄よ、しよせん生れ変らねば適わぬことじゃ」

一人がぼつりと言つた。

「何と、一念癡つてやればなれぬこたあ、あるまい。わしはやつて見せる」

犬鷹は昂然と言つた。

「おぬし、剛力じゃから一つ、ぬすびとの頭領にでもなるか」

他の一人がからからように彼の顔を覗いた。

「ぬすびと？たわけたことを」

吐き出すように言つたが、何故か犬鷹の面は意味ありげに笑つていた。一声高くほととぎすが鳴いて過ぎた。

「夏じやのう……どれ出かけるか」

やがて一行は腰をあげて峠を下つて行つた。時は遠く奈良の昔、唐文化けんらんと咲き匂う聖武帝の盛世である。都の華やかさに比べて地方民の生活は困苦のどん底だつた。天と地のへだたりがあつた。過酷な課税、租（米を納める）庸（官の労役に出る、或は布を代納する）調（土地の産物を納める）の外に歳役や兵役があつた。この数々の租税の重圧は、働けど働けど尙、食いかねる状態に追いつめるのである。その結果は棄て子、餓死、流浪人の続出である。一方、官吏は位田、職田と称する田地が支給され、減税、免税、兵役免除等の特典も考慮され一般大衆と比較にならぬ待遇だつた。犬鷹が羨望嫉視するのも当然である。これは当時の庶民たちの誰しも思う真情であつた。犬鷹の一行は今、租税の一である庸役、即ち官の労役に服するため都へ上る途中なのである。

官の労役に従事するのは年に十日間と規定

されているが、その十日の労役を果たすため都へ往復する道中が並大抵の苦勞でなかつたその上、その間消費する食糧は自弁ということになつてゐるから堪つたものではない。「せめて食いのだけなと官が扶持すべきじや」

これが労役に服する人々の叫びであつた。遙か前方に当つて壮大な寺院の屋根や五重の塔が、ぼんやりと霞んで見えてきた。都は目前に迫つた。偉大な魔力に吸引されるような感じだつた。野心を抱く犬鷹の胸はとりわけ躍つた。

「おれは、ひよつとすると郷に戻らぬかも知れぬ、三男じやによつて氣も軽い」  
同輩をかえり見てこんなことを言つた。

## 二

彼等に与えられた官の労役は都を縦横に貫く道路工事であつた。土を削る者、運ぶ者、いずれも監督官の激しい怒声と恐ろしい答の下に、おののきながら黙々と牛のように働いていた。犬鷹は新しく唐の国から伝わつた唐鍬（とうぐわ）という道具を揮つて土を崩していた。要領よく彼は監督の前では無二無三に働いて見せた。その時だけ精限り根限り働

いた。その抜群の働き振りと人を威圧するに足る頑健な体格を見込んだのか、二日目に監督は彼を監督代に抜擢した。犬鷹は得たりとばかり一層、精勵これ努めた。監督は時々、彼を木蔭に招いて果子（果物）など食わせた。りするようになった。五十がらみの男で相対すると好人物のように見えた。

「郷国はいずこじや、名は何と言う？」

笑みを泛べながらそんなことを尋ねたりした。犬鷹はこゝぞとばかり力を込めて津の国の生まれであるとか、父は里長（さとおさ）を勤めているとか出鱈目を並べた。

「なに、里長とな、家柄じやの」

父親は里長を勤めているという彼の言葉に監督は眼を瞠つて

「どうじやな、都に止まらぬか、場合に依つては仕官させてもよいが」

と、切り出して来た。答を揮つてゐる時の鬼のような姿は消えて、今、目前に居る監督は如何にも好々爺であつた。

「勿体ないことでおざります。私のような者でも、そのようなことが出来するならば望外の仕合わせに存じます……」

頭を地にすりつけんばかりの犬鷹の殊勝な姿を見てお人好しの監督は、幾度も首肯きな



がら慈父のように眼を細くしていた。

その夜、彼は監督の宅へ招かれた。民部省の一微官に過ぎぬ彼の家は貴族邸、寺院などの建ち並ぶ大路とは逆の方向の場末に当る庶民街にあつた。しかし田舎の藁席の上で暮してきた犬鷹にとつては、このささやかな板葺きも金殿玉楼であつた。監督は山部の博徳と言つた。五十に近い年輩である。

「さ、遠慮のう上るがよい」

敷居の傍にぼんやり立つてゐる犬鷹の手を取らんばかりだつた。燈がつけられた。

「さ、さ、」

と、言つて座敷へ上りながらも恐縮して隅の方にうずくまつてゐる犬鷹を真ん中へ座らせた。

「おい佐依」

博徳は奥へ向つて手を拍つた。

うすやみの中に夕顔のような灰白い色が揺らいで次第に近付いてきた。美しい女だつた。犬鷹は眼をみはつた。

「わしの娘じや、佐依と申してな、もう十七になる」

父親の無遠慮な言葉に娘は、ぱつと羞じらいの色を見せ酒を置くと、逃げるように奥へ駆け込んだ。

「さ、飲もう、遠慮は無用ぞ」

博徳は眼を細めて瓶子（へいし）の酒を犬鷹の盃に注いだ。

「何もないが、いおでもつまむがよい」

そう言つてかわかけ皿に載つてゐる焼鮎をすゝめた。犬鷹は、もはや遠慮は無用と腹を決め、盃をとりあげた。かつて味わつたことのない都の酒は五臓六腑に快よく泌みわたつた。「うまい御酒でおざりまする」

感謝の瞳をこらして盃を拝み飲む犬鷹の姿を見て博徳はすこぶる満悦の態だつた。

「うまいか、酒だけはうんと有る、遠慮せず過ごして呉れ」

その言葉を、うつゝに聞きながら犬鷹は飲み且つ、食らつた。二人とも次第に酔つてきた。温い酒、温い飯、犬鷹の若い肉体に暫らく眠つていた慾望がむらむらと沸りたつてきた。さつき、ちらと見た娘の姿が、しきりに脳裡を去来した。

「時に相談じやが」

博徳は、とろりとした眼をしばたゝきながら犬鷹の肩をたゝいた。

「わしはな、妻に先立たれて十年、以来親一人、子一人で過ごしてきた訳じやが、娘も早や十七、先のことを思うと心急かゝる思いじ

や、どうじやな、そなた、娘の婿になつては呉れまいか」

いつか真剣な面持ちになつてゐた。飛んだことになつたわい、素寒貧の下人から微官とはいへ、一躍、官人に上れる、欣喜の情を抑えながら

「わ、私のような者が、とても……」

と、俯向いて見せた。

「何の、何の、謙遜じや、家柄といふ人物といふ、わしの睨んだ眼に狂いが無い、な、そなた、承知して呉れるのう」

博徳が確めるようにその顔を犬鷹の顔に近づけてきた。

「もつたいのうおざりまする」

犬鷹の感激に満ちた表情を見ると博徳は喜色満面の態で

「承知して呉れたか、有難いぞ、有難いぞ」と、大声で怒鳴り、それから

「斯うなれば今宵からそなた、当家のむこじや」

と、叫んでまた奥へ向つて手を拍つた。

娘が現れた

「さあ、改めて一献、飲み改めじや、佐依、注がぬか」

父の命によつて犬鷹の傍へすり寄るよう

添つてきた。緑の黒髪が房々と敷居に垂れて  
いた。成熟した女の香りが犬鷹の体内をゆさ  
ぶつた。澄みきつた瞳、愛らしい唇、腕のよ  
うな胸、ゆたかな四肢、いやこの身体のすべ  
てが今宵から、この俺の物だ

身体がふるえた。

「犬鷹、もはや、そなたと我等は親子じゃぞ  
よいか」

博徳は相好を崩して笑つた。

三

夢ではなかつた。犬鷹は望外の官職と美女  
を同時に獲得することが出来、天にも昇る心  
地だつた。つい先般まで呪いに呪つていた官  
人に対する憎悪の気持ちなど、他事ごとのよ  
うに忘れ果てゝいた。犬鷹は義父の後任にな  
ると、義父は民部省主税寮に属する下級官吏  
に転じた。労役の監督、無位の官ではあつた  
が、犬鷹には鬼の首でも取つたような嬉しさ  
であつた。

「婿めに御座りまする」

博徳は半ば得意そりに自分の上司である民  
部小輔安倍男鷹に犬鷹をひきあわせたりした  
「な、犬鷹、今は微官じやが、正しく勤めて  
居ればやがて位階も得られようぞ、また、そ

うなれば地方へ下つても郡司になれる、国司  
にもなれようぞ」

博徳はそんなことも言つて犬鷹に希望を与  
えた。

「落ち付いたならば一度、郷国へ帰り父の許  
しを得てくるがよい」

とも言つた。犬鷹は笑つた。だけで帰ろうと  
はしなかつた。博徳は口ではそんなことを言  
うものの、氣に入りの婿を一刻も離したくは  
なさそうだつた。

犬鷹は義父に代つて国々から徴用されてく  
る労務者の監督に當つていた。今までにずい



ぶん粗暴な生活をしてきたけれども彼とても  
人間である。もともと、微賤の家に育ち、且  
つ、労務の苦しい経験もあり、殊に貧者に対  
する同情は人一倍、強い男であるから、つと  
めて寛大な監督振りを示した。

労務者の中には到底、重労働に堪えられそ  
うにもない、老人や半病人に近い者が少から  
ずいた。犬鷹は、そつと彼等を、仲間からは  
なれた場所へ連れて行き暫し休憩をあたえ  
た。涙を流して伏し拝む姿を見ると、善根を  
施したという、清々しい気持ちと、官吏とし  
て庶人の上に立つ優越感とをこもこも感じた  
出来ることなら食物も与えてやりたかつた。

「犬鷹！」

不意に背後から鋭い声が起つた。振り返る  
とそれは民部小輔の長子で属官をやつている  
安倍狹鷹であつた。色あくまで黒く、眼のく  
ぼんだ風采の上らぬ男で心もねじけていた。  
滅多に顔を合わすことがなかつたが、犬鷹は  
この男を最初から軽蔑していた。しかし、属  
官といえは犬鷹の上司である。

「手ぬるいぞ、まちつと、きつうせいで何う  
なるか、このようなことで監督が勤まらぬぞ  
！」 きびしく言つて、場合によつては容  
赦をせぬぞといった表情を見せた。



「かれは、病人でござります」

黙つて居ようと思つたが、つい口へ出た。

狭鷹のどすぐろい顔が、みるみる醜怪な形相を呈した。

「何んと、」

いきなり毛むじやらの腕が延びると、ぱちりと大きく犬鷹の頬を打つた。はずみに彼の冠は宙に跳ね上つた。——うぬう！ 飛びかゝろうとしたが、流石にぐつと、堪えた。

後刻、犬鷹の話聞いた博徳は、怒りもせず——上司に逆らわぬことじや、と言うのみで却て犬鷹の軽率をたしなめ、更に民部小輔を訪ねて、吾が子の失礼を詫びる有様であつた。権門勢家に対して彼もまた一個の奴隸に過ぎなかつた。月日が経過するにつれ、最初の得意は次第に消え失せ、下級官吏のはかなさが、つくづく身に沁みてきた。

「下人の方が氣楽じやわ」

失望が彼の心をおそつた。山が野が無性に恋しく、なつかしまれてきた。

#### 四

天平九年、この歳、舶来の疱瘡と称する恐ろしい伝染病が九州から流行しはじめ、都に入るに及んで、右大臣藤原武智鷹等、顯官重



臣以下、天下百姓多くこの病に罹り、これのため、生命を失うものが甚だ多かつた。

義父の山部博徳もあわれ、その犠牲となり高熱にうなされつつも、佐依と犬鷹の名を呼びながら死んでいつた。全く突然だつた。義父の死は、犬鷹にとつて、少なからぬ打撃であつた。支柱が崩れ落ちた感であつた。氏素性を詐つてゐる後暗い我が身が、急に不安になつてきたのである。もう、位階も、榮転も、それどころでなかつた。日々に我が影が薄らいでいく感じがした。不安、焦躁、孤立夫の身を案じてか、妻の佐依までが、何となく落付かぬ様子であつた。

喪が明けた或る日、犬鷹は公用によつて、近国へ十日ばかり、出張することになった。村は明るかつた。久方ぶりに味わう山野は懐かしく、そして身中に眠つていた彼の野性をよびおこした。

「あゝ、山へ戻りたい」

彼は、たくましい双腕を天に向つて思い切り伸ばしながら思わず、呟いた。

予定より早く任務が了り、早々に我が家へ戻つてきた。雨氣を含んだ初夏の夕風が、生温く肌に感じた。敷居を跨いだ途端、妻の低い声に交つて、太い男の声が、ほのぐらい奥の室から洩れてきた。狭鷹であることが、その声によつて知れた。

「はて、今頃、」

彼はおののく胸を、努めておさえながら、屋内の様子をうかがつた。狭鷹の太くとおる声が、はつきり聞こえてくる。どうやら犬鷹の偽戸籍について話してゐるらしく、そしてそれからんで、佐依を我が物にしようとしてゐるように見えた。急に灯が暗くなつて、話声が杜絶えた。

犬鷹の血が逆流した。

「くそつ！」

眼がぐらみ、もう前後の見境いがなかつた。うつ積していた不満が爆発した。

「けだものめ！」

叫ぶと共に屋内に躍り込んだ。不意をつかれた兩人は、半裸のみにくい姿のまゝ逃げようとした。

「おのれ！」

犬鷹の剣は、狹鷹の背中へ、さつと走つた燭台が飛んだ。

「きやつ、」

と、叫んで闇の中に、のけぞつたのは意外にも佐依だつた。

「しまった、」

犬鷹は、佐依を抱き起したが、早や既に、こと切れていた。狹鷹は、闇を幸い逃げ延びていた。冷たくなつた妻の身体を抱きながら犬鷹は狂氣のように屋内を駆けずり廻つた。その夜から犬鷹の姿は都から消えた。

# 五

雲に連なる壮大な貴族邸、大寺院、綺羅を飾つた、みやびやかな官人の姿、青丹よしと謳歌される都の華やかさも、それは表面だけの現象で、一皮剝くと全く悪の巢窟、修羅の巷だつた。貧苦のどん底に喘ぐ大衆庶民、そこには必然的に、つきまとう悪の跳梁があつた。棄て子、餓死、浮浪者の数は測り知れず強盗、殺人、掠奪、放火等の凶悪事件もまた相ついで続出した。弾正台の役人も、軍団の兵士も殆ど傍観の態であつた。この無警察に等しい現状に応じて犯罪は、いよく増加の

一方を辿つていつた。

犬鷹が、逐電してから半歳ばかり経過した或、民部省属安倍狹鷹は、とみに深まつた三笠の秋色を賞でながら、妻の真汐を相手に一献かたむけていた。犬鷹の事件も漸く忘れかけようとしていた。酔いが廻るにつれて、ふと、世を去つた佐依の姿が、まぶたに浮かんできた。

「恋しい女よ」

真汐はさる貴族の娘で、品のよい美人であるが、佐依のような、まろやかな感じに欠けていた。

「何をそんなに考えて居られるのじゃ」

真汐は妙に沈んだ夫の顔色を、げんそうに見やつた。

「ハッハッハ」

狹鷹の空笑いが、室内に、うつろに響いたと、灯が揺らいだ。

「あつ」

眼の前に音もなく、不意に黒装束の怪人が数人、現われた。突嗟のことゝて狹鷹は剣をとる隙もなく、呆然と突つ立ち、真汐は面を伏せて震えていた。

「声を立てまいぞ」

白刃を突きつけながら大將らしい大男が、

そう言つて配下に、目で合図をした。二人の配下が、素早く躍りかゝつて、狹鷹と真汐を高手小手に縛り上げ、そして口に布をかませた。——それつ、二人を引つ立てると、門先きに待伏せていた一団は、それを馬に乗せ、一むち当てた。全く瞬時の出来事であつた。二人をさらつた一団は、街を過ぎ野を走り、山をよじぞ行つた。

「おい、狹鷹！ わしだ、ようく此のつらを見い」

盗賊の山寨らしかつた。部屋の隅に、さまざまな武器など立てかけられていた。狹鷹は、男の顔を、きつと見据えた。容貌魁偉、髭むじやの男が、悠然と、あぐらをかいていた。色赤黒く髭は延び、著しく変貌しているがそれには見覚えがあつた。

「犬鷹だな」

狹鷹はこみあげる憎悪の念に耐えられず、身悶えした。

「いかにも犬鷹よ、口惜しいか」

犬鷹は、縛されている狹鷹を冷やかに見下してせせら笑つた。

「うぬつ、斬れ！ 殺せ、斬らぬか！」

狹鷹は怒号した。



「ふん、斬るはいと易いが、わしは斬らぬよゆるりと吾が怨みを晴らして見せる所存」

犬鷹は、意地わるく笑つて境戸を開けた。

そこには、裳裾もあらわに真汐が、器物か何かのうりに転がつていた。

「やいつ、狭鷹！ おのれは、よくもわしの女を奪つたな、そしてよくも殺したな、今、こゝでその仕返しを見せてやるわ！」

そう叫ぶと、犬鷹は真汐の白い首に手をかけた。大根（おおね）のような、真つ白い足を、激しくばたつかせたけれど、縛られている哀れさ、さしたる抵抗も出来ず、小山のうに掩いかぶさる犬鷹の身体を、どうすることも出来なかつた。

「う、う、」

唇を噛みしめながら狭鷹は眼を掩つた。

晩秋の月が冷たく中天に冴えていた。二頭の馬が曳かれてきた。

「狭鷹、死にたくば勝手に死ね！ だが死ねまい、わしもおぬしを斬らぬ」

無言の兩人を、再び馬に乗せると、犬鷹はそう言つた。返事がなかつた。配下の者共に護衛されながら馬は都に向つて走り出した。

「狭鷹、おれは逃げも隠れもせん、口惜しくば、いつでも手向つて来い、弾正台、軍団、

いづれへでも訴えるがよい、いつでも喜んで相手になろう」

山を下つて行く狭鷹に向つて、も一度、斯う叫んだ。

弾正台の官吏達の腐敗も、貧にやつれた軍団の兵士共の物の役に立たぬことも犬鷹には解り過ぎる程、承知であつた。彼の許には既に百名に近い配下があつた。彼の指揮に従つてその配下達は手足の如く自在に動いた。

大屋根にきらめくいらか、朱塗りの柱、名香漂り錦の衣服……棄て子、餓死、素足に纏の帯、富者と貧者のあまりにも甚だしい懸隔！ 犬鷹の血は躍つた。

「目指すは権門富家ぞ、百姓下人には手を掛けな」

これが、犬鷹の不文律の綱領だつた。貪婪強慾の噂の高い勢家は、確実な彼の襲撃を受けた。財物を奪うと、後は用がなく、手に負えぬ場合は非常手段として焼討ちを掛けた。

犬鷹きたる！ 彼の率いる黒装束の騎馬隊を見ると、貴族連は震え上つた。彼等はその鉄蹄の下に縦横無尽にふみにじられた。

奪つた財物は、悉く窮民達に与えられた。

土間に糞を敷き、その上に家族数人が牛馬のように糞き合い、食う物も、薪もなく、隙

間洩る風に慄えおのゝく哀れな庶民の生活、そのような時、窓から、どさりと、重い袋が投げこまれる。気が付いて外へ出て見ると、何の姿も見られない。

「如来さまじや、菩薩さまじや」

都の評判は高まる一方であつた。貴族は天魔鬼神と恐れ、貧者は如来、菩薩と崇め慕うのである。盗賊と菩薩、いつたいどれ程の差があるのだろうか、人それぞれの立場に依つて、斯くも観方が変わるものなのか、それにしても、何か、あまり差がないような気がした。犬鷹は、不意におかしくなつて、からからと笑つた。さつきから只一人、樹上から麓の方を見下しながら、今宵、襲撃すべき邸を計画しているのであつた。

「攻めて来ぬかの」

腕がうずき骨が鳴る、だが、狭鷹も、軍団も攻撃してくる気配もなかつた。空がくつきりと晴れ渡つていた。その紺碧の空を、雁が鮮かな縦列をつくつて飛んでいた。黒い縦隊それはさながら犬鷹の黒騎兵のように見えた

「もう、秋じや」

犬鷹は、長剣を撫しながら、雲の彼方に消えていく雁の影を追つていた。

## 東都醒醒齋京傳著

櫻姫  
全傳曙あけぼの草ぞう紙し

全五卷

陽 齋 豊 国画

## 梗概

此の物語は人皇第八十二代後鳥羽院の御代、丹波の国桑田郡の長者、鷺尾十郎左エ門義治の内室野分の方が、義治が京より連れて帰った白拍子玉琴に対して嫉妬したことから端を発する。義治は身重になつた愛妾玉琴を家臣の篠原八郎に預けておいた。

野分の方は嫉妬の炎に燃えて遂に悪計をめぐらして、家来の兵藤太を遣わして人知れず玉琴を奪つてこさせ、眼前で鸕鷀殺しにさせた上、死骸を大江山の谷川に沈めさせる。次いで計はかりごとによつて兵藤太を手討にして露頭に備えた。沈められた玉琴の死骸は岸に流れついて八月の胎児が生れる。これが清玄である。野分の方も一子を生む桜姫と名づける。清水寺の花の下で清玄は桜姫を見染める。

鷺尾家は信田勝岡に襲われて、義治は蝦蟇丸がまに殺され、野分と桜姫とは別々に落ちてゆく。野分は北嵯峨あたりに逃れてきたが、蝦蟇丸に捕えられ彼に身をまかせる。野分は彼をそのかして盲目の妻を殺させ、娘たちを責めさいなむ。館から逃れた桜姫は篠原八郎の子、二郎に救われたが病氣になつて死ぬ。死骸は鳥部野の墓守の庵室に運ばれた。墓守は清玄のなれ果てである。姫は忽ち蘇生する。清玄は彌陀二郎に誤つて殺され、旧臣達は相寄つて信田勝岡を斬つて鷺尾家を再興し、蝦蟇丸を射殺して野分の方を救う、桜姫の姿は二人となつてどちらが真とも見分けがつかなくなつた。やがて野分の方は雷死して因果と勧懲の一篇は終りを告げるのである。





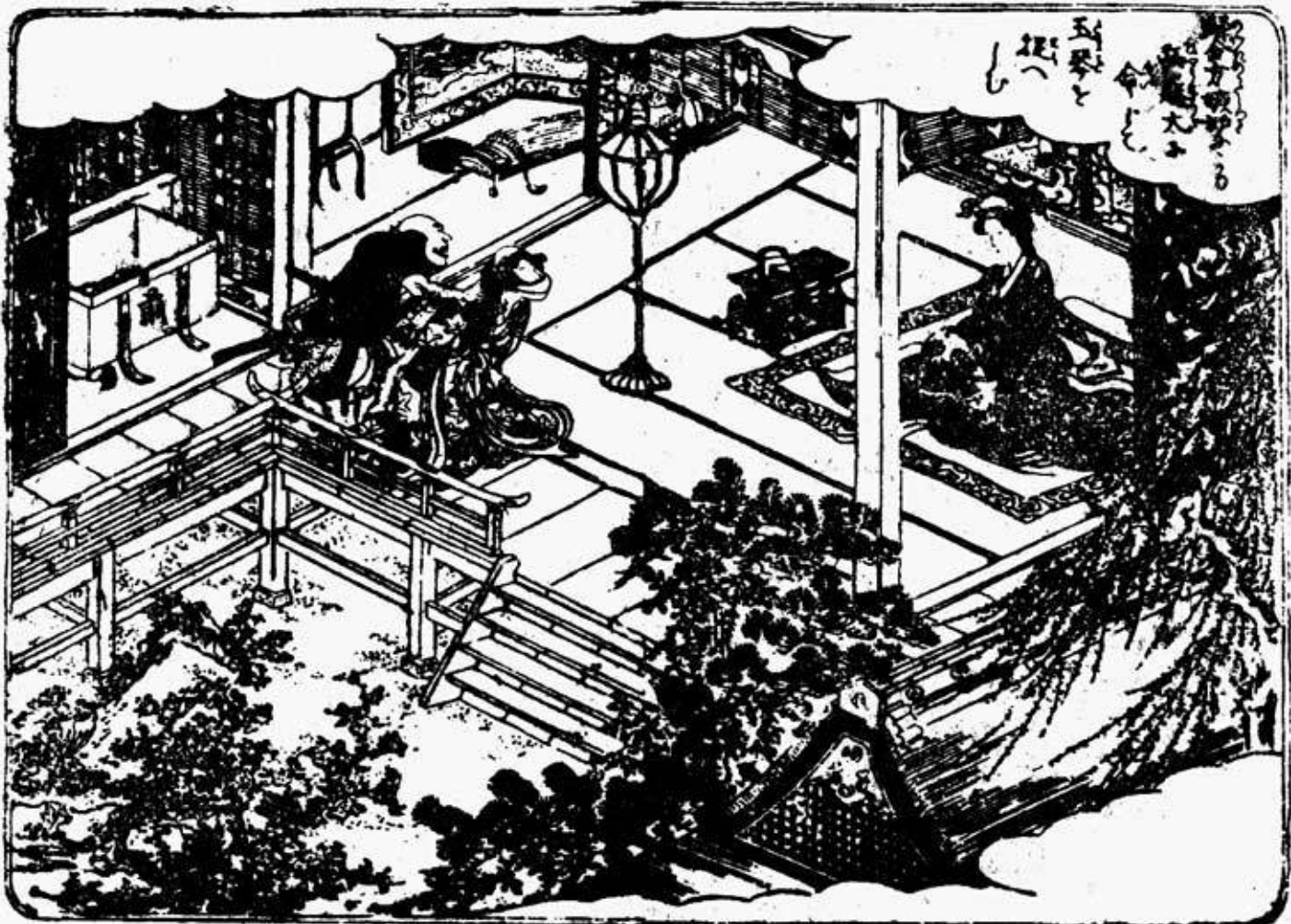
### 兵藤太篠村八郎の家より玉琴を奪い去る

夫の義治が京から連れ帰つた白拍子の玉琴を愛寵し出してから、今年二十才になる野分の方は夜の契りからも遠ざかり独寝の淋しさをかこつていたか、流石に口さがない侍女たちがいろ／＼告口するのを戒めてさりげなくもてなしていたが、折柄夫の義治が朝廷へ貢を奉るために京へ上つて留守なのを幸いに、秘かに家臣の兵藤太を召して、百両の賞金を餌に篠村八郎の屋敷より玉琴を奪つてくるように命じた。兵藤太は初め野分の方の本心を聞いて驚いたが、賞金に目がくらんで早速承諾した。翌夜は雨強くそゞぎ風すざましい嵐しだったので兵藤太をこれ幸いと笠の下に覆面頭巾をかぶつて面をかくし、鎧唐櫃を負つて篠村の屋敷へ庭ずたいに奥深く忍び入り、先ず逃道の便宜を見ておいて、離れの一室の縁にやおら登り妻戸を引き開けた。屏風の裏をさしのぞけば、一人の美女が錦の衾に臥している。まだ一度も玉琴を見たことはないけれども、このような美人は二人とある筈はない、きつと此の方が玉琴という愛妾に違いないと、餓えた鷹が雀を見つけたときのように忽ち夜着の上より、かいつかみ手早く口に手巾をかませて声を立てさせず、鎧櫃の中に押し込んでしかと背負い、奥庭の方へ行こうと竹簾の中へくぐつたところ、寝ぐら鳥が驚いて鳴きさわぐのに肝を冷やして道を変えて行くと、侍女たちが「庭の方に人の足音がする。人々目を醒し候え」と叫ぶのに胸をとどろかした。暗さは暗し、唯夢路を辿る心地で辛うじて前に見ておいた逃道に至り、樹木をつたい、築地の上にのぼり、鎧櫃をくり下して、自分も飛び下りほつと溜息をつく間もなく空を走つて闇の中へ消えて行つた。

## 野分の方兵藤太に命じて玉琴を責める

さて野分の方は此の夜、侍女たちに酒を与えて酔していつもより早く休ましめ、自分の寝間に入つて臥している様子をしていたが、程なく約束の八ツの時が響いたので、手ずから手燭をとつて寝所を抜け出し、幾間も隔てた奥深い座敷に至つて、燈火をうつし、蓐を半ば上げて待つと、やゝして兵藤太、鎧櫃を負い汗みどろになつて息もつきあえず庭づたいに入つてきて、相図の嗽を立てたので、野分の方も金の鈴を鳴らして相図を合した。兵藤太は座敷へ上り「首尾よく仕おはせ候」と云つて櫃を置いたので、野分の方は大喜びで「よくでかした。早くこゝへ引出せ」と云えば、兵藤太、櫃をひらいて玉琴を引出し野分の方の前に引き据えた。

野分の方は簾の中より雪のような腕を差し、玉琴の手を捉らえ膝の下へ引き寄せて、琴を弾じるように要求したので、玉琴は何んでも言うことに背かず憐みを乞うて此の場を通れるより外はないと、琴を引きよせてかきならし「妾薄命」という曲を唱つた。余りの妙手に野分の方の嫉妬の心はいやまさり、琴を弾じ終るや「妾は殿と久しく添いまいらせて鴛鴦の睦みも深かつたが、お前を召して以来、日頃断えて訪ねられることもない、お前は閨の睦言にもきつと妾のことを悪く云つて笑草にしているのであらう。此の恨みはお前の胸をさき、肝を食うとも飽き足りない」と眉を立て眼をつり上げて罵つた。玉琴は胆魂も失せて恐れわななき、許しを乞うたが野分の方は「腹立ちや、あら憎くや」と玉琴の緑の黒髪を掴んで引き倒し額を畳にすりつけたので額の皮が破れて血が流れた。







### 野分の方玉琴を兵藤太に害せしむ

野分の方は兵藤太に向い「此の女を斃殺しにして苦痛を受けしめよ」と突き放したので、兵藤太は氷の刃を抜いて斬りかゝつた。玉琴はひらりと身をかわし、危ふく劍の下をくぐり抜けて遁れようとするのを、兵藤太警を掴んで引きもどし、肩先二三寸斬り込めばあッと一声叫んでうつぶせに倒れ、玉琴は総身朱に染まりながら這い廻り、野分の方と兵藤太に向つて掌を合せ「しばしの命をのべ給われ」と願つたが、野分の方は答もせず只打ち笑つて「今しばらく苦痛させよ」と目くばせしたので兵藤太は玉琴の襟くびを掴み、胸の上にひや／＼と押し当て、咽喉笛にぐさと突きおしたので手足をもかき牙をかむ断末魔の苦しみ目も当てられぬ有様であつた。



### 野分の方密計により兵藤太を殺す

あわれにも玉琴は十七才を一期としてあえなく惨殺されてしまつた。野分の方は兵藤太に命じて玉琴の死骸を素裸として顔の皮を剥ぎ大江山の谷川の底へ沈めさせた。兵藤太が馳せ帰つてくると野分の方は約束の賞金を与え、もう夜明けも間近かであるから、早く帰つて休息せよ、と暇をとらしたので兵藤太は恭々しく礼をして、縁を下りようとした所を不意に野分の方は長刀で背後から右の脇をしちか斬り上げ、あッと一声叫んで打ち倒れた所をすかさず首を打ち落して鮮血したゝるのをそのまゝ引つ提げて、「やよや盗人いりたるぞ」と声高らかに叫んだので宿直の侍たちが駈けつけた時は兵藤太はすっかり盗賊の汚名をきせられてしまつていた。

# 玉琴の魂魄胎子に還著す

駕尾義治の旧家臣であつたが今は回国修行者となつて山陰山陽の国々をめぐる丹後の国についた彌陀二郎が、建久二年の春の半ば大江山を越えて谷川のほとりに暫し休んでいると、折しも小笹の茂つた裏に赤子の泣く声がしきりに聞こえたので、不思議に思つて立ち寄つて見ると、一匹の犬が赤子の襟首を喰えているではないか、錫杖をとつて犬を追ひ払い赤子を取りあげてみると、まだ胞衣えいもはなれず総身血に染つた玉のような男子であつた。

誰が捨子したのかとあたりを眺めると、谷川の岩の間に生々しい屍が横つている。丈なる黒髪を乱した女の死骸であるが面の皮をむいた目もあてられぬ有様である。腹が破れて五臓六腑が乱れ出て咽喉に刀で貫いた疵あとがある。二郎はきつとさつきの犬が此の死骸の腹を喰ひ破りて腹籠りの子を食わえ出したのであろう、せめて此の子を救ひなければと懷に抱けば、時しも一陣の冷風がさつと吹き下して怪しい哉、かの屍の疵口より炎々と一塊の心火が飛び出て二郎の懷に入り、身うちにとつと冷えとおる覚えがしたと思うと忽ち赤子は生き返つて泣き出した。

そこで二郎がつらく思うのに、彼女は惨殺されて水中に投じられたのだから、定めし胎内が冷えたであらうに、その胎内の子が此の様に一命を保つたのは、きつとこの女が痛苦の中にも胎内の子を思ひ一念深く魂魄此子に還著して、一命を保たしめたのに違ひないと土を掘つて屍を埋め一塊の石を置いて仮の印として、鉦を打ち鳴らし、暫し回向して赤子を懷中に立去つて行つた。







### 篠村八郎玉琴を奪れた責任を感じて自刃す

扱てかの玉琴の奪れた夜、篠村の屋敷では、折しも篠村八郎公連は重い病のために臥床していて一子二郎公光といつて今年十五才になつた若者は父の病の祈禱のために出雲明神へ詣つて不在であつた折も折、時もあるうに此の夜に限つて玉琴を奪れたのは、運命が尽きていたのであろうか。その夜「盗人入りたるぞ、人々起合せ給え」と侍女達の叫ぶ声に八郎は起居も自由に任せぬ重病乍ら太刀取つてよろめきつゝ離室へ行つて見ると、はや曲者は玉琴を奪つて逃げ失せた後であつた。「口惜しや、残念や、我重病にあらずば」と云いさして忽ち氣絶して倒れてしまつた。腰元達があわてふためいて、いろ／＼に介抱してようやく息ふき返えして病床に連れて行つた。二郎公光は夜明けになつて家に帰り此の事を聞いて打驚き自ら家僕等を従えて四方に奔走して賊の行方をたずね、その日の夕方、一先ず家に帰ろうとした所、京都より帰館した主君義治の命令で玉琴を迎えに女乗物を守護して来た田島造酒廬に出合つた。二郎は仕方なく造酒廬と連れ立つて離室の座敷に上り戸を開いてみれば、こはいかに玉琴にあらずして、八郎公連、朱に染つてうつぶせていた抱き起してみれば腹十文字にかき切りはや息絶えていた。造酒丞が八郎の懷中より取出したる一書をひらいてみれば、それは主君義治公に当てた八郎の遺書であつた。二郎公光は父の死を見、且つ自分分は不在とはいえ、その責任の重い事を感じて、腹に差添を突き立てようとした所を主君義治公に押し止められ、泣く泣く野辺の送りをすまして、父の最後にも会えなかつた自分の不運をかこち乍ら玉琴を奪つた賊の探索のために出立してゆくのであつた。

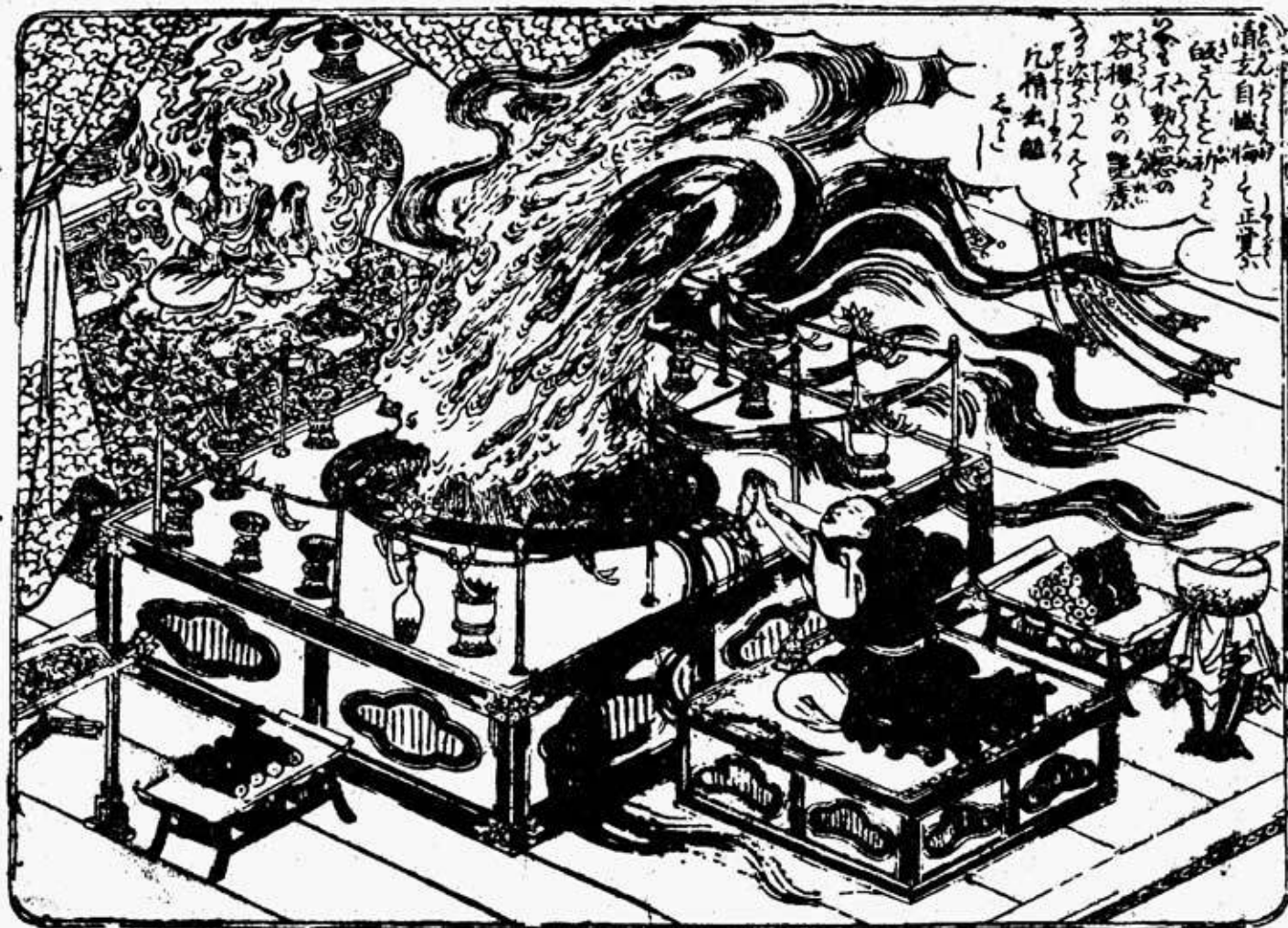


櫻姫清水寺に櫻見物して信田の郎党に襲わる

義治は玉琴を害したのは妻の野分であらう等とは夢にも知らず玉琴の失踪、公連の自殺と重なる不祥事に悲しんでいるので、野分の方も哀れと思つて心を用いて慰めたので、自ら夫婦の中も昔のように睦み深くなつて遂に身重となり、建久三年三月十日に玉のような女の子を安産した。三月十日花咲く盛りに生れたとて桜姫と名づけた。扱て十六年過ぎて承元元年に至り桜姫成長して既に十六才となつたが、その容貌は紅艷目をあざむくばかり義治夫婦は日夜寵愛して掌中の琳といつくしんだ。扱て同国に信田平太夫勝岡という豪族があつたが、容貌甚だ醜惡で性質は極めて奸佞かんねいであつた。日夜酒色に耽つていたが桜姫を見染めてから深く熱愛して人を介して婚を求めてきたが、義治は日頃より平太夫の人と為りを憎んでいたので断つた為、平太夫は深く此れを遺恨に思つた。三月の下旬、桜姫は父義治の許しを得て、田鳥造酒丞を旅中の守護に都へさして桜見物のために出発した。嵯峨、仁和寺、北野あたりを逍遙して清水寺に詣でた所、俄かに酔いたる武士二人迫りて侍女を打倒して一人は桜姫を小脇に抱えて飛ぶように逃げ去つた。丁度布施物を納めに行つていた造酒丞が舞合上からこれを見ていて、忽ちそれを清閑寺村のあたりで追いつき二人を蹴倒して桜姫を奪い返した所、更に二人の武士現れて前後より取囲んだので、唐箕という農具の傍にて四人を相手として武芸の秘術を尽くして相闘い、二人を斬り倒し二人に多くの手負をおわして追い抜つた。この四人の武士は信田平太夫の家臣で主人の命で姫を奪おうとしたのであつた。







### 清玄櫻姫に戀慕して彷徨落魄す

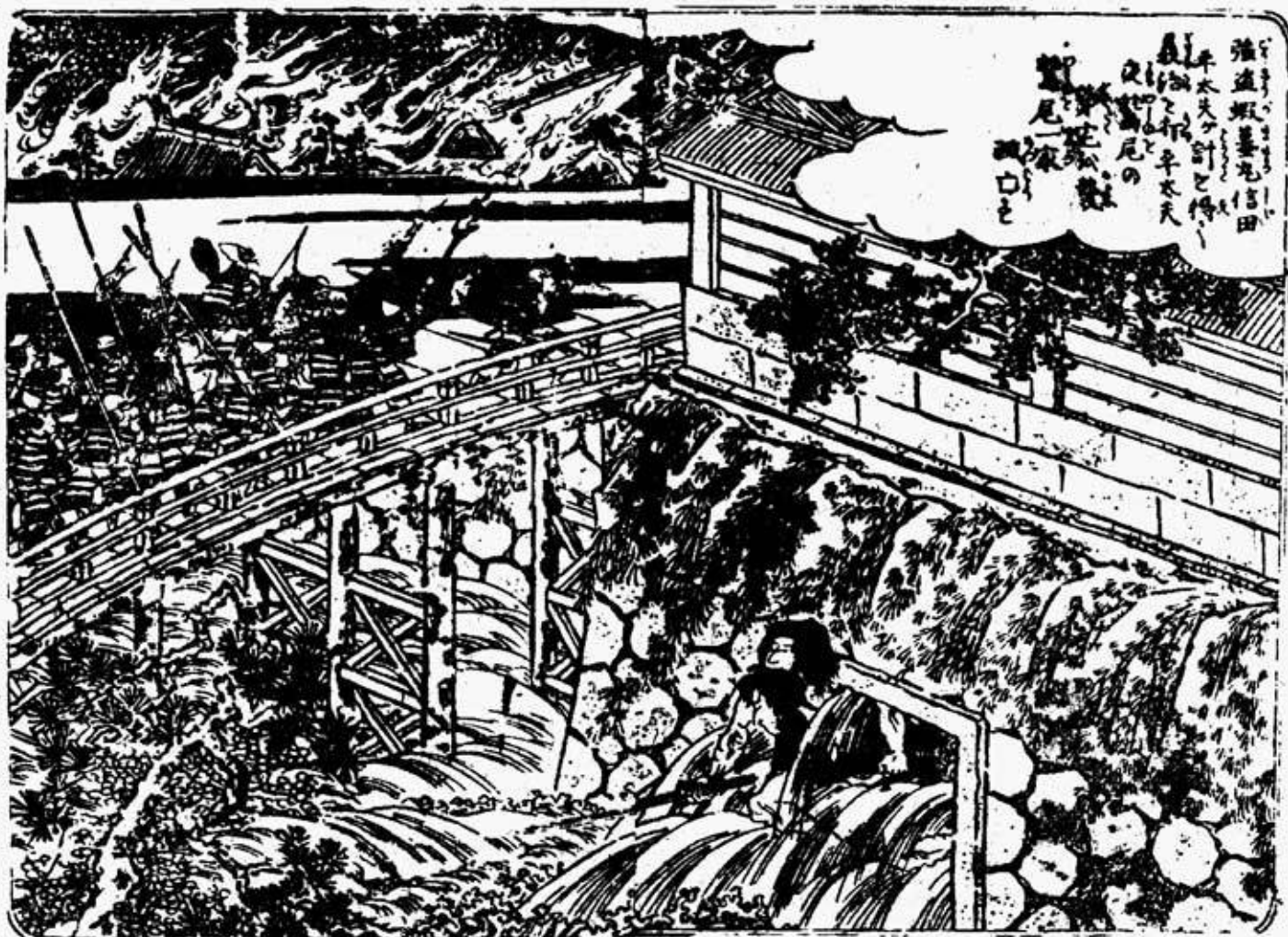
彌陀二郎に助けられた赤子は長じて清水寺の敬月阿闍梨に養れて  
徒弟となり清玄と名乗つた。道心堅固に行いすましていたが、或る  
時、香水を供せんと自ら溜の水を汲み何の心もなく石段の半ばを上  
つた所が、はからずも桜姫と顔がばつたりと合つて姫は面はゆげに  
につこりと笑つた。清玄は身の内にぞつとして「世の中には此の様  
な美人もあるもの」と一目で心の奥底から恋慕してしまつた。

清水寺に詣でた桜姫を一目惚れしてしまつた僧清玄はそれが父を  
同じくする腹違いの兄妹である事等夢にも知らず、夢に現に愛欲の  
火は益々燃えさかり執著の思いに悩まされて、食もすゝまず唯うつ  
ら／＼と夢の心地であつたが、煩惱の悪魔を振りのけ、妄念を払う  
べしと自ら志を勵まし、三の滝に垢離をとり、一室の内に不動明王  
の木像を安置し護摩壇をかまえ、法衣を更めて壇上に上り、明王慈  
救の神呪を誦し、一心不乱に祈つたので護摩の煙は一室に満ち、  
清玄、自らの心を試そうと、眼を閉じて見れば不動の尊像あり／＼  
と拝まれ、こは有難や尊しと眼を開けば忽ち桜姫の窈窕たる姿とな  
り、眼を閉じれば明王の容となり再び開けば姫の姿と見え百八の煩  
悩いや増して消えなかつたので、清玄は今は修行の念も此れ迄と思  
い切り我執著の一念何処にありとも訪ね出し思いを遂ぐべきか」と  
念珠を引き切りて火中に投げ入れ、日頃誦したる経巻も尽く引きさ  
きて投火すれば猛火盛んに燃え上り、折しも同宿二人走り出でて押  
し沈んと追いつがるのを突き倒し「たとえ奈落に落ちようとも、か  
の姫のためならいとわじ、姫よや姫」と叫んで狂人の如くよろめき  
つゝ走り出で、いずくともなくさ迷つて行つた。



## 平太夫鷲尾の邸宅を夜襲す

嘗て信田平太夫、義治に願つて桜姫を嫁にせんとして断られ、又姫が京へ上つた際を利用して奪わんとして逆に造酒丞みきのじやうのために家臣を打たれ遺恨を重ね、義治を亡して山林田庄を奪い、桜姫を盗んで妻にしようと思ひたち、先年鷲尾の獄舎を破つて逃げた強盜蝦蟇丸がま丸を秘かに召して計を与え折を窺つていたが、桜姫が播州の豪族伴宗雄ばんむねと縁談が定まつたと聞いたので殊更に口惜しく火急に事を起そうと決意した。さて蝦蟇丸は忍びの達人であつたから、或る夜鷲尾の館へ忍び入り、義治の寝所の床の下にかくれ、床の下から刺し殺して首をとり、焼草に火薬を包んで床の下に投げ入れたので、宿直の侍達が出合つたところを、急にのぞんで濠の中へ飛入り、水門を潜つて逃げ去つた。程なく火は燃え上り館一面火の海となつた所へ忽然として貝、鐘、太鼓の音高く、信田平太夫勝岡、あまたの郎党を伴つて関をつくつて乱入したので、鷲尾の家人は主君を打たれ、不意を襲われ、殊に素肌の戦であるから、或は討たれ或は逃れて散々ばら／＼となつてしまつた。野分の方はかねてから男勝りの婦人であつたから数多の矢疵を負いながら敵の重囲を切り抜けて何処へともなく落ちのびて行つた。一方桜姫は父が討たれたと聞き、「我身のみ生きのこりて何のかいあらん、一つ闇路を辿らん」と已に猛火の中に飛び込もうとしたのを、侍女山吹があわてて抱きとめ「ひとまず落ちて、母君の御行方をも尋ね給え」とすかして伴ひ出たが敵兵が群つて姫を奪おうとするのを、造酒丞馳せつけて危ふく虎口を脱して城外へと逃れ去る事が出来た。







### 蝦蟇丸奇法にて野分の方を捕う

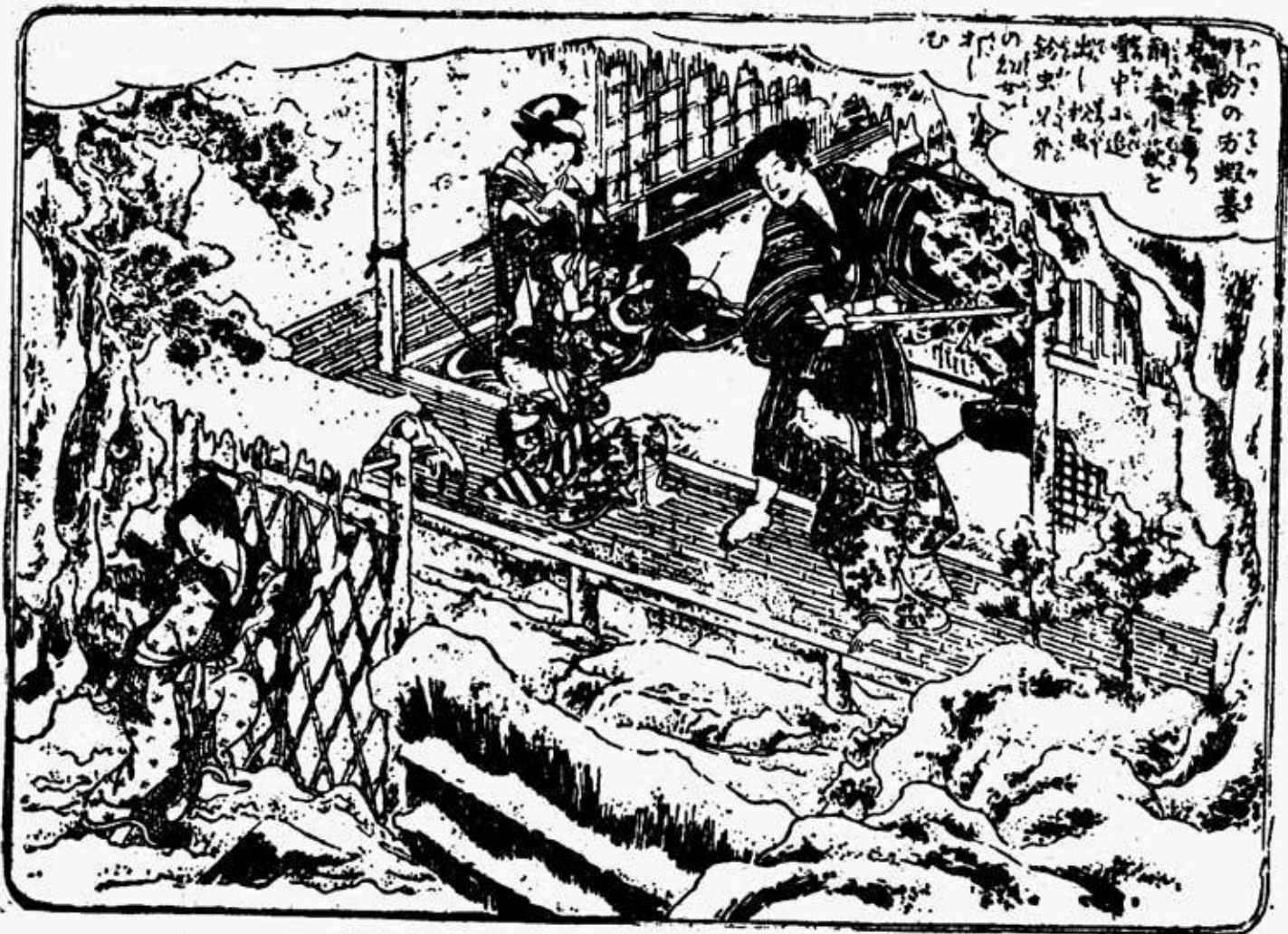
蝦蟇丸には父より伝つた南蠻奇薬の法があつた。其の薬を耳目鼻口にぬれば、水中にあつても見たり聞いたりするのに陸上にあるのと同じである。此の様な奇法を心得ていた蝦蟇丸は妻には京の町へ物を売りに行くと口実を作り、北嵯峨広沢の池の芦の間にかくれていて、池の水面に美しい帯を浮かべておいて、往來の旅人が此れを拾い取ろうとすると忽ち水の中にくぐり、水底に引き込んで縊め殺し衣服や金銀を取ることを商売にしていた。

さて野分の方は、生野の里和五八の親類の家にかくれて矢疵を治療して約三月ばかりで平癒したので五八と共に夜にまぎれて京へさして出立した。龜山城の山路にさしかかった時、信田の郎党が追いつてきたので、野分の方、家伝の宝刀を抜いて立ち向おうとしたが、五八は「こゝは私にお任せ下さい、早くく」と諫めたので野分の方は走りに走つて北嵯峨のあたり迄逃げのび、咽喉をうるおそうと、あたりの池水に手を挿し入れようとすると、池の面に色のよい帯がある、腕を伸してその帯を取ろうとすると、忽ち水中から熊手が出て水中深く引き込まれた。蝦蟇丸は野分の方を水中深く引き入れて今將に縊め殺そうとよく見れば、年は少し盛りを過ぎてはいるが絶世の美女なので、急に心が変わり抱き上げて水を吐かせ介抱したのでようやく息をふき返えた。蝦蟇丸は「あなたが池に落ちられた所を私がお助け致しました。私の家は此の近くですから暫くお休みになつては如何ですか」と言葉巧みに野分の方を誘い、自分の隠れ家へ連れて帰つた。

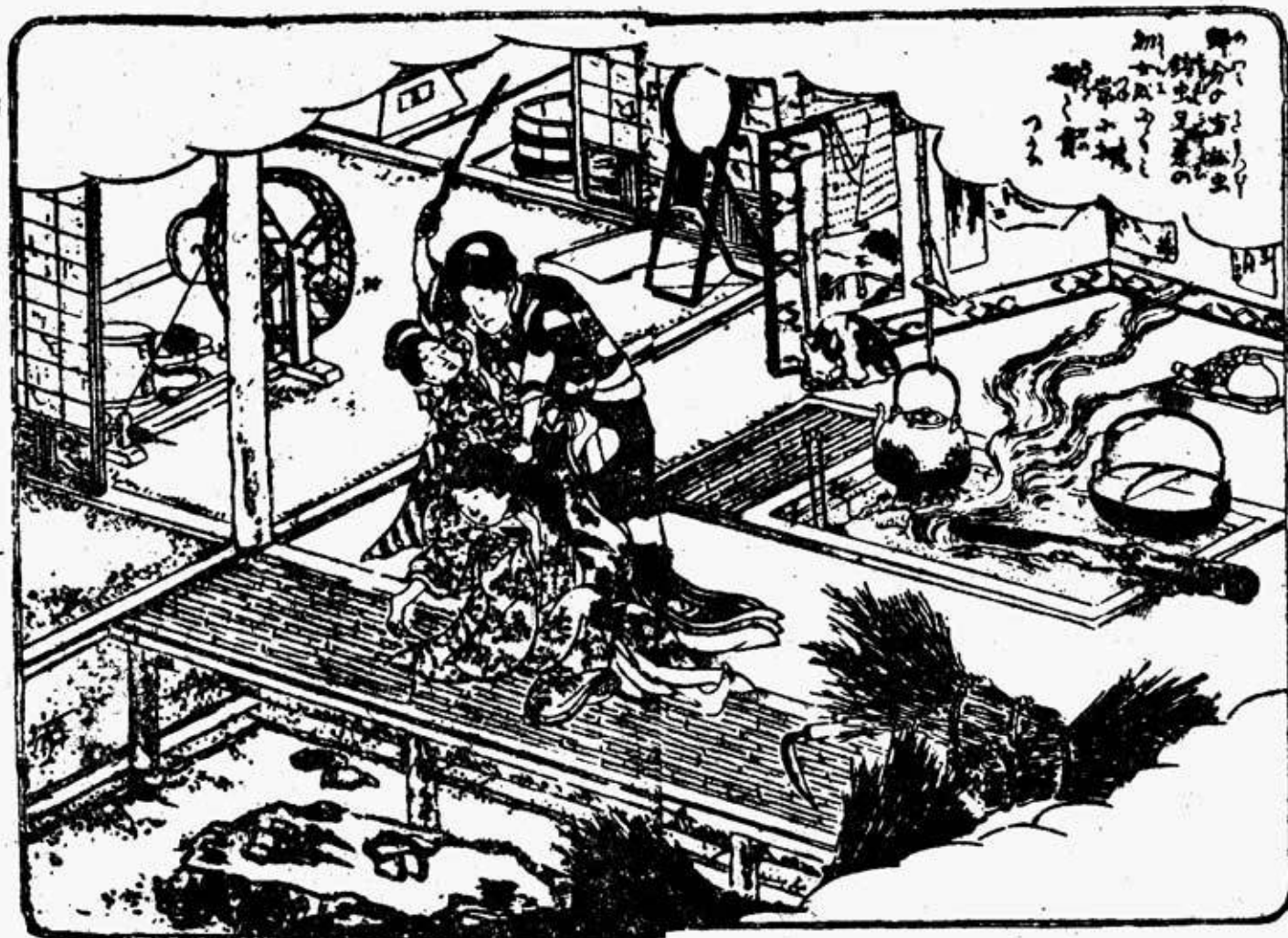


## 野分の方蝦蟇丸の妻となり前妻を追ひ出す

野分の方は蝦蟇丸に誘われて愛宕あたての山奥に行く道すがら、背後より宝刀にて彼に斬りつけたが、かえつて彼の愛情の告白と武芸の奥儀を見せられ、落ちついて蝦蟇丸の容貌をよく見れば、年の頃は三十七八、眉目秀麗、身長六尺に近く稀に見る美男子である。野分の方は生来の淫婦、まして孤獨久しき折柄「おん身の妾を思ふ心実深くば、妾も又おん身を慕ふ心浅からじ、落花心あれば流水も又情あり、ともかくもよきに計い給われかし」と笑いかけたので、蝦蟇丸も大いに喜び「自分には盲目の妻があるが、これは近い中に追ひ出すから」と言いつくろつてそれから隠れ家に同棲することになった。二人の仲の愛情は次第に濃くなつて、暫くは新しい互いの身体を楽しみあい、野分の方はその為此のあばら家の生活もさして苦にならなかつた。その中に例の嫉妬の心が燃え上り、前妻の小萩と二人の子供を早く追ひ出すように蝦蟇丸に迫つた。然し小萩は此の家は前の夫の家であるから、後の夫であるお前こそこの家を出てゆくのが順当ではないかと云つて中々承知しないので、遂に小萩を縁の下に蹴り倒し、松虫という十三才になる子と、鈴虫という十才になる子供が泣いて母をかばつて取りすがるのを、二人別々に柱に縛りつけ「彼等は血を分けた母子であらうが俺には義理の子供である」と小萩を雪中の戸外へ突き出した。小萩は厳寒の雪中をさまよつて古社の下に倒れ伏して虫の息になつてゐる所を、野分にそのかさされた蝦蟇丸が情なくも縊殺して屍を肩に引きかけ、人の通わぬ山奥から深い谷底めがけて投げすてゐしめた。







### 野分の方、松虫、鈴虫、の二女を虐待す

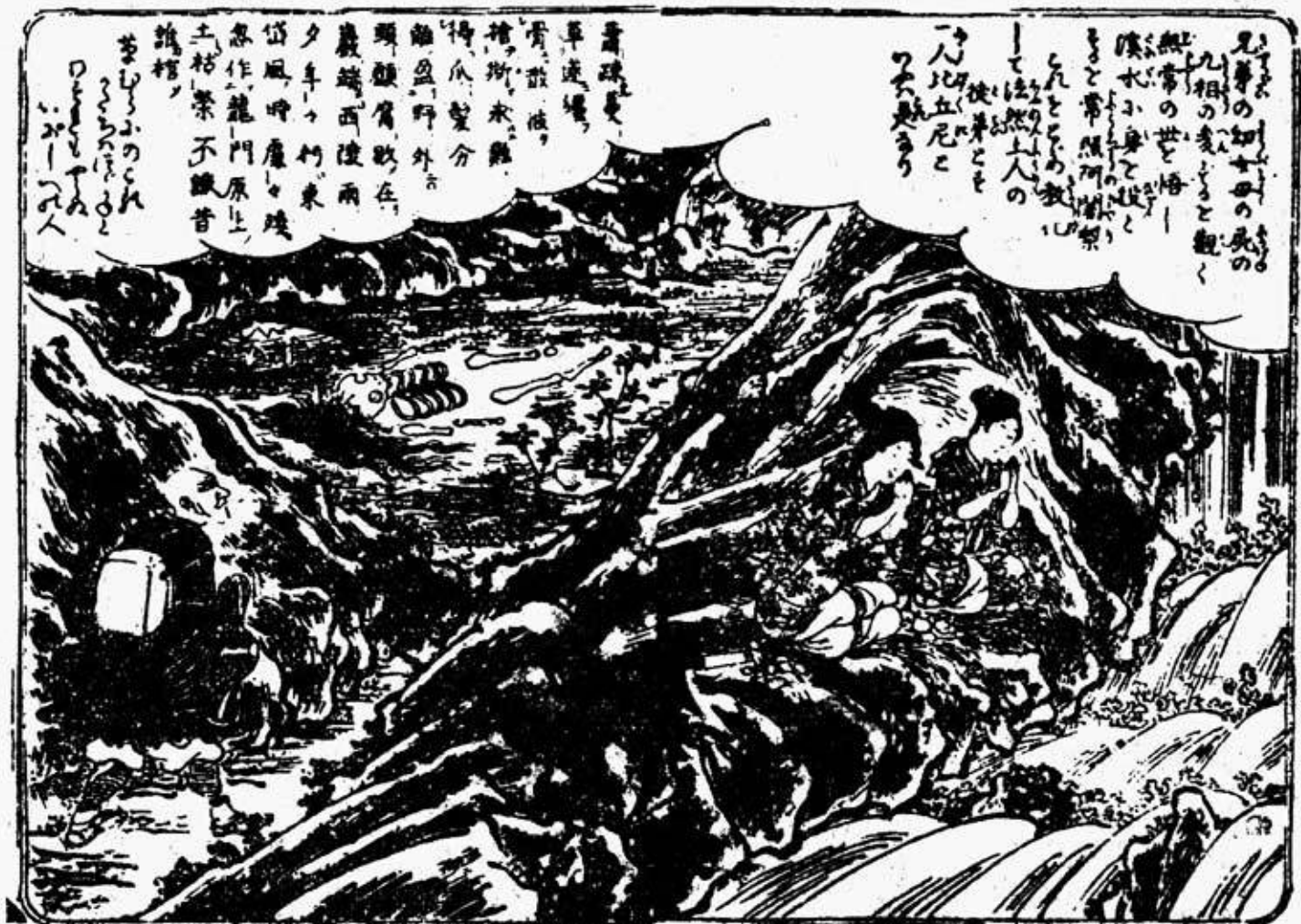
蝦蟇丸は京都に於て悪事が露顕したため、最早や京に近い所では何の仕事も出来なくなつたので「日向の国へ行つて手下共を集めて再び住家を求めてお前を呼び寄せることにする。あの二人の姉妹はもう暫くすれば妓家にでも売れば大金になるから、十分監視して逃さないようにするのだよ」と云い残して日向へさして出発した。

野分の方は留守を守り、二人の子供達に煮炊洗濯の仕事させて自分は只化粧をする事に専念して遊び暮らしていた。姉妹は哀れにも隙々には糸繰りに使われ、夜更に至るまで眠ることを許されず、若し怠けることがあれば、鞭で打たれるので生疵の絶え間がなく、少しでも野分の意に背くことがあれば食を絶たれるので身体は日々に瘦せ細つていつた。それでも倦き足りないのか、或る日二人に山へ行つて姉は七把妹は五把の柴を刈つて来い、若し一把でも足りない時は縛り上げて痛い目にあわすと命じた。二人は白く美しい足を茨の為に紅に染めながらも柴を一心に刈つたが慣れない事とて姉は辛うじて七把の柴を刈つたが妹は日が既に傾いたのにやつと三把になつたばかり、どうしようかと二人は抱き合つて悲しんだが姉は妹をかねて自分の刈つた中から二把を与え、遂に野分の方の怒にふれ、柴小屋の中で素裸とされて高手小手に縛り上げられた。妹の鈴虫は泣く／＼野分が寝静まつてから抜き足しつづつ柴小屋に辿りつき、袂にかくした一握りの飯を姉に食べさし、自分の着物を脱いで着せ、「妾の故に此の様に苦しまれることの勿体なさよ」と取りすがり声を立て泣き、二人して身の上の不運をかこち合つた。



松虫、鈴虫世をはかなんで比丘尼となる

「此れから毎日、日に十把の柴を刈るなら許してやろう」という野分の言葉に松虫は「何んでも仰せの通りに従いましよう」と答えて没々縛しめを解いて貰った。二人の姉妹は毎日山へ行つて柴を刈り、人も通わぬ山奥まで踏み分け入つたが、谷底の雪の落けた所に一つの屍が横たわつていた。胸騒ぎがして若しや母ではないかと二人で手を取り合つてやつと谷に下りて見れば果して母の屍骸であつた。続く雪空に餓えた山鳥が群れているのを木の枝で追い払つて「あな悲しや」と走り寄り屍を揺り動かし声も涸れるばかりに狂人のように泣き叫んだ。それから七日七日にやつて来て、花を供え、水を手向けて念仏を唱えて弔つていた。然し次第に屍の相は変り果て、髪は蓬のように乱れ、五体は青く腫爛れ、目の玉は鳥の為に喰ひ出され、唇は離れ落ちて齒を現わし、次の日に行つてみれば、処々の肉も切れ腹も破れ、五臓六腑あたりに乱れて目も当てられぬ光景である。その次に行つてみれば肉は腐り果て、白い蛆となり、青蠅集つてあたりに満ち臭気ぶんぶんとして昔の佛は何処にも見ることは出来なかつた。一月目には骨に残る肉も乾き白い蛆も散り失せて臭気もなく乱れ髪はそこかしこの草の根にまといついて、何れの人ともわからない。もう骨片となつては男女の見さかしくもなく、幼心にも泡沫無常の世をはかなんで、念仏を唱えつつ谷川の深い所へ身を投げようとした所、突然後の木蔭より「やよく暫らく待たれよ」と呼びとめた一人の出家があつた。姉妹はこの常照阿闍梨に救われて比丘尼となり、上人遷化の時迄病床を離れなかつた。







### 櫻姫死して零落した清玄の手に入る

櫻姫は山吹と共に館を逃れ京へ指して落ちのびる途中、信田の郎  
 党に囲まれ兩人共生捕りとなつて高手小手に縛られた。郎党達が  
 手柄争いから同士討で大騒ぎしている所へ篠村二郎が追手共を追  
 散らして二人を救う。二郎は二人を伴い人里離れた山奥の隠れ家へ  
 連れゆき下へも置かぬもてなしをしていたが、櫻姫、心身共に疲労  
 して遂に病臥に伏し、二郎と山吹の必死の介抱もかいなく僅か十七  
 才を一期として世を終つてしまつた。実に承元二年の八月であつた  
 鳥部野というのは昔から墓地として有名な所であつた。この墓守  
 の僧というのは清水寺の清玄のなれの果てであつた。清玄は清水を  
 退去してから方々を迷ひ歩いていたが、とうとうこの墓守となつて  
 荒れた庵に住みつくようになったのである。櫻姫の棺も常のように  
 受取つて経をよんで回向すれば、何処ともなく経に答える声がする  
 清玄不思議に思つて棺の蓋を開いて掩つた衣をのけて月の光によく  
 く見れば、日頃恋ひ慕つていた姫ではないか。驚き且つ悲しみ、  
 骸を抱いて棺より出し「此の様な花の姿をむげなく灰とするのは惜  
 しむべく悲しむべし」と歎いて落ちた涙がばらりと姫の口に入ると  
 あら不思議や忽ち一息ふうと息をしたので、急いで庵室へ伴い入れ  
 薬よ水よと介抱すれば暫くして蘇生した。清玄は夢の心地で「姫よ  
 心地如何に」と問えば櫻姫目をひらきあたりの余りにも変つた様子  
 を眺めて茫然として香煙にくすぶつた御仏に向つて「こゝは冥途に  
 て候か、女は五つの何某とかや申して深き罪あるものゝよし、慈悲  
 をたれ給えかし」とさめざめと泣きくずれるのであつた。



櫻姫蘇生して清玄再び凡情の火と化す

日頃恋い慕つて片時も忘れた事のない姫の唇紅にして玉貌輝く如く、泣きくずれた様は春の花の雨に悩み、秋の草の露に濡れる風情であつた。清玄暫し姫をかき抱きつくづく眺めていたが、俄かに一陣の冷風がさつと吹いてきて清玄の身体の中に冷えとおると、忽ち心中恍惚として再び断ち難い愛慾の念が強く湧き起り、思はず姫の手をとつて云うのには、

「姫よ、あなたはよもや此の私を見知るまいが、私は前に清水寺に住んでいた清玄という僧である。嘗て桜見物に來られたあなたを秘かに見染めて以来、出家の身でありながら煩惱の鬼となり、清水を追い出されてからは処々を流浪の末、此の賤しい鳥部野の墓守と迄成り下つてしまつた。此れというのも皆あなたが慕しいばかりにこなつてしまつたのだ。あなたは一度死なれて此処へ送られ、私の介抱によつて蘇生されたのは、私とあなたの間に深い宿縁があつたのだと思います。どうか姫よ。此の哀れな私の思いを遂げさせて下さい。お願いです」と云つて手を合せて拝んだので、桜姫は飛びさつて顔に掩つた袖の間から恐る／＼彼の有様を見てみると、目は落ち窪み、頭は栗のいがのようで、身体中垢だらけで顔の正体もなく、頸細くして腹大きく、墨染の衣は水松のように破れて恰かも餓鬼の衆生のようにであつた。姫は声ふるわせて「その志はうれしけれど妾は夫のある身、御心には従ひ難し」とつきのければ、清玄病後の足に力なくよろ／＼と倒れながら「情は人の為ならず、やさしき言葉を聞かせたまえ」と尙もすがりつき解けかかつた姫の帯を身







にまといて起き上り「たぐり寄せたる輪廻の縄、打てども去らぬ煩悩の犬、かくまで執着すること我ながら浅ましく」とかきくどけば姫は只身をちぢめるばかりであつた。此の時狐に追われたのか雉子の雌一羽庵室へ迷た込んだのを清玄が捉え、「日頃修したる戒行を破るし、これ見よ」と、鳥の生血をすゝつたので、口のまわり朱に塗り眉を立て目をつり上げた有様、身の毛もそばだばかりである。「あな恐ろし」と逃げようとする姫の黒髪を掴んで引き倒し「逃げようとして逃がすべきか、わが心に従わないなら此の鳥の様に食殺して冥途の道しるべにせん」と荒れ狂えば、姫は苦しい声を立て、「此のあたりに人あらば、扶けてよ救いてよ」と叫べども物すさまじく更けた夜の、空吹く風に鳴き渡る雁の声のみして誰答える人もなく、殆んど危ふい有様であつた。

### 彌陀二郎誤つて清玄を殺し櫻姫を救う

義治の旧臣彌陀二郎は、主君が信田平太夫に討たれて亡びたと聞き大いに悲しみ何とか平太夫を討つて主家を再興しようと思ひ、諸国を修行して時の至るのを待つて同志を集めていたが庵の中に女の泣き叫ぶ声を聞きつけて怪しみ、垣の外に佇んで様子を窺えば、桜姫と呼ぶ声を聞いた。顔は知らないが主君の姫君という事を知つていたので驚いてうち入り清玄をひきのけて姫をかばひ、「汝、法師の身として憎きふるまいかな、かりにも仏体を学ぶ身なれば、此儘に許しておくぞ」とて姫を伴い出ようとする、清玄はおしへだて、「いな、姫をうばえこそ返すまじ、三世の諸仏に憎まれて、天魔の見いれし我なれば、今は何をかいとうべき、たとい此身の生皮を剥がれさいの目に刻さるゝとも、かくまで思いこみたる一念変ずべきかは、とても奈落に沈む身なり、姫をと共に連れゆかん」と云つて二郎に飛びかゝろうとしたので、仕方なく、杖に仕込んだ戒刀を抜いてはつしと峯打ちにしたが、手先が狂つて肩先深く斬込んだのであつと一声叫んで倒れ伏した。「こは誤りしか、思わぬ殺生不憫さよ。さもあれ姫の御身にはかえ難し」と口裏に念仏を誦えつゝ姫の手をとつて駆け出したが、清玄朱にそみながら、むくと起き上り「あら怨めしや、腹立ちや」と姫めがけて躍りかゝつたので二郎やむを得ず一刀を深々と斬りつけ、倒れるひまに姫の手を引いて走り出した。時に一天俄かにかき曇り、大雨車軸を流し風雨益々烈しく走るに走られず、背後を顧れば一団の心火炎々と燃え上り柳の梢に清玄の姿が現れて尙も後髪を引戻す。二郎怒りて切払い姫を背負つてようやく逃げのびた。

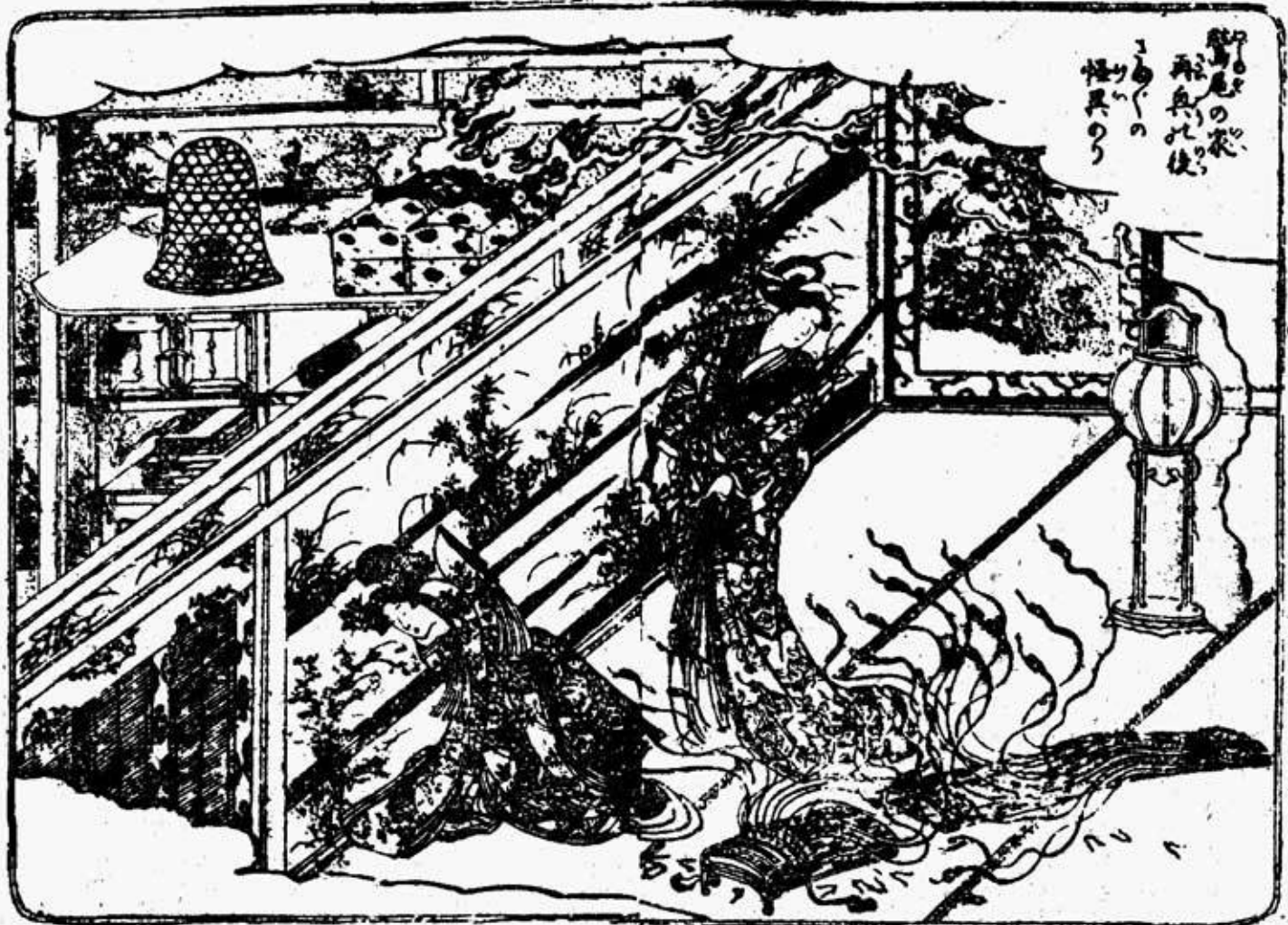


### 鷲尾の家再興の後様々な怪異あり

彌陀二郎は姫を助けて小野里に篠原公光等と会い、造酒丞をはじめ旧臣達相寄り、舅の為に仇を報ぜんとする伴宗雄を将として兵を挙げ信田の家に乱入して平太夫を討取り旧地に館を作つて鷲尾家を再興した。造酒丞は宗雄の命に依つて野分の方探索の旅に出た。

一方日向の国から帰つてきた蝦蟇丸は野分の持物の中に、宝刀の外に肌身離さず持つている系図を見て鷲尾の内室であることを知つて大いに打ち驚き油断を見すまして押し伏せて縛り上げ、自分は義治を討つた蝦蟇丸であると告げた。地団駄ふんで悔しがる野分の方を今将に一打ちしようとした時、一匹の小蛇が現れて彼の右腕にまきつき忽ち腕しびれて途迷う所へ、一条の矢が飛び来つて蝦蟇丸の胸にぐさつと突き刺つた。この矢の主は田島浩酒丞であつた。野分の方は助けられ、鷲尾家再興の事を聞いたので、蝦蟇丸の後妻になつていた事はかくして、系図宝刀も無事に持参して帰国した。

義治の仇は二人共討ち果して、宗雄桜姫は吉日を選んで婚姻をすましたが、桜姫は蘇生した後は、とかく沈み勝ちであつた。母の野分は姫にすゝめて琴を調べさせた。すると俄かに燈が暗く怪しい人影が現れたので野分の方は枕刀を抜いてはたと斬りつけると、青火となつて消え失せ、力余つて姫の弾きさした琴を真二つに斬つてしまった。切れた糸の先は悉く蛇となつて鎌首を立て、姫の方へ向つたので姫は一目見るなり忽ち氣絶してしまつた。それより姫は重病の床に呻吟する身となり、様々な療法を施したが、只うつらうつらと夢心地で食も進まず良医も靈藥も一向に効めがなかつた。





# 櫻姫病臥中夢にて数百の蛇に襲わる

野分の方は晝夜姫の傍を離れず心を尽して看病していたが或夜丑三つばかりに野分の方も看病に疲れて少しまどろんだ折しも、廊下の方に人の足音が響き見なれぬ美しい禿二人、鎧唐櫃をかゝげて出て来て、蓋を開けたと思つたら、中から数百の蛇がうごめき出て簾の裾をくぐつて這い入り、桜姫にとびつき、首すじ、手くび、腹等にまといついたので、桜姫は「あなや」と叫びつゝ身をもだえ苦しんだ。野分の方は驚いて姫を助けようと思つて立ち上ろうとするのだが、身体が痺れて足腰立たず、いら／＼している時にさつと眼が醒めた。さては夢であつたかと、辺を見れば、桜姫は仰向けに倒れて口より血の泡をふき手足をふるわせて苦しんでいる。夢かと思



えば此れは現である。

此れより毎夜家鳴震動し、床の下にて人の泣き悲しむ声がきこえたり家の棟にて高笑いする等様々な怪異があつた。後には晝夜を分たず異類異形のものが見れ、その度に侍女達は氣絶する等の騒動があつて暇を乞う者が多かつた。造酒丞や篠村、山吹等は病床を守護して「これはきつと清玄の怨霊の所為であろう」と鳴弦墓目の法を行ひ加持祈禱をしたが妖怪は一向に止まなかつた。

或夜、野分の方初め一同が看病していると、雪しきりに眠氣を覚えてうつら／＼としている時、姫が一声あつと叫ぶのに驚いて打ち見ると、こは如何に姫の姿は二人となり、「あな恨めしや、腹立ちや」と云いつゝ、足を踏み鳴らし、はたとにらんだ面色の恐ろしさ身の毛もよだつばかりである。これより姫は一体二形となり、物云う声ざま身のこなし迄、少しも違わず、どちらが本当の桜姫とも見別けることが出来なかつたから一同はあきれ果て、「こは如何なる怪異ぞや、世に離魂病という類にや」と言いあつた。

## 櫻姫離魂化して骸骨となる

常照阿闍梨は宗雄に招かれて鷲尾の館に來り姫にのり移つた物の氣を取り除くことになつた。病床には宗雄と野分の方が左右に坐し田鳥、篠村、山吹等が下の方に並んでいた常照坊は先ず簀の扉をひらき、香を拈して暫く念じさて病床を見れば二人共同じ姿で何れを真何れを仮とも分ちがたく、珠数を袖くゝみに持ち袈裟をひきあげつゝ「いかに清玄とやらんが靈魂、我が云う道理をよく聞けよ、汝かりにも仏体を學びし身をもちて、恋慕の風情に戒行を破り、罪な

き姫を苦しめて障災なすは何の理ぞ、すみやかに執惑の悪念を亡して成仏得脱せよかし」と声高く宣いければ、二人の桜姫よろ／＼眼をひらき阿闍梨を見やりて頭を打ち振り「成仏の望さら／＼なし、唯此の姫につきそいて苦痛をさすこと心地よけれ、無益の詞を費し候な」と云いさして又眠つた。阿闍梨膝を立て直し詞を上げまして「あさましや、汝執著の念深く、中有の迷衆となり、更に流転の穢土を離るゝの心なし、然るに我遙かに来りて汝を度せん」とす、本願の利益なからんや、清玄、いかに／＼責め給えば、二人の桜姫再び眠りをさまして居直り坐を正して「如何よりの事ありとも、仔細を語るまじと思えども、阿闍梨の慈心を感じて、深き恨のいわれを語り侍るぞかし、これを聞きてわが理を察し教化をやめ給えよ。人々も聞きてたべ、元来これは清玄が靈にあらず玉琴が怨魂にてあるぞかし」と玉琴が義治公の寵愛を受けたため野分の方の嫉妬によつて惨殺された事から清玄を生んだ事等現在に至る迄の野分の方に対する怨恨の数々を述べ「かく仔細を語る上は永く此土にとゞまりがたし。見よ／＼近きに汝をとり殺し、とも奈落に率てゆかん、思い知るべし」と言いつゝ柳眉を逆立てゝはたとにらむ有様も二人の姫君同じさまで何れを真と知り難かつた。

阿闍梨は四誓の偈を数篇誦し身を起して二人の姫の後に立ち、珠数をもつて先ず左の方の桜姫の頭を打ち給えば姿は忽ち消えて一匹の小蛇となり、頭より光を放つて飛び失せた。又右の桜姫を打給えば、今迄の嬋娟たる花の姿、氷のように消え失せて、身にまといたる小袖と一塊の骸骨のみが褥の上に残つた。桜姫絶世の美女なりといえ骨と化しては常の人と変らず思えば醜美は皮一重にあつたのだ。







### 野分の方雷に打たれ身体くだけて死す

野分の方は此の間中、何も言わず只さしうつむいて死んだ人のように身じろぎもせずになっていたが、十八年の間、誰も知らなかつた旧悪が一時に露顕してしまつて、流石の大胆強氣の心にも面目なく、自分の居間へ行つて自害しようと思つたのか、守刀を持つて庭づたいに馳けて行つた丁度折柄、青天俄かにかきくもり、大雨車軸を流し雷光嘩々として閃めき雷声大いに鳴りはためき野分の頭の上に、炎の塊となつて落ちかゝつたと見えたが、身体に宙にひき上げられ、二つにさつと裂けて大地にどうと落ちた。人々は此の有様を見て身の毛もそばだつたが、見る／＼もとの晴天となつた。

宗雄は焼け爛れた野分の方の屍と桜姫の遺骨とを棺におさめて二人の送葬をすまして後田鳥造酒丞と篠村公光の二人を近くへ呼んで「舅義治殿が某を桜姫にめあわさんと定め給ひしは、畢竟血すじを絶やさん為であつた。それに桜姫が死んだ上は某がたとえ後妻を迎えて一子をもうけても当家の血すじは絶えたも同然である。兼てきく義治殿の甥なる少年をして兩人補佐して当家を継がしめよ。我は今より菩提の道に入り、舅夫婦姉妹、玉琴等の菩提を弔らわん」と言い終りて髻をぶつりと切り払い、剃髪して法然上人の弟子となつた。義治の甥は義基と名乗つて鷲尾家の跡を継いだ。かくして因果と儲善懲惡の一篇は結末を告げるのであるが、それにしても執念深いのは玉琴の怨念ではないか。

【次号は歌川芳員・画(房菴恋々山人作)——淫書開交記——】

# 原稿募集

興味溢れる小説と讀物

探偵小説、犯罪実話、珍談記録  
時代小説、実話小説、怪奇讀物

- 一、すべて未発表の興味本位の作品たるべきこと。
- 一、四百字詰原稿紙五十枚迄の作品たるべきこと。
- 一、住所、本名、筆名の外略歴を記載して下さい。
- 一、発表作品には相当の謝礼を差上げます。
- 一、原稿は原則として御返戻申し上げません。
- 一、締切は別に定めません。
- 一、挿絵、口絵、写真、コント、漫画、笑話、小話等も募つて  
います、奮つて御応募下さい。

探訪報告、奇習紹介、体験告白  
文献讀物、研究蒐集、變態資料

大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇

曙書房内 奇譚クラブ編集部

## ◎縛られた女の写真分譲

光面紙焼付 五枚一組一集分 二百円  
(送料共)

- ◎第一集(第一集より第九集迄) 分譲中止
- ◎第二集(第十集より第九集迄) 分譲中止
- ◎第三集(第三集より第三集迄) 目下分譲中
- ◎第四集(第三集より第四集迄) 目下分譲中

(各集共一集は各々五枚一組です)

本誌独特の豊満なる若き女性による大胆奔放な縛られた女の責めの写真を愛読者中の好事家に実費分譲致します。責められる女に対して興味を持たれる方の垂涎おくあたわざる緊縛美の各種姿態を取揃えました。愛読者サ

ービスとして実費分譲致します故、多少に拘らずせいで御申込下さい。御送金は小為替現金書留、又は振替にて御願います。切手代用は小額のもので一割増に御願致します。尚新作品を漸次追加の上、日作品の分譲を中止する方針ですから早い目に御申込下さい(代理部)

## □予告□ 喜多玲子画集

本誌にその麗筆をふるつておられます喜多玲子女史の縛られた女の画集について多数読者の熱烈な要望がございまして、同女史に依頼して只今鋭意、最も奇抜な緊縛の女の画を製作して頂いております。近々希望の方に分譲致します。葉書にて御予約下されば内容定価等御返事申し上げます。

☆旧号は送料共一冊九十四円にて御送付申し上げます。昨年十月号以降より毎号若干保有致しております。

## ◎直接購読者募集◎

半年分六冊(送料共)五百四十円  
一年分十二冊(送料共)壹千八十四円

【定価値上げの際もそのまま据置きます】  
半年分御支払の愛読者の方には特別景品として責められる女の写真一組、一年分御支払の方には、ヌード・アルバム一冊贈呈申し上げます。

## 奇譚クラブ

第六巻 第九号  
毎月一回一日発行

九月号 定価九十円

昭和二十七年八月三十日印刷  
昭和二十七年九月一日発行

編集人 美田京二  
印刷人 上田庄之助  
発行人 吉田 稔

大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇

発行所 曙書房

振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。